

ISSN 1348-8384



立松 昇一 教授
村上 祥子 教授

退職記念号

拓殖大学
語学研究

Takushoku Language Studies

2019. 3

No. 140

目 次

〈退職教員の略歴と業績〉

思い出すことども

—— 拓大での十数年を振り返って …………… 立松 昇一 (i)

感謝でいっぱいです……………村上 祥子 (vii)

〈論文〉

古文読解における係り結び

——『土佐日記』における「ぞ」「なむ」を中心に——
……………阿久津 智 (1)

視覚スキーマと格表示による多義構造図の試案

—— 移動動詞ハシルを事例として —— …………… 遠藤 裕子 (35)

大学生の英語論文読解指導法……………狩野 紀子 (61)

「動詞＋副詞句」タイプの

複合コロケーションの名詞化……………小池 和良 (81)

中国語語順体系に貫かれた構成原則に関して

—— 基本語順 SVO を骨子とした肉付けに主眼を置いて ——
……………平山 邦彦 (105)

英語付加疑問文の語用論的分析の試み……………渡辺 勉 (147)

〈研究ノート〉

共同研究 〈諸文化圏・諸言語圏における呪い・穢れ・占い・迷信〉

韓国の法師の呪術……………村上 祥子 (193)

〈資料〉

Kimono か quimono か

——「着物」のスペイン語表記をめぐって—— ……松下 直弘 (219)

文化的反義語の試案

—— 日本語の実例 ——……………山田 政通 (237)

拓殖大学 研究所紀要投稿規則

拓殖大学言語文化研究所 『拓殖大学 語学研究』執筆要領… (269)

Takushoku Language Studies

No. 140

Contents

〈Profiles and Works of Retired Professors〉

Looking back on my years of teaching in Takushoku University	TATEMATSU Shoichi (i)
It is full of thanks	MURAKAMI Shoko (vii)

〈Articles〉

<i>Kakari-Musubi</i> in Classical Japanese Reading: Focused on <i>Zo</i> and <i>Namu</i> in <i>Tosa Nikki</i>	AKUTSU Satoru (1)
A Study on Polysemic Network Model with Visual Schema and Case Marker : A Case of 'hasiru'	ENDO Hiroko (35)
Teaching Undergraduates How to Read Research Papers	KANO Noriko (61)
NOMINALIZACIONES DE LAS COLOCACIONES COMPLEJAS VERBOADVERBIALES	KOIKE Kazumi (81)
The Constitutive Principle Behind the Word Order System in Chinese: Focusing on the decoration with the basis of SVO	HIRAYAMA Kunihiro (105)
Toward a Description of Tag Questions in Discourse	WATANABE Tsutomu (147)

〈Study Note〉

Curse, tainting, fortune-telling and superstition

in several different cultures and languages:

Hoshi's magic of Korea MURAKAMI Shoko (193)

〈Material〉

¿ Kimono o quimono ?MATSUSHITA Naohiro (219)

A Proposal for Cultural Antonyms:

Japanese Examples YAMADA Masamichi (237)

Submission of Manuscript

Instructions for Contributors



思い出すことども

—— 拓大での十数年を振り返って

立 松 昇 一

物事は過ぎ去ってみれば、「あっ」という間だ。それを中国の莊子は「白駒の隙を過るが如し」と言った。長い長い地球の歴史から見れば、人間の一生などはほんの一コマに過ぎない。

拓大での十数年は、一言でいえば「楽しみその中にあり」というものだった。多くの学生から若いエネルギーを十分にもらった。おかげで10年は若返った。

教員生活を振り返ると、過去に高校での教員生活、大学での教員生活があった。拓大の和田武司先生との出会いがなかったら、現在の自分はないと言っても過言ではない。季刊中国現代小説の翻訳会、テニス合宿での縁が拓大と私を結びつけてくれた。

ゼミを中心に振り返ってみよう。「スーホーの馬」の研究に燃えたHさん、「封神演義」が好きだと言ったKさん、魯迅の「故郷」を自分流に訳したE君、香港の映画が大好きで海岩の長編小説を全訳したF君、テレサが大好きで私がNHKのSONGSに主演するきっかけを作ってくれたK君、教職を目指していたS君、Sさん、園明園の小冊子を訳したMさん、三国志が大好きだったKさん、一緒に麻雀博物館に言ったT君……。

ゼミの共通テーマとしては、当初は「中国人の面子問題」、最近は「中

国のドラマ研究」くらいでゼミでは専ら各自の好きなテーマを扱ってきた。ほかには莫言や蘇童の短篇を読んだ。

私個人としては、在職中にノーベル文学賞を受賞した莫言の傑作中短篇集と翻訳紹介雑誌『小説導熱体』を発行できたことが何よりも大きな収穫だった。

それから、中国の文学研究者や作家との交流ができで、これも大きな財産になった。

退職後はボランティア活動への参加、再度の学び、雑誌の発行の継続、趣味のテニスと歌を続けていきたいと思っている。90歳になってもエベレスト登頂へという三浦雄一郎氏のことばを胸に、一日一日を大切に過ごしていきたい。みなさま、大変お世話になりました。ありがとうございました。

(2019. 1. 15 記)

経歴と業績等

立松昇一（1948年 8 月 9 日生まれ，岐阜県出身）

学歴・職歴

- 1971年 3 月 麗澤大学外国語学部中国語学科卒業
1971年 4 月 東京都立大学大学院人文科学研究科（中国文学専攻）修士課程入学
1974年12月 東京都立大学大学院人文科学研究科（中国文学専攻）修士課程中退
1976年 4 月 麗澤高等学校教諭
1987年 4 月 麗澤大学外国語学部講師
1992年 4 月 麗澤大学外国語学部助教授
1998年 4 月 拓殖大学外国語学部助教授
2007年 4 月 拓殖大学外国語学部教授

教育研究業績

【著書・訳書】

- 1992年 『これだけ学ぼう中国語レッスン』（大学書林，共著）
2009年 『短いフレーズでかんたんマスター中国語』（新星出版社，共著）
2012年 『神木——ある炭鉱のでできごと』（勉誠出版，共訳）
2014年 『疫病神 莫言傑作中短篇集』（勉誠出版）
2016年 『八月の瓜（バーユエ・グワ）——母へ』（春風社，共訳）

【論文】

- 1986年 「郭沫若の戯曲をめぐる」(『麗澤大学紀要』42号)
1991年 「二人の阿Q」(『麗澤大学紀要』52号)

- 1993年 「教職中国語を考える（1）」（『麗澤大学紀要』57号）
- 1994年 「岳陽楼散記」（『中国俗文学研究』12号）
- 1995年 「教職中国語を考える（2）」（『麗澤大学紀要』61号）
- 1995年 「郁達夫文学の一側面」（『麗澤大学論叢』6号）
- 1995年 「中国の遊びについて——紙牌等をめぐって」（麗澤大学『中国研究』4号）
- 2000年 「中国語教授法の研究・方向補語の導入と練習について」（拓殖大学『語学研究』95号）
- 2002年 「総合中国語へ向けての試み」（拓殖大学『語学研究』101号）
- 2004年 「張資平の訳した白樺派の作品二種」（拓殖大学『語学研究』107号）
- 2004年 「『三言』における身体表現——「顔」を中心として」（『日本語・日本文化を核とした異文化接触ならびに交流に関する対照研究』所収、拓殖大学言語文化研究所総合研究プロジェクト報告書）
- 2005年 「中国の図解・絵入り辞典について」（拓殖大学『語学研究』110号）
- 2005年 「中国江南の港町「乍浦鎮」——その起源から今日まで——」（拓殖大学『人文・自然・人間科学研究』14号）
- 2006年 「張資平への言説をめぐって」（拓殖大学『語学研究』112号）
- 2006年 「莫言——市井に生きる庶民として描く」（『アジア遊学』94号、勉誠出版）
- 2009年 「中国文化における龍と蛇の諸相」（拓殖大学『人文・自然・人間科学研究』22号）
- 2010年 「現代中国ポップカルチャーの研究——中国当代音楽事情（1）」（拓殖大学『語学研究』122号）
- 2011年 「中国の若者文化をめぐって（1）——「高考」の周辺——」（拓殖大学『語学研究』125号）
- 2013年 「中国の若者文化をめぐって（2）——「動漫」の周辺①——」（拓

殖大学『語学研究』128号)

- 2013年 「テレサ・テンと精神汚染一掃キャンペーンについて」(拓殖大学
中国語学科「翻訳研究会」『異文化交流』3号)
- 2014年 「今読みたい同時代中国の作家たち(朱山坡——広西のダーク
ホース)」(『東方』406号)
- 2015年 「日本における中国当代小説の翻訳出版状況とその特色——2000
年以降を中心に——」(『異文化交流』4号)
- 2015年 「疑問に思うことども」(『異文化交流』4号)
- 2017年 「中国の「七夕」の今」(『異文化交流』6号)
- 2018年 「中国の村」(『異文化交流』7号)
- 2018年 「「Q版語文」と林長治」(『異文化交流』7号)
- 2018年 「河南省作家地図」(『小説導熱体』創刊号, 白帝社)

【翻 訳】

- 1999年 「市井の人々」馮驥才(『季刊中国現代小説』通巻48号, 蒼蒼社)
- 2008年 「コオロギ コオロギ」畢飛宇(『中国現代文学』2号, ひつじ書房)
- 2009年 「泥棒」蘇童(『中国現代文学』4号, ひつじ書房)
- 2010年 「犬について, 三篇」莫言(『イリーナの帽子——中国現代文学選
集』所収, トランスビュー)
- 2011年 「月は遙かに」劉慶邦(『中国現代文学』7号, ひつじ書房)
- 2013年 「円形の精霊」于曉威(『中国現代文学』11号, ひつじ書房)
- 2013年 「魂の授業」朱山坡(『中国現代文学』12号, ひつじ書房)
- 2015年 「叫び」朱山坡(『灯火』創刊号, 北京外文出版社)
- 2017年 「三一茶会」顔歌(『中国現代文学』18号, ひつじ書房)
- 2018年 「私の中学時代」莫言(『小説導熱体』創刊号, 白帝社)
- 2018年 「地球のうえの王家村」畢飛宇(『小説導熱体』創刊号, 白帝社)

【書 評】

- 2008年 「韓少功著《山南水北——八溪峒筆記》（作家出版社2006年）（『中国現代文学』創刊号）
- 2016年 「『盗みは人のためならず』——生きることの貪欲さ」（劉震雲著，彩流社，水野衛子訳）『図書新聞』3月5日
- 2017年 「『闇夜におまえを思ってもどうにもならない——中国の北方の片隅に展開する物語』（曹乃謙著，論創社，杉本万里子訳）『図書新聞』3月18日

【講演・発表など】

- 2013年 「中国の若者文化を探る」（高校生対象，東京ビッグサイトにて，7月13日）
- 2014年 「日本における中国当代文学翻訳の出版状況について」（分科会での発表，「第一回国際コミュニケーション中日文化出版翻訳フォーラム」青島にて，8月25日）
- 2015年 「中国の今と昔——文化・社会・言葉を通して」（講演，島根大学にて，7月10日）
- 2017年 「日本における中国現代文学の翻訳について」（講演，河北省石家庄市河北師範大学にて，5月29日）

【学内活動・学内運営など】

- 2007年～2010年 拓殖大学外国語学部中国語学科 学科長
- 2013年～2014年 同上
- 2011年～2018年 拓殖大学中国語学科「翻訳研究会」代表



感謝でいっぱいです

村 上 祥 子

1991年に拓殖大学の韓国語講師となり、2019年3月までの28年間を韓国語教育にかかわってきました。1991年当時は韓国語に興味を持つ学生は少なく、少しでも多くの学生の参加を望みながら教壇に立つ毎日でした。2000年を過ぎると第一次韓流ブームが起こり、想像すらしなかった現実がそこにありました。それはモグラの心境で、暗い穴から突然、太陽のさす地上に顔を出したような感覚でした。当時はいつかまた穴にもぐるのではと考えていました。その後のソーシャル・ネットワーキング・サービスの出現が、情報伝達方法の変化をもたらし、またコンテンツ産業が世界に影響を及ぼすこととなり、いまは第三次韓流ブームと言われています。学生の日常に韓流は溶け込み、情報だけでなく生活に根付いている現実には驚くばかりです。韓国語が置かれた環境の変化は、今後あらゆる言語に起こりえることだと考えます。このような変化を体験し、ブームということだけではなく、向かい合うことから生まれる充実を感じられる韓国語学修を考え、定着と発展を目指してきました。これから言語文化研究所が言語世界の変化を敏感にすくいあげ、発展していくことを期待しております。

具体的に言語文化研究所でお世話になったのは、各国の言語担当の先生方と同じテーマに沿って2002年ごろから共同研究を続け、発表の機会を

頂けたことです。これまでに「辞書研究」「英雄」「龍と蛇」「生と死」「女神」「呪い・穢れ・占い・迷信」などのテーマに基づく業績を積んできました。各国の文化や情緒を相互に理解する良いきっかけとなりました。言語文化研究所の所員として18年間にわたりお世話になり、また2009年と2010年には言語文化研究所長として関わりを持つことができたことは、身に余る光栄でした。

支えていただいた関係者の皆様、仲間とともに多くの学びや気づきの機会を持つことができたこと、ありがたいことと感謝でいっぱいです。

〈論 文〉

古文読解における係り結び

——『土佐日記』における「ぞ」「なむ」を中心に——

阿久津 智

要 旨

古典読解に係り結びを生かす方法を考えるため、『土佐日記』に係り結び（係助詞）がどのように現れているかを調べた。とくに、地の文における、「強意」を表す係助詞「ぞ」、「なむ」を含む係り結びの用法を探った。その結果、「ぞ」と「なむ」には、ともに、係助詞の用法として、(1)限定・対比・排他的な意味を表す用法（卓立強調）、(2)感情の焦点を表す用法（情緒的な強調）が見られたほか、係り結びの談話的な機能として、(3)話に区切りをつける用法が見られた。このうちの(3)などは、文章構成を把握するのに役に立つものであり、古典の読解に活用できるものと思われる。

キーワード：係り結び、土佐日記、古典文法学習、古典の読解、文章構造

1. はじめに

本稿では、『土佐日記』⁽¹⁾における係り結びの現れ方を見ながら、古典の読解に係り結びを積極的に生かす方法を考えていきたい。

筆者は、先に、古典文法学習における係り結びの扱いについて論じたが（阿久津 2018）、そこでは、いわゆる「係り結びの法則」（係助詞と文末との呼応形式）を、構文（文の種類）にとらえる見方を挙げ、また、係り結

びの、文章中における役割（談話的機能）を読解に生かす可能性などを示した。本稿では、高校の古典学習で扱われることの多い『土佐日記』（紀貫之著、935年頃成立）を取り上げて、その本文、とくに地の文に見られる係り結びの役割について、「強意」の係助詞とされる、「ぞ」、「なむ」を含むものを中心に考えていきたい。以下、まず、係り結びの機能について、これまでの研究で明らかにされてきたことを概観し（2節）、次に、『土佐日記』において係り結びがどのように使われているかを見（3節）、最後に、その結果を古典読解に生かす方法について考える（4節）。

2. 係り結びの機能

ここで見ていくのは、古典文法（文語文法）の基礎となった平安時代（中古）⁽²⁾における係り結びである。平安時代は、係り結びが盛んに用いられた時代であるが、近年の研究によれば、「中古は係り結びの量的な意味での全盛時代のように認められるが、盛りの姿が末の姿である」（『日本語文法事典』「係り結び1」）、「中古の係り結びは文法的には形式化し、さらに形骸化した末の姿になったのであって、それでもおしゃべりの際には愛用されている」（野村 2011: 98）などとされる。また、本来、「文情報の中心点」（焦点）を示していた係助詞は、「文の情緒的な卓立点（強調点）」（「一文の中で多少なりとも感情の込められた場所」）を示すだけのものとなっていたという（同辞典「係助詞2」、野村 2011: 98）。だとすれば、平安時代における係り結びの主な機能は、「卓立点（強調点）」を表すという機能は別として（a）「文構造の枠組みを形式的に決定する」（同辞典「係り結び1」）という統語（構文）論的な役割と、（b）談話（文章）において何らかのしるしになる、という談話（文章）論的な役割にあるということになるのではないだろうか。これを、古典文法学習に取り入れる場合、（a）係り結びを構文（文の種類）として扱い、文語による文作り（短歌

や俳句を含む）などを試みる、(b)係り結びの文章中における役割を示し、それを読解に取り入れる、ということなどが考えられると思われる。

本稿では、係り結びの中でも、「強調」や「強意」を表すとされる係助詞「ぞ」、「なむ」を含むもの（構文としては、「強調文」となる（鈴木 1977: 141））を中心に見ていくが、先に、「ぞ」と「なむ」との違いについて、ふれておく（もう1つの「強意」の係助詞「こそ」については、本稿で取り上げる『土佐日記』には少数例しか現れていないため（3.の表1参照）、ここでは、考察の対象としない）。先行研究では、「ぞ」と「なむ」は、ともに卓立の強調（プロミネンス）を表すとし、とくに、「なむ」に、話し言葉的で、聞き手への伝達や呼びかけを表すという特徴を挙げるものが多い。たとえば、『なむ』は恐らく話し言葉に多く用ゐられ、転じて文章形式語として、一つの話語り伝える際の表現になつたのであらう。一方、『ぞ』は、事件や主観的な心情を客観的に写し出す場合に用ゐられたと思はれる。要するに、『なむ』は語る強調、『ぞ』は写す強調表現であるといへよう。」（宮坂 1952: 47）、「ゾの強調がナムやコソと異なる点は、山田孝雄氏の言われたように、『一つを特別に指定する』強調と考えるべきであらう。」、「ナムは情をこめて相手にもちかける強調であると考え。」（伊牟田 1981: 67-68, 69）、「表現主体の判断・断定を示す機能をもつと考えられる『ぞ』の場合、終助詞との共起等他の要因がない限り、述定⁽³⁾の文の構成に関与するに留まるのに対し、『なむ』が用いられた文は、常に『述定＋伝達』の文となるのである。」（森野 1987: 106）、「—ぞ（卓立）—なむ（卓立＋聞き手への強い呼びかけ）」（近藤 2000: 239）などとされている。大学生向けの古典文法のテキストである『古典文法の基礎』（朝倉書店）には、次のようにまとめられている（沖森 2012: 102, 103）。

《地の文で用いられる「ぞ」》「ぞ」は「なむ」より語勢が強く、地の文や和歌に多く用いられた。会話文での使用は少なく、文章語的な性質を持っていた。

《「ぞ」と「なむ」の違い》「ぞ」と同じく文中の一要素への注目を示す強調を担うが、「なむ」はこれに聞き手への強い呼びかけを伴う。

《「なむ」の口語性》散文の会話文の中に多く用いられて、和歌にはほとんど使われない。

係助詞の談話論的な役割については、先行研究には、「なむ」に関するものが多い。たとえば、『なむ』の係り結びを含む文は、全体として聞き手に対して『おし出して確にことわる』という気持を示す、「現代語に於ける『……のだ』といふ指定的な言ひ方が強調を表はすと共に又、根拠のある説明、理由の提出といった意味を表はす場合に用ゐられる〔中略〕が、同様な性格がこの『なむ』の係り結びを含む文にも亦認め得ると思はれるのである。」(阪倉 1953: 10)、「係助詞ゾが、ヒトマズ、ココデ切ルヨ、という予告であるのに対して、係助詞ナムの機能は、ココデ大キク切ルヨ、という予告である。したがって、そのあとは話題が転換するか、短い補足がそれに続くか、さもなければ、そこでディスコースが途切れている⁽⁴⁾。」(小松 2001: 243)、『なむ』の用例に多い『用言の連用形＋て＋なむ』は言い訳の表現である。」(木下 2001: 32)、「聞き手を納得させるために説明する部分では、ナムが使用されるとかながえられる。」(西田 2009: 51)、などとする見方がある。

係り結び（とくに「強意」の係助詞を含むもの）が、文章の展開（話の流れ）の中で切れ目を示す際に使われることは、高校生向けの（大学受験対策用の）古文の問題集における「段落分け」の問題などにも現れている。たとえば、ある問題集には、『土佐日記』の1月20日の記事について、「本文を三段落に分け、第二・第三段落の最初の五字（句読点も含む）を答えなさい。」という問題があるが、そこでは、第二・第三段落ともに、係り結びの後から始まる箇所が「解答」となっている⁽⁵⁾。本文を、青谿書屋本（後述）によって挙げる（本文に、濁点、句読点、かっこを施し⁽⁶⁾、踊り字を仮名に直し、適宜仮名に漢字を当てる（その際、原文が仮名表記

であることを示すため、ルビを付す)。当該の係助詞に下線を付す。和歌を『』でくる。文番号を○数字で示す。以上、以下同じ。下の文章では、「解答」とされる段落の区切れに／を入れる)。

①廿日。②昨日のやうなれば、船出ださず。③皆人々憂へ嘆く。④苦しく心許なければ、ただ、日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日と数ふれば、指も損はれぬべし。⑤いと侘し。⑥夜は寝も寝ず。⑦二十日の夜の月出でにけり。⑧山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。／⑨かうやうなるを見てや、昔、阿倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬の鼻向けし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。⑩飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。⑪その月は、海よりぞ出でける。⑫これを見てぞ、仲麻呂の主、「我が国に、かかる歌をなむ、神代より神も詠ん給ひ、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しむ、喜びもあり、悲しきもある時には、詠む。」とて詠めりける歌、『青海原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』とぞ詠めりける。⑬かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、男文字に、様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心を聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ賞でける。⑭唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。／⑮さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、『都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ』

この問題集の「解説・解答書」には、「第一段落は二十日のこと、第二段落は阿倍仲麻呂の話、第三段落は今（二十日）のこと。」とある。この日の記事には、『土佐日記』の中で、最も多く係り結び（係助詞）が現れている（「第一段落」1例、「第二段落」10例（会話文中1例）、「第三段落」1例（和歌））。係り結びは、とくに「第二段落」に集中しているが、

この部分は、「阿倍仲麻呂の話」であり、係り結びの多用によって、語り口調で、話が進められているともいえる。このような文章の展開は、『土佐日記』においてはここだけである。この日の記事では、「第一段落」の最後の文に、「（「第一段落」で唯一の）係り結びが現れており、これが話に一段落がついたことを示すものとなっていると思われる（「第三段落」の直前にある、「第二段落」の最後の文にも係り結び（「…にやあらむ」）が現れているが、こちらの区切れは、むしろ「第三段落」冒頭の「さて」によって、はっきり示されていると思われる）。

このように、係り結びには、談話（文章）中において何らかのしるしになる、という談話（文章）論的な機能があると思われる。以下、『土佐日記』の本文を通して、このことについて見ていく。

3. 『土佐日記』における係り結び

本節では、『土佐日記』における係り結びについて見ていく。調査対象としたのは、『土佐日記』の全文であるが、とくに地の文における、「ぞ」、「なむ」を含む係り結びを中心に見ていく（ただし、両者の違いについては、とくに分析を行わない）。本文は、青谿書屋本による（『東海大学蔵桃山文庫影印叢書 第九巻 土佐日記・紫式部日記』を用いる）。ただし、池田（1941）などに従って、一部を訂正している⁽⁷⁾。

『土佐日記』を選んだのは、本文の確かさと、文章の扱いやすさからである。『土佐日記』には、作者である紀貫之の自筆本を忠実に写した（奥書に「書写之一字不違」とある）藤原為家本（1223写）が現存しており（複製本未公開）、また、それを正確に写し取った青谿書屋本（江戸初期写）がある（萩谷 1988: 98-104, 小松 2001: 41）。青谿書屋本には、為家本の誤写（と思われるもの）もそのまま写しているが（ほかに、ごくわずかなのであるが、独自の誤写もある（萩谷 1988））、池田（1941a）の「再建」に

より、ほぼ原典が復元され、本文が確定しており、これがテキストとして広く使われている（大木 2013: 33）。

『土佐日記』の文章は、日記形式であり、簡潔な文体をもつとされる。たとえば、『土佐日記』という作品は、基本的に『それから…それから…』という文章を積み重ねた形として捉えることが可能ではないか。時間的には旅立ちの日から帰宅するまで、地理的には土佐から京までという一本の軸の上に、日々の記録が連ねられていくのである。」（篠原 1987: 176）、「土佐日記の文体については、従来より『簡潔な文体』ということが言われてきた。文は単文が多く、また文末が裸の用言の終止形で終わるものが多いといった文の特徴などからくる文の印象であると考えられる」（阿久澤 2002: 283）、「全体に、この『日記』を通底している文体の特徴は、なにしろほとんどが動詞、助動詞の終止形であっさりと終わっていることにある。もし平安女房文学だったら『…しはべりける』とでも言うようなところを、まるで愛想もなにもなく『…す』と書く。」（林 2005: 15）などといわれている。また、『土佐日記』には、「平安期の女流文学作品等には見えない語彙・語法がある。」とされるが、これについては、「土佐日記と漢文訓読との間には〔中略〕深いつながりがあるやうに思はれる。」、「当時、漢文を訓読する場合に用ゐられた言葉は、日常使ふ口語とは異なつた特殊なものであつて、物語随筆日記などの仮名文学の言葉（即ち口語に比較的近いと考へらえる言葉）との間には、相当大きな開きがあり、その違ひは今日からも一々指摘し得るほどであつたと考へられる。〔中略〕この土佐日記こそ、作者貫之が、二種の文体〔「訓読語」と「仮名文学語」〕を使つたといふ、典型的な一例と見られるのである。」（築島 1981: 401, 398-399）などとされている。このように、『土佐日記』は、漢文訓読的な表現が多く、文章が簡潔であり、そのために、文章展開が比較的たどりやすい作品といえる。

一方で、『土佐日記』は、通常の日記（旅行記）ではなく、「日記文学」

であり（木村 1963: 56），その主題や視点とかかわって，動作や感情の主体（主語）が明確でないところが多いという問題がある。『土佐日記』の主題については，主な説だけでも，土佐で亡くなった女兒への追慕をはじめとして，旅における感慨，歌論の展開，社会風刺などがあり⁽⁸⁾，一つには限定できないともいわれる⁽⁹⁾。これに関連して，日記の「書き手」を誰と見るかという問題もあるが，一般には，作者である紀貫之が女性に仮託して書いた（前国司（貫之）の周辺にいる女性を書いたという体裁をとっている）とされる。たとえば，東原・ウォーラー（2013: 11）では，「本当の書き手である紀貫之とは別に『前国守』の身边に伺候している女性を書き手として設定している。」としている。こういった見方に対し，小松（2018: 180-181）は，「女性仮託」説の根拠となる『土佐日記』冒頭の「を」とこもすなる日記といふものを／をむなもしてみむとてするなり」（青谿書屋本の原文。／は改行）は，「女性仮託」ではなく，「漢字で書いている日記を，仮名文で書いてみよう。」（「をむなもし」を「女文字」ととる）と読むべきで，「肝心なのは漢字か仮名か，漢字文か仮名文かという，使用する文字種，文体の違いであるから，書き手の性別は無関係である。したがって，〔中略〕女性仮託という仮説は問題外になる。」と主張する⁽¹⁰⁾。本稿では，「書き手」を，国司一行に同行する女性（侍女）としておく。文中に出てくる，前国司（＝貫之）に当たる，「ある人」，「船君」などは第三者として扱い，「書き手の分身」としては扱わないでおく⁽¹¹⁾。そして，「また，昔へ人を思ひ出でて，いづれの時にか忘るる」（1月11日^⑩）などは，「書き手」が，子を亡くした親の内面を描いた，自由間接言説⁽¹²⁾ととらえておく。

さて，本稿では，『土佐日記』の各日の記事において，各文がどのような内容を持ち，それがどう連なっていくか，どういうところに係り結びが現れるかを見る，というやり方をとる。たとえば，12月23日の記事は，次のように分析される。

《本文》

①廿三日。②八木^{やぎ}のやすのりといふ^{ひと}人あり。③この人^{ひと}、国^{くに}に必^{かなら}ずしも言^いひ使^{つか}ふ者^{もの}にもあらざなり。④これぞ^た、偉^たはしきやうにて、馬^{うま}の鼻^{はな}向けしたる。⑤守^{かみ}がらにやあらむ、国人^{くにひと}の心^{こころ}の常^{つね}として、「今^{いま}は」とて見え^みざるを、心^{こころ}ある者^{もの}は、恥^はぢずにな^きむ来^きける。⑥これは、物^{もの}によりて褒^ほむるにしもあらず。

《文章の展開》

①日付→②説明→③説明→④行為（＋意見）（「…ぞ…」）→⑤説明（＋意見）（「…や…，…なむ…」）→⑥説明（＋意見）

ここで、「行為」とは、時間的順序に従った、人の行為や状態（の継続）を表し、「説明」とは、時間的順序にかかわらずに説明しているものを表す。また、「意見」とは、評価・判断・感想などである。「行為（＋意見）」や「説明（＋意見）」は、その文に書き手の意見が含まれることを表す。

この記事の中では、係り結びは、④（「…ぞ…」）と⑤（「…や…，…なむ…」）とに現れている。④の「これぞ、偉はしきやうにて、馬の鼻向けしたる。」は、②・③で「八木のやすのり」を紹介したのに続いて、その人物の行為を述べ、評価している文である。この「…ぞ」は、「ほかの人とは違って、八木のやすのりこそは」という、限定・対比・排他的な卓立強調といえるが、この文は、「八木のやすのり」を紹介する部分のまとめにもなっている（なお、『土佐日記』には、限定・対比・排他的な表現である「のみぞ」が多く使われている（後述））。⑤の「守がらにやあらむ、」は、挿入句で、書き手の判断を表している。「…にやあらむ」は、『土佐日記』に多く見られる（地の文に7例）。同じ⑤の「…、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。」は、この記事全体のまとめともいえる文である（このあとの⑥は、補足というべきものであろう）。これは、2節に挙げた小松（2001）の見方に合うものであろう。

本稿では、上のようなやり方で、文章の展開の中で係り結びの現れ方を見

表1 『土佐日記』の係助詞

	地の文		和歌		舟唄		会話文		合計
	文中	文末	文中	文末	文中	文末	文中	文末	
「ぞ」	52	1	14	0	1	0	5	1	74*
「なむ」	13	3	0	0	0	0	0	0	16
「や」	16	6	6	1	2	0	3**	0	34
「か」	4	0	7	0	0	0	1***	0	12****
「こそ」	2	0	4	0	1	0	2	0	9

*このほかに、「ざりける」(<ぞありける) 1あり。

**「やは」1を含む。

***「かは」1を含む。

****このほかに、終助詞の「か」1あり。

てみた。なお、『土佐日記』に現れる係助詞の数は、表1のとおりである⁽¹³⁾。

さて、地の文に見られる、「ぞ」、「なむ」を含む係り結びの主な機能を、以下に、まとめて示す(『土佐日記』の各日における文章展開については、本節の終わりに表にして示す(表2))。『土佐日記』には、「ぞ」が多く使われているため⁽¹⁴⁾、「ぞ」の係り結びを中心に述べる(「ぞ」は、出現数が多いため、以下の例には、1月21日(12月21日の「門出」から30日目)までのものを挙げる。ただし、12月23日、1月20日については、すでに挙げたので、ここには挙げる)。

◎「ぞ」、「なむ」の意味・用法

2節で見たように、「ぞ」と「なむ」の主な機能は、卓立強調であるとされる。『土佐日記』には、限定・対比・排他的な意味を表す「ぞ」が多く見られる。とくに限定を表す副助詞「のみ」や、副詞「ただ」とともに使われることが多い。「のみぞ」は、地の文に5例、現れている(ほかに、和歌に2例、会話文中に1例、現れている)。「のみぞ」の例を含め、限定・対比・排他的な意味を表す「ぞ」の例を挙げる(「のみ」、「ただ」に

点線を付す)。

(1) かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にて俄かに失せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何事も言はず、京へ帰るに、女子の亡きのみぞ悲しび恋ふる。(12月27日④)

(2) 守の館の人々の中に、この来たる人々ぞ、心あるやうには、言はれ仄めく。(12月27日⑧)

(3) ただ、押鮎の口をのみぞ吸ふ。(1月1日⑦)

(4) ただ、波の白きのみぞ見ゆる。(1月7日④)

(5) 若葉ぞ今日をば知らせたる。(1月7日⑥)

(6) この人々ぞ、志ある人なりける。(1月9日③)

(7) まして、女は、船底に頭を突き当てて、音のみぞ泣く。(1月9日⑩)

(8) ただ、月を見てぞ、西東をば知りける。(1月11日④)

ほかに、上とは異なる（とくに限定せず、とくに対比の対象もない）、驚き、憂鬱、感動など、感情の焦点を示す、情緒的な強調と思われる「ぞ」も見られる⁽¹⁵⁾。

(9) 今日、破籠持たせて来たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。(1月7日⑭)

(10) 口惜しく、なほ日の悪しければ、居ざるほどにぞ、今日、二十日あまり経ぬる。(1月15日③)

(11) この言葉、何とにはなけれども、物言ふやうにぞ聞こえたる。(1月21日⑩)

一方、「なむ」にも、限定・対比・排他的な意味を表す例が見られる（「のみなむ」は、地の文に1例）。

(12) ただ、海に波なくして、いつしか御崎といふ所渡らむとのみなむ思ふ。(1月16日③)

(13) これを見て、業平の君の「山の端逃げて入れずもあらなむ」と

いふ歌^{うた}なむ思^{おも}ほゆる。(1月8日④)

◎「ぞ」、「なむ」の係り結びの談話的機能

「ぞ」の係り結びの談話的機能としては、2節に挙げたように、話に区切りをつけるというものが挙げられる。とくに多いのは、歌を挙げたあとに、「とぞいふ」などの形で、区切りをつけるものである。『土佐日記』には、「とぞいふ」などの「ぞ」の係り結びが12例、「とぞ」で終わるものが1例、現れている。例を挙げる。

(14) [歌省略] とぞ言^いふなる。(12月27日⑬)

(15) [会話文省略] とぞ言^いひ合^あへなる。(1月1日⑧)

(16) [歌省略] とぞ詠^よめる。(1月7日⑯)

(17) [歌省略] とぞ言^いへる。(1月11日⑨)

(18) [会話文省略] とぞ言^いふ。(1月21日⑨)

一方、「なむ」には、「となむよめる」などの「なむ」の係り結びが3例、「なむ」で終わるものが2例、見られる⁽¹⁶⁾。例を挙げる。

(19) [歌省略] となむ詠^よめる。(1月7日⑳)

(20) [歌省略] と言^いひつつなむ。(1月11日⑬)

(21) [歌省略] となむ歌^{うた}詠^よめる。(1月13日④)

(22) [歌省略] となむ言^いへる。(2月4日⑥)

(23) [歌省略] となむ。(2月5日⑭)

ほかに、「ぞ」の係り結びは、場面（時間、場所など）の変わり目や、行為や状態などの事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所、あるいは、その逆に、説明や意見、歌などから、事実の描写に変わる箇所、また、前の歌から次の歌に続く箇所など、話の区切りに現れている（その文の後に変わる。後ろの文の初めに、「かかる間に」、「かく」、「かくて」などが来ることが多い）。例を挙げる（「かかる間に」、「かく」、「かくて」に点線を付す）。

○場面（時間、場所など）の変わり目

- (24) ありとある上下、童^{かみしも}まで酔^{わらは}ひ痴^ゑれて、一文字^しをだに知らぬ者^{もの}、しが脚^{あし}は十文字^ふに踏^{あそ}みてぞ遊⁽¹⁷⁾ぶ。(12月24日③（最後の文）)
- (25) (= (4)) ただ、波^{なみ}の白^{しろ}きのみぞ見^みゆる。かかる^{あひだ}間に、人^{ひと}の家^{いえ}の、「池^{いけ}」と名^なある所^{ところ}より、鯉^{こひ}はなくて、鰯^{ふな}より始^{はじ}めて、川^{かは}のも海^{うみ}のも、異物^{こともの}ども、長櫃^{ながびつ}に担^{にな}ひ続^{つづ}けて、遣^{おこ}せたり。(1月7日④→⑤（海→陸）)
- (26) これを見送^{みおく}らむとてぞ、この人^{ひと}どもは追^おひ来^きける。かく^こて、漕^こぎ行^ゆくまにまに、海^{うみ}の辺^{ほとり}に留^とまれる人^{ひと}も遠^{とほ}くなりぬ。(1月9日⑥→⑦（陸→海）)
- (27) (= (7)) まして、女^{をむな}は、船底^{ふなぞこ}に頭^{かしら}を突^つき当^あてて、音^ねをのみぞ泣^なく。かく^{おも}思^ふへば、船子^{ふなこ}、楫取^{かちとり}は、舟唄^{ふなうた}歌^{うた}ひて、何^{なに}とも思^{おも}へらず。(1月9日⑩→⑫（船底→外）)
- (28) (= (8)) ただ、月^{つき}を見^みてぞ、西^{にし}東^{ひむがし}をば知^しりける。かかる^し間に、みな夜明^{よあ}けて、手洗^{てあら}ひ、例^{れい}の事^{こと}どもして、昼^{ひる}になりぬ。(1月11日④→⑤（暁→朝・昼）)
- (29) それは、「海^{うみ}の神^{かみ}に怖^おぢて」と言^いひて、何^{なに}の葦蔭^{あしかげ}に託^{ことづ}けて、老海鼠^{ほや}のつまの貽鮠^{いずし}、鮠鮠^{すしあわび}をぞ、心^{こころ}にもあらぬ脛^{はぎ}に上^あげて見^みせる。(1月13日⑦（最後の文）)

○事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所

- (30) (= (2)) 守^{かみ}の館^{たち}の人^{ひと}々^{びと}の中^{なか}に、この来^きたる人^{ひと}々^{びと}ぞ、心^{こころ}あるやうには、言^いはれ仄^{ほの}めく。かく^{わか}別^{がた}れ難^いく言^いひて、かの人^{ひと}々^{びと}の、口網^{くちあみ}も諸持^{もろも}ちにて、この海^{うみ}辺^べにて、担^{にな}ひ出^いだせる歌^{うた}、[歌省略] (12月27日⑧→⑨)
- (31) (= (3)) ただ、押鮎^{おしあゆ}の口^{くち}をのみぞ吸^すふ。この吸^すふ人^{ひと}々^{びと}の口^{くち}を、押鮎^{おしあゆ}もし思^{おも}ふやうあらむや、[会話文省略] (1月1日⑦→⑧)
- (32) 今宵^{こよひ}、月^{つき}は海^{うみ}にぞ入^いる。これを見^みて、業平^{なりひら}の君^{きみ}の「山^{やま}の端^は逃^にげて入^いれずもあらなむ」といふ歌^{うた}なむ思^{おも}ほゆる。(1月8日③→④)

- (33) 本^{もと}ごとに波^{なみ}打ち^う寄せ、枝^{えだ}ごとに鶴^{つる}ぞ^と飛び^{かよ}通^{おも}ふ。面白^{おもしろ}しと見る^みに耐^たへずして、船^{ふね}人の詠^よめる歌^{うた}、[歌省略] (1月9日⑭→⑮)
- (34) まだ幼^{をさな}き童^{わらは}の言^{こと}なれば、人^{ひと}々笑^びふ時^{とき}に、ありける女^{をむな}童^{わらは}なむ、この歌^{うた}を詠^よめる。[歌省略] (1月11日⑧)
- (35) 徒^{いたづ}らに日^ひを経^ふれば、人^{ひと}々海^{びと}を眺^{うみ}めつつぞある。女^めの童^{わらは}の言^いへる、[歌省略] (1月15日④→⑤)

○説明や意見、歌などから、事実の描写に変わる箇所

- (36) この、羽^は根^ねといふ所^{ところ}問^とふ童^{わらは}のついでにぞ、また、昔^{むかし}へ人^{びと}を思^{おも}ひ出^いでて、いづれの時^{とき}にか忘^{わす}る。今^け日はまし、母^{はは}の悲^{かな}しがるることは。(1月11日⑪→⑫)
- (37) これを見^みれば、春^{はる}の海^{うみ}に秋^{あき}の木^この葉^はしも散^ちれるやうにぞありける。臍^{おぼろ}けの願^ゆによりてにやあらむ、風^{かぜ}も吹^ふかず、よき日^ひ出^いで来^きて、漕^こぎ行^ゆく。(1月21日④→⑤)
- (38) [唄省略] と歌^{うた}ふぞあはれなる。か^く歌^{うた}ふを聞^ききつつ漕^こぎ来^くるに、黒^{くろ}鳥^{とり}といふ鳥^{とり}、岩^{いは}の上^{うへ}に集^{あつ}まりをり。(1月21日⑥→⑦)

同様の「なむ」の係り結びの例を挙げる。

○事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所

- (39) これかれ互^{たが}ひに、「国^{くに}の境^{さか}の内^{うち}は」とて、見^み送^{おく}りに来^くる人^{ひと}数^{あまた}多^たが中^{なか}に、藤^{ふぢ}原^{はら}のときざね、橘^{たちばな}のすゑひら、長^は谷^せ部^べのゆきまさらなむ、御^み館^{たち}より出^いで給^たびし日^ひより、ここかしこに追^おひ来^くる。この人^{ひと}々ぞ、志^{こころ}ある人^{ひと}なりける。(1月9日②→③)
- (40) この間^{あひだ}に、雲^{くも}の上^{うへ}も海^{うみ}の底^{そこ}も、同^{おな}じ如^{ごと}くになむありける。むべも昔^{むかし}の男^{をとこ}は、「棹^さは穿^うつ波^{なみ}の上^{うへ}の月^{つき}を。船^{ふね}は圧^おふ海^{うみ}の中^{なか}の空^{そら}を。」とは言^いひけむ。(1月17日③→④)

○前の歌から次の歌に続く箇所

- (41) [歌省略] となむありければ、帰^{かへ}る前^{さき}の守^{かみ}の詠^よめりける、[歌省略] (12月26日⑥)

この節の最後に、『土佐日記』の記事の概要・文章の展開・係り結びの出現位置を一覧にしたものを挙げておく（表2）。

表2 『土佐日記』の記事の概要・文章の展開・係り結びの出現位置

【凡例】「文章の展開」における略号や用語は、以下のとおりである。

- ・○数字：各日における各文の順番。
- ・行為：時間的順序に従った、人の行為や状態（の継続）。
 - ・㊦：前国司一行（身内の者）以外の人々の行為（㊦のないものは、前国司一行の行為）⁽¹⁸⁾。
 - ・㊦㊦：前国司一行と、それ以外の者との共同の行為。
- ・状態：時間的順序に従った、天候や自然などの状態。
- ・説明：時間的順序にかかわらずに説明しているもの。
- ・意見：評価・判断・感想など（自由間接言説と思われるものを含む）。
- ・セリフ：会話の言葉そのままと思われるもの。「内話」（心中語）は、セリフとしては扱わない。
- ・歌：和歌（通し番号を付す）。「唄」は舟唄など（通し番号は付さない）。
- ・行為（+意見）：行為の描写の中に意見が現れるもの（他の「（+）」も同様）。
- ・行為+歌：行為の描写の後に歌が現れるもの（他の「+」も同様）。
- ・（ぞ）：係助詞「ぞ」が現れている箇所（他の係助詞も同様）。
 - ・㊦：文末がその係助詞で終わっているもの。
- ・歌+（ぞ）：歌のあとに「とぞいへる」などとあるもの（他の係助詞も同様）。

～日目	月日	場所	記事の概要	文章の展開
1	12/21	国府→ 大津	日記を書くことにする。 12月21日夜に出発する。 任期を終えた国司が館を出る。多くの人々が見送りに来る。	①説明→ ②行為→③説明→ ④行為→⑤㊦行為→⑥㊦㊦行為（+意見）（なむ）
2	12/22	大津	和泉国までの無事を祈願する。藤原のときざねが餞別に来る。	①日付+行為→②㊦行為→③㊦㊦行為（+意見）
3	12/23	大津	八木のやすのりが餞別に来る。	①日付→②説明→③説明→④㊦行為（+意見）（ぞ）→⑤説明（+意見）（や・なむ）→⑥説明（+意見）
4	12/24	大津	講師が餞別に来る。	①日付→②㊦行為→③㊦㊦行為（ぞ）
5	12/25	大津→ 国府	新任国司から送別の宴に呼ばれる。	①日付→②㊦行為→③㊦㊦行為（+意見）

6	12/26	国府 → (大津)	送別の宴が続く。	①日付→② [㊞] 行為→③ [㊞] 行為→④ [㊞] 行為→⑤説明→⑥ [㊞] 行為+歌 ₁ +(なむ)+行為+歌 ₂ →⑦説明(+意見)→⑧ [㊞] 行為(+意見)
7	12/27	大津→ 鹿兒の崎 →浦戸	船出する。 この国で急死した女 児を追慕する。 鹿兒の崎で国司の兄 弟らが酒などを持っ てくる。 楫取に促され、船に 乗る。 浦戸に泊まる。藤原 のときざねらが来る。	①日付→②行為→ ③説明→④行為(+意見)(ぞ)→ ⑤行為(+意見)→⑥行為+歌 ₃ → ⑦歌 ₄ (ぞ)+ [㊞] 行為→⑧行為(+ 意見)(ぞ)→⑨ [㊞] 行為(+意見)+ 歌 ₅ (や・こそ)+行為+歌 ₆ → ⑩ [㊞] 行為(+意見)+セリフ+セ リフ+行為→⑪行為(+意見)→ ⑫行為→⑬行為+セリフ+(ぞ) → ⑭行為→⑮ [㊞] 行為
8	12/28	浦戸 → (大湊)	浦戸から大湊へ向か う。 以前の国司の子らが 酒などを持ってくる。	①日付→②行為→ ③ [㊞] 行為→④行為
9	12/29	大湊	大湊に泊まる。 医師が、屠蘇、白散、 酒を持ってくる。	①日付→②行為→ ③ [㊞] 行為→④意見
10	1/1	大湊	同じ泊にいる。 白散を失う。押鮎を 吸う。	①日付→②行為→ ③説明→④説明→⑤説明→⑥説 明→⑦行為(ぞ)→⑧意見(や [㊞]) +セリフ(ぞ)+セリフ(ぞ [㊞]) (ぞ)
11	1/2	大湊	大湊にいる。 講師が酒などを贈っ てくる。	①日付→②行為→ ③ [㊞] 行為
12	1/3	大湊	同じ所にいる。 風波が強い。	①日付→②行為→ ③意見(や)
13	1/4	大湊	風が吹き、出発でき ない。 まさつらが酒などを 持ってくる。	①日付→②状態+行為→ ③ [㊞] 行為→④行為(+意見)→⑤ 説明→⑥意見

14	1/5	大湊	風波がやまず、同じ所にいる。 人々が訪ねてくる。	①日付→②状態+行為→ ③行為
15	1/6	大湊	同じ所にいる。	①日付→②行為
16	1/7	大湊	同じ港にいる。 白馬の節会を思う。 「池」に住む人が長櫃で食べ物を贈ってくる。 わりごとを持ってきた人が歌を詠むが、だれも返歌をしない。 ある童が返歌をしようと言う。	①日付→②行為→ ③意見→④説明(ぞ)→ ⑤行為→⑥説明(ぞ)→⑦説明→ ⑧歌 ₇ →⑨意見→⑩説明→⑪説明→⑫行為(+意見)→ ⑬説明→⑭説明(+意見)(ぞ・や)→⑮説明(+意見)→⑯行為+歌 ₈ (や)+(ぞ)→⑰説明(+意見)→⑱意見→⑲行為→⑳行為(+意見)→㉑行為+セリフ→㉒行為→㉓セリフ+行為→㉔行為+セリフ(やは)+セリフ→㉕セリフ+行為+行為(+意見)(や)→㉖セリフ+行為(+意見)→㉗行為→㉘行為+歌 ₉ (こそ)+(なむ)→㉙意見→㉚意見(や)→㉛セリフ(かは)+セリフ+セリフ+行為
17	1/8	大湊	障りがあり、同じ港にいる。 月を見て、業平の歌を思う。	①日付→②行為→ ③状態(ぞ)→④意見(なむ)→⑤意見(や)→⑥行為(+意見)+歌 ₁₀ (や)
18	1/9	大湊 → (宇田の松原)→	大湊から奈半へ向かう。 藤原のときざねらが追ってくる。互いに別れを惜しむ。 宇多の松原を過ぎる。	①日付+行為→ ②行為(なむ)→③意見(ぞ)→④意見→⑤行為→⑥説明(ぞ)→⑦行為→⑧行為→⑨意見→⑩意見→⑪行為+歌 ₁₁ (や)→⑫行為→⑬意見→⑭状態(ぞ)→⑮行為(+意見)+歌 ₁₂ (ぞ)+(や)→⑯意見→

		奈半	楫取の舟唄を聞く。 泊に着く。	①7行為+状態+行為→①8説明(+意見)→①9説明(ぞ)→②0㊦行為(+意見)→②1㊦行為+唄(ぞ・や・や)→②2説明→②3行為+意見→ ②4行為
19	1/10	奈半	奈半に泊まる。	①日付→②行為
20	1/11	奈半→ (羽根) →(室津)	暁に船を出し、室津に向かう。 「羽根」に来る。童が「羽根」という名をおもしろがる。それを見て、亡き子を思い出す。	①日付→②行為→③行為→④行為(ぞ)→⑤行為→ ⑥行為→⑦行為+セリフ(や)→ ⑧行為(なむ)→⑨歌 ₁₃ +(ぞ)→ ⑩説明(+意見)→⑪意見(ぞ・か)→⑫行為(+意見)→⑬行為(+古歌一部(ぞ))(+意見)+ 歌 ₁₄ +(なむ㊦)
21	1/12	室津	ふむときらの船が奈良志津より室津に来る。	①日付→②状態→③㊦行為
22	1/13	室津	女たちが沐浴しに下りていく。 女が葦蔭で沐浴する。	①日付+状態→②状態→③行為→④行為+歌 ₁₅ (ぞ・か)+(なむ)→ ⑤意見→⑥説明→⑦行為(+意見)(ぞ)
23	1/14	室津	雨が降り、同じ所にいる。 船君が節忌をする。 楫取が鯛を持ってきて、米や酒を与える。	①日付→②状態+行為→ ③行為→④行為→⑤説明→⑥㊦行為→⑦行為→⑧説明(+意見)
24	1/15	室津	船が進まないことを嘆く。 女の童が歌を詠む。	①日付→②行為→③説明(+意見)(ぞ)→④説明(+意見)(ぞ)→ ⑤行為+歌 ₁₆ (や)→⑥意見
25	1/16	室津	風波がやむことを願う。 船に乗ってから25日になる。	①日付→②状態→③意見(なむ)(+内話(か))→④状態→⑤行為+歌 ₁₇ (ぞ・ぞ)→ ⑥説明

26	1/17	室津→ →室津 (?)	暁に船を出す。月をめ でる。 楫取が、風が吹くと 言って、船を返す。	①日付→②行為(+意見)→③状態(+意見)(なむ)→④意見→⑤説明→⑥行為+歌 ₁₈ →⑦行為+歌 ₁₉ (ぞ)→ ⑧状態+㊟行為+セリフ+セリフ+セリフ+行為→⑨意見
27	1/18	室津 (?)	同じ所にいる。 手持ちぶさに歌を 詠み合う。	①日付→②行為→③状態+行為→ ④意見→⑤意見→⑥説明(+意見)(や)→⑦行為+歌 ₂₀ (ぞ)→ ⑧説明→⑨行為+歌 ₂₁ (ぞ)→⑩行為+歌 ₂₂ (か・か・ぞ)→⑪行為→⑫説明→⑬行為→⑭説明→ ⑮説明(+意見)→⑯説明→⑰説明(+意見)
28	1/19	室津 (?)	天候が悪く、船を出 さない。	①日付→②状態+行為
29	1/20	室津 (?)	船を出さない。月が 出る。 月を見て、昔の阿倍 仲麻呂のことを思う。	①日付→②行為→③行為→④意見→⑤意見→⑥行為→⑦状態→ ⑧説明(ぞ)→ ⑨説明(や)→⑩説明(や・ぞ)→ ⑪説明(ぞ)→⑫説明(ぞ)(+セリフ(なむ))+歌 ₂₃ (ぞ)→⑬説明(や・なむ)→⑭説明(や)→⑮行為+歌 ₂₄ (こそ)
30	1/21	室津 (?) → (某港 a)	船を出す。 ついてきた童が舟唄 を歌う。 楫取が詩的なことを 言う。 船君が海賊の報復を 恐れる。	①日付→②行為→③㊟行為→④意見(ぞ)→⑤状態+行為(+意見)(や)→ ⑥行為+唄(こそ)+意見(ぞ)→ ⑦行為+状態→⑧状態→⑨㊟行為+セリフ+(ぞ)→⑩意見(ぞ)→⑪説明→ ⑫行為+セリフ+セリフ+歌 ₂₅ +セリフ

31	1/22	某港 a → (某港 b)	昨日の泊から別の泊 に向かう。 男の童が山を見て、 歌を詠む。 ある人が歌を詠む。	①日付→②行為→ ③状態→④説明(ぞ)→⑤行為 (+意見)(ぞ)→⑥歌 ₂₆ (や)+(ぞ) →⑦意見→ ⑧状態(+意見)→⑨行為+歌 ₂₇
32	1/23	某港 b	海賊の恐れありと聞 き、神仏を祈る。	①日付→②状態→③行為
33	1/24	某港 b	同じ所にいる。	①日付→②行為
34	1/25	某港 b	船を出さない。海賊 が来るといううわさ を聞く。	①日付→②行為+セリフ→③ 行為
35	1/26	某港 b → (某港 c)	海賊を恐れて、夜中 に船を出す。幣を奉 る。 船に帆を上げて進む。	①日付→②行為(+意見)(や)→ ③行為+セリフ+行為→④行 為+歌 ₂₈ +(ぞ)→ ⑤行為→⑥行為(+意見)(か・ や)→⑦行為+歌 ₂₉ (こそ)+(ぞ Ⓢ)→⑧行為
36	1/27	某港 c	風波が荒れて、船を 出さない。 ある女、ある男が歌 を詠む。	①日付→②状態+行為→ ③行為→④行為+歌 ₃₀ →⑤行為 +歌 ₃₁ →⑥状態→⑦行為
37	1/28	某港 c	雨がやまない。	①日付→②状態
38	1/29	某港 c → 土佐の泊	船を出して、漕いで いく。 京の子の日のことを 思い出す。 土佐の泊に船を寄せ る。	①日付→②行為→③行為→④行 為→ ⑤行為+意見→⑥行為+歌 ₃₂ (か) +(ぞ)→⑦意見→⑧行為+歌 ₃₃ →⑨行為→ ⑩行為(+意見)+セリフ(や)+ 行為+セリフ+行為→⑪説明 →⑫行為+セリフ(ぞ)+セリフ +歌 ₃₄ (ぞ)+(ぞ)
39	1/30	土佐の泊→ (沼島など) →和泉の灘 a	夜中に船を出して、 阿波の水門を渡り、 沼島を過ぎ、多奈川 を渡り、和泉の灘に 至る。	①日付→②状態→③行為→④行 為→⑤行為→⑥行為(+意見)→

			船に乗ってから 39 日になる。和泉の国に來たので、海賊の心配はない。	⑦状態→⑧意見→⑨説明→⑩行為+意見
40	2/1	和泉の灘 a → (黒崎) → 箱の浦→ (和泉の灘 b)	和泉の灘を出て、漕いでいく。 黒崎の松原を通る。 箱の浦より船を綱で引く。船君が長旅の苦しさを嘆く。 風波が高くなり、留まる。	①日付→②状態→③行為→④→状態 ⑤行為→⑥説明(+意見)(ぞ)→ ⑦行為→⑧行為+歌 ₃₅ (か)→⑨行為+セリフ+行為+歌 ₃₆ →⑩意見→⑪セリフ+セリフ(こそ)+行為→ ⑫状態+行為
41	2/2	和泉の灘 b	風波がやまず、神仏を祈る。	①日付→②状態→③行為
42	2/3	和泉の灘 b	船を出さない。 風波がやまず、歌を詠む。 日が暮れる。	①日付→②状態+行為→ ③状態→④行為+歌 ₃₇ → ⑤状態
43	2/4	和泉の灘 b	楫取が黒雲を見て船を出さない。終日波風は立たない。 この浜で美しい貝や石を見て、亡き子を思い、歌を詠む。 女が歌を詠む。	①日付→②セリフ+③行為→③状態→④意見→ ⑤状態→⑥行為+歌 ₃₈ +行為+歌 ₃₉ +(なむ)→⑦意見→⑧意見(や④)→⑨意見→ ⑩行為+歌 ₄₀ (ぞ)
44	2/5	和泉の灘 b → (小津) → (石津) → (住吉) →	和泉の灘より小津に向かう。 小津の松原を見て、歌を詠む。 船を速く漕ぐように促すと、楫取は歌のようなことばを言う。 風波立たずに進む。 住吉のあたりを漕いでいく。 亡き子の母が歌を詠む。	①日付→②行為(+意見)→ ③状態→④行為+歌 ₄₁ → ⑤行為+セリフ+セリフ+⑥行為+セリフ+セリフ→⑥説明→ ⑦説明→⑧説明(+意見)→⑨行為+状態→⑩状態→⑪行為+歌 ₄₂ +行為+状態(+意見)→ ⑫行為→⑬行為+歌 ₄₃ (ぞ)→ ⑭行為+歌 ₄₄ (や)+(なむ④)→ ⑮説明→

		(滯標)	風が吹き、楫取が住吉明神に物を奉るように言う。海に鏡を入れると、海は穏やかになる。	⑬行為+状態→⑭行為+セリフ(ぞ)+セリフ(ぞ)+意見→⑮セリフ+⑯行為→⑰行為→⑱状態+⑲行為+セリフ+セリフ→⑳行為+意見+セリフ(こそ)+行為+意見→㉑状態+行為+歌 ₄₅ →㉒意見→㉓意見(こそ)→㉔意見
45	2/6	滯標→難波→川尻	滯標のところより出て、難波に着き、川尻に入る。船酔いの淡路の大御が歌を詠む。	①日付→②行為→③行為→④行為(ぞ)+歌 ₄₆ (か)→⑤行為→⑥行為+セリフ
46	2/7	川尻→ (某所)	川尻に入るが、船が進まない。 病人の船君が淡路の御に対抗して、歌を詠む。	①日付→②行為→③説明→ ④説明→⑤行為(や)→⑥歌 ₄₇ → ⑦説明(+意見)→⑧行為+歌 ₄₈ →⑨説明(+意見)→⑩セリフ+セリフ+行為
47	2/8	某所→鳥飼の御牧	鳥飼の御牧のあたりに泊まる。 ある人が贈り物を持ってくる。米でお返しをする。	①日付→②行為→ ③行為→④⑯行為→⑤行為→⑥行為+セリフ+(や⑱)→⑦説明→⑧行為
48	2/9	鳥飼の御牧→ わだの泊のあかれの所→ (渚の院)→ 鵜殿	船を引いて上るが進まない。 わだの泊のあかれの所で米や酒を与える。 渚の院を見て、在原業平を偲び、歌を詠む。 子を抱く人々を見て、亡き子の母が悲しみに耐えず、歌を詠んで泣く。 鵜殿に泊まる。	①日付→②行為(+意見)(ぞ)→ ③説明→④⑯行為+行為→ ⑤行為→⑥意見→⑦状態→⑧状態→⑨行為+セリフ+セリフ+歌 ₄₉ +セリフ→⑩行為+歌 ₅₀ →⑪行為+歌 ₅₁ (ぞ)+行為(+意見)(ぞ)→ ⑫説明(ぞ)→⑬行為→⑭行為+歌 ₅₂ +行為(ぞ)→⑮意見→⑯意見→⑰説明(か)→ ⑱行為

49	2/10	鵜殿	障ることがあって、 上らない。	①日付→②行為
50	2/11	鵜殿→ (八幡宮) →山崎	雨が降って、やむ。 八幡宮を拝む。山崎 に至る。	①日付→②状態 ③行為+㊦行為→④行為→ ⑤行為→⑥意見→⑦行為→⑧状 態→⑨行為+歌 ₅₃ (か・ぞ)
51	2/12	山崎	山崎に泊まる。	①日付→②行為
52	2/13	山崎	山崎にいる。	①日付→②行為
53	2/14	山崎	京に車を取りに行か せる。	①日付→②状態→③行為
54	2/15	山崎	車が来る。人の家に 移る。 家の主人が饗応して くれる。	①日付→②行為→③行為(+意 見)→ ④㊦行為(+意見)→⑤意見→⑥ 行為→⑦意見
55	2/16	山崎→ 島坂 →桂川→京 自宅	夕方、京に上る。 島坂で、ある人が饗 応してくれる。 桂川で月を見て歌を 詠む。 家に着き、門を入ると、 ひどく荒れている。家 を預けた隣人の心も荒 れているのだ。 池や松も荒れている。 泣き子を思い、心知 れる人と歌を詠む。 口惜しいことは尽き ない。 早く破り捨ててしま おう。	①日付→②行為→③行為(+意 見)→④説明(セリフ(ぞ))(+ 意見)(ぞ)→ ⑤行為+㊦行為→⑥意見→⑦意 見(ぞ)→⑧行為→ ⑨行為+状態→⑩行為(ぞ)→⑪ 行為+セリフ+行為+歌 ₅₄ →⑫ 行為+歌 ₅₅ →⑬行為→⑭歌 ₅₆ →⑮説明(+意見)(ぞ)→ ⑯状態→⑰意見→⑱行為→⑲状 態(+意見)(ぞ)→⑳意見→㉑説 明(こそ)→㉒説明→㉓行為→㉔ 意見→ ㉕状態→㉖説明→㉗説明(+意 見)(や)→㉘説明(ぞ)→㉙状態+ 行為(ぞ)→㉚意見→㉛行為→㉜ 行為(+意見)+歌 ₅₇ +(ぞ)→㉝意 見(や・なむ㊦)→㉞歌 ₅₈ (や㊦)→ ㉟意見→ ㊱意見

4. 係り結びと古典読解

『土佐日記』の中で、古典の学習でよく取り上げられるのは、12月21日（門出）、2月4日（忘れ貝）、2月16日（帰京）の記事である（とくに、「門出」と「帰京」は、国語総合の教科書でよく取り上げられている）。そこで、最後に、これらの日の記事における係り結びについて、見ておきたい。

【12月21日（門出）】

《本文》

①男^{をとこ}もすなる日記といふものを、女^{をんな}もしてみむとてするなり。②その年^{とし}の十二月^{しはす}の二十日^{はつか}あまり一日^{ひとひ}の日の、戌^{いぬ}の刻^{とき}に、門出^{かどで}す。③その由^{よし}、いささかに、ものに書きつく。④ある人^{ひと}、県^{あがた}の四年五年果てて、例^{れい}の事^{こと}ども皆^{みな}し終へて、解由^{げゆ}など取りて、住む館^{すたち}より出でて、船^{ふね}に乗るべき所^{ところ}へ渡る。⑤かれこれ、知る知らぬ^{しし}、送りす。⑥年来^{としごろ}よく比べつる人々^{ひとびと}なむ、別れ難^{わか}く思ひて、日頻^{がた}りに、とかくしつづ、罵^{ののし}るうちに、夜更^{よふ}けぬ。

《文章の展開》

①説明→②行為→③説明→④行為→⑤行為→⑥行為（＋意見）（「…なむ…」）

これは、最初の日である、12月21日の記事であるが、区切れとなる最後の文に「なむ」の係り結びが使われている。この文中の「忘れ難く思ひて」は、第三者（「年来よく比べつる人々」）の気持ちとして描かれており、自由間接言説的な表現になっている（《文章展開》では、「（＋意見）」で示した）。

【2月4日（忘れ貝）】

《本文》

①四日。②楫^{かぢとり}取^け、「今日^{けふ}、風雲^{かぜくも}の気色^{けしき}はなはだ悪^あし。」と言^いひて、船^{ふね}出^いださずなりぬ。③しかれども、ひねもすに波^{なみ}風^{かぜ}立^たたず。④この楫^{かぢとり}取^とは、日^ひもえ計^{はか}らぬ乞^{かた}丐^るなりけり。⑤この泊^{とまり}の浜^{はま}には、種^{くさぐさ}々の美^うわしき貝^{かひ}、石^{いし}など多^{おほ}かり。⑥かかれば、ただ昔^{むかし}の人^{ひと}をのみ恋^こひつつ、船^{ふね}なる人^{ひと}の詠^よめる、『寄^よする波^{なみ}打^うちも寄^よせなむわが恋^こふる人^{ひと}忘れ貝^{がひ}下^おりて拾^{ひろ}はむ』と言^いへれば、ある人^{ひと}の耐^たへずして、船^{ふね}の心^{こころ}遣^やりに詠^よめる、『忘れ貝^{わす がひ}拾^{ひろ}ひしもせじ白^{しら}玉^{たま}を恋^こふるをだにも形^{かた}見^みと思^{おも}はむ』となむ言^いへる。⑦女子^{をむな}のためには、親^{おや}幼^{おきな}くなりぬべし。⑧「玉^{たま}ならずもありけむを」と人^{ひと}言^いはむや。⑨されども、「死^しし子^こ、顔^{かほ}良^よかりき」と言^いふやうもあり。⑩なほ、同^{おな}じ所^{ところ}に日^ひを經^ふる事^{こと}を嘆^{なげ}きて、ある女^{をむな}の詠^よめる歌^{うた}、『手^てを漬^ひてて寒^{さむ}さも知^しらぬ泉^{いづみ}にぞ汲^くむとはなしに日^ひごろ經^へにける』

《文章の展開》

①日付→②セリフ＋行為→③状態→④意見→⑤状態→⑥行為＋歌＋行為＋歌＋行為（「…なむ…」）→⑦意見→⑧意見（「…や」）→⑨意見→⑩行為＋歌（「…ぞ…」）

これは、2月4日の記事であるが、係り結びは、地の文に「なむ」と「や」のものが、歌に「ぞ」のものが現れている。このうちの「なむ」のものについては、「船なる人」と「ある人」との描写と歌が続いたあとに、「となむ言へる」で、歌の終わりを示している。これは、また、⑦以下の意見を述べる箇所に移る前の位置であり、話の切れ目を示すものとなっている。

【2月16日（帰京）】

《本文》

①十六日。②今日^{けふ}の夜^よさつ方^{かた}、京^{のぼ}へ上^{のぼ}る。③ついでに見^みれば、山崎^{やまざき}の小櫃^{こひつ}の絵^えも、曲^{まが}りの大^{おほ}釣^づの像^{かた}も変^かはらざりけり⁽¹⁹⁾。④「売^うり人^{びと}の心^{こころ}をぞ知^しらぬ」とぞ言^いふなる。⑤かくて、京^しへ行^いくに、島坂^{しまさか}にて、人^{ひと}、

あるじ 饗応したり。⑥ 必ずしもあるまじき業なり。⑦ 発ちて行きしよりは、
 くるとき ひと 人はとかくありける。⑧ これにも返り事す。⑨ 夜になし
 て、京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。⑩ 桂
 がは つき あか 川の言はく、「この川、飛鳥川にあらね
 ば、淵瀬さらに変はらざりけり」と言ひて、ある人の詠める歌、『ひ
 さかたの月に生ひたる 桂川底なる影も変はらざりけり』⑪ また、あ
 る人の言へる、『雨雲の遥かなりつる 桂川袖を漬ても渡りぬるか
 な』⑫ また、ある人詠めり。⑬ 『桂川我が心にも通はねど同じ深さ
 に流るべらなり』⑭ 京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。⑮ 夜
 更けて来れば、所々も見えず。⑯ 京に入りたちて嬉し。⑰ 家に到り
 て、門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。⑱ 聞きしよりもま
 して、言ふ甲斐なくぞ毀れ破れたる。⑲ 家に、預けたりつる人の心
 も、荒れたるなりけり。⑳ 中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望み
 て預かれるなり。㉑ さるは、便りごとに、物も絶えず得させたり。㉒
 今宵、「かかること」と、声高にもものも言はせず。㉓ いとは辛く見ゆ
 れど、志はせむとす。㉔ さて、池めいて窪まり、水浸ける所あ
 り。㉕ ほとりに松もありき。㉖ 五年六年のうちに、千年や過ぎにけ
 む、片方はなくなりにけり。㉗ 今生ひたるぞ交じれる。㉘ 大方の皆荒
 れにたれば、「あはれ」とぞ人々言ふ。㉙ 思ひ出でぬことなく、思ひ
 恋しきが中に、この家にて生まれし女子の、諸共に帰らねば、いか
 がは悲しき。㉚ 船人も皆、子集りて罵る。㉛ かかるうちに、なほ悲
 しきに耐へずして、密かに心知れる人と言へりける歌、『生まれしも
 帰らぬものを我が宿に小松のあるを見るが悲しき』とぞ言へる。㉜ な
 ほ飽かずやあらむ、また、かくなむ。㉝ 『見し人の松の千年に見まし
 かば遠く悲しき別れせましや』㉞ 忘れ難く、口惜きこと多かれど、え
 尽くさず。㉟ とまれかうまれ、疾く破りてむ。

《文章の展開》

①日付→②行為→③行為（＋意見）→④説明（セリフ（「…ぞ…」）（＋意見）（「…ぞ…」）→⑤行為＋行為→⑥意見→⑦意見（「…ぞ…」）→⑧行為→⑨行為＋状態→⑩行為（「…ぞ…」）→⑪行為＋セリフ＋行為＋歌→⑫行為＋歌→⑬行為→⑭歌→⑮説明（＋意見）（「…ぞ…」）→⑯状態→⑰意見→⑱行為→⑲状態（＋意見）（「…ぞ…」）→⑳意見→㉑説明（「…こそ…」）→㉒説明→㉓行為→㉔意見→㉕状態→㉖説明→㉗説明（＋意見）（「…や…」）→㉘説明（「…ぞ…」）→㉙状態＋行為（「…ぞ…」）→㉚意見→㉛行為→㉜行為（＋意見）＋歌＋行為（「…ぞ…」）→㉝意見（「…や…，…なむ」）→㉞歌（「…や…」）→㉟意見→㊱意見

これは、最後の日、2月16日の記事であるが、この日記の中で最も長く、最も文の数が多い記事である。係り結びも多く現れているが、とくに地の文における「ぞ」のことが多い。「ぞ」の係り結びの現れているところは、場面（場所）の変わり目（④，⑮）や、行為や状態などの事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所（⑩，⑲，㉙），あるいは、その逆に、説明や意見、歌などから、事実の描写に変わる箇所（⑦，㉘），また、前の歌から次の歌に続く箇所（㉜）などである（いずれかに決めがたいものもあるが、大まかに分けておく）。この日の記事は、（内容、あるいは（および）作者の感慨の吐露が多いためであろうが）係り結びが多すぎて、その役割がわかりにくくなっているように思われる。

以上、本稿では、『土佐日記』を題材に、文章中における係り結びの役割を見てきた。このように、係り結びに注目しながら作品を読むというやり方は、古典学習における読解の方法として有効であると思われる。

《注》

- (1) 『土佐日記』は、「現存する伝本がすべて『土左日記』という表記」（東原・ウォーラー2013: 13）だというのが、本稿では、今日の一般的な表記である『土佐日記』を用いておく。ただし、引用の中では、『土左日記』の表記も用いる。
- (2) 文語文法が平安時代の文法に基づくことについて、白藤（1987: 2）は、「書き言葉という点から見ると、それぞれの時代に書き言葉はあるのであるが、[中略]長い時代に亘って、ある種の文体の文が、伝統的・慣習的に行われていたのであり、その内容が、和文脈・漢文訓読脈の両者を含めて、平安時代の文章の調子を基礎とするものであり、[中略]文語文法の内容は、自ずとある種のことを事実として指していたのである。」と述べている。
- (3) 「述定」と「伝達」とは、芳賀綏の用語で、前者は、「事柄の内容についての、話手の態度【断定・推量・疑い・決意・感動・詠歎……など】の言い定め」、後者は、「事柄の内容や、話手の態度を、聞手（時には話手自身）に向ってもちかけ、伝達する言語表示」、「すなわち【告知・反応を求める・誘い・命令・呼びかけ・応答……など】」を表す（芳賀 1978: 298, 森野 1987: 106）。
- (4) 伊牟田（1981: 69）によれば、「蜻蛉日記の地の文にはナムが二六例（うち上巻に二三例）見えるが、そのうち二二例（うち上巻一〇例）は一つの話題（文段）のしめくくり（または初め）に用いられたもの」だという。
- (5) 川村力雄編著（2004）『改訂版 実戦演習 標準 古文』桐原書店 p. 40～p. 41, 「解説・解答書」p. 38～p. 39。ほかに、同問題集には、『徒然草』の「あだし野露きゆる時なく」の「段落分け」の問題などもあり（p. 36～p. 37, 「解説・解答書」p. 34～p. 35）、そこでも、係り結び（「…こそ…」）が段落の切れ目に現れている。なお、同問題集の「解説・解答書」には、「段落分け」について、「時・場所・人物・話題の変化に注目。」（p. 37）とある。
- (6) 『新注校訂 土左日記』（武蔵野書院）、『新編 土左日記』（おうふう）によるが、両書に相違があるときは、主に前者による（一部後者による）。文の認定については、長田（1964: 12）の「『文』とは、活字本の上で、普通の場合、句点から句点までの地の文をさし、特別の場合、たとえば、歌の場合には、句点の次から歌で終止している場合、歌の最後までをさす。」にならう（長田 1964 では、テキストに、日本古典文学大系の『土左日記』（鈴木知太郎校注）を用いている。長田 1964: 13 は、「『文』の認定をほとんど鈴木氏に従ったことは、その意味で、『文』の解釈の出発点を、まず、鈴木氏に従おうとしたことである。」と述べている）。本稿では、文の認定に、

『新注校訂 土左日記』と『新編 土左日記』とを用いるが、両者に相違がある（解釈が異なる）、12月27日の「かくあるうちに京にてうまれたりしをむなこくに、てにはかにうせにしかはこのころのいてたちいそきをみれとなにこともいはず京へかへるにをむなこのなきのみそかなしひこふる」、1月11日の「けふはましては、のかなしかるゝことは」、2月16日の「けふのようさつかた京へのほる」（以上、本文は青谿書屋本の原文による）については、いずれも、ここに引用したものを1文とした）。

- (7) 池田（1941a: 280-281）で修正された16箇所、萩谷（1988: 1）による、藤原為家本との照合によって明らかになった青谿書屋本の独自の誤写4箇所（うち、2箇所は池田1941aの修正と重なる）のほか、『新編日本古典文学全集 13』（小学館）の「校訂付記」によって、5箇所を改め、また、「え（や行）→へ」の誤写と思われる（池田1941a: 151-152）13箇所を改めた。
- (8) 主な注釈書の解説で、主題やモチーフとされているものを挙げると、「土佐で失った女兒に対する親としての情」（松村1973: 12）、「京に生まれ、しかも土佐離国の直前に異郷で急死した愛児への永遠の思慕」（鈴木1979: 150）、「僻遠の地からの帰京の旅」（菊池1995: 76）、「旅」（木村1988: 364）、「土佐守在任中およびその往還時の体験に触発された自身の感慨を『旅の時間』の中で表現すること」、「都びと意識や流人意識、また死・老いへの感慨」、「氏族意識」（長谷川1989: 502, 505）などがある。
- (9) 木村（1979: 98, 105）は、「『土佐日記』の主題を一つに限定できないことは、よく言われるとおりである。」とし、「特定の主題にしばられることなく、さまざまな意識や発想が継起的につながったり、表裏をなしたり、矛盾しあったりしながら、総体として作品全体を貫之の複雑な内面像としていくのが、『土佐日記』の本質と考えるべきなのであろう。」と述べている。また、萩谷（2000: 17）は、「表層第一主題＝歌論展開／中層第二主題＝社会風刺／深層第三主題＝自己反照／という三大主題を並行させた、極めて多目的で、複雑多岐な内容を包含した作品である。」（／は改行）としている。萩谷は、このうちの「表層第一主題」について、「年少男子に対する和歌初学の入門書（その歌論展開）」としているが、大伴（1999: 5）は、「これは、私が見たところでは、当時の初心者に歌や古典常識を教えるために作られた教科書という性質の作品」で、「しかも、私は、権門の女子で将来の後候補のために書かれたものだと思います」と述べている。
- (10) 木村（1979: 68）によれば、「女文字」説は江戸時代からあったようである。
- (11) 東原・ウォーラー（2013: 18）は、「『土左日記』という散文作品の主体は

分裂している、そのことを冷静に意識し、むしろ分裂していることを積極的に評価できる分析をすべきではないだろうか。」と述べている。堀江(2016)の『土左日記』(訳)では、本文(訳)の前に「貫之による緒言」をおき、「私は男にもなり、女にもなる。男の『私』にもなり、女の『私』にもなる。」と、貫之に語らせている。

- (12) 「自由間接言説」(free indirect discourse)とは、「任意の登場人物の発言・思考を再現する言説の類型の一つ」であり、これには、「自由間接話法」(free indirect speech)(英文法でいう「中間話法」と、「自由間接思考」(free indirect thought)が含まれ(『物語論辞典 改訂版』『free indirect discourse』)、「語りの文でありながらキャラクターの意識をキャラクター自身の視点で提示することを可能にする」(『最新文学批評用語辞典』『自由間接話法』)、「語り手が作中人物の言説を引き受ける、というかむしろ、作中人物が語り手の声によって話す」(ジュネット 1985: 203)ものである。
- (13) 係助詞の認定は、『土左日記総索引』、『土佐日記：本文及び索引』による。ただし、『新編日本古典文学全集 13』(小学館)の「校訂付記」に従って、両索引にある「ぞ」を1つ除いた(青谿書屋本の「ゝ[は]ちすそなむ」(12月23日)の「そ」を「に」に改めた)。両索引の内容は、ほぼ同じであるが、係助詞「や」の数が異なる。前者では、本稿同様、34としているのに対し、後者では35としている。これは、後者では、青谿書屋本をそのまま本文としていて、青谿書屋本独自の誤写とされる(萩谷 1988: 1)、2月1日の「つなてや」(為家本「つなての」)の「や」を含めているためである。
- (14) 伊牟田(1981: 54, 62)によると、「一般に、日記にはゾが多く、古い物語はナムが多く、時代が下るとコソが多い、という傾向が見られる。[中略]土佐日記はゾが極めて多くコソが極めて少ない」、「日記にゾが多いのは、[中略]自照的表現にふさわしいものであったからだ」という。
- (15) 「ぞ」に見られる2種の強調は、半藤(2003: 14)の述べる、「こそ」の2つの「取り立て」機能(「有限特定のものの中からの取り立て」(対比用法)と、「絶対的な取り立て」(主題用法(または主題的用法))に近いと思われる。
- (16) 木下(1992: 20)の調査によると、平安仮名文学9作品(『竹取物語』、『伊勢物語』、『土左日記』、『平中物語』、『大和物語』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』、『堤中納言物語』)について、『「とぞ」『などぞ』の用例数』と『「となむ」『などなむ』の用例数』とを比べると、『「なむ」の場合のほうがむしろ『と』『など』を承けた形での引用は多い。』という。

- (17) 「一文字たにしらぬものしかあしは十文字にふみて」（青谿書屋本の原文）の「しか」については、諸説あるが、ここでは小松（1960: 95-96）に従い、「…者、しが足を…」と読点を打つておく。
- (18) 「船の一行は旅の哀歎を分けあう共同体を形成し、殆ど一体化している。」（篠原 1987: 178）などとされるため、表2では、前国司一行の行為と、それ以外の人々の行為とを区別して示すことにする。
- (19) 「やまさきのこひつのゑもまかりのおほちのかたもかはらさりけり」（青谿書屋本の原文）は、「土佐日記の中で代表的な難文」（萩谷 1960: 110）、「この作品中でもっとも難解の箇所」（品川 1983: 263-264）などとされるが、ここでは、萩谷（1960: 110-111）の説（対照法解釈）に従って、漢字を当てておく。

引用文献・参考文献（本文・注・訳・索引）

- 池田亀鑑（1941b）『古典の批判的処置に関する研究 第三部 資料・年表・索引』岩波書店
- 大伴茫人（田村秀行）（1999）『姫様と紀貫之のおしゃべりしながら 土佐日記』洋泉社
- 菊地靖彦校注・訳（1995）『土佐日記』『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』小学館
- 木村正中校注（1988）『新潮日本古典集成 80 土佐日記・貫之集』新潮社（新装版 2018）
- 品川和子全訳注（1983）『土佐日記』（講談社学術文庫）講談社
- 鈴木知太郎校注（1957）『土左日記』『日本古典文学大系 20 土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』岩波書店
- 鈴木知太郎・山田瑩徹編著（1975）『新注校訂 土左日記（影印本）』武蔵野書院
- 鈴木知太郎校注（1979）『土佐日記』（岩波文庫）岩波書店
- 西山秀人編（2007）『土佐日記』（ビギナーズ・クラシックス 日本の古典）角川学芸出版
- 日栄社編修所編（1964）『要説 土佐日記』日栄社
- 日本大学文学部国文学研究室編（1967）『土左日記総索引』日本大学文学部人文科学研究所
- 萩谷朴（1967）『土佐日記全注釈』角川書店
- 萩谷朴（1989）『影印本 土左日記 新訂版』新典社（初版 1968）
- 長谷川政春校注（1989）『土佐日記』『新日本古典文学大系 24 土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』岩波書店

- 林望（2005）『すらすら読める 土佐日記』講談社
- 東原伸明, ローレン・ウォーラー編（2013）『新編 土佐日記』おうふう
- 平林文雄編著（1975）『土佐日記：本文及び索引』白帝社
- 堀江敏幸訳（2016）『土佐日記』池澤夏樹編『日本文学全集 3 竹取物語 伊勢物語 堤中納言物語 土佐日記 更級日記』河出書房新社
- 松村誠一校注・訳（1973）『土佐日記』『日本古典文学全集 9 土佐日記 蜻蛉日記』小学館
- 三谷栄一訳註（1980）『土佐日記 附現代語訳』（角川古典文庫）角川書店
- 村瀬敏夫解題（1992）『東海大学蔵 桃山文庫影印叢書 第九巻 土佐日記・紫式部日記』東海大学出版会

引用文献・参考文献（その他）

- 阿久澤忠（2002）『語法・語彙を中心とする平安時代仮名文論考』武蔵野書院
- 阿久津智（2018）「古典文法学習における係り結び」『拓殖大学 語学研究』139 拓殖大学言語文化研究所
- 池田亀鑑（1941a）『古典の批判的処置に関する研究 第一部 土佐日記原典の批判的研究』岩波書店
- 伊牟田経久（1981）「ゾ・ナム・コソの差異：蜻蛉日記を中心に」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店
- 大木一夫（2013）『ガイドブック日本語史』ひつじ書房
- 沖森卓也編著, 山本真吾・永井悦子（2012）『古典文法の基礎』朝倉書店
- 川口喬一・岡本靖正編（1998）『最新文学批評用語辞典』研究社出版
- ドナルド・キーン, 金関寿夫訳（1984）『百代の过客 日記にみる日本人 上』朝日新聞社
- 木下書子（1992）「上接語より見た係助詞『ぞ』の用法」『尚綱大学 研究紀要』15 尚綱大学
- 木下書子（2001）「断りのストラテジーから見た係助詞『なむ』の用法」『尚綱大学 研究紀要』24 尚綱大学
- 木村茂光編（2010）『歴史から読む『土佐日記』』東京堂出版
- 木村正中（1963）「土佐日記の構造」『文芸研究』10 明治大学文学部研究所文芸研究会
- 木村正中（1979）「『土佐日記』の主題は何か」『國文學 解釋と鑑賞』44-2（紀貫之〈醒めた意識の悲しみ〉）至文堂
- 小林芳規（1961）「平安時代の平仮名文の表記様式〔I〕：語の漢字表記を主とし

て」『国語学』44 国語学会

小松登美（1960）「土佐日記の解釈と文法上の問題点 I 語彙」『講座解釈と文法

4 竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・かげろふ日記・宇津保物語・更級日記・大鏡』明治書院

小松英雄（2001）『日本語の歴史：青信号はなぜアオなのか』笠間書院

小松英雄（2006）『古典再入門：『土佐日記』を入りぐちにして』笠間書院

小松英雄（2018）『土佐日記を読みなおす：屈折した表現の理解のために』笠間書院

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

阪倉篤義（1953）「歌物語の文章：『なむ』の係り結びをめぐる」『国語国文』22-6 京都大学文学部国語学国文学研究室

篠原宏子（1987）「土佐日記の文法」山口明穂編『国文法講座4 時代と文法』明治書院

ジェラルド・ジュネット、和泉涼一・神郡悦子訳（1985）『物語のディスコース：方法論の試み』風の薔薇

白藤禮幸（1987）「古代語の文法：平安時代語」山口明穂編『国文法講座 第4巻 時代と文法 古代語』明治書院

鈴木康之（1977）『日本語文法の基礎』三省堂

塚原鉄雄（1958）「竹取・伊勢・土佐の文法」『日本文法講座4 解釈文法』明治書院

築島裕（1981）「土佐日記と漢文訓読」服部四郎・亀井孝・築島裕編『日本の言語学7 言語史』大修館書店（初出1951）

長田久男（1964）「土佐日記における文の構造：文の構造の記述法の試み」『論究日本文学』22 立命館大学日本文学会

西田隆政（2009）「竹取物語の会話文の『文末表現』：和文の会話文の文体的特徴をめぐる」『文学史研究』49 大阪市立大学

日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店

野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館

芳賀綏（1978）「“陳述”とは何もの？」服部四郎ほか編『日本の言語学3 文法I』大修館書店（初出1954）

萩谷朴（1960）「土佐日記の解釈と文法上の問題点 II 文章構造」『講座解釈と文法4 竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・かげろふ日記・宇津保物語・更級日記・大鏡』明治書院

萩谷朴（1988）「青谿書屋『土佐日記』の極めて少ない独自誤謬について」『中古文学』41 中古文学会

- 萩谷朴（2000）『紫式部の蛇足 貫之の勇み足』新潮社
- 半藤英明（2003）『係結びと係助詞：「こそ」構文の歴史と用法』新典社
- ジェラルド・プリンス，遠藤健一訳（2015）『物語論辞典 改訂版』松柏社（初版原著 1989，改訂版原著 2003）
- 益田勝実（1949）「紀貫之と島田公鑒の国司交替」『日本文学史研究』2 日本文学史研究会
- 宮坂和江（1952）「係結の表現価値：物語文章論より見たる」『国語と国文学』29-2 東京大学国語国文学会
- 森野崇（1987）「係助詞『なむ』の伝達性：『源氏物語』の用例から」『国文学研究』92 早稲田大学出版部

（原稿受付 2018 年 11 月 29 日）

〈論 文〉

視覚スキーマと格表示による 多義構造図の試案

—— 移動動詞ハシルを事例として ——

遠 藤 裕 子

要 旨

多義語の意味分析とその記述・表示の方法についてはさまざまなモデルが提案されてきている。本稿では、言語学的な裏付けを持ちつつ一般の日本語学習者にも理解可能な形を探った。具体的には、日本語の基本動詞の1つである多義語ハシルを取り上げ、用例を検討したうえで認知言語学の観点から8義に分析した。そして、意味拡張のプロセスと多義構造を、基本スキーマに基づく視覚的な図と格表示を組み合わせた形で示した。

キーワード：視覚スキーマ 多義構造図 格表示 動詞ハシル

1. はじめに

本稿では、日本語の基本動詞の1つである多義語ハシルを取り上げ、認知言語学の観点からその意味拡張のプロセスと多義構造を明らかにし、それを視覚スキーマに格表示を組み合わせた形で示すことを提案する。分析に当たっては用例を重視し、個別義間の連続性や周辺的な用法などにも論及するものとする。

2. 多義性、多義構造および図式論

多義語⁽¹⁾の分析に関しては、舩山（2001：32）で、その課題として次の4点を挙げている。「（それぞれ確立した）複数の意味の認定」「プロトタイプの意味の認定」「複数の意味の相互関係の明示」「複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明」の4点である。

このうち、プロトタイプ的意味の認定に関しては、イメージの具体性や認知的際立ちの高さ、用法上の制約の少なさ、複数の意味の起点となる位置にあることなどが、その基準として一般に挙げられている。松本（2009）は、多義語の中心的意味⁽²⁾には2種類あるとしている。1つは概念的の中心性で、「心的辞書の多義語の構造において、他の個別の意味の派生の基盤となるような、概念的に最も基本的な意味」であり、もう1つは機能的の中心性で、「言語話者の伝達活動の観点」から見た「一番よくアクセスする意味」である。そして、この両方を備えた意味が「典型的な中心的意味」であると主張している。また、木下（2018）では、多義動詞の「意味拡張の起点」と「直観的プロトタイプ」という二種の中心義についてずれが生じる場合があるとし、例として動詞「とく」を取り上げ分析している。

「意味の相互関係」に関して Langacker（1990）などで提案されている意味拡張のネットワークでは、プロトタイプと拡張事例から抽出された共通点として「スキーマ」が設定されている。スキーマは、より一般的には、あるカテゴリーの全成員に共通する抽象の意味とされるものである。そして、このような考え方に基づく意味分析において、プロトタイプを含

（1） 国広（1982：97）によると、多義語とは「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語」である。

（2） 松本（2009）は、プロトタイプカテゴリーの理論に基づく「プロトタイプ的意味」よりも一般的な用語として「中心的意味」を使用している。

む個別義やスキーマを視覚的に表示することがなされてきている⁽³⁾。

本稿では、認知言語学の枠組みで、動詞ハシルの個別義とプロトタイプおよびスキーマを分析・設定し、視覚的スキーマと意味に直接関連する格助詞を組み合わせて個別義を示し、さらに個別義間の関連をネットワークで示すこととする。以上3点と典型的な用例を示すことで、ハシルの全体像と個々の意味用法を日本語学習者が理解するのに役立てられることを期待するものである。

3. 動詞ハシルの先行研究と研究課題

基本動詞の意味や用法に関する分析は数多く、また、日本語学習という観点から、用例を数多く挙げたりイメージ図を示して意味を伝えようとしたりする試み⁽⁴⁾も見られる。動詞ハシルについても例外ではない。

本節では、検討した先行研究の中から何点か特徴的な研究を取り上げてハシルの全体像を示し、本稿の意味分類の立場と分析の課題について述べる。

3.1 ハシルの意味用法 — 先行研究

ハシルの意味分析にあたり、できるだけ幅広く意味用法を収集する目的で10点の国語辞典⁽⁵⁾の記述を調査した。このうち、ハシルの意味分類⁽⁶⁾

(3) 'over' に関するいくつかの研究 (Dewell (1994) 他) で図が示されており、非英語母語話者にとっては示唆に富む。

(4) 例えば、国立国語研究所のサイト「基本動詞ハンドブック」には、冒頭に「～のコアイメージ」としてイラストが大きく掲載されている。http://verb-handbook.ninjal.ac.jp/

(5) 定評のある大型の『日本国語大辞典』から、携帯型で「中学生向け」の『例解新国語辞典』まで10点。書名は、稿末の「国語辞典」を参照されたい。

(6) 意味分類数は、4分類が2点、6分類が1点、10分類が1点、12分類が3点、

が他辞書と比較して細かく、かつ意味間の関連性に注目して語義を記述・配列していると考えられる『明鏡国語辞典第二版』（以下、『明鏡』と略）の記述を引用する。下線は筆者の判断で、意味の関連性を際立たせるために付したものである。

- ① 人や動物が足を交互にすばやく動かして移動する。かける。「ランナーが全速力で走る。チーターが草原を走る。廊下を走ってはいけない。」
- ② 乗り物などが進む。また、運行する。「電車が郊外を走る。ここのバスは12時を過ぎても走っている。」
- ③ 目的の場所へ急いて行く。急行する。急ぐ。「取るものもとりにあえず事故現場へ走る。」
- ④ 目的達成のために急いで行動する。特に、安易な手段での解決を急ぐ。「ドル買いに走る。売上げ減となるとすぐさま値上げに走る。」
- ⑤ ある目的のために忙しく動き回る。東奔西走する。駆けずり回る。飛び回る。「金策に走る。」
- ⑥ （急いで）逃げ回る。また、逃げてある側につく。「味方を裏切って敵方に走る。」
- ⑦ 水などが勢いよく流れる。また、水などが飛び散る。ほとばしる。「岩間を清水（せいすい）が走る。傷口から血が走る。」
- ⑧ すべり出る。「刀が鞘（さや）から走る。」
- ⑨ 投げた球がスピードに乗る。「今日はボールがよく走っている。」
- ⑩ 文字・文章などが思いどおりに書ける。「すらすらとペンは走る。」
- ⑪ ある方向や状況に強くかたむく。「悪の道／流行／極端／私利私欲に走る。」

- ⑫ ある方向に通じている。また、細長く延びる。「南北に国道が走る。
道路に亀裂が走る。」
- ⑬ 光・音などが瞬間的に現れて消える。「夜空に稲妻が走る。」
- ⑭ ある感覚・感情などが瞬間的に現れて消える。「肩に痛みが走る。
声を聞いただけで虫酸（むしず）が走る。」

次に、文型や文法情報、慣用句など広く関連情報を記載した『日本語基本動詞用法辞典』（以下、『動詞用法』と略）から、「意味・文型」の部分を簡略化して引用する（420-421）。この辞典は補語基となる名詞の意味カテゴリーも分析・記述されている。

- ① 足で速い足度で進む。
 - a [人・生き物・乗り物] が（[所] を）（[所] から）（[所] に／へ／まで）走る
 - b [人・生き物・乗り物] が [順番] を走る
- ② ある目的を果たすために急いで行く。
[人] が [活動] に走る
- ③ ある一つの傾向に向かって進む。
[人・組織] が [事・感情・人] に走る
- ④ ある感情・考え・痛みなどが瞬間的に現れて消える。
[痛み・考え・心理] が [身体部分・心] を走る
- ⑤ ある物が線状に伸びる。
[道・山脈・溝・稲妻] が（[所] を）（[所] から）（[所] に）走る

上記の「意味・文型」記載とは別に、「慣用句」として「敵方へ走る、筆が走る、むしずが走る」の3つを挙げている。

国語辞典と用法辞典の上記2種の記述でハシルの全体像はほぼ示されて

いると考えられるが、辞書によって分類や記述には異同が多いので、以下、少数の辞書に見られる意味用法の記述をいくつか挙げる。

「〔相場用語〕先取りして株などを売り買いする」「〔音楽〕テンポが始まったときより速くなる」(『日本国語大辞典第二版』(以下、『日国』と略))、「実行される。例：多くのプロジェクトが走っている」「動く。例：会社のパソコンと同じソフトが走る」(『三省堂国語辞典第七版』(以下、『三国』と略))などである。

日本語を共時的・通時的に記述する⁽⁷⁾『日国』には、13世紀以前の用例しか掲げられていない意味が14分類中2つある。「(3)水などが勢いよく流れる」と「(4)激しく動く。特に「胸がはしる」の形で〈略〉」である。このほか、「(8)多くのものが散り広がる。飛び散る。ほとばしる。ころがる」という意味が立てられ、「血、珠、塩、炭」などを動作主体とする文例が挙げられている。「血」以外の例は他の辞書にはほとんど見られない。

3.2 ハシルの特徴および多義性

次に、動詞ハシルを意味論の立場から論じた研究を見る。

松本(1997)は、「移動動詞における語彙化パターン」の章で「様態を表す移動動詞」として次の13語を挙げている(p.143)。

歩く、走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ、潜る、流れる、急ぐ

「行く、越える、去る」などが「方向性」や「経路位置関係」を包入するのに対し、「走る」は「様態」を包入する動詞としている。つまり、「走る」は、移動の様態を含んではいるが、起点・着点・通過点のいずれかを指定するものではないということである。

(7) 『広辞苑』も、古語を現代語との区別なく記載している。用例が『日国』より少ないため、読者にはその区別がやや分かりにくい。

なお、ここで論じられている「走る」は、3.1で挙げた『明鏡』の①義に関するものであり、本稿でも、プロトタイプは①であるとする。

また、吉村（2004：96-102）では、多義性について説明する中で動詞「走る」を例として取り上げ、次のように述べている。

「走る」の「スキーマ的意味」は「連続して速く動くさま」、「プロトタイプの意味」は「人間が足を連続して速く動かし移動するさま」であり、複数の周辺の意味は「プロトタイプの意味属性の一部（「連続して速く動くさま」）が共有された形で属性の連鎖が生じ」、「全体が家族的類似性を構成」している。その上で、意味拡張の全体を意味ネットワーク図として模式的に描いている。

この他、英語の run と対照した意味分析⁽⁸⁾も見られるが、川出（1987）の run の分析で、コア⁽⁹⁾記述に加え「そのもののエネルギーがなくなり自然に停止するか、無理に止めようと外から力を加えない限り、（スルスルと）そのまま動き続ける感がある」（p.143）とされているのが、日本語のハシルと異なる点と思われる、興味深い。

3.3 ハシルの意味記述と表示の課題

ここまでの意味分析記述を検討して浮かび上がる細かい問題点としては、分類の異同の他に以下のような事柄が挙げられると思われる。

- ① 「細長く線状に延びる」にはさまざまな用例が見られる。この用法に何か制限や特徴はないか。
- ② 『明鏡』『旺文社国語辞典第11版』（以下、『旺文社』と略）に「光

(8) 山本（1984）など。

(9) 「コア」core とは、田中・川出（1989）では、「文脈に依存しない意味」であり、「無制限な語義の広がりを抑える方向で作用する」もので、「語義のすべてを視野に入れたものでなければならない」とある。

や音がハシル」という記述があるが、「音」だけ（光を伴わない音）がハシル様子を表す用例が見つからず意味用法が不明である。これで適切か。また、「光」の意味用法に何か制限や特徴はないか。

- ③ 「感覚・感情・考えが急に現れて消える」の「感覚など」に、何か制限や特徴はないか。
- ④ 現代語としては用例もあまりなく、共起する名詞の自由度が低いと考えられる意味（『日国』の(3)(4)や(8)など）が、記述量の違いはあるものの複数の辞書で言及されている。これをどう扱うのが妥当か。

上記①②③は、本稿の課題の一部として当然扱われる内容になるであろう。また④については、現代語を対象とした携帯型の辞書に記載されているものについては、用例を調査するなどして判断することになると思われる。

以上のような問題意識の上に立って、本稿では多義動詞ハシルの個別義を記述すると同時、意味拡張のプロセスを示し、かつ視覚スキーマに場所格表示を組み合わせた表示法を提案する。

4. ハシルの意味拡張とスキーマ

4.1 ハシルの8義

本研究では、コーパス等の用例を広く検討し、認知言語学の立場から意味拡張を分析してハシルの意味を8分類することとした。意味拡張とスキーマについて詳述する前に、8義の「動作主体（ガ格を伴う名詞）の意味カテゴリー」「動作・作用の性質」「動作・作用の領域」の特徴を表1にまとめて示す。この3点に注目するのは、これらを表にまとめて記述することにより、意味間の関係を概観することができるからである。個別義内の下位分類（第1義と第6義）、慣用句、概念メタファーによる一時的メタファー表現などについても、4.2以降で触れることとする。なお、表と

表 1 ハシルの 8 義の基本的特徴

	動作・作用の 主体の意味範 疇	動作・作用の 性質	動作・作用の 生じる領域	意味拡張, 下位分類など	
1	人間・動物, 乗り物	移動	物理的空間	プロト タイプ	1 a 人間など 1 b 乗り物
2	人間	移動	物理的空間	1 → 2	目的地の焦点化, 移動の様態の背 景化
3	人間・組織	行動	社会的空間	2 → 3	性急さ, メタファー
4	具象物	移動	物理的空間	1 → 4	被使役物の焦点 化, メタファー
5	具象物	—	(物理的空間)	1 → 5	主観的移動 (心 的走査)
6	抽象的具象物 〔現象〕	主観的移動/ 出現と消滅	物理的空間	5 → 6	6 a 線状の光 6 b 拡がる光
7	抽象物〔感覚〕	移動・出現と 消滅	心理的空間 〔身体〕	1・6 → 7	メタファー
8	抽象物〔感情〕	移動・出現と 消滅	社会的空間	1・6 → 8	メタファー

合わせて、実例を参考にした作例を付す。

以下, (1)～(8) は, 表 1 の意味番号の 1～8 に対応する。

- (1) 私は毎朝 5 キロ走ります。／車がたくさん走っている。
- (2) 不安になった被害者は ATM へと走った。
- (3) 居場所のないその少年は非行に走った。
- (4) ことばがどんどん湧いてきてペンが走った。
- (5) 何カ所か, 壁に亀裂が走っている。
- (6) サーチライトの光が夜空を走った。／突然閃光が走り, あたり一

面が明るくなった。

(7) ふくらはぎに鋭い痛みが走った。

(8) 女性の顔に戸惑いの色が走った。／社内に動揺が走った。

なお、本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ と略)を主な用例資料とし、出典を例文の後ろにかっこ書きした。出典の記載がないものは、筆者による作例である。検索には、NINJAL-LWP for BCCWJ⁽¹⁰⁾(以下、NLB と略)も使用した。

意味拡張のプロセス等に関して本稿で使用する概念として、メタファー、メトニミーなどがある。メタファーは、端的に言えば、起点領域から目標領域への写像であり、異なる領域にある2つの概念の類似性に基づく比喩である。またメトニミーは、単一領域内の要素のずれであり、同一領域にある2つの概念の隣接的関連性に基づく比喩である。焦点移動・焦点化は、メトニミーに含まれるものとする。また、言語主体が対象物の動きに目を向けて追うときのプロセスを本稿では走査 scanning と考え、心的走査 mental scanning は、線状のものを想定して心の中の目で追うプロセスを指すこととする。

4.2 個別義間の関連性

4.2.1 第1義およびプロトタイプ

まず、ハシルの第1義とプロトタイプおよびスキーマについて述べる。

〔第1義〕 〈人などが〉〈陸上などを〉〈足を交互に動かして〉〈一定方向に〉〈素早く〉〈進む〉

1a 〈人や動物が〉〈陸上などを〉〈足を交互に動かして〉〈一定方向に〉

(10) BCCWJ を対象としたコーパス検索ツール。名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できる。

〈素早く〉〈進む〉

1b 〈人の操作する乗り物が〉〈陸上などを〉〈一定方向に〉〈素早く〉〈進む〉

第1義は、ab とも、「動作主体ガ（所カラ所マデ／ニ）所ヲ〜」という格関係を基本構造として持ち、起点と着点は焦点化によって現れる場合があると考えられる。移動経路のヲ格は事象成立には必須であるが、実際には（1）（9）のように「走る」だけでも文となる。（10）（11）のように、いずれかの格（二重下線部）だけが使用される文も数多く見られる。

（9） 他にも、沿線には列車が走る姿をカメラに収める方もたくさんいらっしゃいました。
（Yahoo! ブログ）

（10） プリストル海峡沿いの道路を、夜遅く警官が自転車で走っていました。
（秦寛博『悪戯好きの妖精たち』）

（11） 愛車のボルシェで東京まで走っていきよった。
（板東英二『プロ野球知らなきゃ損する』）

（10）では「自転車が走る」ではなく「警官が自転車で走る」となっており、人間と自転車が隣接（一体化）している場合、そのどちらに焦点を当てるかで言い分けられることがわかる。「車でハシル」は（12）のように文脈によっては許容されるが、新幹線などを運転士が仕事として走らせている場合には、手段のデ格の使用は不自然なようである。

（12）？その運転士は、のぞみ13号で新大阪へ走っていた。

（10）（11）などの例からもわかるように、1aと1bには連続性があり、人から乗り物へメタファーで拡張したというよりも、人の操作する乗り物に身体が拡大し、メトニミーで意味拡張したと考える方が妥当であろう。

次に、1aの「陸上などを」については、移動経路が「面」的性質を備え

ていれば、陸上ではなく水上・水面でもハシルと言うことができる。次の(13)のように足を動かして水面を走る例も稀に見られる。第1義には、接面性が要素として含まれると考えられる。ただし、典型的には陸上である。

(13) 水の上を走るトカゲ バシリスクの動画

(<http://www.tomorrowearth.com/2008/12/jesus-lizard.html> 20180830)

1bの「乗り物」としては、「車、電車、列車、自動車、車両、汽車⁽¹¹⁾」など陸上の乗り物が多いが、(14)のように水上を行く船の例も少なくない。

(14) 定置網の漁船が魚市場に向かって走っています。(Yahoo! ブログ)

また、(15)のような「[[順番]を走る」(『動詞用法』p.420)については、(16)のような「～の前／後ろ／横－をハシル」という位置関係兼場所を表す表現を介して「トップ／先頭⁽¹²⁾－をハシル」のような形が定着した可能性が考えられる。ヲ格は1文に重複して使用することはできないため、複数の移動物の位置関係を示す語句がヲ格で示されると、移動経路が現れることはなくなる。

(15) ホンダのRA272はスタートから終始トップを走り続けて、ついに悲願の初勝利を飾る。 (日本工業新聞社編『決断力』)

(16) 明らかに自分より若い子達が400ccとか乗ってるのに、その横や後ろをチマチマ走るのは正直…苦痛でした。 (Yahoo! ブログ)

以上、第1義の意味と用法について述べた。

(11) NLBの「…が走る」パターンの頻度順に挙げた。

(12) 「先頭を走る」の用例は、BCCWJではメタファー表現としての使用が非常に多い。

第1義はハシルのプロトタイプであると考えられる。「動き」が具体的に観察可能であり、慣習化の程度が大変高く、デフォルトの状態で想起しやすいなどの条件が揃っていると言えるだろう。aが原義であり、人力車や籠、自転車、バイクのように、操作する乗り物へと人間の身体が拡大して使用され、さらに自動車、電車のように人間の姿が見えない乗り物の移動へと、同じ領域内のメトニミーで拡張していると考えられる。生き物も乗り物も、外部の力で動かされるのではなく、自らの力で移動する点は共通している。

4.2.2 第2義～第4義の意味用法と意味拡張

第2義から第4義は、以下のように記述することができる。

〔第2義〕 〈人が〉〈ある目的のために〉〈ある所へと〉〈急いで〉〈移動する〉

人間がハシル（第1義）のは、歩く場合よりも急いで移動したい場合が多く、そこから目的地へ焦点が移動し慣用化したと考えられるのが第2義である。目的地における目的がさらに前景化し、「足を動かす」「接面性」といった具体的な移動の様態を表す要素は背景化する。物理的に空間移動はするが、それよりも目的の方が際立つ用法である。

方向性を示す「へ」や移動先を示す「ニ」とは結びつくが、第1義には現れる到達点（限度）を示す「マデ」とは結び付きにくい。（2）のほか、（17）のような例が挙げられる。

（17）それで、京都にいる慶喜のもとへ、急使が走った。

（水野泰治『徳川慶喜』）

『明鏡』の意味⑤など複数の先行研究で、「金策にハシル」⁽¹³⁾との用例とともに「動き回る」などの説明がされている意味用法は、この第2義に含めることができる。「金策にハシル」場合も、意味的には「所へ／ニ」が必須であるが、前述したように目的地よりも目的地における目的に焦点が移っているため「目的ニ」の方が明示されている。「金策」の例の場合は、この語自体があれこれ工夫する意を含む⁽¹⁴⁾ためハシリ回ると解されるが、(18)では行く先が1カ所でも複数カ所でもかまわないと思われる。

- (18) 筮竹占いの本をつくったときは焼鳥の串を調達に走り、かるたや
双六のサイコロ、ジグソー・パズル、はては花の種まで手配したり
で、〈略〉 (『おかしな本の奮戦記』堀内俊宏)

また、『明鏡』の意味⑥など、複数の先行研究で「逃げだす、逃げ回る、敵方につく」などの説明がされている意味用法は、『三省堂国語辞典第七版』(以下、『三国』と略)では「文章語」と記されているように、現代語ではあまり使用されない用法である。意味記述も用例も先行研究において一貫性が見出しにくく、個々の古典の実例に合う現代語を当てた印象が強い。そこで、本稿では1つの意味としては取り上げないこととした。

ただ、こういった用例の意味拡張については、説明が可能である。第2義では、移動先に目的があるのに対し、このやや古い用法の一部(逃げる)は、移動元(起点)からいなくなることが目的となった用法と考えられる。移動する主体ではなく、主体の存在しない起点に焦点が移動していると考えられる。次のような例が挙げられる。

(13) 実際の用例を見ると「金策に－走る／走り回る」の両方が見られる。複合動詞「走り回る」の前項のハシルは、第2義に該当すると考えられる。

(14) 「さまざまに工夫して入用なかねをととのえること。－に駆けずり回る」(『広辞苑』)などの記述がある。

(19) 女郎をつれはしつたがよい

（『日国』(5)歌舞伎（1702 年）からの例）

〔第 3 義〕 〈人などが〉〈ある行為・行動へと〉〈性急に〉〈向かう〉

表 1 に記したように、第 3 義は、動作・作用の性質が「移動」ではなく「行動」であり、また動作・作用の領域が単なる物理的空間ではなく人間から成る社会的空間となっている。異なる領域へのメタファーによる意味拡張である。

(20) 広告コピーの目的は正確な情報伝達ではなく、読んだ人間に商品を買わせる、ある行動に走らせるということなのだから。

（鐸木能光『インターネット時代の文章術』）

(21) ですが、先生が最も嫌われたのは、華美に走ることでした。

（宇野千代『きもの日和』）

(22) たとえば歯周病の治療が見過ごされたまま、その歯の隣にインプラント手術が行われたり、営利主義に走って、患者さんとのコミュニケーションをおろそかにしたり…。

（玉木仁『安心のインプラント治療』）

NLB によると、「非行，行動，行為，主義，極端，趣味，不倫，保身，感情」などの名詞の使用頻度が高くなっている。全体的にマイナス・イメージの語句がやや多く、対となるプラス・イメージの語句が想起されやすいものが多い。(20) では、冷静で合理的な行動の反対の行動であり、(21) では、「流行や値段の多寡にとらわれない“きもの選び”」という基本姿勢の反対という捉え方、(22) では、患者本位の治療の反対のハシルと理解される。

第 3 義は、目的となる行為・行動へと急いで向かう時には、熟慮して判

断する余裕がないため、安易で好ましくない行動になりやすいという推論に基づくものと考えられる。「行動、テクニック」といったプラス・イメージもマイナス・イメージも伴わない語と使用されると、それが話し手の行為であれ第三者の行為であれ、安易に飛びつく性急さへの負の評価の表現となる。

〔第4義〕 〈ものが〉〈素早くなめらかに〉〈動く〉

第4義は、用例がやや限られているが、後述するメタファー表現とは異なるものとして多義構造上に位置づけたい。具体例としては、「筆が走る、ボールが走る」などが挙げられる。ここでは、使役者が筆やボールを素早く移動するよう働きかけ、その結果被使役物が素早くなめらかに動くときに、その被使役物の方に焦点を当てた言い方であると考えられる。(24)では人がボールをハシリせ、ボールがハシルことを表している。慣用化した表現で、ボールは、使役者の意図通りあるいはそれ以上のなめらかな素早さで動くことを表している。

(23) 筆が面白いくらいに走った。四百字詰百三十枚ほどの小著だが、
半月あまりで書き上げてしまった。 (高田宏『われ山に帰る』)

(24) 最後の方は ボールが走り始めましたが、やはりコントロールが
悪いとボールの勢いは意味がない。 (Yahoo! ブログ)

移動する「物」がガ格に来る使い方には、さらに、一時的なメタファー表現と解される用例も見られるが、本稿では、こういった用例は、語の意味として慣用度あまり高くないと考え、個別義としては立てなかった。次の(25)は、動作・作用の主体において、モノを人に見立てた第1義か

らのメタファー表現と考えられる。⁽¹⁵⁾

- (25) 部屋の片すみに ほうずえついて ため息一つ 雲が走ってる
黄昏の街 (Yahoo! ブログ)

また、複数の辞書で記載のある「刀が走る（鞘から抜ける意）」は、スキーマと直接つながるものであると考えられる。BCCWJ では 1 件用例が見られたが、しかし、「鞘から抜ける」意ではなく、むしろ (24) の「ボール」の用例に近い意味と解釈されるものであり、意味分類において別に扱う必要はないと考える。

4.2.3 第 5 義～第 8 義

続けて、第 5 義から第 8 義について述べて行く。

〔第 5 義〕〈移動経路などが〉〈線状に〉〈のびる〉

第 5 義に分類される用例としては次のようなものが挙げられる。

- (26) 筑森の東を小岩井有料道路が南北に走っている。
(松田司郎『宮沢賢治の旅』)
- (27) 網膜の血管がその上を走っていることで、それがわかります。
(本田孔士『あなたの眼は大丈夫?』)
- (28) 地面のほとんどすべてに、無数のひび割れが走っていた。
(丸山直樹『アフガン乾いた大地戦火の中の民』)

(15) 次のような例は、「目標に向かって行動を続けることは、目的地に至る道を進むことである」という、第 1 義からの概念メタファーに基づくメタファー表現であると考えられる。ここでは、動作・作用が、物理的空間から時間的・社会的空間へ写像されている。「今日はホントにありがとうございました。今日が 15 年ですがこれからも DEEN は走り続けていきます」(Yahoo! ブログ)

- (29) 自治区のはぼ中央を天山山脈が走っていて、それより北を「北疆」、南を「南疆」と呼ぶのがふつうです。 (陳舜臣『中国歴史の旅』)
- (30) 袖に別珍のラインが走る コーデュロイジャケット。 (Boon)

ガ格名詞として使用されているのは、「道路、道、国道、街道、鉄道」「血管、静脈、パイプ、神経」「亀裂、ひび割れ、断層」「山脈」などさまざまである。

このうち、「亀裂」に関しては、次の(31)のように眼前で亀裂が生じるようすを描写する用例もあれば、「走っている」の形で線状に伸びる状態を言う用例も見られる。(31)は、亀裂が線状に生じる過程を視覚で捉えた表現と考えられる。NLBの「亀裂」の31例の形を見ると、多い方から順に「走った>走っている>走り、>走りはじめた>(その他)」となっている。

- (31) バリバリバリ…！ 空間に亀裂が走った。「結界が…！」
(早坂律子『超魔炎獄変』)

次に、「道路」や「血管」などは、乗り物などや血液が(素早く)移動する場所であり、名詞において、容器と中身のメトニミーでより際立ちの高い容器の方へ拡張したと考えることができる。パイプと液体、神経と電気信号なども、同じ関係である。いずれも「走っている」の形で線状にのびる状態を心的に捉えている。

さらに、(29)(30)のように、ガ格名詞自体には何の移動の痕跡がない例も見られる。「山脈」の用例4例では、「走っている、走る+名詞」が各2例となっている。ここでは話し手の主観的移動によってハシルが使用されていると考えられる。

第5義は、詳細に分析するとこのように違いが見られるが、共通するの

はガ格名詞であるモノの方が移動するのではなく、話し手（言語主体）の視線あるいは心的視線が線状に移動する点であり、また、多くは心的走査によるものである。

〔第6義〕 〈光が〉〈線状に（または周囲に）〉〈瞬間的に〉〈現れる〉

第6義に分類される例としては、次のようなものがある。

(32) 遠くで白いはずმაが走った。 （速水彩『青いプリंक』）

(33) 〈略〉キュベレイとコア・ファイターの間にビームが走った。
（遠藤明吾『機動戦士ガンダム ZZ』）

(34) 突然閃光が走り、空間が明るくなった。
（石垣用喜『石垣島失踪事件』）

ガ格名詞としては、「稲妻、稲光、光、閃光」などが見られる。国語辞典等においては、速い移動に注目して分類するもの（『大辞林第三版』『岩波国語辞典第七版新版』『例解新国語辞典第九版』『新明解国語辞典第七版』）、瞬間性に注目して分類するもの（『明鏡』『旺文社』）、線状性に注目して分類するもの（『動詞用法』）などが見られるが、本稿では、典型的には線状性と瞬間性を有すると考える。(32) がその例である。しかし、(6) のサーチライトのように「+線状性、-瞬間性」の例もあれば、(34) の閃光（＝瞬間的に強くひらめく光⁽¹⁶⁾）のような場合は、「±線状性、+瞬間性」であると考えられ、他の語義同様、共起する名詞によって範囲は広がる。

第5義の「移動経路などが線状にのびる」と大きく異なる点は、道などが実際には静止しているのに対し、光は移動することである。速く移動す

(16) 『明鏡』の記述。

るものは、一般に眼前では瞬間的に出現し消滅するように見えることから、素早い移動と瞬間性は、推論的につながると考えられる。

なお、『明鏡』には「光・音などが瞬間的に現れて消える」と記されているが、雷のように光と音が同時に現れる例は数多く見られる一方、音だけがハシル用例は、BCCWJ で見る限り用例が見当たらなかった。音は視覚的な線状性は持たず、仮に時間的な線状性を持つならば瞬間的にはならないので、「音」は排除していいと考えられる。

〔第7義〕 〈強い感覚が〉〈身体の一定の範囲で線状に〉〈瞬間的に〉〈拡がる〉

第7義に分類される例には、(7) のほか次のようなものがある。

(35) その途端に、フィリップは背筋に悪寒が走るのを覚えた。

(森詠『戦場特派員』)

(36) 背筋に冷たいものが走った。恐怖に毛穴がぶあーっと開く。

(佐々原史緒『かくて背信の旅はおわる』)

(37) 今、起きたら全身に痺れが走り動くことも、ままなりません。

(Yahoo! 知恵袋)

第7義は第8義と意味的に近い関係にあるが、第7義は感覚主体が自身の内部に強い刺激が出現するのを知覚する場合を表し、第8義は個人あるいは集団に感覚・感情が出現するのを外部から捉えて表している。

ガ格名詞としては、「痛み、激痛」などのようにほぼ第7義と解される語群もあれば、「緊張」のように、(38) では第7義、(39) では第8義となるような語群とがある。

(38) ハッと胸に緊張が走った。 (夏樹静子『黒白の旅路』)

(39) エンジニアたちの間に緊張が走る。 (高嶋哲夫『スピカ』)

第1義から第6義までと第8義は、観察主体が、人間や具象物の動きや在りようを視覚を中心とする感覚等から判断する表現であるのに対し、第7義は身体感覚であり、刺激を感じる心理的（あるいは精神的）空間という異なる領域についての用法である点が他の個別義と異なる。

〔第8義〕 〈強い感情が〉〈個人や、社会の一定の範囲に〉〈瞬間的に〉〈拡がる〉

第8義の用例としては、前述の（8）（39）や次の（40）（41）などが挙げられる。感情などが個人の表情などに瞬間的に現れる用法と、感情などが一定の範囲の人たちに瞬時に拡がる用法とに分けることもできる。どちらも、個人の内面に生じた強い感情が外から観察できる変化として現れた様子を述べるものである。

（40） 唯野の落ちつかぬ様子を見て日根野の表情に喜悅の色が走った。
（筒井康隆『文学部唯野教授』）

（41） 全国の障害者に危機感が走った。
（中西正司、上野千鶴子『当事者主権』）

以上、第1義から第8義までの意味を記述し、語義間の関連性について述べた。

4.3 視覚スキーマと格表示による多義構造図

本節では、動詞ハシルの視覚スキーマに、4.2で論述した場所に関わる格助詞を組合わせて、8義に対応する8つのイメージ図を作成し、それらを多義構造図（ネットワーク）として示す。

ハシルのスキーマは、図1のように示すことができる。図1～図9において、「太い矢印」は動作・作用の主体の動きを示し、矢印の塗りつぶさ

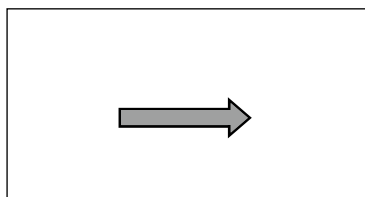


図1 ハシルのスキーマ

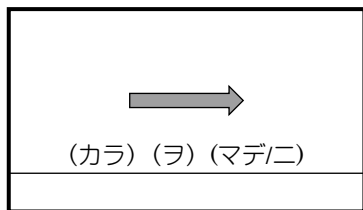


図2 第1義（例：毎朝5キロ走る）

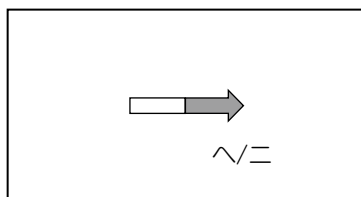


図3 第2義（例：ATM へと走る）

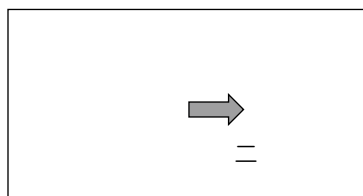


図4 第3義（例：非行に走る）

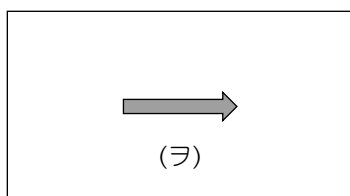


図5 第4義（例：ペンが走る）

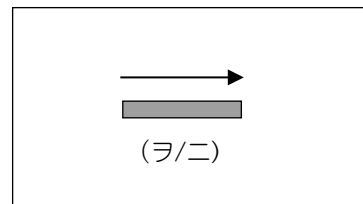


図6 第5義（例：亀裂が走る）

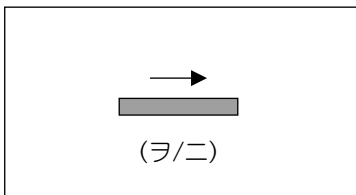


図7 第6義（例：稲妻が走る）

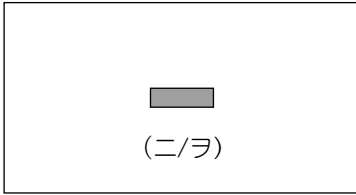


図8 第7義（例：痛みが走る）

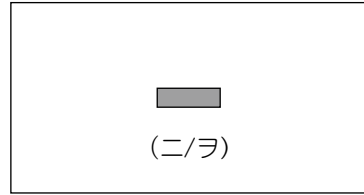


図9 第8義（例：動揺が走る）

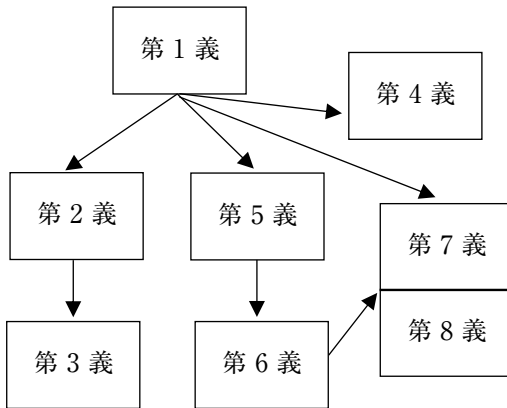


図10 ハシルの多義構造

れていない部分は背景化していることを表す。また、「太い線」は動きが見られないことを表し、太い線の上の「細い矢印」(→)は、言語主体（話し手）の主観的移動を表す。抽象的空間における動作・作用である第7義と第8義は、視覚的に表すのは困難であるが、仮の案とし提示した。第1義から第8義まで、短い例を添えて図に示した。

上記の8つの図（つまり8義）は、4.1, 4.2で論じたように、図10のような多義構造をなすと考えられる。図10に上記の8図を入れた構造図が本稿の結論である。

5. おわりに

本稿では、移動動詞ハシルを事例として、個別義、プロトタイプ、スキーマを認定し、視覚スキーマに場所格表示を組み合わせての方法で多義構造図を示した。個別義の分析と意味拡張に関しては、用例を検討した結果、中間的な使用が見られて意味拡張のプロセスが鮮明になったと思われる。また、慣用化していないメタファー表現にも言及した。

視覚的スキーマは一般的に簡潔なものになりがちであり、そのため、必ずしも語の理解につながりにくい場合もあるように思われる。そこで、本稿では、視覚スキーマに格表示を加え、さらに補助的な記号を加えることで、より伝わりやすい多義構造図のモデルを提案した。

参考文献

- 川出才紀 1987 「項目：run」 田中茂範編著『基本動詞の意味論』142-145 三友社出版
- 木下りか 2018 「多義動詞の意味拡張の起点と直観のプロトタイプ」 日本認知言語学会第19回全国大会ワークショップ「多義動詞の分析——特徴の記述と分析方法の精緻化」配付資料2-5
- 国広哲弥 1982 『意味論の方法』大修館書店
- 小泉保他編 1989 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 田中茂範・川出才紀 1989 「基本動詞の意味分析：コア・パラメータ・視点」『茨城大学教養部紀要』(21) 385-418
- 田中茂範 1990 『認知意味論——英語動詞の多義の構造』三友社出版
- 松本曜 1997 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』125-230 研究社出版
- 松本曜 2004 「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4 (1) : 111-128
- 松本曜 2009 「多義語における中心的意味とその典型性：概念的の中心性と機能的の中心性」*Sophia Linguistica: working papers in Linguistics* 89-99
- 杉山洋介 1993 「多義語分析の方法——多義的別義の認定をめぐる——」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1 : 35-57 名古屋大学留学生センター

- 棚山洋介 2001 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」 山梨正明 他編『認知言語学論考 No. 1』 29-58 ひつじ書房
 山梨正明 2000 『認知言語学原理』 くろしお出版
 山梨正明 2004 『ことばの認知空間』 開拓社
 山本和之 1984 「Run と「走る」—— 辞書の定義と日英語の比較 (1) ——」 『英語と英米文学』 19 : 29-39 山口大学
 吉村公宏 2004 『はじめての認知言語学』 研究社
 Dewart, R. B. 1994 Over again: Image-schema transformation in semantic analysis. *Cognitive Linguistics* 5 (4): 351-380
 Langacker, Ronald W. 1990 *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Mouton de Gruyter

国語辞典

- 日本国語大辞典第二版編修委員会 2003 『日本国語大辞典第二版』 小学館
 松浦明編 2006 『大辞林第三版』 三省堂
 北原保雄編著 2010 『明鏡国語辞典第二版』 大修館書店
 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 2011 『岩波国語辞典第七版新版』 岩波書店
 山田忠雄・柴田武他編 2012 『新明解国語辞典第七版』 三省堂
 見坊豪紀他編 2013 『三省堂国語辞典第7版』 三省堂
 山口明穂他編 2013 『旺文社国語辞典第11版』 旺文社
 林四郎監修 2015 『例解新国語辞典第九版』 三省堂
 金田一春彦他編 2017 『学研現代新国語辞典改訂第六版』 学習研究社
 新村出編 2018 『広辞苑第7版』 岩波書店

資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス : <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>
 NINJAL-LWP for BCCWJ : <http://nlb.ninjal.ac.jp/>

(原稿受付 2018年11月27日)

〈論 文〉

大学生の英語論文読解指導法

狩 野 紀 子

要 旨

近年、アカデミック・ライティングやリサーチペーパーの執筆指導を英語の授業で実践している大学は少なくない。執筆するためには、英語論文を読んで理解することがまず必要であるが、論文読解指導に関する調査・研究は少なく、教科書や指導書の数も限られている。そこで本研究では、英語を専攻する学生を対象に、英語論文の構成や頻出する表現を中心に、論文の読解方略を指導・訓練した。1学期間の指導の結果、論文構成の理解を基に行う scanning 力には伸長が認められた。また、特に指導はしていないが、論文中に頻出する「論文に関する用語」や「統計に関する用語」の理解にも進歩がみられた。それに対し、重要情報である研究の目的、方法、結果の精読に関しては、限られた効果しか認められなかった。短期間の指導で、学生はある程度は英語論文を理解できるようになるが、複雑な構造の文の理解や概念の理解には、さらなる指導が必要となることが示唆された。

キーワード：英語論文、読解方略、論文構成、EAP、指導法の開発

I. はじめに

英語が幅広い分野で使用されるようになり、大学生にも高い英語力が求められるようになってきている。当然、高等教育機関に求められるのは、日常的な言語運用能力を学生に身に付けさせるだけでなく、学術的な事柄

に関して、英語で情報収集し、理解し、問題を解決していくスキルや、専門分野における言語運用能力までを、段階的に育成していくカリキュラムである。つまり指導されるべきは、一般目的の英語 (English for General Purposes = EGP) だけではなく、学術目的の英語 (English for Academic Purposes = EAP) である。学術目的の英語 (EAP) には、スタディスキルなどを含む一般学術目的の英語 (English for General Academic Purposes = EGAP) と、学生の専門分野に関係した特定学術目的の英語 (English for Specific Academic Purposes = ESAP) がある。田地野・水光 (2005) は、大学1・2年次に一般学術目的の英語 (EGAP) を中心とした指導、3年次以降に特定学術目的の英語 (ESAP) 科目を位置付けている。

法学部や医学部ならば、一般学術目的の英語 (EGAP) と特定学術目的の英語 (ESAP) の区別はさほど困難ではないが、学生の専門が英語となると、この区別は簡単ではない。実際、筆者が勤務する大学では、一般学術目的の英語 (EGAP) と特定学術目的の英語 (ESAP) が2年次から混在する形となっている。学生は2年次に、「言語学・言語教育」、「文化」、「コミュニケーション」の何れかを専門として選択し、2年次より専門科目の履修を開始する。その代わりに一般学術目的の英語 (EGAP) を3年次まで開講している。したがって、3年次の科目が一般学術目的の英語 (EGAP) の最終段階となり、難易度の高い内容が要求されている。このような授業のひとつが時事問題に関する記事を読むこと、それについてアカデミック・エッセイを書くことである。もうひとつは、専門に関係のある研究論文を読むこと、そして英語でリサーチペーパーを書くことである。難易度が高いという理由もあり、研究論文を読んだり書いたりする授業実践例は、日本の大学ではあまりない。本研究では、実質的に、一般学術目的の英語 (EGAP) の最終段階にあたる3年次の必修授業で、どのように研究論文を読めばよいのか、その指導法を考察し、提案するものであ

る。またその効果について、extensive reading 力、vocabulary および intensive reading 力に関して検証する。

一般学術目的の英語（EGAP）の最終段階で何を指導するかに関しては、議論の余地があるが、筆者の勤務する学科では、時事問題と専門に関連する研究論文とした。時事問題のリーディングに関しては、教科書も多数出版されており、指導にはさほど困らない。リサーチペーパーの書き方の学習方法や指導方法に関する文献も多数ある。それに比べるとリサーチペーパーの読み方に関する文献は少ない。また、筆者が担当しているリサーチペーパーのライティングの中で、review of related literature の部分で過去の研究論文を読まなければならないが、この部分に問題を抱える学生が多い、つまり研究論文が読めない学生が多いことに気づいた。そこで本研究では、リサーチペーパーの読み方の指導法を考察し、実践することとする。

Ⅱ．先行研究

論文には時間や労力をかけても理解しておかなければならない重要な情報と、読み飛ばしても全体の理解には支障をきたさない詳細情報がある。情報の重要度を知ることができれば、英語論文の読解にかかる時間や労力を節約し、効率的に論文を読み進めることができる。そのために本研究では、論文読解を促進する方略として英語論文の構成を考察していくこととする。

英語の研究論文には分野により一定のフレームワークがある。Hartley (1999) は、*British Journal of Educational Psychology* に掲載された 35 論文を分析し、心理学の論文の構成を明らかにした。Hartley によると、心理学の論文は大きく分けて、Abstract, Introduction, Method, Result, Discussion, Acknowledgement, References, Appendices の各要素から構

成されている。しかし、論文のテーマによりその構成要素は多少異なり、どの論文にも適合する一般的なフレームワークを抽出することは容易ではない。さらに、各構成要素に含まれる情報は、非実験系論文と実験系論文では異なる。たとえば非実験系論文の Introduction では、ある理論をサポートする（またはしない）論拠が記されているのに対し、実験系論文の Introduction では、研究の目的や仮説が記されているなどの違いがある。

一方 Posteguillo (1999) は、計算機科学 (computer science) 分野の学術論文に含まれる構成要素の出現頻度を数値化した。Posteguillo は、*The Journal of Parallel and Distributed Computing* や *The SIAM Journal of Computing, Artificial Intelligence* などの学術誌から 40 の論文を選択し、Swales (1990) の CARS (Create A Research Space) モデルを使って分析した。その結果、どの論文にも Introduction は存在するものの、Discussion または Conclusion のセクションを設けている論文は、85% しかないことを指摘している。さらに、Swales が CARS モデルで規定している Introduction, Result, Conclusion のいずれかに含まれる情報であっても計算機科学の論文には含まれないものが多く、たとえば、問題提起 (question-raising) を記述している論文は 22.50%、研究の目的の概略 (outline purpose) に関しては 25.00%、今後の課題 (recommendation for further research) は 58.82% に留まっている。Posteguillo は計算機科学分野の論文には、整然とした枠組みはないと結論付けている。

Laubepin (2013) は、社会科学の論文には、標準的なフォーマットがあり、その構造を理解してしまえば、必要な情報はどこにあるのか簡単にわかり、内容も容易に理解できると主張している。さらに、必要な情報を得るためには、論文のどの部分を読めばよいのかを表にまとめ、効率的に読む方法として提案している。John Hopkins 大学の Hall (2017) は、指導者用のサイトで、論文読解の指導法のひとつに、Laubepin の指導法を推奨している。

英語教育学の分野における実験系の研究論文は、通常 Introduction, Procedure (Method), Result, Discussion の各章から構成されており (Hill, Soppelsa, & West, 1982), 各章には重要度の高い下位項目と低い下位項目が含まれる。たとえば, Introduction の章にある「研究の目的」(または仮説やリサーチ・クエスチョン) は時間や労力をかけても必ず理解しなければならない項目であるが, 先行研究の一部が理解できなくても論文全体の理解にはさほど支障をきたさない。それに対して, Method の章に含まれるデータ収集の方法や Result の章に記述される有意差の有無, Discussion の章にある研究の目的 (リサーチ・クエスチョン) に対する答え, つまり結論は必ず読み取らなければならない情報である。

各分野の論文はある程度共通する要素から成り, その構成にもある程度の共通性がある。しかしそれは必ずしも全ての論文に共通するものではない。そこで本研究では可能なかぎり多くの研究論文に適用できるよう, 大きな枠組を考え, それを読解内容を整理するフレームワークとして使用することとした。その最も大まかなフレームワークとして IMRD (Introduction, Method, Result, Discussion) を指導に使用することとする。

もし学習者がこの IMRD の論文構造に慣れていれば, つまり論文の構造をスキーマとして利用できれば, 重要な情報とそうでない情報をすばやく弁別し, 必要な情報のみを収集し, 論文の概要を正確に理解できるであろう。現状としては, 学生たちは使うべき方略を理解しておらず, 英国でも半数近い大学院生が, 研究論文を最初から最後まで均一に読んでいるという報告もある (Sohail, 2015)。しかし, Hijikata, Nakatani, & Shimizu (2013) の読解方略に関する研究では, 英語能力が低い学生は文章構成に注意を払わないのに対し, 能力の高い学生は章のタイトル見て論文の構成を確認してから読み進めるという結果も報告されている。また, 論文読解の方法として Hoskins, Stevens, & Nehm (2007) は, CREATE (Consider, Read, Elucidate the hypothesis, Analyze and interpret the data, Think of

the next Experiment) 法を提唱し, (1) Introduction では, 重要な概念の関係を考えてコンセプトマップを作成, (2) Method と Result を読む, (3) 仮説の検証と解説, (4) データの分析と解釈, (5) 今後のリサーチを考えるとというモジュールを提案している。本研究では, IMRD の文章構造および CREATE などの指導手順を参考にして指導を試みることにした。

そのために, 授業では, skimming や scanning など top-down reading の指導に時間を使った。先行研究においても, Puruggannan & Hewitt (2004) は, 論文の構成やその特徴を捉えるために, まず論文全体をスキミングすることの重要性を説いている。また, 論文の内容を整理して記憶するために, テンプレートを作成しておくことをも推奨している。アメリカの高等教育機関の多くは, 大学図書館やサポートセンター, その他研究機関などで英語論文の読み方や書き方の指導を行っているが, そのひとつ, テキサス大学図書館 (University of Texas, 2008) も, 科学論文の読み方指導講座を行っており, そこには, Puruggannan & Hewitt (2004) のテンプレートを使用して, 論文の読み方を訓練するサイトが公開されている。

本研究では, (1) 研究の目的, (2) 実験 / 調査の方法 (被験者 / 回答者・実験材料・データの収集方法・データの分析方法), (3) 実験 / 調査の結果, および (4) 結論を重要情報として項目化し, 学生に読み取らせ, その情報をインデックスカード (Appendix 参照) にまとめさせる方法を中心に指導を行った。アブストラクトではなくインデックスカードにしたのは, 後者の方が情報量が多く, 情報の質も高いからである (Hartley, 1999)。

Ⅲ. 研究の方法

本研究には, 英米語を専攻する大学生 33 人が参加した。2017 年度と 2018 年度に同一内容で授業を行い, 2017 年には 17 人 (男性 6 人, 女性

11 人), 2018 年には 16 人 (男性 6 人, 女性 10 人) が受講した。彼らの TOEIC スコアは 600 点から 770 点, 平均は 674 点であり, upper-intermediate レベルの学習者と考えられる。なお, 受講を途中でやめてしまった学生 2 人 (男性 1 名, 女性 1 名) は分析から除外した。

実験を行った大学は, 東京にある私立大学である。学生は必修科目として, 1 年次には, Listen & Read I (前期) と Listen & Read II (後期), Speak & Write I (前期) と Speak & Write II (前期), 英文法 (通年) を履修する。2 年次には, Listen & Read III (前期) と Listen & Read IV (後期), Speak & Write III (前期) と Speak & Write IV (前期) を履修する。学生は, その他にも「資格英語」や「英語ワークショップ」などの選択科目も履修するが, 一般学術目的の英語 (EGAP) である上記の必修科目はすべての学生が履修のうえ, 3 年次の Reading Skills A (前期), Reading Skills B (後期), Writing Skills A (前期), Writing Skills B (後期) を履修することとなる。本実験で使用したのは, 英語論文読解を目的とした 3 年次の必修科目 Reading Skills A である。

授業は 2017 年と 2018 年 4 月から 7 月にかけて, 90 分間, 週 1 回のペースで 15 回実施した。ただし, 第 1 回目の授業はプリテストに, 第 9 回目は中間試験に, 最終授業の第 15 回目は期末試験およびポストテストに使用したので, 実際に指導に使用できたのは 12 回だけである。指導内容および使用した文献を表 1 にまとめる。

指導は, トップダウン・リーディングの訓練として, 論文のタイトルから概要を予測させる練習, およびアブストラクトから詳細情報を予測させる練習から始めた。続いて, 英語論文の構成に関する基礎的な知識を与え, Introduction, Method, Result, Discussion の各章でどのような内容が書かれているのか, 論文を精読させることによって理解してもらった。コースの後半には, 研究の目的や方法, 結果に関する重要情報の目印となる表現 (表 2 参照) を手掛かりに, 重要な情報の記述箇所を迅速に探し出

表 1 指導内容と使用論文

回	指導内容	使用論文
1	Pretest	Holzinger, Kickmeier-Rust, & Albert (2008) <i>Dynamic Media in Computer Science Education; content complexity and learning performance: Is less more?</i>
2	タイトルから論文の概要を予測 アブストラクトから論文の内容を予測	Tanaka & Stapleton (2007) <i>Increasing reading input in Japanese high school EFL Classrooms: An empirical study exploring the efficacy of extensive reading</i> Yamashita (2004) <i>Reading attitudes in L1 and L2, and their influence on L2 extensive reading</i> Huang & Liou (2007) <i>Vocabulary learning in an automated graded reading program</i>
3	論文の構成	Lenington (1979) <i>Effect of holy water on the growth of radish plants</i>
4	Abstract (精読) Introduction (精読)	Machida & Dalsky (2014) <i>The effect of concept mapping on L2 writing performance: Examining possible effects of trait-level writing anxiety</i>
5	Review of Literature (精読) Method	
6	Results (精読) Discussion (精読)	
7	Abstract (精読) Introduction (精読) Method (精読)	Vivaldo-Lima (1997) <i>Cognitive style and reading comprehension in L1 and L2.</i>
8	Results (精読) Discussion (精読)	
9	中間試験	

10	Skimming & Scanning Abstract 執筆	Navarro (2008) <i>Building schema for English language learners</i>
11	Skimming & Scanning Index card 作成	
12	Skimming & Scanning Index card 作成	Lai & Kuo (2007) <i>Gender difference in CALL programs for English as a second language acquisition</i>
13	Skimming & Scanning Index card 作成	Brundage (2007) EFL foreign teacher stress in Korea: Causes and coping mechanisms
14	Skimming & Scanning Index card 作成	Ito (2011) <i>L2 reading-writing Correlation in Japanese EFL high school students</i>
15	期末試験 Posttest	Holzinger, Kickmeier-Rust, & Alber (2008) <i>Dynamic Media in Computer Science Education; content complexity and learning performance: Is less more?</i>

し、論文の要旨や概要を把握する skimming や scanning のスキルを訓練した。その際に、表 2 に示す表現を教示し、精読させ、重要情報を正確に読解する訓練を行った。さらに、理解した内容を可視化するため、読んだ論文の重要事項を Index Card（Appendix 参照）にまとめる練習も行った。教材には、主に英語教育に関する論文を使用した。

コースの最初と最後には、指導の効果を測定するために、事前テストと事後テストを実施した。テストは、(1) 10 分間に論文の概要（研究の目的、専門用語の説明、被験者数、実験に使った教材、実験結果×2 問）を把握させる問題 6 問（5 点×6 問＝30 点）、(2) 英語論文、統計、教育工学、言語習得・言語教育に関する語彙（1 点×40 問＝40 点）、(3) アブストラクトの英文和訳（6 点×5 問＝30 点）からなる。(1) の概要把握は、論文構成を理解した上で skimming や scanning が迅速にできるか検証する目的

表2 論文に頻出する構文事例

Introduction 研究の目的 The [aim / purpose] of this [paper / research / study] is to [examine / investigate] In this [paper / research / study], we [examine / investigate]
Method 被験者／回答者 Participants are 100 students who are majoring ... 100 students participated in this study. We selected 100 students for this study. 実験材料（ツール・質問紙） We [measured / tested / used] ... [for /in] this study ...was [measured / tested / used] [for /in] this study
Results 結果 The result indicates ... The findings indicate... We found that ... It was found that ... [Table 1 /Figure 1] [demonstrates / highlights / shows] that[is / are shown] in [Table 1 /Figure 1]

で行った。(2)の語彙問題は、授業で使用した論文に頻出する「英語論文」と「統計」に関する用語と、論文には出現しなかった「教育工学」や「言語習得・言語教育」に関する用語の理解を比較することにより、論文読解授業で学生がどの程度語彙を習得しているか調べるためのものである。(3)の英文和訳では、主語－動詞の対応や修飾関係など、文の構造を把握できているかを中心に測定した。事前テストと事後テストには同じ問題を使用した。採点は2人で別々に行った。採点者間相関は $r=.846$ ($p=.000$) で有意に高かったので、2人の得点の平均を算出し、対応のある t 検定を行った。

Ⅳ. 結果

表3に事前テストと事後テストの結果をまとめる。表が示すように、概要把握、語彙、英文和訳すべてにおいて、事前テストと事後テストの間に1%水準で有意差があり、指導の効果が認められた。以下テスト内容ごとに詳しく結果を述べていく。

表3 事前テストと事後テストの結果

テスト内容		事前テスト	事後テスト	検定の結果
(1)概要把握 (5点 X 6問 = 30点満点)	平均	9.45	14.19	$t = -5.03$
	標準偏差	5.72	4.06	$p = .000^{**}$
(2)語彙 (1点 X 40問 = 40点満点)	平均	3.10	11.00	$t = -14.14$
	標準偏差	1.67	3.25	$p = .000^{**}$
(3)英文和訳 (6点 X 5問 = 30点満点)	平均	11.21	13.48	$t = -3.08$
	標準偏差	4.12	4.12	$p = .004^{**}$

A. 概要把握

本研究では、skimming や scanning の訓練を行うことにより、英語論文の内容把握が迅速かつ正確に行えるようになると考えた。事前テストと事後テストの結果から、指導の効果は認められた ($t=-5.03$, $30df$, $p=.000$)。問題毎の解答状況を表4にまとめる。10分という制限時間内に、研究の目的 (Q1)、特別な用語の意味 (Q2)、被験者数 (Q3)、実験内容 (Q4) や実験結果 (Q5 と Q6) の全てを探すのは、簡単ではなかったようである。用語の説明 (Q2) や被験者数 (Q3) など scanning によって簡単に解答できる問題の正答率が高いが、purpose (Q1) や content (Q4) といっ

表 4 概要把握：問題ごとの平均

	Q1 研究目的	Q2 用語意味	Q3 被験者数	Q4 実験教材	Q5 実験結果	Q6 実験結果	合計
事前 テスト	1.16	3.13	4.03	0.65	0.00	0.48	3.10
事後 テスト	2.55	4.13	5.00	1.58	0.32	0.61	11.00
<i>t</i> 値	-2.80**	-3.29**	-2.68*	-1.98	-1.44	-0.39	-5.03**

*各問題 5 点満点

たキーワードを探しその周辺の文章を読んで解答する問題になると正答率は下がる。さらに、キーワードすらなく、論文構成から記述されている場所を予想して必要な情報を探さなければならない Q5 や Q6 になると、限られた時間内ではなかなか解答できないことがわかった。つまり精読自体があまりできていない可能性が高いことが示唆された。

B. 語彙

語彙に関しては、特に毎回の授業で解説したり、小テストを行って定着を図ったりしたわけではないが、表 3 に示す通り、半期の授業で向上が見られた ($t=-14.14$, $30df$, $p=.000$)。語彙テストは(1)論文に関する用語、(2)統計に関する用語、(3)教育工学に関する用語、(4)言語習得・言語教育に関する用語の 4 分野からなるが、各分野の得点は表 5 に示す通りである。ま

表 5 語彙：分野ごとの平均

	論文用語	統計用語	教育工学用語	言語習得・ 言語教育用語	合計
事前テスト	1.55	0.94	0.19	0.42	3.10
事後テスト	4.13	3.61	1.06	2.19	11.00
<i>t</i> 値	-9.58**	-12.20**	-4.12**	-6.40**	-14.14**

*各分野 10 点満点

た、表6に各用語の正答者数を示す。全ての分野で得点の伸びが認められるが、特に変化が大きかったのは、授業でしばしば使用した論文に関する用語と統計に関する用語であった。これまで曖昧に理解・記憶していた review of related literature, figures and tables, reference, acknowledgement など論文に関する用語や hypothesis, mean, correlation といった統計に関する用語が、論文を読むことにより明確になり、定着したものと考えられる。一方、教育工学や言語習得・言語教育に関する語彙は、統制のために用意したもので、特に授業で使用した論文では扱われていない。しかし、この2分野でも有意な差がみられた。学生は本コース以外の授業で学習したものと予測される。

表6 用語別正答者数（人）

論文用語	事前	事後	統計用語	事前	事後
plagiarism	1	2	questionnaire	16	26
analysis	13	19	independent valuable	0	3
review of related literature	0	11	hypothesis	7	25
references	1	16	standard deviation	0	1
citation	4	6	mean	0	26
figures and tables	9	21	reliability	6	8
bibliography	0	8	correlation	0	21
acknowledgement	0	17	significant difference	0	2
punctuation	0	1	Analysis of Variance	0	0
evaluation	20	27	validity	0	0

教育工学用語	事前	事後	言語習得教育用語	事前	事後
constructivism	0	0	competence	0	1
cognitive science	0	15	comprehensible input	0	10

natural language processing	0	0	dyslexia	1	9
CSCL (Computer Supported Collaborative Learning)	0	0	ESP (English for Specific Purposes)	6	6
scaffolding	0	2	CPH (Critical Period Hypothesis)	3	16
reflection	2	1	fossilization	1	6
visualization	3	8	motherese	0	5
semantic network	0	3	pattern practice	2	8
ubiquitous	1	3	TPR (Total Physical Response)	0	3
ZPD (Zone of Proximal Development)	0	1	Wernicke's area	0	0

C. 英文和訳

第4回から第8回の授業では、論文に頻出する構文を解説し、実際の論文の中でその構文を探し、精読および和訳させた。その成果なのか、事後テストでは英文和訳のセクション全体の得点に上昇が見られた（表3および表7参照）。しかし問題ごとの得点には有意な差は認められなかった。採点の基準を、主節—従属節の関係、比較、修飾関係など文構造の認識に

表7 概要把握：問題ごとの平均

	Q1 背景	Q2 研究目的	Q3 被験者	Q4 実験方法	Q5 実験結果	合計
事前テスト	2.21	2.18	1.71	2.00	3.11	11.21
事後テスト	2.44	2.52	2.50	2.34	3.71	13.48
<i>t</i> 値	-.58	-.84	-1.88†	-1.27	-1.66	-3.08**

* 各問題6点満点

置いたために、得点に大きな変化はみられなかったのであろう。予測しながら大意を捉えることには慣れているが、正確に文を読み取ることができない、近年の学生の特徴のある意味象徴する結果となった。

V. まとめと考察

本研究では、英語を専攻する大学生が英語論文の内容を効率よく、かつ正確に読み取ることができるようになる指導法を考案して、1学期間の授業で実践した。具体的には、IMRD（Introduction, Method, Result, Discussion）の論文構造をスキーマとして利用し、skimming や scanning の指導を中心に行った。さらに skimming や scanning で検出した重要情報に含まれる論文に頻出する表現を解説し、要点を正確に読み取らせる訓練を行った。実践の前後にはテストを行い、概要把握、語彙、重要内容の和文英訳に関して、授業実践の効果が現れるか検証した。

論文の構造を教示し、それを利用して skimming や scanning の練習をさせ、その効果として、概要把握がどの程度迅速かつ的確にできるようになるか、事前テストと事後テストの点数を比較することによって検証した。事前テストと事後テストの間に統計的な有意差は認められたが、個々の問題を詳しくみると、数字や用語など scanning 力を測定する問題の得点の伸びがほとんどで、実験結果など重要な内容に関しては、大きな変化は認められなかった。その理由のひとつとして、テストで与えられた時間が10分と短かったため、後半に出題した実験結果まで到達できなかったことが考えられる。つまり、要求されている情報が、論文のどの部分に記述されているのかおおよその場所はわかっている、制限時間内に読解し、適切な答えにたどり着くことはできなかったようである。今後のテストでは、解答を含む部分をマークさせるなど、その測定方法を工夫する必要があるだろう。

本実践では、論文や統計に関する用語は、簡単に説明したので、これが事後テストの語彙スコアの伸びにつながったと考えられる。しかし、不正確な記述（eg「信頼性」を「信用性」や「信頼度」と記述、「認知科学」を「認識科学」や「認知化学」と記述、「構成主義」を「構造主義」と記述）や、類似概念との混同（eg「independent valuable」と「dependent valuable」, 「citation」と「reference」）が多かったため、得点の伸びは予測よりも低かった。教育工学や言語習得・言語教育に関する用語は、授業では特に扱わなかったが、統計的に有意な差が認められた。事後テスト後に、教育工学でしばしば使用される scaffolding や ZDP（Zone of Proximal Development）、言語習得や言語教育の研究分野でしばしば使用される fossilization, dyslexia, Wernicke's area などは、別の専門科目の中で学習したとコメントしてくれた学生がいた。被験者は3年生であったため、「英語科教育法」や「英語教育研究」等の専門科目や、その他教職科目でこのような語彙に触れる機会があったそうである。

精読（英文和訳）に関しては、5問の合計点では統計的な有意差は認められたが、個々の問題に関しては大きな差は見られなかった。本コースの目的のひとつが、論文の大意を迅速に把握することであり、skimming や scanning など、top-down のリーディング方略に時間を割いたことが、ひとつの原因であろう。

この点に関しては、狩野・舟生（2009）が工学系の学生を対象として行った実験の結果と異なる。緻密な分析をしながら論理的に思考する工学系の学生たちは、精読に長けており、短時間の指導でこの部分の点数を確実に伸ばすことができた。それに対し、英語を専攻する学生たちは、主に Communicative Language Teaching で指導されてきており、背景知識を使って予測し、大意を把握することには慣れているが、文法知識を使って緻密な読み方をしていないため、誤った予測や解釈が多い。この部分の指導は今後の課題としたい。

以上のように、本実験に参加してもらった英語を専攻する学生の場合、scanning のスキルはあるので、論文の構造を把握させれば、必要な情報には簡単にたどり着くことができる。また、論文の構造を理解させれば、読み取るべき重要情報は把握できるので、大意にたどり着くこともできる。問題は、精読する力が十分にないため、特に実験結果に関して、解釈ができなかったり、誤った解釈をしたりする傾向が強いことである。今後の指導課題として、論文で重要となる研究の目的や、方法、結果を示す文を正確に解釈する練習をさせる必要が示唆された。

本研究は JSPS 科研費 21500901 の助成を受けて行ったものである。

引用文献

- Brundage, G. C. (2007). EFL foreign teacher stress in Korea: Causes and coping mechanisms. Retrieved from ERIC database. (ED502354)
- Hall, M. (2017). Scaffolding: Teach your students how to read a journal article. *John Hopkins University, the Innovative Instructor Blog*. Retrieved from <https://ii.library.jhu.edu/2017/02/28/scaffolding-teach-your-students-how-to-read-a-journal-article/>
- Hartley, J. (1999). From structured abstracts to structured articles: A modest proposal. *Journal of Technical Writing and Communication*, 29 (3), 255-270.
- Hijikata, Y., Nakatani, Y., & Shimizu, M. (2013). Japanese EFL students' processes for academic papers in English. *Journal of Education and Learning* 2 (1), 70-83.
- Hill, S. S., Soppelsa, B. F., & West, S. G. (1982). Teaching ESL students to read and write experimental-research papers. *TESOL Quarterly*, 16 (3), 333-347.
- Holzinger, A., Kickmeier-Rust, M., & Albert, D. (2008). Dynamic media in computer science education; content complexity and learning performance: Is less more? *Educational Technology & Society*, 11 (1), 279-290.
- Hoskins, S. G., Stevens, L. M., & Nehm, R. H. (2007). Selective use of the primary literature transforms the classroom into a virtual laboratory. *Gene-*

- tics, 176, 1381-1389.
- Huang, H., & Liou, H. (2007). Vocabulary learning in an automated graded reading program. *Language Learning & Technology*, 11 (3), 64-82.
- Ito, F. (2011). L2 Reading-writing correlation in Japanese EFL high school students. *The Language Teacher*, 35 (5), 23-29.
- 狩野紀子・舟生日出男. (2009). 教育学系の学生を対象とした英語論文読解の指導法の開発と実践. 拓殖大学語学研究 121, 71-89.
- Lai, D., & Kuo, M. (2007). *Gender difference in CALL programs for English as a second language acquisition*. Retrieved from ERIC database. (ED496190)
- Laubepin, F. (2013). How to read (and understand) a social science journal article. Inter-university for Political and Social Research. Retrieved from http://www.wsufamilies.com/uploads/2/5/6/9/25691386/how_to_read_a_journal_article.pdf
- Lenington, S. (1979). Effect of holy water on the growth of radish plants. *Psychological Reports*, 45, 381-382.
- Machida, N., & Dalsky, D. J. (2014). The effect of concept mapping on L2 writing performance: Examining possible effects of trait-level writing anxiety. *English Language Teaching*, 7 (9), 28-35.
- Navarro, A. M. (2008). *Building schema for English language learners*. Retrieved from ERIC database. (ED514335)
- Posteguillo, S. (1999). The schematic structure of computer science research articles. *English for Specific Purpose*, 21, 139-158.
- Puruggannan, M., & Hewitt, J. (2004). How to read a scientific article. Retrieved from http://www.owlnet.rice.edu/~cainproj/courses/HowTo_Read_SciArticle.pdf
- Sohail, S. (2015). Academic reading strategies used by Leeds Metropolitan University Graduates: A case study. *Journal of Educational Development*, 2 (2), 115-133.
- Swales, J. M. (1990). *Genre analysis*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- 田地野彰・水光雅則. (2005). 大学英語教育への提言. 竹蓋幸生・水光雅則編『これからの大学英語教育：CALLを活かした指導システムの構築』(pp1-46) 東京：岩波書店.
- Tanaka, H., & Stapleton, P. (2007). Increasing reading input in Japanese high

- school EFL classrooms: An empirical study exploring the efficacy of extensive reading. *The Reading Matrix*, 7 (1), 115-131.
- University of Texas. (2008). Exercise: How to read a scientific article. Retrieved from <https://blogs.lib.utexas.edu/utlis/2008/08/11/exercise-how-to-read-a-scientific-article/>
- Vivaldo-Lima, J. (1997). *Cognitive style and reading comprehension in L1 and L2*. Retrieved from Eric database. (ED438733)
- Yamashita, J. (2004). Reading attitudes in L1 and L2, and their influence on L2 extensive reading. *Reading in a foreign Language*, 16 (1), 1-19

（原稿受付 2018 年 11 月 27 日）

Appendix

Index Card

論文のタイトル Title	
著者 Author	
出版年 Publication Date	
ジャーナル名 Journal	
研究の目的 Purpose of study	
調査の方法 Methodology	被験者 / 回答者 Participants
	質問紙 Instrument
	データの収集・分析 Data collection & analysis
調査の結果 Result	
結論 Conclusion	

〈論文〉

NOMINALIZACIONES DE LAS COLOCACIONES COMPLEJAS VERBOADVERBIALES*

Kazumi KOIKE

RESUMEN

Se ha comprobado en el presente trabajo que, aunque no todas, un elevado número de las colocaciones complejas verboadverbiales formadas por un verbo y una locución adverbial toleran la nominalización (*disparar a bocajarro* > *disparo a bocajarro*, *luchar a brazo partido* > *lucha a brazo partido*), lo cual pone de manifiesto que estas colocaciones se comportan sintácticamente del mismo modo que las colocaciones simples verboadverbiales (*respirar entrecortadamente* > *respiración entrecortada*, *intentar infructuosamente* > *intento infructuoso*). El cambio de categoría gramatical que afecta a estas colocaciones es posible por cuanto la colocación, sea simple o compleja, es una combinación de dos unidades entre las que existe un vínculo semántico de dos lexemas.

PALABRAS CLAVE: colocaciones léxicas, colocaciones complejas, colocaciones verboadverbiales, nominalizaciones, locución adverbial

* Agradezco muy sinceramente al Prof. Mario García-Page Sánchez por la gentileza de leer el borrador del presente trabajo y de hacerme llegar sus valiosas sugerencias, aunque me pertenecen en exclusiva todos los errores e imprecisiones que pueda haber en él.

1 OBJETIVO

Como señalan algunos autores (Corpas Pastor 1996: 118; Ruiz Gurillo 1998: 27; Bosque 2001: 39), no pocas locuciones adverbiales están restringidas léxicamente a unos pocos verbos. También la *NGLE* (2941-2942: 39.6g) menciona esta restricción léxica mostrando una lista de locuciones adverbiales junto con verbos que pueden combinarse con ellas¹. Así, *a bocajarro* se usa, entre otros, con *arrojar*, *decir*, *disparar*, *espetar*, *lanzar*, *soltar*. De estas combinaciones formadas por un verbo y una locución adverbial algunas pueden nominalizarse manteniendo el mismo vínculo léxico. Me refiero a expresiones como *disparar a bocajarro*, *luchar a brazo partido* y *negociar a puerta cerrada*, que admiten las nominalizaciones: *disparo a bocajarro*, *lucha a brazo partido* y *negociación a puerta cerrada*, respectivamente.

El objetivo del presente trabajo es estudiar las características sintácticas y semánticas de las combinaciones formadas por un verbo y una locución adverbial, especialmente, las que puedan nominalizarse, como es el caso de *disparar a bocajarro* (1), que tiene su forma nominal (2):

(1) El asesino *disparó a bocajarro* (*DCPEC*, s. v. *a bocajarro*).

(2) *Un disparo a bocajarro* y lo mandó al otro barrio (*DCPEC*, s. v. *a bocajarro*).

2 LOCUCIONES ADVERBIALES

2.1 Número de locuciones adverbiales

Resulta difícil determinar el número exacto de locuciones

1 La *NGLE* (2009: 2941-2942: 39.6g) cita 66 locuciones adverbiales que están restringidas léxicamente, junto con los predicados a los que habitualmente modifican.

adverbiales del español, puesto que el estatus de una locución adverbial puede variar según el criterio que se adopte². El cómputo se hace aún más difícil si se tiene en cuenta la existencia de locuciones adverbiales que también funcionan como adjetivas y de locuciones adjetivas que pueden emplearse como adverbiales³.

Para tener una idea sobre el número de locuciones adverbiales he averiguado las entradas de tres diccionarios (el *DFDEA*, el *DLA* y el *DCPEC*). De estos diccionarios, el *DFDEA* recoge el mayor número de locuciones adverbiales (3310 entradas), seguido del *DLA* (1614 entradas) y, por último, el *DCPEC* (670 entradas).

Según las entradas registradas en el *DFDEA*, las locuciones adverbiales ocupan el segundo puesto en cuanto a su número, después de las verbales⁴.

2.2 ¿Locución adverbial o locución adjetiva?

Atendiendo a la función sintáctica que desempeñan, las locuciones adverbiales se dividen en dos grupos; las que funcionan únicamente con valor adverbial (*locuciones adverbiales genuinas*) y las que también funcionan como locuciones adjetivas (*locuciones bifuncionales*).

Como datos de referencia se muestra en la Tabla-1 el número de locuciones adverbiales recogidas en el *DFDEA*, el *DLA* y el *DCPEC*, junto con el de locuciones adjetivas, con las que existe un problema de límites.

-
- 2 García-Page (2008: 120) afirma que el inventario de las locuciones adverbiales «es prácticamente indeterminado, no sólo por el elevado número existente de las mismas (...), sino por la posibilidad de formar continuamente unidades a partir de ciertos moldes sintácticos fijos».
 - 3 Por ejemplo, la locución adjetiva *de oreja a oreja*, que suele combinarse con *sonrisa*, puede usarse como adverbial: «Levantó el rostro, sonrió de oreja a oreja y prosiguió» (*CREA*).
 - 4 La distribución cuantitativa de las entradas del *DFDEA* es la siguiente: 5027 entradas de locuciones verbales, 3310 de adverbiales, 1211 de nominales y 983 de adjetivas.

Tabla 1

	loc.adv.	loc.adv./loc.adj. (bifuncionales)	loc.adv. genuinas
<i>DFDEA</i>	3310	468 (=388+80)	2922
<i>DLA</i>	1614	152	1462
<i>DCPEC</i>	670	222	448

Según el *DFDEA*, 388 de las 3310 locuciones adverbiales también se usan como adjetivas, y 80 de las 983 locuciones adjetivas se emplean como adverbiales, por lo que un total de 468 locuciones pueden funcionar con valor adverbial y adjetivo⁵.

El *DLA* compilado por I. Penadés recoge 1614 locuciones adverbiales, de las cuales 152 están registradas como locuciones adjetivas en el *DLNAP* de la misma autora. Este último, por su parte, recoge 584 locuciones adjetivas que incluyen las 152 que funcionan como adverbiales⁶.

De las 670 locuciones adverbiales recogidas en el *DCPEC*, 222 pueden funcionar como locuciones adjetivas (*locuciones bifuncionales*). El resto (448 locuciones) son locuciones adverbiales genuinas⁷.

Como puede verse en la Tabla-1, hay más locuciones adverbiales genuinas que locuciones bifuncionales, aunque la catalogación que se da a cada locución es dispar entre los diccionarios consultados. Solo 21 locuciones son tratadas como bifuncionales en ellos⁸.

5 He clasificado como locuciones bifuncionales aquellas locuciones registradas como adverbiales que también funcionan como adjetivas y otras registradas como adjetivas que se usan como adverbiales.

6 Estas 152 locuciones están recogidas tanto en el *DLA* como en el *DLNAP*.

7 El *DCPEC* distingue las locuciones adverbiales genuinas (*como un guante*) de las locuciones bifuncionales (*de pies a cabeza*), y las adjetivas genuinas (*de poca monta*) de las bifuncionales.

8 Las 21 locuciones son las siguientes: *a carta cabal*, *a fondo*, *a fondo perdido*, *a juego*, *a medias*, *a muerte*, *a puerta cerrada*, *a todo riesgo*, *a traición*, *a ultranza*, *a vida o muerte*, *al completo*, *al por menor*, *de refilón*, *de soslayo*, *en*

El corpus con el que se trabaja en el presente estudio consiste en 574 locuciones bifuncionales recogidas del *DFDEA*, el *DLA* y el *DCPEC*⁹.

2.3 Polisemia

Aunque el número no es muy elevado, existen locuciones adverbiales polisémicas. Así, *a dedo* es una locución polisémica. Esta locución significa ‘en autoestop’ en *Viajé a dedo por todo el país* pero tiene otro significado (‘arbitrariamente’) en *nombrar/elegir (a alguien) a dedo*. Como locuciones polisémicas pueden citarse, entre otras, *a bocajarro* (‘desde muy cerca’, ‘de improviso’), *en persona* (‘uno mismo, sin delegar’ y ‘personificado’), *en seco* (‘fuera del agua’, ‘de repente’, etc.)¹⁰.

2.4 Estructura formal y semántica

La mayor parte de las locuciones adverbiales se compone de una sola unidad léxica y otro(s) signo(s) gramatical(es) (*a dedo*, *a destajo*, *a lo grande*) (García-Page 2008: 24)¹¹. Existen, no obstante, locuciones adverbiales que constan de más de una unidad léxica: *a cámara lenta*, *a capa y espada*, *a cara descubierta*, *a cuerpo de rey*, etc.

Cabe señalar que una locución adverbial, aunque consta de más de

blanco, *en común*, *en funciones*, *en persona*, *en profundidad*, *en seco*.

9 Esta cifra no es igual a la suma de los números que aparecen en la columna de locuciones bifuncionales de la Tabla-1. Como es de suponer, hay locuciones registradas en más de un diccionario y otras que solo aparecen en uno de los tres diccionarios.

10 El *DRAE* registra cinco acepciones para la locución *en seco*.

11 El autor afirma que los términos *polilexicalidad* o *pluriverbalidad*, «aunque resultan esclarecedores e ilustrativos, pueden no ser del todo acertados cuando se intentan describir ciertas estructuras. Así, por un lado, respecto del primer término, numerosas locuciones se componen de una sola unidad léxica, de un solo lexema, aunque concurren otros signos gramaticales (*a lo mejor*, *a horcajadas*)...».

una unidad léxica, posee un significado léxico al igual que un adverbio. Así, *a bote pronto* en *contestar a bote pronto* posee un significado parecido al de su sinónimo adverbial *improvisadamente*.

Algunas locuciones adverbiales que imponen restricciones léxicas al verbo al que modifican tienen adverbios sinónimos que se colocan con el mismo verbo, conformando dos colocaciones verboadverbiales; una simple y otra compleja. Es el caso de los pares *llover a cántaros* - *llover copiosamente*, *cerrar a cal y canto* - *cerrar herméticamente* y *entrar de golpe y porrazo* - *entrar bruscamente*. La existencia de adverbios sinónimos explica que las locuciones adverbiales tienen un significado equivalente al de un adverbio.

2.5 Restricciones léxicas

Al igual que un gran número de adverbios de manera están restringidos léxicamente, no pocas locuciones adverbiales de manera presentan restricciones léxicas con respecto al predicado al que modifican (NGLE 2941-2942: 39.6g).

Aunque no todas, existen locuciones adverbiales que presentan restricciones léxicas con respecto al verbo al que se aplican. El grado de restricción léxica es variable según cada locución. Las hay que solo se combinan con muy pocos vocablos y otras que presentan una mayor combinatoria léxica. Por ejemplo, *a fuego lento*, locución con mayor restricción léxica, se coloca con verbos como *calentar*, *cocer*, *cocinar*, *hervir*, *tostar*, *sofreír*, *rehogar*, *freír*, *saltear*, etc. En el caso de *de sol a sol*, su combinatoria léxica es aún más limitada¹², mientras que la locución *a favor* presenta menor restricción léxica al poder combinarse con un elevado número de verbos y sustantivos.

12 En 63 de los 90 casos (el 70 %) registrados en el CREA esta locución modifica al verbo *trabajar* o el sustantivo *trabajo*.

2.6 Dos tipos de colocaciones complejas

Las locuciones adverbiales forman dos clases de colocaciones complejas (Koike 2001: 58-60). La primera consiste en la combinación de una locución adverbial con un verbo, del tipo *reírse a mandíbula batiente* y la segunda en la combinación de una locución adverbial con un adjetivo, como *loco de remate*. Denominamos *colocación compleja verboadverbial* a la primera combinación, y *colocación compleja adjetivoadverbial* a la segunda.

Las colocaciones complejas verboadverbiales, funcionalmente correspondientes a las colocaciones simples verboadverbiales, representan un grupo numeroso dentro de las colocaciones complejas (Koike 2005: 174-175)¹³.

En cuanto a la clase de verbos, tanto los verbos transitivos como los intransitivos y pronominales conforman este tipo de colocaciones: *abrir* (la puerta) *de par en par*, *luchar a brazo partido* y *reírse a carcajadas*.

3 NOMINALIZACIONES

Al analizar las unidades léxicas combinables con locuciones adverbiales, se observan dos tendencias que llaman la atención. La primera es que muchas locuciones adverbiales pueden colocarse con un verbo y con el sustantivo derivado de él, como es el caso citado de *a bocajarro* que se combina con *disparar* (verbo) y *disparo* (nombre). Al igual que sucede con otros sintagmas verbales (*ampliar la foto* > *la ampliación de la foto*), la nominalización es posible en este tipo de colocación. La segunda consiste en que se forma una colocación concatenada en torno a una locución adverbial, como es el caso de *a cuerpo de rey*, locución empleada en *pasar una semana a cuerpo de rey*.

13 En cuanto a la tipología de las colocaciones complejas, véanse Koike (2001: 55-60 y 2005: 171).

En el presente capítulo trato de describir las características de las nominalizaciones que afectan a las colocaciones complejas verboadverbiales.

Según la *NGLE* (793: 12.1ñ), los sustantivos derivados de verbos o adjetivos se denominan habitualmente nominalizaciones. Estos sustantivos «se caracterizan por que pueden manifestar sintácticamente, con ciertas restricciones, varios argumentos y adjuntos que corresponden a sus bases léxicas» (*NGLE*, 863: 12.11a)¹⁴. La colocación compleja *reunirse a puerta cerrada* en (3a) puede nominalizarse manteniendo sus argumentos, como puede verse en (3b). Lo mismo sucede con *nombrar a dedo* en (4a), colocación compleja verboadverbial que se nominaliza en (4b):

- (3a) Los parlamentarios del PSOE se reunieron a puerta cerrada para analizar... (*CREA*)
- (3b) *la reunión a puerta cerrada de los parlamentarios del PSOE* para analizar...
- (4a) Herminio Trigo (...) *nombró a dedo a una persona* para el desempeño de un cargo público a espaldas de lo estipulado en la ley (*CREA*).
- (4b) *el nombramiento a dedo de una persona* para el desempeño de un cargo público (...)

A continuación se analizan las características de las colocaciones complejas verboadverbiales que pueden nominalizarse:

3.1 El tipo de locución adverbial

El tipo de locución adverbial es un factor que decide la posibilidad de nominalizar una colocación compleja verboadverbial. Las colocaciones complejas son nominalizables cuando la locución es bifuncional. Si la

14 Existen varios trabajos sobre las nominalizaciones en la bibliografía española. Véanse, entre otros, Fábregas (2016), Monjour (2001) y Picallo (1999).

locución no puede combinarse con el sustantivo derivado del verbo componente de una colocación compleja, no se produce su nominalización. Así, la locución *a puerta cerrada* es compatible con el verbo *reunir(se)* y con su derivado nominal *reunión*, por lo que es posible nominalizar la colocación compleja *reunirse a puerta cerrada* (> *la reunión a puerta cerrada*):

- (5) El inspector de la Fuerza Armada Nacional (...) sostuvo una reunión a puerta cerrada durante toda la mañana de ayer (...) (CREA).

Según el DCPEC, la locución *a puerta cerrada* puede colocarse, entre otros, con los siguientes pares de verbo y nombre:

reunir(se)/reunión, discutir/discusión, debatir/debate, negociar/negociación, deliberar/deliberación, declarar/declaración, testificar/testimonio, comparecer/comparecencia, intervenir/intervención, entrenar/entrenamiento, decidir/decisión, resolver/resolución, votar/votación, examinar/examen

De las 222 locuciones bifuncionales que están registradas en el DCPEC, se ha comprobado que al menos 116 locuciones (que se presentan abajo) pueden colocarse con el verbo y su derivado nominal¹⁵:

a bocajarro, a bote pronto, a brazo partido, a cámara lenta, a capa y espada, a cara descubierta, a cara o cruz, a cobro revertido, a comisión, a

15 La comprobación se ha realizado al revisar los verbos y sustantivos compatibles con cada una de las locuciones. En el Apéndice se presenta la lista de verbos y sustantivos que se combinan con estas locuciones adverbiales. Algunas locuciones bifuncionales que no modifican a un verbo, sino a un adjetivo o un sustantivo (p. ej., *a carta cabal, como una catedral*) no conforman colocaciones complejas verboadverbiales, por lo que quedan excluidas del análisis del presente trabajo.

corazón abierto, a crédito, a dedo, a destajo, a discreción, a domicilio, a escote, a favor, a flor de piel, a fondo, a fondo perdido, a fuego lento, a golpes, a la baja, a la defensiva, a la desesperada, a la moda, al detalle, a lo grande, al pie de la letra, a machamartillo, a mano alzada, a mano armada, a media voz, a medio gas, a muerte, a ojo, a partes iguales, a pasos agigantados, a pie de página, a plazo fijo, a plazos, a puerta cerrada, a punta de [navaja/pistola], a rajatabla, a sangre fría, a tientas, a tiros, a toda costa, a toda máquina, a toda plana, a todo color, a todo pulmón, a traición, a ultranza, a vida o muerte, a voces, bajo fianza, bajo juramento, cara a cara, con alevosía, con cajas destempladas, con reservas, contra reembolso, cuerpo a cuerpo, de carrerilla, de cuerpo entero, de domingo, de igual a igual, de incógnito, de [mi/tu/su...] puño y letra, de palabra y obra, de plano, de por vida, de refilón, de salón, de sol a sol, de soslayo, de (todo) corazón, de tú a tú, de urgencia, en abierto, en batería, en cadena, en diferido, en directo, en especie, en estéreo, en exclusiva, en firme, en funciones, en masa, en metálico, en profundidad, en seco, en serie, en son de paz, entre líneas, en vivo, en zigzag, frente a frente, mano a mano, por correo, por cuenta [ajena/propia], por los pelos, por teléfono, punto por punto, sin ambages, sin condiciones, sin éxito, sin fianza, sin (ningún) fundamento, sin paliativos, sin remisión, sin reservas, sin tapujos, sin tregua

Las colocaciones complejas formadas por alguna de las locuciones adverbiales que figuran en esta lista son nominalizables. Así, la locución *a la baja* está presente en las nominalizaciones de *revisar a la baja* y *tender a la baja* como puede apreciarse en (6) y (7):

- (6) Industria *revisa a la baja* la demanda de energía y la inversión prevista en el PEN (CREA). > *la revisión a la baja* de la demanda de energía y la inversión prevista en el PEN
- (7) Se redujo la inflación, las tasas de interés *tienden a la baja* y (...) (CREA). > *la tendencia a la baja* de las tasas de interés

3.2 *Verbos nominalizables*

No todos los verbos compatibles con una locución bifuncional pueden nominalizarse. Hay verbos que se nominalizan y otros que no lo hacen. Así, la locución *a fuego lento* puede combinarse con verbos como *arder, calentar, cocer, cocinar, hervir, quemar, tostar*, mientras que su combinación con sustantivos es limitada; según los datos del *CREA*, solo se combina con *cocción*.

3.3 *Diferencia en las nominalizaciones entre las colocaciones simples y las complejas*

Koike (2001: 143-144) ha llamado la atención sobre algunos casos de nominalización de colocaciones simples verboadverbiales (*llover torrencialmente* > *lluvia torrencial*, *vigilar estrechamente* > *vigilancia estrecha*, *luchar encarnizadamente* > *lucha encarnizada*, etc.). Al igual que en las colocaciones simples, un elevado número de complejas verboadverbiales pueden nominalizarse, pero con alguna diferencia formal.

En caso de nominalizar la colocación verboadverbial (p. ej., *intervenir quirúrgicamente*), el verbo se convierte en sustantivo y el adverbio, en adjetivo (*intervención quirúrgica*), mientras que en la nominalización de la colocación compleja formada por un verbo y una locución adverbial, esta no sufre un cambio formal. En (8) y (9) se ilustran la nominalización de una colocación simple (*luchar encarnizadamente* > *lucha encarnizada*) y la de una colocación compleja (*luchar a brazo partido* > *lucha a brazo partido*):

- (8) (...) tribu de los lusones celtibéricos que *lucharon encarnizadamente* con los dominadores romanos (*CREA*). > *la lucha encarnizada* con los dominadores romanos
- (9) El presidente del gobierno español, José Luis Rodríguez Zapatero, pidió el sábado a sus homólogos del istmo, “*luchar a*

*brazo partido contra la corrupción" (...) (CREA) > la lucha a
brazo partido contra la corrupción*

3.4 La presencia implícita de un verbo de apoyo

La razón por la que una locución adverbial no sufre un cambio formal en la nominalización de las colocaciones complejas verboadverbiales sería la presencia implícita de un verbo de apoyo. Por ejemplo, en la nominalización de *reunirse a puerta cerrada* existe un verbo de apoyo (*sostener* o *mantener*). Véase el esquema siguiente que muestra el posible proceso de dicha nominalización:

*reunirse a puerta cerrada > mantener una reunión a puerta cerrada >
una reunión mantenida a puerta cerrada > una reunión a puerta
cerrada*

Lo mismo sucede con la nominalización de la mayor parte de las colocaciones complejas verboadverbiales siempre y cuando el sustantivo derivado del verbo integrante de la colocación tenga un verbo de apoyo. En el proceso de nominalización de *subvencionar a fondo perdido*, existe un vínculo de *conceder* con *subvenciones*, y otro de *subvenciones* con *a fondo perdido*. Obsérvese el posible proceso de la nominalización de *subvencionar a fondo perdido* en (10a)-(10d):

- (10a) El Ayuntamiento *subvencionará a fondo perdido* la rehabilitación de viviendas.
- (10b) El Ayuntamiento *concederá subvenciones a fondo perdido* para la rehabilitación de viviendas.
- (10c) Las *subvenciones* que *serán concedidas a fondo perdido* para la rehabilitación de viviendas.
- (10d) las *subvenciones a fondo perdido* para la rehabilitación de viviendas

4 CONCLUSIÓN

Dado que la colocación, sea simple o compleja, es una combinación de dos unidades entre las que existe un vínculo semántico de dos lexemas, es posible el cambio de categoría gramatical que afecta a ella (Hausmann 1979: 191, n.9; Koike 2001: 28, 141-146). Las nominalizaciones de las colocaciones complejas verboadverbiales son una prueba de ello. La posibilidad combinatoria de la locución *a ultranza* no solo con *proteger* y *protección* sino también con *proteccionismo* apoya dicha afirmación.

El vínculo de dos lexemas se observa en varios tipos de colocaciones. La colocación simple verboadverbial *mirar fijamente* se convierte en una verbonominal (*mirada fija*), la cual, a su vez, conforma una concatenada mediante el verbo *mantener* (*mantener la mirada fija*)¹⁶:

- (11) Las mujeres *mantenían la mirada fija* en Mercedes¹⁷.

Cuando el verbo tiene su forma analítica y el adverbio deriva de un adjetivo, puede darse este tipo de correspondencia léxica. Lo mismo sucede con una colocación compleja verboadverbial. Así, *mirar de soslayo* puede transformarse en una colocación compleja sustantivoadjetival (*mirada de soslayo*), la cual, a su vez, se concatena con *lanzar* (*lanzar una mirada de soslayo*):

- (12) Cada veinte segundos nos *lanzaba una mirada de soslayo* (CREA).

16 Un caso peculiar del cambio de categoría gramatical es el que se observa en *salir airosamente* (*de*) (colocación verboadverbial), *salir airoso* (*de*) (colocación verboadjetiva), *salida airosa* (*de*) (colocación verbonominal o la forma nominalizada de las dos primeras colocaciones) (Koike 2015: 82).

17 La frase original recogida en el CREA es *Las mujeres que mantenían la mirada fija en Mercedes bajan la vista*.

Las colocaciones complejas verboadverbiales constituyen un grupo representativo dentro de las colocaciones complejas del español. Se ha comprobado en las páginas anteriores que, aunque no todas, un elevado número de este tipo de colocaciones toleran la nominalización, lo cual pone de manifiesto que estas colocaciones se comportan sintácticamente del mismo modo que las colocaciones simples verboadverbiales (*respirar entrecortadamente* > *respiración entrecortada*, *intentar infructuosamente* > *intento infructuoso*, *analizar pormenorizadamente los datos* > *el análisis pormenorizado de los datos*). Las nominalizaciones son un fenómeno sintáctico que se debe a la flexibilidad formal que caracteriza a la colocación¹⁸.

Por último, cabe señalar que las unidades léxicas integrantes de una colocación no siempre aparecen juntas en el texto. Por ejemplo, el vínculo entre los lexemas de *reunirse* y *a puerta cerrada* legitima las colocaciones *reunirse a puerta cerrada* (colocación verboadverbial) y *reunión a puerta cerrada* (colocación sustantivoadjetival). Es precisamente este vínculo léxico el que facilita la lectura de una colocación aun cuando aparezcan distanciados sus componentes léxicos en el texto. En los ejemplos siguientes, *reunirse*, *reunión* y *a puerta cerrada* que mantienen un vínculo léxico estrecho aparecen separados, pero no por ello dejan de ser colocaciones.

- (13) El Gobierno de México, país anfitrión del encuentro nicaragüense-estadounidense, reconoce un especial significado a esta *reunión* por la paz en Centroamérica, que se desarrolla *a puerta cerrada* en el puerto de Manzanillo, al este del país (CREA).

18 En Koike (2001: 31-33) he señalado que «la colocación presenta mayor flexibilidad formal que la locución», por lo que la colocación permite transformaciones sintácticas como la nominalización, la modificación, la transformación a pasiva, etc.

- (14) La *reunión*, de carácter informal, se celebró *a puerta cerrada* y (...) (CREA).
- (15) (...) los responsables del grupo parlamentario centrista, que habían aconsejado al señor Oreja que *la reunión* no fuera *a puerta cerrada* (CREA).

APÉNDICE

Lista de verbos y sustantivos combinables con locuciones adverbiales

a bocajarro	disparar/disparo, lanzar/lanzamiento, tirar/tiro, rematar/remate, preguntar/pregunta
a bote pronto	contestar/contestación
a brazo partido	luchar/lucha, pelear/pelea, combatir/combate, competir/competición
a cámara lenta	rodar/rodaje, filmar/filmación, entrar/entrada, pasar/paso
a capa y espada	defender/defensa
a cara descubierta	atracar/atraco
a cara o cruz	apostar/apuesta
a cobro revertido	llamar/llamada
a comisión	vender/vendedor,-a
a corazón abierto	operar/operación
a corazón abierto	intervenir/intervención
a crédito	comprar/compra, adquirir/adquisición, vender/venta, suministrar/suministro, pagar/pago
a dedo	nombrar/nombramiento, designar/designación, contratar/contratación/contrato, fichar/fichaje, elegir/elección, seleccionar/selección, adjudicar/adjudicación, conceder/concesión, nominar/nominación
a destajo	trabajar/trabajo, faenar/faena, vender/venta, luchar/lucha, asesinar/asesinato

a discreción	disparar/disparo
a domicilio	ganar, vencer/victoria, triunfo, derrotar/derrota, empatar/empate, golear/goleada
a domicilio	vender/venta/vendedor,-a, entregar/entrega, repartir/reparto, repartidor,-a, enviar/envío, distribuir/distribución, trabajar/trabajo, servir/servicio, atender/atención
a escote	pagar/pago, repartir/reparto
a favor	votar/voto/votación, fallar/fallo, argumentar/argumento, argumentación, resolver/resolución, intervenir/intervención, posicionarse/posición, decidir/decisión, dictaminar/dictamen, declararse/declaración, manifestarse/manifestación, luchar/lucha
a flor de piel	sentir/sentimiento
a fondo	discutir/discusión, debatir/debate, limpiar/limpieza, transformar/transformación, combatir/combate, reestructurar/reestructuración, reformar/reforma, reorganizar/reorganización
a fondo perdido	financiar/financiación, invertir/inversión, subvencionar/subvención, aportar/aportación
a fuego lento	cocer/cocción
a golpes	asesinar/asesinato
a la baja	cerrar/cierre, cotizar/cotización, abrir/apertura, jugar/juego, tender/tendencia, evolucionar/evolución, moverse/movimiento, deslizarse/deslizamiento, orientarse/orientación, caer/caída, presionar/presión, negociar/negociación, revisar/revisión, retocar/retoque, modificar/modificación, mover/movimiento, ajustar/ajuste, corregir/corrección, calcular/cálculo, estimar/estimación
a la defensiva	pelear/pelea, jugar/juego, jugador,-a
a la desesperada	salir/salida, huir/huida, intentar/intento, buscar/búsqueda

a la moda	vestir/vestido
al detalle	vender/venta, vendedor,-a, comprar/compra
a lo grande	celebrar/celebración, festejar/fiesta, vivir/vida, triunfar/triunfo, debutar/debut, despedir/despedida
al pie de la letra	leer/lectura, interpretar/interpretación
a machamartillo	defender/defensa, crear/creencia
a mano alzada	votar/votación
a mano armada	luchar/lucha, enfrentarse/enfrentamiento, atracar/atraco, atracador,-a, robar/robo, asaltar/asalto, asaltante
a media voz	comentar/comentario
a medio gas	jugar/jugador, -a
a muerte	luchar/lucha, luchador,-a, enfrentarse/enfrentamiento, discutir/discusión, defender/defensa
a ojo	calcular/cálculo, medir/medida, estimar/estimación
a partes iguales	dividir/división, repartir/reparto, distribuir/distribución, aportar/aportación, financiar/financiación, pagar/pago, mezclar/mezcla
a pasos agigantados	avanzar/avance, mejorar/mejora, crecer/crecimiento
a pie de página	citar/cita
a plazo fijo	depositar/dépósito, ingresar/ingreso, retirar/retirada
a plazos	comprar/compra, pagar/pago, financiar/financiación, adquirir/adquisición, vender/venta
a puerta cerrada	reunir(se)/reunión, discutir/discusión, debatir/debate, negociar/negociación, deliberar/deliberación, declarar/declaración, testificar/testimonio, comparecer/comparecencia, intervenir/intervención, entrenar/entrenamiento, decidir/decisión, resolver/resolución, votar/votación, examinar/examen
a punta de {navaja/pistola}	robar/robo, atracar/atraco, asaltar/asalto, secuestrar/secuestro, agredir/agresión

a rajatabla	cumplir/cumplimiento, seguir/seguimiento, mantener/mantenimiento, aplicar/aplicación
a sangre fría	asesinar/asesinato, matar/matanza, muerte, homicidio, magnicidio, ejecutar/ejecución
a tientas	buscar/búsqueda
a tiros	asaltar/asalto, secuestrar/secuestro, robar/robo
a toda costa	desear, querer/deseo, mantener/mantenimiento, resistir/resistencia, proteger/protección, salvaguardar/salvaguarda
a toda máquina	salir/salida
a toda plana	anunciar/anuncio
a todo color	ilustrar/ilustración, dibujar/dibujo
a todo pulmón	gritar/grito
a traición	atacar/ataque, disparar/disparo
a ultranza	defender/defensa, defensor,-a, mantener/mantenimiento, proteger/protección, proteccionismo, resistir/resistencia, negar/negativa
a vida o muerte	combatir/combate, luchar/lucha, pelear/pelea, batallar/batalla
a vida o muerte	operar/operación
a voces	preguntar/pregunta, gritar/grito, pedir/petición
bajo fianza	dejar libre, poner en libertad, liberar/libertad
bajo juramento	declarar/declaración
cara a cara	encontrarse/encuentro, reunir(se)/reunión, negociar/negociación, debatir/debate, conversar/conversación, dialogar/diálogo, interrogar/interrogatorio
con alevosía	matar/muerte, atacar/ataque, asesinar/asesinato, homicidio, parricidio
con cajas destempladas	expulsar/expulsión

con reservas	apoyar/apoyo, aprobar/aprobación
contra reembolso	comprar/compra, pagar/pago, enviar/envío
cuerpo a cuerpo	luchar/lucha, pelear/pelea, combatir, realizar un combate/combate, enfrentarse/enfrentamiento, batallar/batalla
de carrerilla	leer/lectura, declamar/declamación
de cuerpo entero	fotografiar/fotografía, retratar/retrato
de domingo	vestir/vestido
de igual a igual	tratar/trato, luchar/lucha, competir/competencia, enfrentar(se)/enfrentamiento, conversar/conversación, discutir/discusión, dialogar/diálogo, negociar/negociación, pactar/pacto, cooperar/cooperación, colaboración
de incógnito	viajar/viaje, visitar/visita, salir/salida
de {mi/tu/su...} puño y letra	anotar/anotación
de palabra y obra	agredir/agresión, maltratar/maltrato
de plano	rechazar/rechazo, oponerse/oposición
de por vida	emplear/empleo, trabajar/trabajo, condenar/condena
de refilón	mirar/mirada
de salón	torear/toreo
de sol a sol	trabajar/trabajo
de soslayo	mirar/mirada, ver/vistazo, ojeada
de (todo) corazón	agradecer, dar las gracias/gracias, apoyar/apoyo
de tú a tú	dialogar/diálogo, luchar/lucha, negociar/negociación
de urgencia	atender/atención
en abierto	televisar/televisión, retransmitir /retransmisión, emitir/emisión
en batería	aparcar/aparcamiento, estacionar/estacionamiento

en cadena	colisionar/colisión, chocar/choque, fabricar/fabricación, producir/producción, trabajar/trabajo, cerrar/cierre
en diferido	emitir/emisión, retransmitir/retransmisión
en directo	emitir/emisión, retransmitir/retransmisión
en especie	pagar/pago, retribuir/retribución, cobrar/cobro
en estéreo	emitir/emisión, grabar/grabación
en exclusiva	contratar/contrato, distribuir/distribución, vender/venta, suministrar/suministro, explotar/explotación, controlar/control
en firme	condenar/condena, rechazar/rechazo, acusar/acusación, oponerse/oposición, comprometer(se)/compromiso, contratar/contrato, acordar/acuerdo, apostar/apuesta, decidir/decisión, sentenciar/sentencia, resolver/resolución, proponer/propuesta, ofertar/oferta, pedir/petición, pedido
en funciones	gobernar/gobierno
en masa	movilizarse/movilización, asesinar/asesinato, asesino,na, ejecutar/ejecución, matar/matanza, violar/violación, exterminar/exterminio, fusilar/fusilamiento, despedir/despido, deportar/deportación, expulsar/expulsión, abandonar/abandono, dimitir/dimisión, escaparse/escapada, huir/huida, fugarse/fuga, llegar/llegada
en metálico	pagar/pago, abonar/abono, ingresar/ingreso
en profundidad	investigar/investigación, estudiar/estudio, analizar/análisis, explorar/exploración, revisar/revisión, dialogar/diálogo, debatir/debate, discutir/discusión, criticar/crítica, cambiar/cambio, limpiar/limpieza
en seco	lavar/lavado, cepillar/cepillado, afeitarse/afeitado
en seco	frenar/frenazo, frenada, parar(se)/parada, parón
en serie	fabricar/fabricación, producir/producción, trabajar/trabajo, montar/montaje, reproducir/reproducción, repetir/repetición, copiar/copia

en son de paz	visitar/visita
entre líneas	leer/lectura
en vivo	grabar/grabación, presenciar/presencia
en zigzag	mover(se)/movimiento
frente a frente	pelear/pelea
mano a mano	entrevistar/entrevista, conversar/conversación, discutir/discusión, debatir/debate, enfrentar(se)/enfrentamiento, luchar/lucha, negociar/negociación, almorzar/almuerzo
por correo	votar/voto
por cuenta {ajena/ propia}	trabajar/trabajador, trabajo
por los pelos	aprobar/aprobado, aprobación
por teléfono	conversar/conversación, consultar/consulta, pedir/petición, pedido, suscribirse/suscripción
punto por punto	ratificar/ratificación, corroborar/corroboração, repetir/repetición, reproducir/reproducción, refutar/refutación, desmentir/desmentido, replicar/réplica, resumir/resumen, negociar/negociación, pactar/pacto
sin ambages	declarar/declaración, expresar/expresión, defender/defensa, apoyar/apoyo, apostar/apuesta, criticar/crítica, definir/definición
sin condiciones	aceptar/aceptación, rendirse/rendición, entregar(se)/entrega, apoyar/apoyo, respaldo
sin éxito	intentar/intento, buscar/búsqueda, perseguir/persecución, pesquisa, investigar/investigación, registrar/registro
sin fianza	encarcelar/excarcelación, poner en libertad, liberar/libertad
sin (ningún) fundamento	afirmar/afirmación, criticar/crítica, acusar/acusación

sin paliativos	condenar/condena, descalificar/descalificación, criticar/critica, rechazar/rechazo, censurar/censura, apoyar/apoyo, triunfar/triunfo, fracasar/fracaso
sin remisión	fracasar/fracaso, castigar/castigo, condenar/condena, apoyar/apoyo
sin reservas	admirar/admiración, reconocer/reconocimiento, respaldar/respaldo, elogiar/elogio, apostar/apuesta, acatar/acatamiento, aceptar/aceptación, afirmar/afirmación, entregarse/entrega, dedicar/dedicación
sin tapujos	dialogar/diálogo, conversar/conversación, reconocer/reconocimiento, aceptar/aceptación
sin tregua	luchar/lucha, combatir/combate, disputar/disputa, guerrear/guerra, trabajar/trabajo

BIBLIOGRAFÍA

- Bosque, I. (2001): «Bases para un diccionario de restricciones léxicas», *Moenia*, 7, 11-52.
- Bosque, I. (dir.) (2004): *REDES, Diccionario combinatorio del español contemporáneo*, Madrid: Ediciones SM.
- Bosque, I. (dir.) (2006): *Diccionario combinatorio práctico del español contemporáneo*, Madrid: Ediciones SM.
- Corpas Pastor, G. (1996): *Manual de fraseología española*, Madrid: Gredos.
- Fábregas, A. (2016): *Las nominalizaciones*, Madrid: Visor.
- García-Page, M. (2008): *Introducción a la fraseología española. Estudio de las locuciones*, Barcelona: Anthropos.
- Hausmann, F. J. (1979): «Un dictionnaire des collocations est-il possible?», *TraLiLi*, 17/1, 187-195.
- Koike, K. (2001): *Colocaciones léxicas en el español actual: estudio formal y léxico-semántico*, Alcalá de Henares / Tokio: Universidad de Alcalá/Takushoku University.
- Koike, K. (2005): «Colocaciones complejas en el español actual», R. Almela, E. Ramón Trives y G. Wotjak (eds.), *Fraseología contrastiva con ejemplos tomados del alemán, español, francés e italiano*, Murcia: Univ. de Murcia, 169-184.
- Koike, K. (2015): «Reflexiones sobre las colocaciones verboadjetivales», *Takushoku Language Studies*, 133, págs. 61-85.

- Monjour, A. (2001): «La valencia nominal en español. Observaciones y sugerencias», F. Sánchez Miret (ed.), *Actas del XXIII Congreso Internacional de Lingüística y Filología* (Salamanca 2001), *Sintaxis, semántica y pragmática*, II/1, 89-101, Tübingen: Niemeyer.
- Picallo, M.^a C. (1999): «La estructura del sintagma nominal: las nominalizaciones y otros sustantivos con complementos argumentales», I. Bosque y V. Demonte (eds.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, 363-393, Madrid: Espasa-Calpe.
- RAE y ASALE (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Libros.
- Ruiz Gurillo, L. (1998): *La fraseología del español coloquial*, Madrid: Ariel.

SIGLAS UTILIZADAS

- CREA = RAE: Banco de datos (CREA) [en línea]. *Corpus de Referencia del español actual* <<http://corpus.rae.es>> [2017-2018]
- DCPEC = Bosque, I. (2006): *Diccionario combinatorio práctico del español contemporáneo*, Madrid: Ediciones SM.
- DFDEA = Seco, M., Olimpia, A. y Ramos, G. (2005): *Diccionario fraseológico documentado del español actual*, Madrid: Aguilar.
- DLA = Penadés Martínez, I. (2005): *Diccionario de locuciones adverbiales para la enseñanza del español*, Madrid: Arco/Libros.
- DLNAP = Penadés Martínez, I. (2008): *Diccionario de locuciones nominales, adjetivas y pronominales para la enseñanza del español*, Madrid: Arco/Libros.
- DRAE = RAE (2014), *Diccionario de la lengua española*, Madrid: Espasa.
- NGLE = RAE y ASALE (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa Libros.

〈論文〉

中国語語順体系に貫かれた 構成原則に関して

—— 基本語順 SVO を骨子とした肉付けに主眼を置いて ——

平 山 邦 彦

要 旨

言語体系の把握において文法の整理は必須事項である。「言語体系の理解の為の文法整理」という場合、大枠を保ちつつも使用者の用途によって幾分調整が必要と考えられる。本稿では、主に「中国語の語順体系を単純な形から複雑な形へと明確な形で体系化を行う」という点を主眼に置き、「日本人学習者に適合する形に加工して」という点を加味して論じた。具体的には、構造的肉付けという部分に焦点を当て、次の内容を示していった。(1)中国語の基本語順が、動作者を主語としたSVOである点。(2)中国語の肉付け関係が主述フレーズを基礎とした各種肉付けの関係にある点。(3)語気助詞はSVO外部から肉付けを施された形式であり、連用修飾フレーズはVOに対し様々な形で外部からの肉付けの施された形式である点。

キーワード：基本語順；SVO；主述フレーズ；主語；肉付け

1. はじめに

中国語は形態変化を持たない孤立語であり、語順が特に大きな役割を果たすことは今更強調するまでもない。日本語の文と比較しても、随所に垣間見ることができる。

- (1) a. 我吃面包。
b. 私はパンを食べます
- (2) a. 他们听音乐。
b. 彼らは音楽を聴きます。

上掲の例において、日本語では統語構造において「私」と「パン」、「彼等」と「音楽」の動作者と受動者の意味役割を読み取るには、語順以外にも「-は」「-を」という助詞が手掛かりとなる。一方、中国語には相応の成分が存在しない為相対的に語順にかかる比重が大きいことが見て取れる⁽¹⁾。当然、外国語話者が中国語を的確に把握していく上で語順体系の理解は必須事項である。本稿では「日本人話者にとって有益な中国語語順の整理」という点を加味して議論する。

他言語との比較から中国語の特徴を捉える研究は昨今言語類型論等のアプローチが盛んなこともあり、少なからず確認できる。この点は、語順的枠組みという意味でも例外ではない(陆丙甫 2005; 2008a; 2008b)。但しこれらの枠組みはあくまで言語的普遍性という大原則のもとに中国語という個別言語を見つめるという大局的観点の主とする。日本語話者の立場から中国語を見つめ整理するという点を主眼に置く場合、必ずしも目的に合致するとは限らない。中国語文法研究で確立された成果や理論体系を日本人に合わせた枠組として加工し提示するのも有用な一面と思われる。

その主要作業の一環として、単純な文から複雑な文への発展関係を明快な記述という部分が挙げられるのではないだろうか。中国語の語順の重要性に関しては、文法書等でも強調されることである。ただし、先に挙げた

(1) 但し、他の言語においては語順が重要でないと述べているわけではない。例えば形態変化が豊富な欧米言語においても語順の重要性を主張するものも見られる。陆丙甫、罗彬彬 (2018) において欧米言語における統語構造の分析も、語順が優先的な要素として左右し形態変化はあくまで補助的なものと指摘している。

単純な語順から複雑な語順への一本の筋の通った解説を見かけた印象に乏しい⁽²⁾。その大きな要因として、骨子となる基本語順に対して、如何なるプロセスから発展関係がなされたのか、詳細な分析と整理及び記述のなされていない点が一つの原因のようにも感じられる。もしも同一平面状からのみ記述しようとするれば無理の生じることは推測に難くない。逆にこれからの棲み分けをしっかりと行った上で分析を施せば、より合理的な解釈が可能になることが期待される。その主要なプロセスについて、筆者としては主要な次の3段階が主要素になると考えている。

（プロセス1） 単純な文から複雑な文への構造的な発展関係を如何に説明するか。

（プロセス2） 単純な文から複雑な文への意味的な発展関係を如何に説明するか。

（プロセス3） 一見すると（1）（2）のルールから例外と思われる事象に対する合理的説明を如何に説明する。

紙幅の都合上、本稿では、主に（1）の点に絞って基本語順の設定と発展関係の一部分に焦点を当てて論を進めていく⁽³⁾。

2. 基本語順と肉付け関係

本章では、第1章で提起した観点を受け次の2点を論証の基本点として

-
- （2） 3.2でも指摘しているが、他の主要要因として、中国語文法研究の主眼が欧米の文法観から脱却し中国語独自の文法体系の確立に置かれている点も挙げられる。その観点から出発する場合、本稿で主眼とするSVOを軸とした語順体系という発想自体欧米型の文法体系の踏襲として忌避されやすいことは容易に推測できる。
- （3） 疑問文は考察の対象から外す。中国語の疑問文は英語と異なり、平叙文の語順を基礎としているからである〔例、我去学校。（私は学校に行きます）→你去哪儿？（あなたはどこに行きますか）〕。

いく。(1)中国語の基本語順がSVOにある点。(2)中国語の語順はSVOを骨子とした肉付けの関係にある点。

2.1 中国語の基本語順 SVO

中国語の語順を把握する一つのステップとして、中国語の各種文型の把握が必要不可欠となる。その意味で、范晓(2010, 2013, 2015, 2016)の如く、中国語の各種文型に対する詳細な記述の加えられたことは大きな意味を持つ。各種構文スキーマの定着は、一つの言語を掌握する上で基礎的事項の一つとなる。その上で、上述の各種文型が如何なる必然的な規則で結びついているのかを理解することが次の重要なステップとなる。理論的な整理と説明が加えられれば、中国語語順体系全体像の解明に寄与することとなる。

中国語の基本語順についてはSVOであるのかSOVであるのか全ての研究における観点が一致しているわけではない。しかし、概ねSVOという共通認識が形成されている(张谊生 2013)。実際SOV語順がSVO語順と比べて、使用頻度が劣ることや使用における制約の存在すること(沈家煊 1999: 196-219; 储泽洋、王艳 2016; 施春宏 2004: 17-18)、「動作者+受動者+VP」と並ぶSOV語順自体が特殊性を有する(陈平 1994: 166-167; 方梅 1995: 284)、等SOVの有標性に関しては先行研究でも指摘されている。更には基本語順をSVOと断言していないながらも、その論旨から中国語の語順はSVO(或いはSOVは有標的語順)という前提から議論が成り立っていると考えられる先行研究も多々見ることができる。一例として主述述語文を挙げておきたい。次のようなSOVタイプは成立に種々の制約が見られる(陆丙甫 2011: 293; 陆俭明 2016: 9-10, 2017: 61-62。例(3)(4)(5)は陆俭明 2016, 2017より引用)。

(3)

- a. 姐姐衣服洗干净了。(姉は服をきれいに洗いました⁽⁴⁾)
- b. *姐姐弟弟的衣服都洗干净了。

(4)

- a. 姐姐把弟弟的衣服都洗干净了。(姉は弟の服をみんなきれいに洗いました)
- b. 姐姐棉布的衣服洗干净了。(姉は綿の服をきれいに洗いました)
- c. *姐姐棉布的、不像话的衣服洗干净了。
- d. 姐姐把棉布的、不像话的衣服洗干净了。(姉は綿の、話にならないくらい汚れている服をきれいに洗いました)

(5)

- a. *姐姐全是油腻脏得不像话的衣服洗干净了。
- b. 姐姐把全是油腻脏得不像话的衣服洗干净了。(姉は全身油まみれで話にならないくらい汚れている服をきれいに洗いました)

上に挙げた(3)(4)(5)は何れも O に受動者の用いられた主述述語文である。“把”構文と対比した場合、文の成立には種々の制約が課せられる。陆俭明 (2016、2017) によると、例えば(3)の如く S と O の間に領属関係が成り立たない場合不成立となる。また音節数が長くなる場合も、(4)(5)の如く文の成立が危ぶまれる (陆丙甫 2011 : 293 ; 陆俭明 2016 : 9-10, 2017 : 61-62)。何れも“把”構文にするなり加工が必要となる。また仮に“把”構文を SOV 語順の形式と見なしたとしても、その有標性は拭うことはできない。周知の如く、“把”の後の物は通常特定物が用い

(4) 本稿の日本語訳について、筆者によるものは () で示している。引用文献のものは [] で記している。

られ不特定なものは用いられない（把这件衣服洗干净了／*把一件衣服洗干净了）、Oに後続する動詞フレーズには裸の動詞が用いられない（把衣服洗干净／*把衣服洗）という内容は、教学の場でも度々解説される。更には、その伝達意図の特殊性についても先行研究の関心を浴びてきた構文でもある⁽⁵⁾。また形態変化のない中国語においてはSとOがVによって左右両側に隔てられている語順であるSVOの方が、情報伝達において利する部分が多いものとなる⁽⁶⁾。

以下、本稿でもSVO語順を骨子とする立場をとっていく。

2.2 SVO に対する肉付けの関係

第1章で、提示した複雑な文への発展関係のプロセスを本稿では「基本語順SVOを基礎とした肉付けの関係」と考える。更に「肉付け」という

(5) 中にはSVOの形式では使用できず“把”構文のみで使用可能な形式も存在する〔例. 我把护照和旅行支票放在保险箱里了〔私はパスポートとトラベラーズチェックをセイフティボックスに入れておきました〕（守屋 1995 : 296）。この種は、状況はSVOから派生後の構文に細分化的調整〔elaboration〕が施され、基本形式への復元が不能となったタイプと考えられる（袁毓林 1996 : 253）。

(6) SOV形式を比較的自由に使用できる構文の代表例として、様態補語表現“S(V)OV得C”（例. 他汉语说得很好（彼は中国語〔を話すの〕が上手です））が挙げられる。但し、この場合“V得”におけるVは動作の意味が消失している。“V得”の後続成分における伝達の中心は状態を表す語句（上の例では“很好”）にある。“V得”の役割に関して、（杉村 2007a : 170-171）においてVの発生を前提情報とした“承指形式”（照応形式）という指摘が見られる。そして、日本語に訳出する際、“V得”を訳出しない方が自然な状況が多く存在することも指摘されている。

你哥哥拉了贝多芬的奏鸣曲，他拉得真好！（あなたの兄はベートーヴェンのソナタを演奏し、本当に上手でした）

上の文で“拉得”は“拉了”という動作の発生を受けた照応形式となる。この点からも、Vの動作性の顕現度の低いことが伺える。

部分について「SVO という骨組みに対し他の要素を付加することで種々のリンク関係を構成すること」と定義したい。「肉付け」という場合、各種構文において顕現される SVO の作用力は異なりを見せる。

(6)

- a. 他们在图书馆学习汉语。(彼らは図書館で中国語を勉強します)《平山 2012》→他们学习汉语。
- b. 他们在图书馆学习汉语。

(7)

- a. 我向上级详详细细地汇报了情况。(私は上司に事細かに状況を報告しました)《平山 2017b》→我汇报情况。
- b. *我向上级详详细细地汇报子情况。

上掲の文は連用修飾の例である。何れも VO の前の連用修飾語を削除しても構造的骨子として SVO の存在が見出せる。この点は動詞“学习”“汇报”を削除すると文の成立しなくなることからもうかがい知ることができる。また意味的にも、“学习汉语”，“汇报情况”という命題を中心に成り立っている。

一方で、次の例では文の意味的骨子として SVO が見出しにくい。

(8)

- a. 她不吃面包。(彼女はパンを食べません)《平山 2012》
- b. *她不吃面包。
- c. 一//→她吃面包。

上掲の例は“不”を用いた否定文である。“吃”を削除した場合文自体の成立は危ぶまれる。この点構造的に述語動詞の重要性を垣間見ることができる。一方“吃”は意味上の骨子とはならない。否定の前提となる「予め設定された相対する肯定命題」となる（沈家煊 1999：57；杉村 2005）。

更に、以下の文では構造的にも意味的にも SVO の残像すら見出しにくい。

(9)

- a. 我听懂了你的意思。〔私は君のいう意味が聞いて分かった〕
《興水・島田 2009: 25》
- b. *我听懂了你的意思。／我听懂了你的意思。
- c. —//→ *我听你的意思。／我听你的话。

上掲の例における SVO と肉付けされた成分を見てみたい。こちらは、構造的にも意味的にも V に当たる“听”の存在よりも補語“懂”の方が重要性を増す。この点は(9a)(9b)(9c)を対比しても分かる。論理関係から見て、“我(听)懂了你的意思”という結果状態に至るには“我听你的话”という動作の存在が必要となる。但し、この点はかなり背景化された形となっている。

以上、中国語の各種構文では骨子とする SVO の残像が鮮明なものから形骸化したものまで存在する。それぞれ次元を異にした肉付け関係を辿る形となる。

3. 中国語の語順的枠組み

本章では、骨子としての核心語順とその肉付け（構造的肉付け）の関係を論じるにおいて、骨子となる SVO についてより焦点を当てて論じる。

3.1 賓語の基本的枠組

日本人学習者は大多数が英語を第一言語として学んだ背景を持つ。よって、中国語 VO の意味関係が母語と英語 VO の関係から理解し易いならば、容易に受け入れやすいことが推測される。この部分は冒頭の（プロセス 1）で挙げた処理で十分足りることが予想される。一方で言語背景による理解から乖離した場合有標的なタイプとして、（プロセス 2）（プロセス 3）での処理が妥当と考えられる。この点の議論は平山（2008, 2017c）に

譲るとするが、本稿では大枠の部分のみを提示する。

中国語の VO 関係については、日本語より幅広い関係性を見ることが出来る。賓語の意味役割は文法書や辞書の中でも解説される項目となる（北京大学中文系現代汉语教研室編 2004：318；劉月華等 2001：460-462；孟琮等 1999；朱德熙 1982：110；興水・島田 2009：26,70-72）。日本人話者の語感からして連想し辛いタイプを以下に列挙しておく。

- (10) 吃大碗（どんぶりで食べる）／洗凉水（冷水で洗う）⇒賓語が道具
- (11) 起風（風が吹く）／下雨（雨が降る）⇒賓語が動作者
- (12) 墙上挂着一张宣传画。（壁に 1 枚のポスターが張ってあります）
⇒賓語が動作者
- (13) 睡觉（眠る）／洗澡（入浴する）／登记（登録する）⇒賓語が同
源タイプ

(10)の賓語は道具を表す。日本人の語感からすれば賓語となる成分は連用修飾語としての印象が与えられるだろう。(11)の VO 関係は自然現象を表すタイプとなる。文法書等では“下雨了！”（雨が降ってきた）等の無主語文という説明を見ることが出来る。(12)は存在文の例である。「場所 + V 着 + 動作者」という文型のもと、動作者が賓語の位置に置かれる。(13)は V と O の両者が、それぞれ「眠る」「洗う」「記録する」という同義語・類義語が用いられている。離合詞の例として見なされる例である。個々の形態素を見ると、意味的には並列構造としての色彩を呈する。動賓構造の体裁を保つのはその統語構造の機能によるものである（例、“睡觉”“洗个澡”“登记”）。

中国語の VO についてかくの如き特徴が見られる。その一方日本語訳に当てはめてみると、対応形式には大まかな傾向性を見ることが出来る⁽⁷⁾。

(7) ここで挙げる〔1〕から〔6〕は、VO を日本語に訳す場合、O の後ろにいかな

〔1〕 SはOをVする

- (14) 我喝冰咖啡。(私はアイスコーヒーを飲む)《平山 2012》
(15) 她写信。(彼女は手紙を書く)
(16) 他知道这件事。(彼はこの事を知っています)《商務印書館 小学館共編 2016 : 2024》

中国語の VO を日本語に訳出する際、多くの場面でこの意味関係が対応する。換言すれば、賓語の意味役割を幅広く網羅する。上掲の例において(14)の“咖啡”は受動者、(15)の“信”は結果、(16)の“这件事”は心理動作の対象を示す。

また、本節の冒頭で例(11)(12)を挙げて VO の意味関係に「O が V する」というパターンの存在することを言及した。当該パターンの中にも「O を V する」という関係性から類推が可能となるものが見られる。

- (17) 那儿有一家快餐店。(あそこに一軒のファストフード店がある)《平山 2012》
(18) 教室里有一个人。(教室には人が一人います)《平山 2012》

上掲の存在表現は“S [場所] + 有 + O [人 / 物] (S [ある場所] に O [人 / モノ] がある・いる)”という形で用いられる。この点は、“有”の持つもう一つの用法である所有義(“S 有 O”という形で「S は O を持っている」)とのリンクから捉えることができる。

- (19) 我有电脑。(私はパソコンを持っている／私にはパソコンがある)《平山 2017a》
(20) 我有三十本小说。(私は小説を 30 冊持っている／私には小説が 30 冊ある)《平山 2012》

存在と所有についてリンク関係から見ると、存在表現における主語(場

る助詞(「を」「に」「が」等)が用いられるか(という形式の面)でグルーピングしている。グループ内の意味役割が同一と述べているわけではない。詳細は、本文中の解説を参照。

所)は広義の所有者と見なすことができる。また賓語で表される存在する人や物は広義の被所有者と見なすことができる。存在と所有のリンク関係については、上掲の例(19)(20)に示す如く、所有を表す“有”構文の“有O”の部分が「Oがある」と訳出できる点でも見出すことができる。

〔2〕 SはOにVする

- (21) 她去图书馆。(彼女は図書館に行く)《平山 2012》
- (22) 姐姐来东京。(姉が東京に来る)
- (23) 银行在邮局旁边。(銀行は郵便局の隣にあります)《平山 2012》
- (24) 我给你。(私はあなたにあげます)

上掲の例から説明すると、(21)(22)(23)何れも賓語が場所を表している。その中で(21)(22)は着点、(23)は存在点という差異が存在する。また(24)は動作の間接対象((24)では“我给你一本书”の“一本书”のような直接賓語の存在が想定される)となる。

〔3〕 SはOだ

このグループには、Vにおいて主に“是”が用いられる。この点は英語のbe動詞に相当する部分となる。

- (25) 我是日本人。(わたしは日本人です)《平山 2012》
- (26) 这是我的书。(これは私の本です)《平山 2017a》

以上、上に挙げた〔1〕から〔3〕は日本人が第一外国語として学んだSVOの知識から十分に認識が可能となる。

3.2 主語の基本的枠組の設定

中国語の基本語順設定において、主語の範囲や設定という点についても避けて通ることができない。中国語の統語分析において採用されている階層分析(“层次分析”)では、主語とは主述フレーズ(主語+述語)という

枠組の中で用いられる。また、中国語の主語は話題 (topic) としての色彩を多分に含む。この点は中国語の主語が「陳述・説明の対象」(朱德熙 1982: 17; 北京大学中文系现代汉语教研室編 2004: 307; 興水・島田 2009: 21; 三宅 2012: 81 等) という定義からも垣間見ることができる。主語の定義をかくの如く設定した場合、そこには動作者以外のものも見られる ((27) (28) (29) は朱德熙: 99-100 より引用)。

(27) 那幢房子早就拆掉了。(あの部屋はとっくに取り壊されました)
⇒主語が受動者

(28) 这枝笔不能写小字。(このペンでは細字を書くことができません)
⇒主語が道具

(29) 这位同学我没跟他说过话。(この同級生と私は話をしたことがありません) ⇒主語が参与者

中国語が話題優先型の言語の一種であることは、中国語文法理論研究における基本的な定説として受け入れられている (刘丹青 2012a: 299)。その影響力の高さについては、様々な論及が成される。昨今の研究だけを取り上げてみても、関連する文献は度々目にする事ができる。例えば刘丹青 (2012a) においては言語目録類型論 (“语言库藏类型学”) の立場から、中国語の“显赫范畴” (ある言語において高い際立ちと優勢を誇る範疇⁽⁸⁾) の典型例の一つとして話題構造の存在が指摘されている。更に、刘丹青 (2012b) では話題構造の拡張という点から中国語比較文の特徴について論証を行っている。また話題を統語上の範疇として論じるものも見ることができる。张伯江 (2018) においては主述述語文 (“这几个生产队的耕地好坏差不多” (この幾つかの生産チームの耕地は良し悪しが同じくらいだ)), 週遍性主語文 (“酒和烟他一样也不沾边” (酒とタバコを彼は同じよ

(8) 刘丹青 (2012a: 292) から原文を引用しておく。“所谓显赫范畴，简单地说是一种语言中既凸显，又强势的范畴”。更に細かい定義は紙幅の都合上省略する。詳しくは同論文を参照されたい。

うにたしまない)), 名詞状語文 (“咱们电话联系吧” (私達は電話で連絡しましょう)) 等をテーマとして中国語の多くの文は話題構造であり、文頭の成分は必ずしも VO と意味役割を有する成分でない点が指摘されている。沈家煊 (2012b) においては、“零句” (miner sentence) と複数の“零句”によって構成される“流水句” (flowing sentence) には主語が存在せずに自然な文として成り立つ例の多数存在することが指摘されている。沈家煊 (2017) では更に、中国においては欧米言語によって定義される主述フレーズが存在しないことを主張している。更には (陆丙甫 2009 : 14) では文法成分関連の用語に対する理解のない一般話者も文を理解できる状況を鑑み、主語等の概念が言語研究における必須事項かも検討に値する内容であることに言及している。

以上に示した観点は、世界の言語という巨視的枠組から中国語を捉えるという目的においては有益な手法である。更には欧米言語との特徴の違いを捉える、欧米言語の枠組みや呪縛から脱して中国語独自の文法範疇を構築する (沈家煊 2012b : 414, 2017 : 12 ; 张伯江 2018 : 241) という点を趣旨とするならば、強調されて然りと言える。外国語話者の言語背景を生かした理解の仕方は、沈家煊 (2012b : 414) “这好比国外的中餐馆, 为了迎合西方人的口味, 做的饭菜已经不是地道的中餐” (これは海外の中国料理店が西洋の人々の味付けに合わせるようなもので、作られた料理は既に本場の中国料理でなくなっている) で指摘される通り負の側面と捉えられることは容易に察しがつく。しかし一方で、日本人話者の立場から外国語を捉える上では、「日本人の味付けに合わせる」という側面を考慮するのも有益な材料となり得る。当然主語という概念自体も一方的に否定する必要もないだろう。

また統語論的要素に目を向ける場合、中国語の文においても、日本語、英語同様主語には動作者や属性の主体が用いられる。

(30) 这个很好。(これは / 良い)

(31) 我喝红茶。(私は / 紅茶を飲みます)

(32) 我是日本人。(私は / 日本人です)

先にも言及したが中国語の主語は動作者のみならず、多種の意味役割が存在する。そして動作者以外の成分が主語となる文について、動作者を主語とする SVO 語順からの拡張形式であることは先行研究でも指摘されている(袁毓林 1996; 石毓智 2001)。また、形態変化を有さない中国語において主語 S と賓語 O (或いは動作者と受動者) が動詞 V で隔てること、即ち意味役割が動詞の左右に隔てられることでその意味関係が明確にされやすいという点に対する指摘も見られる(施春宏 2004)。刘丹青 (2016、2018) においては、ある一定の枠組みにおいては主語の存在が認定されることを主張している。更には主語の典型は動作者であることが主張されている。中国語の主語の特徴について、Chao Yuen Ren 著、吕叔湘译 (1979: 45) の「中国語の主語において動作者(受動的な動作, “是”を含めて)となるのは 50% に到達しない位だ」という言及が見られる。この指摘は、先行研究の中でも話題優先型の論拠の一つとして引用されている(沈家煊 2017: 2; 谢思炜 2018: 14)。但し上述のデータはあくまで、中国語の主語における動作者という要素が他の言語と比べて相対的に薄いという点を示したに過ぎない。中国語内部に目を向けてみると、主語の中で動作者の用いられるパーセンテージが一番高いことを覆す証左にはなっていない。

更には動作者主語と対照してみる時、これからが主語としての有標性を有していることは節々から読み取ることができる(以下の (33) から (34) は朱德熙 (1982: 96) から引用, (35) から (36) は李临定 (1984: 12) から引用)。

(33)

a. 我们昨天开了一个会。(私達は昨日会議を一つ開きました)

⇒動作者主語

- b. 昨天我们开了一个会。（昨日私達は会議を一つ開きました）

⇒時間主語⁽⁹⁾

中国語において動作発生の時間を表す（日本語の「いついつに」に当たる）成分は動詞の前に若しくは文頭に置かれることは文法書や教科書等でも目にする説明内容である。一方、疑問文を作る際には制約において差を見ることができる。

- a'. 你们什么时候开会。（君達はいつ会議を開きますか）

- b'. ? 什么时候你们开会。（いつ君達は会議を開きますか）

以上、主語に時間を尋ねる疑問代詞“什么时候”に変えた場合容認度が低下する。

(34)

- a. 弟弟已经吃了苹果了。（弟はもうりんごを食べてしまいました）
⇒動作者主語

- b. 苹果弟弟已经吃了。（りんごは弟がもう食べてしまいました）
⇒受動者主語

受動者が主語の位置で用いられるか賓語の位置で用いられるかはその特定性と不特定性（上掲の例では“一个苹果”か“这个苹果”等）によって相性の良しあしと関わるのはよく指摘されることである。更には、他の部分でも制約を見ることができる。例えば、李臨定（1984：12）から次の例を見られたい。

(35)

- a. 他打了我一拳。（彼は私をがつんと殴りました）

- b. ? 我他打了一拳。

(36)

(9) 4.3で論じることになるが、本稿では連用修飾語の一種として分類している。

(33b) については朱德熙（1982）の主張に合わせ、便宜的に「時間主語」として表現する。

a. 老张看着老李。(張さんは李さんを見えています)

b. ?老李老张看着。

(35)(36)の例について動詞の前に並べられた両者は方梅(1995:285)の表現を借りれば「受動者性の強弱が同等の組み合わせ」となる。方梅(1995)の指摘によれば、文頭の成分が受動者と解釈される傾向性が強いとある⁽¹⁰⁾。文としてある程度容認される要素も見受けられる一方、李临定(1984)の如く成立を危ぶむ指摘も見られる。動作者ほど融通性の高くない点が伺える。

(37)

a. 我用这支笔写小楷。(私はこのペンで細字の楷書を書きます)

⇒動作者主語

b. 这支笔我用来写小楷。(このペンで私は細字の楷書を書きます) ⇒道具主語

(38)

a. 我给小王写了一封信。(私は王さんに手紙を一通書きました)

⇒動作者主語

b. 小王我也给他写了一封信。(王さんにも、私は手紙を一通書きました) ⇒関与者主語

(37)(38)においても、道具や関与者をただ文頭に置くのみという作業が行われているわけではない。(37b)における“用来”と手段・方式を表す“来”の付加、(38b)における“给他”による照応等、統語形式も意味役割を判断する上での指標として働いている。

以上、簡単ではあるが主語の性格について概観し、動作者という意味役割が主軸となる点を確認した。以下の議論も、SVOの主語を動作者(心

(10) 方梅(1995:285)からの例を引用しておく。你我接管了(あなたを私が接収管理することになります)

理動作や属性の主体を含む）という点をベースに展開したい。

3.3 各フレーズ間の階層関係

SVO を核心と枠組みを考えるに際し、本章では階層分析について触れておきたい。中国語は形態変化を有さない言語である。欧米言語の如くフレーズと文が構成関係となる関係性にあるわけではない。中国語の文は一番大きなフレーズとなる。中国語のフレーズは、次の6種類に分類される（各種フレーズの名称は興水・島田（2009：21-30）より引用⁽¹¹⁾）。

（一）主述フレーズ：前後両者が「主語＋述語」の組み合わせとなる。

主語は、述語の「陳述・説明」の対象という関係性を持つ。

(39) 他／写了一首诗（彼は／詩を1本書きました）

(40) 我／有事（私は／用事がある）

(41) 外头／冷（外は／寒い）

(42) 今天／星期三（今日は／水曜日です）

（二）修飾フレーズ：両者には「修飾語＋被修飾語」の関係を持つ。修飾語は、(43)(44)の如く名詞性語句を修飾する「連体修飾語」と、(45)(46)の如く動詞性語句を修飾する「連用修飾語」に分かれる。

(43) 新／作品（新／作品）；木头／房子（木造の／家）

(44) 农场的／马（農場の／馬）；我／哥哥（私の／兄）

(45) 赶快／走（早く／行く）；细细／研究（事細かに／研究する）

(46) 非常／高（非常に／高い）；有点儿／贵（少し／[値段が] 高い）

（三）動賓フレーズ：前後両者の成分は「動詞＋賓語」という組み合わせ

(11) 当該部分の用語として他に「-連語」「-構造」も使用される。興水・島田（2009）では「-連語」が使用されているが、本稿では「-フレーズ」で統一する。

せを成す。

- (47) 洗 / 衣服 (服を / 洗う→洗濯する) ; 修 / 电灯 (電灯を / 修理する)
- (48) 写 / 信 (手紙を / 書く) ; 挖 / 坑 (穴を / 掘る)
- (49) 去 / 图书馆 (図書館に / 行く) ; 坐 / 地上 (地面に / 座る) ; 站 / 门外 (ドアの外に / 立つ)

(四) 補足フレーズ：両者が「動詞 / 形容詞 + 補語」の関係にあり、補足関係を成す。

- (50) 洗 / 干净 (きれいに / 洗う) ; 说 / 清楚 (はっきり / 言う)
- (51) 做 / 完 (食べ / 終える) ; 听 / 懂 (聞いて / 理解する)
- (52) 进 / 来 (入ってくる) ; 坐 / 下 (座る) ; 走 / 出去 (歩いて / 出て行く) ; 买 / 回来 (買って / 帰ってくる)
- (53) 洗得 / 干净 (きれいに洗える) ; 洗 / 不干净 (食べきれない)

(五) 並列フレーズ：両者が同一の品詞成分で結ばれ、前後対等の関係を成す。

- (54) 春夏秋冬 (春夏秋冬) ; 多快好省 (多く速く立派に無駄なく)
- (55) 飞机, 火车, 轮船 (飛行機, 列車, 汽船) ; 干净, 利落 (きれいで, きちんとしている)
- (56) 黄河和长江 (黄河と長江)
- (57) 又干净, 又利落 (きれいな上きちんとしている)

(六) 連動フレーズ：2つ以上の述詞成分を連用し、前後に並んだ両者に「主述」「修飾」「動賓」「補足」「並列」「連動」何れの関係も生じないもの。

- (58) 借一本书 / 看 [本を一冊借りて / 読む]

- (59) 找人 / 聊天儿 [人を訪ねて / 雑談する]
- (60) 借辆车 / 运货 [車を借りて / 荷物を運ぶ]
- (61) 去北京 / 开会 [北京に行って / 会に出る]
- (62) 开着窗户 / 睡觉 [窓を開けて / 寝る]
- (63) 花钱 / 买回来 / 搁着 / 不用 [お金を使って / 買って帰り / 放っておいて / 使わない]

以上6種のフレーズを挙げてみた。中国語では主述フレーズもこれらの一種となる。何れも前後にポーズやイントネーションを伴うことで、文となり得る。文がSVOの形式を必ず備えなければならないという制約も少なくなる。更には、主述フレーズ自体も文の大枠ではなく細部で用いられる例もありふれて目にすることができる。更には文法書でも解説を見ることができる（以下の例(64)から(66)は守屋（1995：130）より引用）。

- (64) [李老师病了 / 是真的] 吗？[李先生が病気になったのは本当ですか] ⇒主述フレーズが主述フレーズの「主語」
- (65) 我不 [知道 / 他是个哪个公司的]。[あの人がどこの会社の人か知りません] ⇒主述フレーズが動賓フレーズの「賓語」
- (66) 这是 [我天天锻炼的 / 结果]。[これはわたしが毎日トレーニングをつんだ結果です] ⇒連体修飾フレーズにおける連体修飾語

但しその一方で文の核心をなす上で「動作者—動作—受動者 / 対象」というのは認知上の基本モデルとなる（沈家煊 2006：35）。また、中国語の主語においても動作者の比率が一番高いであろうことは既に言及した。当然、基礎として動作者が主語となるSVOの構文スキーマの存在は見過ごしてよいわけではない。それが外国人の立場で中国語語順体系を捉えとなると猶更である。中国語における動詞の地位という点に関して、動詞も名詞の一部と考える“名動包含”（沈家煊 2009, 2012a）に示される如く名詞に比べ影響力の小さな側面を見出すことができる。しかし、その一方で、発話、文構造、フレーズ等多方面において英語と比べ動詞型言語と見

なせるような側面も存在する（刘丹青 2010⁽¹²⁾）。この点基本語順を考える際、動詞を中心とした意味役割を考察に入れることは不可欠ということが分かる。言語分析という点では、核心構造から派生形式へのリンク関係という点を明瞭、且つ可視的に体系化した提示をなすことで大きく有用性を増すことだろう。核心という部分に関心を寄せる現在の言語研究の流れにある（陆丙甫（2008b））という点を考慮に入れても、その重要性は言うまでもない。よって SVO 基本語順と階層分析を融合した整理という部分も一考の価値があるのではないだろうか。

SVO 語順を中心に、他の語順成分が如何なるルールで配列されているかという部分の考察は先行研究にも見ることができる（陆丙甫 2008a；张国宪，鲁健 2013）。特に陆丙甫（2008a：246）においては詳細な分析が見られる。同論文から例を挙げておきたい。

- (67) (他) [上星期 [在实验室 [用计算机 [连续地 [[工作了]]]] 六天]]。(彼は先週実験室においてコンピューターで続けて 6 日間働きました)

上掲の例で説明すると、基礎となる V（工作了）を基層として、連用修飾語として外層から内層へ“时位（時間的位置：上星期），时量（時間

(12) 刘丹青（2010）から幾つか例を挙げておきたい。何れも、英語の方が名詞の占める役割が高く、中国語では動詞の役割が高いことを示す例として示されている。

① Eat some fruit, please. — I've eaten/ate * (some) ～ 吃点水果吧。— 我吃过了。

② trains from Shanghai. ～ 从上海*（来）的火车。

例文①の返答部分において、英語では賓語の後の名詞（“some”）が省略できない。一方中国語の方では相対する名詞性成分の必要とされない点が指摘されている。②では、英語では前置詞の前に動詞の使用が必要とならないが、中国では介詞フレーズ（“从上海”）の後に動詞（“来”）がなければ非文となることが指摘されている。

量：六天），处所（場所：在实验室），工具（道具：用计算机），方式（方式：连续地）”という順序で統語位置の段階性を表すとある。

以上の如く、主に連用修飾成分各種（動作発生の時間点、手段・方式、場所）の作用について詳細な分析が成されている。更には、各種語順成分を同一平面上に並べることで、語順ルールの明瞭化を果たしていると言える。但し、次の点において断片的な感が否めない。

（１）連用修飾成分に関する分析が綿密な一方で、他の成分（時量補語以外の各種補語、連動フレーズ等）について言及が成されていない。

（２）各種文成分を同一平面上に配列することで、各種成分の異なる次元から施される肉付け関係が見出しづらくなっている。

これらの点を考えると、大枠から細部までの俯瞰図を構成することができれば、本研究の目的とする SVO を基準とした肉付け関係を整理する上での重要な第一歩となることが予想される。

話をフレーズに戻したい。SVO 語順を上 の 6 種フレーズに当てはめて言えば、SVO という主述フレーズにおいて、述語部分に VO という動賓フレーズの使用された形式となる。同時に、中国語の複雑な形式は述語部分における VO の肉付けされた形式と見ることができる。

ここで、構造部分の肉付けという点については、陆俭明 (1993: 227) の拡張 (expansion) という概念を指標としておきたい。拡張について、同論文では直接構成成分の連続した同一線上に並べられたタイプに“更迭性扩展” (expansion by the supersession), “组合性扩展” (expansion through the Combination) が提示されている。

“更迭性扩展”は“模型里的某个序列被一个包含这个序列但长度超过该序列的新的序列所替代，从而构成一个长度超过原模型的新的扩展式”（原型におけるある序列成分がそれを含むが当該の序列成分を超えた長さの新しい序列成分にとって代わられ、原型を超える長さの新たな拡張形式を構

成すること）と定義されている。以下陆俭明（1993：227）から用例を挙げておく。

(68) 买房子（家を買う） →動賓フレーズ

⇒买〔一所房子〕（家を一軒買う） →動賓フレーズ

(69) 他去（彼は行く） →主述フレーズ

⇒他〔去北京〕（彼は北京に行く） →主述フレーズ

例えば、上掲の例では動賓フレーズ（それぞれ“买房子”“他去”）の中の一部（“房子”“去”）に拡張の操作が行われているが、全体の大枠は拡張前のフレーズ関係（それぞれ動賓フレーズと主述フレーズ）という点で変わりがない。本稿で採用の肉付けという表現を用いるならば、あるフレーズ内部における肉付け関係に相当する。

“组合性扩展”については“以模型作为一个整体跟另一个词的序列进行组合，从而构成一个长度超过原模型的扩展式”（ある原型を大枠とし、他の序列の単語と結合を行い、原型を超える長さの拡張形式を構成すること）と定義されている。同様に、陆俭明（1993：227）から用例を挙げておく。

(70) 批判（批判する） →動詞

⇒批判〔康德学说〕（カントの学説を批判する） →動賓フレーズ

(71) 洗（洗う） →動詞

⇒洗〔干净〕（きれいに洗う） →補足フレーズ

一方で“组合性扩展”は他の成分と結合することで、新たなフレーズを構成することになる。例えば、上掲の例では動詞（それぞれ“批判”“洗”）が挙げられた中で、他の成分（“康德学说”“干净”）を付加することで、新たなフレーズを構成している。言わば、拡張前の原型はフレーズにおける構成要素となる。こちらは、本稿「肉付け」という表現を用いるなら

ば、あるフレーズに対する外部からの肉付けに相当する⁽¹³⁾。

ここで各フレーズ間の肉付けの関係を上位から下位へと配列する場合次の通りになる。

◎大枠の語順

〔1〕 主述フレーズ

(72) 我 / 去中国。(私は中国に行きます) ⇒述語が動賓フレーズ

(73) 我 / 也去中国。(私も中国に行きます) ⇒述語が連用修飾フレーズ

(74) 我 / 听懂了。(私は聴いて理解しました) ⇒述語が補足フレーズ

(75) 我 / 骑车去学校。(私は自転車で学校に行きます) 《平山 2017a》
⇒述語が連動フレーズ

文の中で主語の存在を設定する場合、基本的に全ての文が当該のフレーズに該当する。複雑な構造は述語部分における VO に様々な形で肉付けの施された形となる。

〔2〕 連用修飾フレーズ：VO に対する前方からの肉付け

当該のフレーズは、述語部分における最も大きな単位となる。被修飾語

(13) 拡張について、陆俭明 (1993: 227) では更に“插入性扩展”(expansion through the insertion)を設けている。このタイプの拡張は原型の間に単語を挿入し、原型の長さを超えた拡張形式を構成する。“更迭性扩展”“组合性扩展”と異なり、直接構成成分は連続性を持たない成分によって構成される。例えば“他所写的文章”(彼の書いた文章)における“他所写”は“他写”(彼が書く)という主述構造の中に“所”が挿入された“所”構造(“所”字结构)と分析している。このタイプは本文中で挙げたフレーズを基礎として展開するもので“更迭性”“组合性”の方がより基礎的肉付けの形式と言える。更には、先述の二者の拡張形式ほどありふれて見られるものではない。よって、本稿では考察の対象から外しておく。

の部分には、連動フレーズ、動賓フレーズ、動補フレーズが含まれる。

- (76) 热烈 / 欢迎 (熱烈に / 歓迎する) 《興水・島田 2009 : 138》⇒被修飾語が動詞
- (77) 他们 [在图书馆 / 学习汉语]。(彼らは図書館で中国語を勉強します) 《平山 2012》⇒被修飾語が動賓フレーズ
- (78) 我踢出的球 [把体育馆的窗户 / 打坏] 了。(私の蹴ったボールは体育館の窓を壊してしまいました) 《平山 2017b》⇒被修飾語が補足フレーズ
- (79) 攒了钱, [干脆 / 去国外旅行] 吧。(貯金が貯まったら, 思い切って / 海外旅行しに行きましょう) 《平山 2017c》⇒被修飾語が連動フレーズ

〔3〕 連動フレーズ：VO に対する後方からの肉付け

当該の単位は、(79)にも示す通り、連用修飾フレーズよりも下位に属す。前後2つの成文として動賓フレーズ若しくは補足フレーズが用いられる。

- (80) 我 [骑车 / 去学校]。(私は自転車で学校に行きます) 《平山 2017a》⇒動賓フレーズ+動賓フレーズ
- (81) 好像谁在叫我, 我 [停下脚步 / 看了一下]。(誰かが私を呼んだようなので, 私は歩みを止めて / ちょっと見てみました) 《平山 2017b 一部改》⇒動賓フレーズ+動補フレーズ

〔4〕 動賓フレーズ：述語の基本構造

当該の単位は、述語の基本部位を表す。単純な形としては“VO”の形で示される。

- (82) 我 [喝 / 可乐]。(私はコーラを飲む)
- (83) 我 [是 / 日本人]。(私は [日本人 / だ])

- (84) 我 [有 / 电脑]。(私は [パソコンを / 持っている]) 《平山 2017a》

〔5〕 補足フレーズ：VO 内部で展開された肉付け

当該のタイプは、動賓フレーズ内部の動詞部分に関する肉付けの施されたタイプとなる。肉付け後も動賓フレーズという枠組に変化が生じない。動賓フレーズの下位に属することとなる。

- (85) 我 [看 / 完] 了。(私は読み終わりました)
 (86) 我 [[听 / 错] 了你的话]。(私はあなたの話を聞き間違えました) 《平山 2012》
 (87) 我昨天 [[看 / 见] 他] 了。(私は昨日彼を見かけました) 《平山 2017a》

〔6〕 連体修飾フレーズ / 並列フレーズ：細部における肉付け

当該のタイプは、主語、述語、賓語と様々な階層において現れる。言わば、〔1〕から〔5〕の下位レベルに属す⁽¹⁴⁾。

- (88) 这 [是 [我的 / 书]]。(これは私の本です) 《平山 2017a》
 (89) [你的 / 衣服] 很漂亮。(あなたの服はきれいだね) 《平山 2017a》
 (90) [孙老师 / 和学生们] [又是学生 / 又是朋友]。[孫先生と学生たちは師弟どうしであり、友人どうしでもある] ⇒主語
 (91) 吃 [水果 / 和蔬菜]。(果物と野菜を食べる) ⇒賓語

連体修飾フレーズの一例としては(88)(89)では名詞性の“的”を用いた連体修飾フレーズを提示している。それぞれ、主語、賓語と異なる文成分として使用されている。(90)では主語の位置に接続詞“和”を用いた名詞

(14) 同様の考え方は、陆丙甫 (2008a) にも見ることができる。同論文においては文成分を明瞭に示す為同一平面状から連体修飾フレーズを排除することを提案している。

の並列、述語部分においては副詞“又”を用いた連用修飾が並列されている。(91)では“和”を用いた名詞性語句の並列フレーズが賓語として用いられている。

4. 基本語順と各フレーズの階層関係

第3章でSVOの肉付け関係を示したが、以下具体的な文法事項に当てはめて提示していきたい。

4.1 SVOを中心とした基本語順

中国語の文において、述語の中心成分が動詞、形容詞、名詞かによって異なる名称の述語文となる。それぞれのタイプについて観察をしておきたい。

4.1.1 動詞述語文

このタイプの述語文は、動詞が述語における構造的な中心となる。その中で、最も単純なタイプはV若しくはVOが述語となったタイプである。

(92) 我们休息。(私達は休憩します)

上掲の例に示す如く、動詞の中には賓語をとらない自動詞も存在するが、多くは賓語を伴うタイプのものとなる。基本となるSVOの意味関係については3.1で触れたので、本節では例を挙げるに留めておく。

(93) 我喝冰咖啡。(私はアイスコーヒーを飲みます)《平山2012》

(94) 他在房间里。(彼は部屋にいます)《平山2017a》

(95) 我有电脑。(私はパソコンを持っています)《平山2017a》

(96) 我是日本人。(わたしは日本人です)《平山2012》

上掲の例において動詞と賓語の意味関係は、(93)(95)は「OをVする」、(94)は「OにVする」、(96)は「Oである」タイプとなる。また、一部

「OがVする」タイプも存在する。この点についても 3.1 節で言及したので、例を挙げるに留めておく。

(97) 我很喜欢历史。(私は歴史が好きだ)

(98) 那儿有一家快餐店 (あそこに一軒ファストフード店があります)

《平山 2012》

4.1.2 形容詞述語文

中国語の形容詞述語文の単純な形は、形容詞がそのまま述語として用いられる。英語の如く be 動詞の仲介を必要としない。

(99) 他是很认真。(彼はまじめです)《平山 2017a》

(100) 她是很漂亮。(彼女はきれいです)《平山 2012》

但し、“是”は形容詞の前に必ず用いられないというわけではない。肯定を強調したい場合、以下のような例として用いられる。

(101) 这本书是好，你可以看看。(この本は紛れもなく良いので、読んでみたら良い)《现代汉语词典（第7版）：1197》

以上、形容詞述語文“SA”の形自体，“是”を用いた動詞述語文との一定の関連性を見ることができる。

4.1.3 名詞述語文

中国語の文において、主語と述語の両者が「時刻、曜日、日付、金額」等の特定の関係性表す場合においては名詞句がそのまま述語として用いられる。

(102) 现在是五点半。(現在 5 時半です)《平山 2017a》

(103) 今天是星期天。(今日は日曜日です)

上の文では主語と述語の間に「だ」「である」という同格の関係が表される。“是”の省略と考えても、名詞が動詞の役割を担うと考えるにしても、当然“S 是 O”とのリンクと考えることができる。

4.2 SVO 全体に対する肉付け（語気助詞）

第4章の中で主述フレーズを大枠としてという点について言及したが、フレーズと文の違いという点まで考慮すればSVOの外枠に置かれるものとして語気助詞を挙げることができる。

(104) 我吃晚饭了。(私は夕食を食べました)《平山 2012》

(105) 我们回家吧。(私達は家に帰りましょう)《平山 2017a》

(106) 别大声说话, 婴儿睡觉呢。(大声で話さないで。赤ちゃんが寝ているのです)《平山 2017a》

上掲の語気助詞“了”“吧”“呢⁽¹⁵⁾”はそれぞれ「状況の変化」「勧誘」「進行」と説明される。通常語気助詞は、階層分析の中で扱われることがない。第3章で形態的特徴から見る時「文は一番大きなフレーズ」という点についての言及を成した。一方で文は「フレーズの前後に一定のポーズやイントネーションを伴う」という特徴を有する。ポーズやイントネーションは話者の思考・心理・感情的側面を反映と見なすことができる。また「語気」自体も同様に心理・感情の反映体と見なすことができる。当該の形式は構造部分に対する肉付けと話者の主観性の付与されたタイプと言える⁽¹⁶⁾。

4.3 VO に対する前方からの肉付け

連用修飾という形は多くのパターンが存在する。副詞、介詞等個別の手

(15) “呢”に機能に進行・持続を否定するものも存在する。例えば森（2000：269）では進行の意味を表すのは他の部分が担っており，“呢”自体は「動作や状態が進行中であるということを認めるムードを表す」と主張している。

(16) 主観性という部分がSVO語順と関連性があるのか筆者としては、現時点結論を下せない状況にある。主観性と語順の関係について、完权（2017）の如く語順として特定の位置や傾向性もないという見解を示した先行研究も見られる。この点は今後の考察材料としたい。

段を取り上げてみても、意味的、機能的に見て千差万別の特徴を有する。この点に関して、本稿の主旨とする形式面の肉付けという関係から見出していきたい。

4.3.1 語彙的手段による連用修飾

連用修飾語に関して、構造的に後続の述語成分に対する依存性の高いものと低いものが存在する。

4.3.1.1 述語成分に対する依存性の高いタイプ

当該のタイプは後続成分の動作・状態の発生と共に付随的に認知される内容となる。一番代表的なタイプとし副詞を挙げることができる。

- (107) 这个很大。(これは大きい) ⇒程度
- (108) 我们都是日本人。(私達はみんな日本人です)《平山 2017a》⇒範圍
- (109) 我曾经学过汉语。(私はかつて中国語を学んだことがあります)《平山 2012》⇒時間

- (110) 我不吃面包。(私はパンを食べません)《平山 2017a》⇒否定

上掲の例においては、それぞれ矢印の右側に示した如く異なる系列に属すが、何れも「Sは～」「SはOをVする」という命題を軸に提供される情報となる。

次に、副詞以外の状況にも挙げておきたい。

- (111) 我们这么办吧。(私達はこうにしましょう)《平山 2017a》
- (112) 这件事我又详细说了一遍。[この件は私はまた一遍詳しく話した]《三宅 2012 : 95》
- (113) 大家痛痛快快玩儿了一天。[皆はとても楽しく1日遊んだ]《三宅 2012 : 95》

上掲の例においては、指示代名詞、二音節形容詞、形容詞の重ね型が連用修飾語として用いられた形となる。

4.3.1.2 述語成分に対する依存性の低いタイプ

当該のタイプとしては、「いついつに」という動作発生の時点を表すパターンが挙げられる。

- (114) 他明天回老家。(彼は明日実家に戻ります)《平山 2012》
(115) 我今天打扫房间。(私は今日部屋を掃除します)《平山 2012》
(116) 我们下午一点吃午饭。(私達は午後 1 時に昼食を食べます)《平山 2012》

上の例において“明天”(明日)，“今天”(今日)，“下午一点”(午後 1 時)はそれぞれ，“他回老家”(彼は帰省する)，“我打扫房间”(私は掃除する)，“我们吃午饭”(私達は昼食を食べる)という動作に対して「いついつに」という付加情報を与える成分となる。

一方で，“明天见!”(明日会いましょう)の如く上記の解釈しか成り立たない事例もあるが、多くの場面において主語としての性質を帯びたことが見て取れる。“回老家”“打扫房间”“吃午饭”は，“明天”“今天”“下午一点”という時点において何をするのか」という問いに対する回答としての役割も持つ。例文中における時間成分は“回老家”，“打扫房间”，“吃午饭”という動作の陳述や説明を受ける対象ともなる。言わば，時間詞(連用修飾語)は，後続する動作内容を認知する上での背景としての一面も有している。この点は，上の 3 例に関して「彼は，明日は帰省します」「私は，今日は部屋を掃除します」「私達は，午後 1 時は昼食を食べます」と時間を表す成分の後に「は」を付加できる点から見ても，理解しやすい点と言えよう。

また述詞性語句の前の時間詞を主語とする分析は先行研究にも見ることができる(以下(117)–(118)は朱德熙(1982: 97)より引用)。

- (117)
(a) 今天下午开会。(今日の午後会議があります)
(b) 今天下午开不开会? (今日の午後会議がありますか)

(118)

(a) 晚上会下雨。(夜雨が降るだろう)(b) 晚上会不会下雨？(夜雨が降るだろうか)

朱德熙(1982:97)では主語の判定基準の一つとして反復疑問文にすることができるかという点が挙げられている(“你去”(あなたは行く)→“你去不去?”(あなたは行きますか);“他抽烟”(彼はタバコをする)→“他抽不抽烟?”(彼はタバコを吸うだろうか))。上の例において時間名詞は、主語としての特徴が見られることが分かる。この点、4.3.1.1で挙げたタイプの連用修飾語と異なる性格を呈することが分かる。

4.3.2 後置成分(構造助詞“地”)を媒介とした連用修飾

当該のタイプは構造助詞“地”を用いた“地”フレーズの形で主に動作の様態やプロセスを描写することとなる⁽¹⁷⁾。“地”フレーズには“地”の省略可能なものも見られる。

(119) 这件事我又详细〔地〕说了一遍。〔この件は私はまた一遍詳しく話した〕《三宅2012:95》

(120) 大家痛痛快快〔地〕玩儿了一天。〔皆はとても楽しく1日遊んだ〕
《三宅2012:95》

(121) 她的脸渐渐〔地〕红了。〔この件は私はまた一遍詳しく話した〕
《三宅2012:95》

その一方で、本来連用修飾関係を表せない両者の間にも“地”を介すること、その幅が大きく広がる⁽¹⁸⁾。

(17) 例えば「彼は部屋を綺麗に掃除した」という日本語に対して、中国語では“他把房间打扫得干干净净”“他干干净净地打扫了房间。”等複数の表現で表することができる。前者は主に動作語の状態がプロファイルされるのに対して、後者は動作プロセスがプロファイルされる(張黎2017:202)。

(18) 但し「その幅が大きく広がる」というのは、“地”を介せずに修飾できるも

- (122) 他得意地说 (→*得意地说): “我成功了!” [彼は得意げに言った。「成功したぞ!」] 《三宅 2012: 94》
- (123) 科学地研究 (→*科学地研究) [科学的に研究する] 《興水・島田 2009: 139》
- (124) 安安静静地坐着 (→*安安静静地坐着) [静かに座っている] 《興水・島田 2009: 139》
- (125) 一动不动地停着 (→*一动不动地停着) [じっと停まっている] 《興水・島田 2009: 139》

4.3.3 前置成分（介詞）を媒介した連用修飾

連用修飾語における付加成分の働きという部分に関して、4.3.2 で言及した“地”の作用については構造助詞という名称の通り、本来連用修飾関係を有さない両者にも繋がりを持たせる機能を持つ。「両者に繋がりを持たせる」という部分の機能に関しては、介詞も同じ機能を有することになる。本稿では、2 種のタイプに分けて整理しておきたい。

4.3.3.1 被修飾語内部における肉付けを必要としないタイプ

当該のタイプは被修飾語内における肉付けを特に必要としない。よって述詞成分の形式についても特に大きな制約を受けない。

- (126) 他们在图书馆学习汉语。(彼らは図書館で中国語を勉強します)
- (127) 小张对历史感兴趣。(張さんは歴史に興味があります)
- (128) 我先生明天从纽约回来。(私の夫は明日ニューヨークから帰ってきます) 《平山 2017a》

のは必ず“地”を加えても連用修飾語になるという意味ではない。例えば一音節形容詞は上述の連用修飾を構成できない(例. 快说(速く話す)→*快地说, 北京大学中文系现代汉语教研室编 2004: 339; 三宅 2012: 95)。“一音節形容詞+de”が修飾フレーズで用いられる場合連体修飾語となる(例. 热的饮料(温かい読み物)。

- (129) 公司离东京塔很远。(会社は東京タワーから遠いです)《平山 2012》

上掲の例において“图书馆”(図書館)が動作発生の地点,“历史”(歴史)が心理動作の対象,“纽约”(ニューヨーク)が動作の起点,“东京塔”(東京タワー)が遠近を図る基準点として,それぞれの修飾関係を認識させる上で介詞の存在が重要な役割を担う。上述の介詞の役割について,次の例を見ると更に認識し易いものとなる。

- (130) 用肉包子打狗(肉まんて犬を叩く)《陆俭明 2005: 160 一部改》
“肉包子”は通常食べ物に属すが, 上掲の例においては道具を表す。

4.3.3.2 被修飾語内部における肉付けを必要とするタイプ

本節で挙げたタイプは単に介詞フレーズが前方から肉付けするのみならず, 動詞の後に補語等の他成分の付加が必要となる。当該タイプとして, まずは“把”構文と“被”構文を挙げておく。

- (131) 我把今天的作业做完了。〔私は今日の宿題をやり終えた〕《三宅 2012: 189》
(132) 我的车被警察拉走了。〔私の車はお巡りさんにレッカー移動されました〕《平山 2012》

上掲の“把”構文, “被”構文は何れも後続の述詞性語句は裸の動詞(それぞれ“做”“拉”)だけで終わらせることができない。往々にして何らかの成分(それぞれ“完了”“走了”)が付加される。何れも被修飾語部分における伝達の中心が動作の発生よりも, その動作によって如何なる結果や状態に達したかという点に置かれる⁽¹⁹⁾。

(19) 更に付加成分以外にも述語動詞との組み合わせも考慮する必要がある。例えば“了”を付加した場合の容認度も変化が見られる(①②は, それぞれ三宅 2012: 187, 189 より引用)。① a. 小李被老王打了〔李さんは王さんに殴られた〕
b. ?桌子被小李打了。〔テーブルは李さんにたたかれた〕→桌子被小李打了
两下。〔テーブルは李さんにたたかれた〕② a. 他把字擦了。〔彼は字を消した〕

次に“比”構文を見てみたい。

(133) 今年比去年冷。(今日は昨日より寒い)《平山 2012》

“比”構文において介詞フレーズの後には裸の形容詞を置くことができる。この場合形容詞は“比”の前後を比較したある尺度における差を表す。上掲の例で“冷”はその尺度を「寒さ」が担う。よって、その差が如何なる状態であるのか、どれ位の数値であるのか具体的な情報の付け加えることも少なくない。

(134) 今年比去年 更/还冷。(今日は昨日より更に寒い)

(135) 今年比去年冷一点儿。(今日は昨日より少し寒い)

(136) 今年比去年冷得多。(今日は昨日よりずっと寒い)⁽²⁰⁾

5. おわりに

本稿では、既存の中国語文法の枠組みを生かしつつ日本人により適した形で、という考えの下語順体系に対する整理を試みた。

具体的な内容として、第1章では中国語の語順理解において骨子となる語順に対して如何なるプロセスから発展関係が生じるのか整理を行った上での議論が必要であること、更には(プロセス1)について論じることを示した。第2章では、中国語の基本語順をSVOという点から議論を展開することを示した。第3章では、SVOにおける主語、賓語、そしてその肉付け関係の前提に対して先行研究の指摘を交えながら論を展開した。そして、賓語は「OをVする」「OにVする」型等を基礎とする点、そし

b. *他把字写了。〔彼は字を書いた〕

(20) 更に幅広く解釈すれば、刘丹青(2002、2003)で提示される“框式介词”(周置詞, circumposition)の各種(“从…起”“跟…一起”“用…来”“对…来说”等)も含められるかもしれない。本稿では一旦考察の対象から外しておきたい。

て主語の基本形に動作者、属性の主体に置くこと、主述構造を基礎に置いた各フレーズ間の肉付け関係を示した。そして、第4章では紙幅の都合上、肉付け規則について次の点について考察を行った。基本語順 SVO と SVO に対する外部肉付けとして語気助詞があることを示した。更には述語部分における VO に対する外部肉付けとしての連用修飾フレーズについて整理を試みた。

冒頭の問題提起とも重複することになるが、これまでの語順分析においては骨子となる基本語順からの発展関係について、異なる要素によるものを合理的に棲み分けして提示したものは見受けられなかった。その点、本稿で示すプロセスの違いを明確に示し、それぞれのプロセスにおける内部構造、そして各プロセス間の発展過程を合理的に示すことは、日本人話者が中国語語順体系を的確に把握する上で寄与する部分も少なくないであろう。更には、SVO からの発展関係の記述という分析自体意外と充実しているといい難い。中国語語順を論じる時 SVO を基本語順とする認識が備わっていることは、先行研究の節々から読み取ることができる。一方で、管見の限り真正面から扱ったものとして陸丙甫（2008b）等ごく少数に限られている。第2章で詳細に観察したが、昨今の中国語研究において欧米言語の文法体系からの脱却と中国語独自の体系の確立を目指す流れが強いように思われる。その発想を出発点とする場合、英文法の基本体系である SVO という枠組から展開される議論も忌避されやすいことが伺い知れる。一方で、日本語話者としては、大多数が第一外国語として英語を学んだ背景を持つ。よって、SVO 枠組みを活用した形で、一本の筋の通った肉付け関係を整理し提示することが、日本人話者の中国語理解に対し有益に思われる。その意味で、寄与する部分は多いのではないだろうか。

当然の事ながら、残りのフレーズについても分析を行っていく必要がある。また、SVO に対する構造的肉付けというだけでは説明できない部分は存在する。例えば、第4章で基本文型 SVO という点に言及したが、以

下の形は基本語順と構造的肉付けだけで説明できる問題ではない。以下は存現文の例である。

- (137) 告示牌上 貼着 一张广告。(揭示板に広告が1枚貼ってあります)
《平山 2012》

- (138) 门口 来 了一位客人。(玄関にお客さんが1人いらっしゃいました)

以上の構文は「場所＋動詞＋動作者」の語順が特徴の一つとなる。場所と動作者の関係が「既知情報／旧情報」と「未知情報／新情報」という関係性を見出すこともできるが、本稿で主眼とする SVO という基本語順からの肉付けという点では、関係性を見出すのに困難である。何故動作者が賓語の意味で用いられるのか各成分の語彙の意味（“告示牌”“貼”“广告”，“门口”“来”“客人”）だけでは判断がつきにくい⁽²¹⁾。

また文頭の成分が動作者を表す場合でも主語と整理すべきか検討を要する状況も見られる。例えば疑問詞を用いた任意表現（“谁都／也～”“什么都／也～”等）を取り上げておく。当該タイプの構文は日本語訳を見ても「誰でも」「何でも」と「は」が後続することはない。更に文の統語的特徴を見ても、主語らしくない特徴が見られる。動詞・形容詞の前の“都／也”が必要となることはよく知られたことである。その他に疑問詞の部分にアクセントが置かれる〔(例. '谁都了解这个情况（誰でもこの状況を知っている）〕、疑問詞の後に“是不是”を置き 4.3.1.2 で言及したような反復疑問文を構成できない〔(例. *谁是不是都了解这个情况？)〕（陆俭明

(21) (137)(147)で挙げた存在を表すタイプ（存在文）に関しては、「場所＋動詞＋動作者」という語順が文成立に大きく関わっている点に対する指摘が見られる（潘文 2006：84；王建军 2003：13）。また存在を表す“有”構文からの繋がりにから説明した指摘も目にすることができる（李临定 1984：14，任鹰 2000：117，平山：64）。更には後者の点からの解説は文法書等でも目にすることができる（相原等 2016：165；丸尾 2010：164）。(137)を例にとると当該例文は“告示牌上有一张广告”（揭示板に一冊の広告がある）という例をベースとして“贴着”は“有”の存在方式を表すものとなる。

1986:163-164)。更には関連副詞“就”は疑問詞の後に置くことができず、前に置かれる（杉村 2007）、等が挙げられる。“就”の位置という点について点について例を一つ挙げてない（(139)は杉村 2007b:291より引用）。

(139)

(a) 你有错误，改了就好，再犯老毛病**就**谁也少不了你了。（あなたに間違いがあれば改めたら良い。またいつもの癖が出たとしても誰もあなたを欠くことはできませんよ）

(b) *你有错误，改了就好，再犯老毛病**就**王主任也少不了你了。

これらは第1章で挙げた（プロセス2）（プロセス3）のコンセプトも加味して考える必要があるだろう。本稿では、第一歩として（プロセス1）の構造的肉付けについて整理と分析を試みた。更なる分析が必要であることは、言うまでもない。何れも解明すべき課題は少なくないが、以上の点は稿を改めて論じたい。

参考文献

（中国語）

北京大学中文系现代汉语教研室编（2004）《现代汉语（重排本）》，北京：商务印书馆。

Chao, Yuen Ren (1959) A Grammar of Spoken Chinese. Berkeley and Los Angeles: University of California Press. 吕叔湘节译本《汉语口语语法》，商务印书馆（1979）

陈平（1994）试论汉语中三类句子成分与语义成分的配位原则《中国语文》第3期，161-168页。

储泽祥，王艳（2016）汉语OV语序手段的指称化效用《世界汉语教学》，第3期，318-330页。

范晓（2010）论句式意义《汉语学报》，第3期，2-13页。

范晓（2013）论语序对句式的影响《汉语学报》，第1期，2-11页。

范晓（2015）不及物动词构成的句干句式《汉语学报》，第2期，2-12页。

范晓（2016）句式的几个问题——基于语言习得的视角《海外华文教育》，第6期，

723-738 页。

方梅 (1995) 汉语对比焦点的句法表现手段《中国语文》第 4 期, 723-738 页。

李临定 (1984) 施事、受事和句法分析《语文研究》第 4 期, 8-17 页。

刘丹青 (2002) 汉语中的框式介词《当代语言学》第 4 期, 241-253 页。

刘丹青 (2003)《语序类型学与介词理论》, 北京: 商务印书馆。

刘丹青 (2010) 汉语是一种动词型语言——试说动词型语言和名词型语言的类型差异《世界汉语教学》第 1 期, 3-17 页。

刘丹青 (2011) 语言库藏类型学构想《当代语言学》第 4 期, 289-303 页。

刘丹青 (2012a) 汉语的若干显赫范畴: 语言库藏类型学视角《世界汉语教学》第 3 期, 291-305 页。

刘丹青 (2012b) 汉语差比句和话题结构的同构性: 显赫范畴的扩张力一例《语言研究》第 4 期, 1-12 页。

刘丹青 (2016) 汉语中的非话题主语《中国语文》第 4 期, 259-275 页。

刘丹青 (2018) 制约话题结构的诸参项——谓语类型, 判断类型及指称和角色《当代语言学》第 1 期, 1-18 页。

刘月华 潘文娛 故鞞 (2001)《实用现代汉语语法 (增订本)》, 北京: 商务印书馆。

陆丙甫 (2005) 语序优势的认知解释 (上): 论可别度对语序的普遍影响《当代语言学》第 1 期, 1-15 页。

陆丙甫 (2008a) 语序类型学理论与汉语句法研究《当代语言学理论和汉语语法研究》, 北京: 商务印书馆, 241-256 页。

陆丙甫 (2008b) 直系成分分析法——论结构分析中确保成分完整性的问题《中国语文》第 2 期, 129-139 页。

陆丙甫、蔡振光 (2009) “组块”与语言结构难度《世界汉语教学》第 1 期, 3-16 页。

陆丙甫 (2011) 重度—标志对应律——兼论功能动因的语用性落实和语法性落实《中国语文》第 4 期, 291-299 页。

陆丙甫、罗彬彬 (2018) 形态与语序《语文研究》第 2 期, 1-13 页。

陆俭明 (1986) 周遍主语句及其他《中国语文》第 3 期, 161-167 页。

陆俭明 (1993) 关于“他所写的文章”的切分《陆俭明自选集》, 河南: 大象出版社, 220-230。

陆俭明 (2005)《现代汉语语法教程 (第三版)》, 北京: 北京大学出版社。

陆俭明 (2016) 从语言信息结构视角重新认识“把”字句,《语言教学与研究》第 1 期, 1-13 页。

陆俭明 (2017) 试议句法成分长度问题,《语言教学与研究》第 4 期, 59-66 页。

吕叔湘 (1986) 主谓谓语句举例《中国语文》第 5 期, 334-340 页。

- 孟琮 郑怀德 孟庆海 蔡文兰 (1999) 《汉语动词用法词典》，北京：商务印书馆。
- 潘文 (2006) 《现代汉语存现句的多维研究》，南京：南京师范大学出版社。
- 覃业位 (2016) 汉语诗歌中介宾状语“N+NP”的后置及相关句法问题《语言教学与研究》第1期，67-76页。
- 任鹰 (2000) 《现代汉语非受事宾语句研究》，北京：社会科学文献出版社。
- 杉村博文 (2007a) 基于汉外对比的教学语法，《汉语教学学刊》第3辑：163-174页。
- 杉村博文 (2007b) 现代汉语疑问代词周遍性用法的语义解释，张黎 古川裕 下地 早智子主编《日本现代汉语语法研究论文选》，北京：北京语言文化大学出版社，284-301页。
- 邵敬敏，任芝镁，李家树，税昌锡，吴立红 (2009) 《汉语语法专题研究（增订本）》，北京：北京大学出版社。
- 沈家煊 (1999) 《不对称标记论》，南昌：江西教育出版社。
- 沈家煊 (2002) 如何处置“处置式”？——论把字句的主观性《中国语文》，第5期，387-410页。
- 沈家煊 (2006) 转指和转喻，《认知与汉语语法研究》，北京：商务印书馆 30-52页。
- 沈家煊 (2009) 我看汉语的词类《语言科学》，第1期，1-12页。
- 沈家煊 (2012a) “名动词”的反思：问题和对策《世界汉语教学》，第1期，3-17页。
- 沈家煊 (2012b) “零句”和“流水句”——为赵元任先生诞辰120周年而作《中国语文》，第5期，403-415页。
- 沈家煊 (2017) 汉语有没有“主谓结构”《现代外语》，第40卷第1期，1-13页。
- 施春宏 (2004) 汉语句式的标记度及基本语序问题《汉语学习》，第2期，10-18页。
- 石毓智 (2001) 汉语的主语与话题之辨《语言研究》，第2期，82-91页。
- 完权 (2017) 汉语（交互）主观性表达的句法位置，《汉语学习》第3期，3-12页。
- 王建军 (2003) 《汉语存现句的历时研究》，天津：天津古籍出版社。
- 谢思炜 (2018) 诗歌话题句探论，《语文研究》第2期，14-19页。
- 杨成凯 (1997) “主主谓”句法范畴和话题概念的逻辑分析——汉语主宾语研究之一《中国语文》，第4期，251-259页。
- 袁毓林 (1996) 话题化相关的语法过程《中国语文》，第4期，241-254页。
- 袁毓林 (2005) 面向当代科技的语言研究的理论和方法《基于认知的汉语计算语言学研究》，北京：北京大学出版社。

- 张伯江 (2018) 汉语句法中的框—桠关系《当代语言学》，第2期，231-242页。
- 张国宪、卢健 (2013) 从始点之视——汉语定语的时空视角走向，中国文法論叢刊行会編《木村英樹教授還暦記念 中国文法論叢》白帝社。
- 张黎 (2017) 《汉语意合语法学导论——汉语型语法范式的理论建构》，北京：北京语言大学出版社。
- 张谊生 (2013) 句法层面的语序与句子层面的语序——兼论一价谓词带宾语与副词状语表程度《语言研究》，第3期，40-51页。
- 朱德熙 (1982) 《语法研究》，北京：商务印书馆。
- 中国社会科学院语言研究所词典编纂室编 (2016) 《现代汉语词典（第7版）》，北京：商务印书馆。

(日本語)

- 相原茂 石田知子 戸沼市子 (2016) 『Why? にこたえる はじめての中国語の文法書〈新訂版〉』，東京：同学社。
- 平山邦彦 (2008) 「日本人学習者を対象とした中国語教育に関する一考察—その言語背景を考慮に入れて」『拓殖大学 語学研究』第117号，1-32頁。
- 平山邦彦 (2009) 「存現文教学に関する一考察」『中国語教育』第7号，中国語教育学会，64-86頁。
- 平山邦彦 (2012) 語順で覚えよう！ ワンフレーズ中国語『NHK ラジオテキスト まいにち中国語』4-6月号。
- 平山邦彦 (2017a) 『新版 口を鍛える中国語作文——語順習得メソッド 初級編』，東京：コスモビア。
- 平山邦彦 (2017b) 『新版 口を鍛える中国語作文——語順習得メソッド 中級編』，東京：コスモビア。
- 平山邦彦 (2017c) 「中国語語順体系に貫かれた構成原則について——基本語順の設定とその核心的SVOの位置づけを中心に——」『拓殖大学 語学研究』第137号，57-100頁。
- 興水優 島田亜実 (2009) 『中国語 わかる文法』，東京：大修館書店。
- 丸尾誠 (2010) 『基礎から発展までよく分かる中国語文法』，東京：アスク出版。
- 三宅登之 (2012) 『中級中国語 読みとく文法』，東京：白水社。
- 森宏子 (2000) 「平叙文における“呢”の機能」『中国語学』第247号，267-281頁。
- 守屋宏則 (1995) 『やさしく くわしい 中国語文法の基礎』，東京：東方書店。
- 中邑光男・山岡憲史・柏野健次 (2017) 『ジーニアス総合英語』，東京：大修館書店。

北京・商務印書館 小学館共編（2016）『中日辞典（第3版）』，東京：小学館。
杉村博文（2005）否定情報の獲得と応用『中国語学』252号，36-60頁。

〔付記〕

本稿は平成29年度言語文化研究所研究助成による成果である。

（原稿受付 2018年11月29日）

〈論 文〉

Toward a Description of Tag Questions in Discourse

Tsutomu WATANABE

Abstract

Tag questions in English are generally introduced as a pair of a question and an answer in EFL textbooks. The information-seeking function of a tag question is stressed. Yet, Tottie and Hoffman (2009) report that the information-seeking use of tag questions comprises 41% in their data. Out of 65 examples I have gathered from the Archers (2018), a BBC's radio drama, a coherent or direct response to a tag question is made in 37 cases. Among the 37 examples, responses with a literal "yes" add up to 10 instances and responses with a literal "no" come to seven instances. The combined numbers of literal responses, 17 instances, constitute 46% in the "coherent responses". The literal yes/no responses comprise only 26.2% in the total number of examples of tag questions collected from the Archers (2018). The non-information-seeking function of tag questions needs more attention in linguistic description as well as in an EFL context.

Keywords: answer, following utterance, intonation, non-information-seeking, question

Table of Contents

1. The linguistic description of tag questions in English
2. The description of tag questions in EFL materials
- 2.1. Tag Questions in EFL Materials in England

2.2. Tag questions in English teaching materials in Japan

3. Investigating tag questions in actual examples

3.1. Watanabe (2017)

3.2. The pragmatic use of tag questions in discourse

3.3 The Archers (2018)

3.3.1 The procedure of collecting data

3.3.2 The statistical summary of the collected data

3.3.3 A linguistic response following tag questions

4. Concluding remarks

1. The linguistic description of tag questions in English

English has a grammatical structure called tag questions¹. The following examples² are quoted from a comprehensive reference grammar.

①_a [Your friends made a good job of it,]_a _b [didn't they?]_b

(Huddleston & Pullum 2002: 892)

②_a [They haven't finished it,]_a _b [have they?]_b

(Huddleston & Pullum 2002: 892)

③_a [So you have forgotten your homework again,]_a _b [have you?]_b

(Huddleston & Pullum 2002: 895)

④_a [% So you haven't done your homework,]_a _b [haven't you?]_b

(Huddleston & Pullum 2002: 895)

The previous studies on tag questions seem to have focused on one of the two aspects of their behavior: the polarity combination of an anchor clause and the question tag; the intonation of the question tag.

The polarity combination of the four examples above will be analyzed as follows: ①[positive + negative]; ②[negative + positive]; ③[positive + positive]; ④[negative + negative]. The type ① and ② are called reverse polarity tag questions whereas the type ③ and ④ are named constant polarity tag questions. Huddleston & Pullum (2002:

Table 1

	positive + negative	negative + positive	positive + positive	negative + negative
American	69%	27%	4%	0%
British	75%	17%	8%	2 instances

892) comment that the constant polarity tag questions in the form of [negative + negative] are rejected by many speakers of English. Many grammars of English³ refer to the [negative + negative] type. Tottie and Hoffmann (2006) conducted a corpus research which revealed the frequency of how often the four types of tag questions are used in America and in England, respectively. Watanabe (2014: 12) summarizes what Tottie and Hoffmann (pp.289–291) discuss about the possible combinations of an anchor and the question tag. His table is quoted above as table 1.

The statistics tells us that the four types of tag questions are distributed, in descending order, as follows: [positive + negative], [negative + positive], [positive + positive], and [negative + negative]. Obviously, the use of reverse polarity tag questions prevails in both accents of English: 96% in America, 92% in Britain. Tottie and Hoffman analyze their data from several viewpoints; the kinds of pronouns used in the question tags, the possibility of gender difference in the frequency of usage, and the generation difference in the frequency of usage. Unfortunately, their collection of examples lacks phonetic data⁴.

The phonetic behavior of tag questions is usually mentioned very briefly⁵ in reference grammars as follows:

- ⑤ He was here, wasn't he ↗ ? [rising tag]

(Huddleston & Pullum 2002: 894)

- ⑥ He was here, wasn't he ↘ ? [falling tag]

(Huddleston & Pullum 2002: 894)

⑦ He wasn't here, was he ↗ ? [rising tag]

(Huddleston & Pullum 2002: 894)

⑧ He wasn't here, was he ↘ ? [falling tag]

(Huddleston & Pullum 2002: 894)

Huddleston & Pullum (2002: 894) state that a question tag can take either a rising or a falling tone. They argue that a speaker expresses their doubt or asks for verification when they use a rising tag; in other words, they want the message in the anchor to be confirmed. They go on to assert that a speaker does not express their doubt when they use a falling tag; after all, they only seek acknowledgement that the message in the anchor is true.

In Watanabe (2017) I collected 120 spoken examples from BBC's radio drama, *the Archers*⁶. The 120 examples were analyzed in terms of both syntax and phonetics; syntactically, they were classified according to the polarity of an anchor clause and the question tag; phonetically, they were categorized based on the nuclear tone taken on by the anchor and the tag. The tag questions were divided into ten categories as follows: (1) positive rising anchor + negative falling tag, (2) negative rising anchor + positive falling tag, (3) positive rising anchor + negative rising tag, (4) negative rising anchor + positive rising tag, (5) positive falling anchor + negative falling tag, (6) negative falling anchor + positive falling tag, (7) positive falling anchor + negative rising tag, (8) negative falling anchor + positive rising tag, (9) positive rising anchor + positive rising tag,

(10) positive falling anchor + positive rising tag

To offer the bird's eye view of the result of my survey three tables are quoted below from Watanabe (2017: 155-156). Four changes⁷ have been made to the statistics in tables 3 and 4.

To summarize, as in table 4, if we disregard the nuclear tone of the

Table 2 Tag Questions with Rising Anchors in the Archers in 2016

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	10	7
Negative + Positive	5	3
Positive + Positive	0	2
Total	15	12

Table 3 Tag Questions with Falling Anchors in the Archers in 2016

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	58	8
Negative + Positive	19	3
Positive + Positive	0	5
Total	77	16

Table 4 Tag Questions with Rising/Falling Anchors in the Archers in 2016

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	68	15
Negative + Positive	24	6
Positive + Positive	0	7
Total	92	28

anchors and only focus on the polarity combination and the tone of the question tag, the most frequent type of tag questions is [positive + negative; fall] (68 instances), followed, in descending order, by [negative + positive; fall] (24 instances), [positive + negative; rise] (15 instances), [positive + positive; rise] (7 instances)⁸, and [negative + positive; rise] (6 instances). The order of frequency may look different from that of Tottie and Hoffman (2006) introduced earlier in table 1. The apparent difference arises from the fact that Watanabe (2017) took the nuclear

tone of the question tag into the analysis. If we only look at the syntactic property of the tag questions, we will obtain the same order of frequency; the [positive + negative] type provides 83 (68 + 15) instances, the [negative + positive] type yields 30 (24 + 6) instances, and the [positive + positive] type confers 7 instances.

If we concentrate on the intonation aspect, the rising anchors comprise 22.5 % while the falling ones occupy 77.5 %. The occurrence of falling anchors prevails. The occurrence of falling question tags (76.7%) is much larger than that of rising ones (23.3%). We may need to find other studies of the intonation of tag questions based on phonetic corpus to evaluate the appropriateness of the statistics in Watanabe (2017) ; unfortunately, I have been unable to find such kind of studies. The closest I have been able to find is Geluykens⁹ (1988). He discusses the role of “inversion-questions” (yes-no questions) and “queclaratives” (questions in statement form)¹⁰. He (p.472) collected 119 examples of inversion-questions from the database of the recorded conversation stored in the Survey of English Usage based at University College London. Of the 119 examples, 68 instances take on a rising nuclear tone whereas 51 instances assume a falling nuclear tone. In other words, the rising tone occupies 57.1 % and the falling tone comprises 42.9 %¹¹. The percentage difference between the use of two tones is 14.2. The similar percentage difference in the case of Watanabe (2017) is 53.3; the use of falling tones is much larger. The forms of question tags and yes-no questions seem to be similar on surface. Yet, I would assume that there is an essential difference in function between the two syntactic phenomena¹².

2. The description of tag questions in EFL materials

2.1. Tag questions in EFL materials in England

First, let us check how tag questions are introduced in EFL grammar textbooks published in England. The sentences ⑨ and ⑩ are the examples from an EFL grammar to illustrate it.

⑨ A: You closed the window, didn't you? (Murphy 2002: 84)

B: Yes, I did.

⑩ A: Lucia doesn't have a car, does she? (Murphy 2002: 84)

B: No, she doesn't.

Both in examples ⑨ and ⑩ the tag questions are presented as a question and answer pair; the first speaker asks a question and then the second speaker replies to it with an utterance starting with a "yes" or a "no".

Murphy (2002) is intended for pre-intermediate EFL learners.

Tag questions are introduced in the same way in an intermediate grammar textbook, Murphy (2004).

⑪ A: It's a nice day, isn't it? (Murphy 2004: 104)

B: Yes, beautiful.

⑫ A: Tim doesn't look well today, does he? (Murphy 2004: 104)

B: No, he looks very tired.

But an advanced EFL grammar book¹³, Hewings (2013), refers to the topic only briefly as in example ⑬:

⑬ We don't have to leave just yet, do we? (Hewings 2013: 227)

This will be because Hewings (2005, 2013) are designed to help advanced EFL learners who want to improve their proficiency in written English. Sinclair (1990: 433) comments¹⁴ that tag questions are most often used in spoken English.

How are the tag questions presented in the EFL textbooks teaching pronunciation? They are described in the same way in all levels of textbooks¹⁵; Marks (2007) is intended for elementary learners; Hancock (2003) is written for intermediate learners; Hewings (2007) is designed for advanced learners.

- ⑭ A: You're June Smith, aren't you? (Marks 2007: 103)
B: No, I'm Jane Smith.
- ⑮ A: Football's so boring, isn't it? (Hancock 2003: 126)
B: Yeah, I know. I hate it.
- ⑯ A: Mr. Simpson can be very charming, can't he? (Hewings 2007: 45)
B: Yes, he certainly knows how to turn it on.

The EFL textbooks for grammar and pronunciation do not necessarily provide both positive and negative responses for the preceding tag questions. The responses do not always take such conventional forms¹⁶ as “Yes, I did” and “No, she doesn't” as illustrated in examples ⑨ and ⑩ from Murphy 2002.

2.2. Tag questions in English teaching materials in Japan

In the communication-oriented English education in junior and senior high schools in Japan we tend to assume that tag questions are introduced as a question and answer pair to illustrate how to seek agreement or how to express doubt between the interlocutors in pre-intermediate teaching materials in Japan. Let us take a look at some introductory teaching materials.

- ⑰ A: This is a book, isn't it? (Ogawa and Yasuda 1961: 17)
B: Yes, it is.
- ⑱ A: This isn't a book, is it? (Ogawa and Yasuda 1961: 17)
B: No, it is not.
- ⑲ A: This is a new camera, isn't it? (Yasuda 1970: 134)
B: Yes, it is. I just bought it a couple of days ago.
- ⑳ A: But you had another camera, didn't you? (Yasuda 1970: 134)
B: Yes, I did. But I gave it to my brother.

The four pairs of examples above are an illustration of exercises using the method of pattern practice. The purpose of using examples like ⑰

and ⑮ will be to teach how to form a tag question and how to answer it, though this approach can be criticized that the practice required is just mechanical¹⁷. Examples ⑰ and ⑱ seem to be a result of improvement on the application of pattern practice. The second speaker in both examples not only gives an answer “yes” but also more information to develop the conversation.

Ogawa and Yasuda (1961) and Yasuda (1970) are good resource books to consult how a particular grammatical item was introduced to the pre-intermediate students when the method of pattern practice¹⁸ was widely employed in Japan.

The two books offer us an example of how the grammatical structure of English was taught in the 1960's and 1970's in Japan. We need to know what modern students are learning about tag questions. I consulted the Course of Study announced by MEXT¹⁹ in 2007 and 2017. Nevertheless, I have been unable to find a description on how the tag question is to be taught in junior high schools.

I explored two independent learning materials of English designed for junior high school students. The two books treat the topic as an item to be taught to third-year students.

Ogata and Kamiho (2012: 154-155) discuss tag questions with nine examples. I will quote two examples below.

⑰ You want a new computer, don't you?

(Ogata and Kamiho 2012 : 155)

⑱ You don't play baseball, do you? (Ogata and Kamiho 2012 : 155)

They are good examples of reverse polarity tag questions. The two questions can be answered with a “yes” or a “no”. Among the nine examples four cases illustrate the use of a form of *be* in question tags and five cases show the use of other auxiliary verbs in question tags. Yet, unfortunately, no example is given of how we can respond to them.

Kanatani (2016: 90-91) provides ten examples of reverse polarity tag

questions. He also discusses the use of a form of *be* and other auxiliary verbs in question tags. Then he goes on to give an example of positive and negative responses as follows:

㉓ You are busy, aren't you? (↘) (Kanatani 2016: 91)

㉔ You are busy, aren't you? (↗)

㉕ Yes, I am.

㉖ No, I am not.

It is to be noted that he indicates the nuclear tones of question tags, explaining that a falling tag is used when the speaker wants a confirmation and that a rising tag is used when one wants to get a yes/no answer.

Let us go over some textbooks currently used in Japanese junior high schools. I will take up three government-authorized English textbooks currently in use for third-year junior high school students.

㉑ The woman looked at Rudolf calmly, and smiled. "I fainted, didn't I?" she said. "I haven't eaten for three days." "Oh, no!" cried Rudolf. "Wait! I'll be right back." (New Horizon: p.102)

㉒ A: As a long jumper, you have taken part in the Paralympic Games three times, right? (Sunshine: p.34)

B: Yes, I have.

㉓ A: That's the temple built by Ashikaga Yoshimitsu in 1397.

B: You call it Kinkakuji, right? (Sunshine: p.112)

No example has been found in *New Crown English Series 3*. The sentence "I fainted, didn't I?" in ㉑ is an example of tag questions in reverse polarity. But its usage does not seem to be canonical because it does not demand a yes/ no response from the other party. The expres-

sion “right” in sentences in ㉒ and ㉓ is an example of what Tottie and Hoffman (2006: 306) call “invariant tags”.

There will be at least two reasons why the canonical tag questions are rarely used in junior high school textbooks.

The first reason is linguistic. Tottie and Hoffman (2006: 306) report that tag questions are used nine times as often in British English as in American English. They (p.307) further point out the necessity of investigating if American English use such invariant tags as *right*, *okay*, *huh*, more often. We could assume that the three textbooks have employed American English as a basis of their description.

The second reason is educational. The editors of the textbooks might have considered that tag questions were too difficult²⁰ to teach to junior high school students in Japan.

I would consider that the coverage of tag questions is not comprehensive enough from an educational viewpoint either in the independent learning materials or in the authorized textbooks.

There can arise two problems. The first problem relates to the descriptions of tag questions in Ogata and Kamiho (2012) and Kanatani (2016). Their account might give the learners an impression that they can make tag questions simply by placing a form of *be* or an auxiliary and a pronoun after an anchor clause and they might also assume that they can always reply with such short answers, “Yes, I am” and “No, I am not,” as indicated in Kanatani (2016: 91). Watanabe (2012: 79) call our attention to Fuchs and Bonner’s (2001: 124) description of questions and short answers. He quotes the following examples:

㉔ Will you mail this for me? (Fuchs and Bonner 2001: 124)

㉕ Can you mail this for me?

㉖ Would you mail this for me?

㉗ Could you mail this for me?

㉘ Sure (I will).

㉙ Certainly (I can).

③⑩ I'm sorry, but I can't.

The sentences in ②④, ②⑤, ②⑥, and ②⑦ are questions; the sentences in ②⑧, ②⑨, and ③⑩ are possible examples of a response to the preceding question. Watanabe (2012) points out that the questions employ one of the four auxiliaries *will*, *can*, *would*, and *could*; yet, the answers do not include *would* and *could*. He, therefore, concludes that the kinds of auxiliary verbs available in short answers cannot be automatically deduced from those employed by a preceding question. Watanabe (2012: 78) observes that there is a case where an expression that may seem syntactically possible is not actually used. He quotes Fuchs and Bonner (2001: 158) as follows:

③⑪ Could he work there? (Fuchs and Bonner 2001: 158)

③⑫ He [must (not), may (not), might (not), could (n't), can't, has (got) to].

He declares that the positive form “can” is missing although the negative form “can't” is given in the options. He suspects that the lack of “can” is not an accidental but a systematic gap in English.

The EFL learners should be warned against such a systematic gap.

I would consider that a pattern practice approach in the form of ③⑬ below could help the learners in Japan to acquire communicative ability to make a realistic response if two conditions are met when they participate in the practice: a target expression is grammatically well-formed; the language is used in an appropriate context which will ensure its grammaticality.

③⑬ [= ①⑨] A: This is a new camera, isn't it? (Yasuda 1970: 134)

B: Yes, it is. I just bought it a couple of days ago.

The second problem relates to the rare coverage of tag questions in

the textbooks. As I have pointed out in endnote (19), the use of tag questions seems to be unique in English. Comparing Ogata and Kamiho (2012) and Kanatani (2016), I have suggested that pre-intermediate learning materials need to show how we can answer tag questions. Watanabe (2012: 78) demonstrates that making a short answer to yes/no questions is not a mechanical process. Watanabe (2012: 81) stresses that the answer to a tag question is not necessarily a simple short answer. He takes up the discussion of tag questions in Murphy (2009: 100) with the following examples:

③④ A: You wouldn't have a pen, would you? (Murphy 2009: 100)

B: Yes, here you are.

③⑤ A: You couldn't lend me some money, could you? (Murphy 2009: 100)

B: It depends how much.

A: You don't know where Lauren is, do you? (Murphy 2009: 100)

B: Sorry, I have no idea.

He emphasizes that the answers to tag questions can be varied.

Watanabe (2012: 83, 85) further argues that tag questions, together with “reply questions”²¹ and “follow-up questions”²² play an important role in developing a conversation. He asserts that a Japanese student's utterance can end abruptly as in ③⑦ A but that it can be followed by another utterance as in ③⑦ B.

③⑦ A: I went to Tokyo Disneyland last Saturday.

B: Oh, did you? Was it fun?

The second speaker in ③⑦ helps to keep the conversation going by throwing such a reply question as “Oh, did you?” The speaker facilitates the communication by using a follow-up question “Was it fun?” The first speaker can automatically continue the conversation by answering it.

The Course of Studies (2007: 30; 2017: 72) take up the function of language to enhance a person-to-person communication. The practice of tag questions will help learners to develop their interactive skills to accomplish a two-way communication.

3. Investigating tag questions in the actual examples

3.1. Watanabe (2017)

In chapter two I assumed that a prototypical use of tag questions was to respond to them with a yes/no answer as illustrated in ㉞ below.

- ㉞ [= ㉡] A: You closed the window, didn't you? (Murphy 2002: 84)
B: Yes, I did.

I also assumed that a question and answer pair would be used to teach tag questions in textbooks. I consulted six books published in England and five of them were found to use that approach. I probed four independent learning materials and three current government-authorized textbooks published in Japan. The two learning materials were found to take that approach. Just one example of tag questions was found in one Japanese textbook. Besides, that example was not an illustration of canonical use of tag questions.

In Watanabe (2017) I collected 120 examples of tag questions from a radio drama. The purpose of investigation was to uncover the syntactic and phonetic behavior of tag questions. The focus of research was to describe the possible polarity combinations of an anchor and the question tag and to reveal the nuclear tones of the anchor and the question tag. Much effort was placed to collect the examples of tag questions. Yet, a supplementary effort was made to record “the preceding utterance” and “the following utterance” while a part of the drama was being transcribed.

Out of 120 examples of tag questions 74 instances are followed by a

linguistic response. Among 74 instances 30 cases employ “yes” or “no” as part of linguistic expressions. Among 30 instances 18 cases employ “yes” and 12 cases use “no”. To sum up, tag questions with a yes/no answer constitute 25% of all the examples; this type of tag questions may not be a prototype exemplar.

3.2. The pragmatic use of tag questions in discourse

Tottie and Hoffman (2006: 301; 2009: 141) classify their data of tag questions into six categories based on the pragmatic functions they fulfill in the context of verbal interaction: (a) informational function which is used to make a genuine request for information; (b) confirmatory function by which the speaker tries to get confirmation because they are not sure of what they say; (c) attitudinal function by which the speaker emphasizes what they say and do not expect an involvement or a reply from the other party; (d) peremptory function by which the speaker makes a statement of generally acknowledged truth and they intend to close off the debate; (e) aggressive function which acts as an insult or a provocation; (f) facilitative function in which the speaker is sure that what they say is true but want to involve the other party.

I will quote examples from Tottie and Hoffman (2009: 141).

The bracketed numbers following the notation of the functions indicate the percentage that each use of functions occupies in their data. The italic notations are theirs.

(a) informational (4%)

③⁹ You're getting paid for this, *are you?*

(Tottie and Hoffman 2009: 141)

(b) confirmatory (37%)

④⁰ I don't need a jacket, *do I?* (Tottie and Hoffman 2009: 141)

(c) attitudinal (18%)

- ④① ...she'll be in trouble, *won't she*, she often gets her own drinks any-way... (Tottie and Hoffman 2009: 141)

(d) peremptory (1%)

- ④② I wasn't born yesterday, *was I?* (Tottie and Hoffman 2009: 141)

(e) aggressive (1%)

- ④③ Ernest: ...I put six eggs on.

Peggy: you put what?

Ernest: put six eggs on *didn't I?* (Tottie and Hoffman 2009: 141)

(f) facilitative (36%)²³

- ④④ Teacher: Right, it's two, *isn't it?* (Tottie and Hoffman 2009: 141)

Pupil: *Mm.*

The functions “informational” and “confirmatory” can be encapsulated as “information-seeking”. The information-seeking use comprises 41% in their data. In Watanabe (2017) the replies to a tag question with “yes” or “no” occupy 25%. It seems obvious that we need to investigate more about the non-information-seeking functions of tag questions.

I would consider that a context where tag questions are used would be schematized as follows:

Schema 1

A: the preceding utterance

B: a tag question

C: the following utterance

At the end of 3.1 I noted that the research focus of Watanabe (2017) was on the phonetic and syntactic behavior of tag questions. In this section I will report the result of my investigation. I will put focus on

“the following utterance” as in schema one.

Geluykens (1988) offers two interesting observations on yes/no questions. He (p.496) states that there will be three kinds of responses to polar questions or yes/no questions: (1) confirmation (e.g. yes), (2) rejection (e.g. no), (3) statement to the effect that confirmation / rejection cannot be provided (e.g. perhaps; I don't know). The first and the second case will correspond to the information-seeking function of tag questions. My research will reveal the variety of responses in the third case.

Geluykens (1988: 470) points out that the answer to a yes/no question may not immediately follow the question. He provides two kinds of examples²⁴ as I quote below:

④⑤ A: do you want to go to the movies (Q1)

B: you mean right now (Q2)

A: yes (A2)

B: no sorry I can't leave just now (A1)

④⑥ A: do you like this painting? I hate it.

B: I think it's great actually.

Example ④⑤ illustrates a case where the second speaker asks a confirmation question before he answers the first speaker's question. The second speaker makes an appropriate response after that. Example ④⑥ illustrates a case where the first speaker puts a question and makes his own comment immediately. The speaker replies after that. Geluykens (1988: 470) argues, referring to Levinson (1983: 304), that the adjacency requirement for questions and answers is not absolute. When I collect the examples of “the following utterance” after a tag question, I will have to take into account that the relevant response may not come just after the question.

3.3. The Archers (2018)

3.3.1 The procedure of collecting data

I have obtained 15 sessions of *the Archers* available from the BBC's website and have managed to collect 65 examples from the radio drama, of which 58 examples are those of reverse polarity tag questions while the remaining seven are those of constant polarity tag questions. All the data are presented in the appendix of this article. For the purpose of acknowledging the data source, each example is accompanied by the broadcast date, and the minute and second of when a particular dialogue is uttered. The speaker's gender is indicated by F or M at the beginning of each line.

Wells (2006) is assumed for the rhythmic notations. The indicated rhythms are as follows: (a) a rhythmic beat as in '*great*, '*having*, '*Hana*, and '*back* in example (1), which is represented by a short vertical line placed as a superscript on the left of the word in question; (b) the location of a nuclear accent as in Ambridge and isn't in example (1), which is shown by the underline; (c) a falling nuclear tone as in \didn't in example (2), which is indicated by a slash going down from left to right; (d) a rising nuclear tone as in /can't in example (6), which is indicated by a slash going up from left to right; (e) a fall-rise nuclear tone as in ∨name in example (3), which is shown by the combination of the falling and rising slashes. The rhythmic notations are given only for the examples of tag questions.

3.3.2 The statistical summary of the collected data

The collected 65 examples will be classified and presented in the table format below. The classification is based on the ten types of tag questions proposed in Watanabe (2017: 150).

The size of corpus in this study is about half the size of the corpus used in Watanabe (2017): 65 examples versus 120 examples. How will

Table 5 Tag Questions with Rising Anchors in the Archers in 2018

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	2	2
Negative + Positive	2	2
Positive + Positive	0	0
Total	4	4

Table 6 Tag Questions with Falling Anchors in the Archers in 2018

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	24	9
Negative + Positive	10	7
Positive + Positive	1	5
Negative + Negative	1	0
Total	36	21

Table 7 Tag Questions with Rising/Falling Anchors in the Archers in 2018

Polarity of Anchor and Tag	Falling Question Tag	Rising Question Tag
Positive + Negative	26	11
Negative + Positive	12	9
Positive + Positive	1	5
Negative + Negative	1	0
Total	40	25

the corpus size affect the distribution of phonetic and syntactic properties of tag questions?

I would like to describe the phonetic properties first. Watanabe (2017: 156) reports that the rising anchors comprise 22.5% (27 instances) while the falling ones occupy 77.5% (93 instances). I have found in this study that rising anchors comprise 12.3 % (8 instances) while fall-

ing ones occupy 87.3% (57 instances). The occurrence of falling anchors prevails in both studies. Watanabe (2017: 156) reports that falling tags comprise 76.7 % (92 instances) while rising ones occupy 23.3% (28 instances). I have found in this study that falling tags comprise 61.5% (40 instances) while rising ones occupy 38.5% (25 instances). Both study reveal that the occurrence of falling tags is larger than that of rising ones.

Next let me discuss the syntactic properties. Watanabe (2017: 158) reports that the most frequent type of tag questions is (1) [positive + negative; fall] (68 instances), followed, in descending order, by (2) [negative + positive; fall] (24 instances), (3) [positive + negative; rise] (15 instances), (4) [positive + positive; rise] (7 instances), and (5) [negative + positive; rise] (6 instances). The present survey provides a slightly different order of frequency from that in Watanabe (2017) ; the most frequent type of tag questions is (1) [positive + negative; fall] (26 instances), followed, in descending order, by (2) [negative + positive; fall] (12 instances), (3) [positive + negative; rise] (11 instances), (4) [negative + positive; rise] (9 instances), and (5) [positive + positive; rise] (5 instances). The order of the more frequent combinations remains the same. Yet, the ranking of less frequent combinations have changed.

We could argue that a corpus with 65 examples is large enough to see the phonetic properties of anchors and question tags but it may be small to describe the syntactic properties of less frequent constructions.

A smaller corpus has provided us with two apparently rare examples as follows:

(65) M: Kenton's put a suggestion box on the bar.

F: Honestly, what those boys (are) like? 'Toby can 'do 'anything
 \normally, | \can he?

M: Favorite (names) so far: Luis and Emily.

F: Great. Right. Here we are.

M: Thanks for the lift.

(64) F: It's very kind of you. I'm grateful.

M: No more 'human be\havior, | \isn't it? When someone's under the weather.

F: Oh, I probably don't deserve this. Not after everything I've put you through.

M: Probably not. (The Archers 1st June 2018; 6: 20)

Example (65) is a case of constant polarity tag questions where both the anchor and the tag come in positive. The intonation of a question tag in such a case is usually described to be rising as is summarized in endnote (7). Yet the tag “\can he?” in example (65) assumes a falling tone. Example (64) is a case of constant polarity tag questions where both the anchor and the tag come in negative. Such a combination of an anchor and a tag is not widely accepted as is summarized in endnote (3).

If we combine the number of instances obtained from the Archers (2016) and the Archers (2018), the total number of instances will be 183. The examples (64) and (65) discussed above are excluded from the count as apparent exceptional cases. We will get the frequency distribution of five types of tag questions as follows: the most frequent type of tag questions is (1) [positive + negative; fall] (51.4%; 94 instances), (2) [negative + positive; fall] (19.7%; 36 instances), (3) [positive + negative; rise] (14.2%; 26 instances), (4) [negative + positive; rise] (8.2%; 15 instances), and (5) [positive + positive; rise] (6.6%; 12 instances). The lowest frequency of the type [positive + positive; rise] seems to be predicted. We will need to enlarge the phonetic corpus to know if the ranking above is stable.

3.3.3 A linguistic response following tag questions

This section will describe how a tag question is responded by a follow-

ing utterance. Out of 65 examples I have gathered from the Archers (2018) a coherent or direct response to a tag question is made in 37 cases. The coherent responses are observed in the following cases. The example number of the sentences in the appendix of this paper is quoted below: (2), (3), (6), (7), (8), (10), (11), (12), (13), (14), (17), (18), (19), (21), (22), (23), (25), (27), (28), (29), (30), (32), (33), (38), (39), (40), (42), (44), (47), (48), (52), (53), (54), (56), (58), (60), (62), (63).

In the remaining 28 cases the utterances made in response to a preceding tag question do not seem to constitute a direct answer to it. As a tentative naming I will call a case where a direct answer is not provided to a tag question “incoherent responses”. The “incoherent responses” are observed in the following cases. The example number of the sentences in the appendix of this paper is quoted below: (1), (4), (5), (9), (12), (15), (16), (20), (24), (26), (31), (34), (35), (36), (37), (41), (43), (45), (46), (49), (50), (51), (55), (57), (59), (61), (64), (65).

First I would like to describe the characteristics of incoherent responses and then go on to discuss “coherent responses”.

The incoherent responses can be grouped into five types. I will describe each case with a relevant example from the appendix.

The first type is a case where the first speaker poses a question and goes on to make his own comment before the second speaker gets a chance to make a response. This type includes examples (1), (9), (16), (20), (31), (37), (43), and (61). Example (31) is quoted below for an illustration.

(31) M₁: So what did Anisha say?

M₂: Nothing.

M₁: Didn't you tell her?

M₂: Well, there's 'nothing to tell, | is there? You just may use

Pip. Sue was being a bit friendly.

(The Archers 19 June 2018; 2: 44)

M₁: Friendly. I wish I had more friends like that.

In example (31) the first speaker (M_2) submits a question “Well, there’s ‘nothing to \tell, | \is there?” and immediately adds a comment “You just may use Pip. Sue was being a bit friendly.” The second speaker (M_1) responds to an expression “friendly”. The first speaker’s question is apparently disregarded.

The second type is a case where the scene changes in a drama or the drama itself is concluded by a speaker’s tag question. This type includes examples (12), (20), (26), and (57). Example (26) is quoted below for an illustration.

- (26) F: Because obviously I love her whatever decisions she makes. Or however she lives her life. ‘That’s ‘what ‘moms \do, | \isn’t it?
(The Archers 14 June 2018; 8: 25)

In example (26) a female speaker expresses how she feels about her daughter and the drama goes on to the next scene. I would think that the question is posed not only to the characters in the drama but also to the audience.

The third type is a case where the second speaker tries to change a topic addressed by the first speaker or to develop a conversation initiated by him. This type includes examples (4), (5), (34), (35), (36), (41), (45), (46), (49), (50), (64), and (65). Example (34) is quoted below for an illustration.

- (34) M: Strawberry cheese cake helps my brain.
F: ‘Not the \cheese cake, | \is it, buddy?
M: I think all relationships are equal. Don’t you, mom?
F: Yes, of course, really. (The Archers 7 June 2018; 7: 23)

In example (34) the second speaker (M) does not obviously answer the first speaker’s (F) question.

The fourth type is a case where the second speaker reveals his ig-

norance to the first speaker's question. This type includes examples (15), (51), (55), and (59). Example (55) is quoted below for an illustration.

- (55) F: I just don't wish. Oh, it doesn't matter. Forget I said anything.
M: You are. You are 'not 'having 'second \thoughts, | /are you?
F: I don't know.

Example (55) just illustrates what Geluykens (1988: 496) states about three kinds of responses to yes/no questions. It falls into the third case: statement to the effect that confirmation / rejection cannot be provided.

The fifth type is a case where a tag question is answered by another tag question. Example (24) is the only case I have encountered in this study. It is quoted below.

- (24) M: It's a business deal, pure and simple. Working out how to divide things up. So it's fair.
F: It's 'not at 'all about \finance, | \is it, Alistair? |
(The Archers 12 June 2018; 5: 36)
M: Well, we 'just want to 'get it \over with, | \don't we? W h e r e
can we park? (The Archers 12 June 2018; 5: 39)
F: On the street.

In example (24) the second speaker (M) responds to the first speaker's (F) question by another tag question and then changes a topic addressed by her.

Now I would like to discuss coherent responses to tag questions. Coherent responses can be divided into two kinds: a "yes-response" or a syntactically positive response and a "no-response" or a syntactically negative response. Among the 37 examples yes-responses comprise 24 instances and no-responses constitute 13 instances.

The 24 yes-responses are divided into two types: those with a liter-

al “yes” and those without. The responses with a literal “yes” comprise 10 instances. The remaining 14 instances are considered to be the cases without a literal “yes”. The examples of substitutive expressions are as follows²⁵: (11) It certainly did; (14) Of course, she can; (21) Ok; (22) Right; (32) Oh, of course; (48) That’s right. These examples will be readily interpreted as “yes”.

There are cases where a correct interpretation of an utterance can be obtained through the flow of conversation. I will take up two cases for an illustration.

(8) M: We 'won't 'need chande\liers, | /will we?

(The Archers 13 June 2018; 3: 32)

F: They are extremely tasteful and made especially from our key scores.

(62) M₁: 'Freddie's \picking again this year, /is he?

M₂: Maybe after his exam. (The Archers 8 June 2018; 1: 43)

In example (8) the second speaker (F) is trying to convince the first speaker (M) that they need chandeliers by describing the merit of particular items. Therefore, the second speaker’s statement conveys the implication “Yes, we will”, which contradicts the first speaker’s assertion.

In example (62) the second speaker expresses agreement to the first speaker’s assertion by offering the period when Freddie can help the first speaker’s work.

Now let us look at 13 “no-responses”. Among them seven instances come with a literal “no”. The remaining six instances without a literal “no” contain the following substitutive expressions: (19) Not right; (23) I suppose not; (40) Well, possibly not. The three examples will be readily interpreted as “no”.

As in the case of “yes-responses”, the “no-responses” also include the cases where a correct interpretation of an utterance will depend on the context. I will take up two cases for an illustration.

(39) (TV in the pub breaks down during a football match.)

M₁: It's not making any difference.

M₂: It's 'not looking 'too \good, | \is it? (The Archers 18 June 2018; 12: 06)

M₃: Maybe we should go home and watch it there.

(53) F: I mean you've seen them together.

M: Ha, ha, ha.

F: This is no laughing matter, Freddie. I mean (it) makes sense, actually. Lily's never had a proper boyfriend. She 'never 'brought \anyone home, | /has she?

M: Ah.

Example (39) is part of a scene in the pub in England. While the customers are enjoying a football match on a TV screen in the pub, the set suddenly breaks down. The pub keeper tries to make the TV work but fails. The first speaker (M₁) describes the situation and the second speaker (M₂) requests an approval from other customers in the place. The third speaker (M₃) expresses agreement by giving an alternative to staying in the pub. Therefore, his utterance conveys the implication “No, it isn’t”.

In example (53) the expression “ah” itself can denote various emotions: disappointment, pain, pleasure, surprise, sympathy²⁶. In the present case the best interpretation will be to understand the second speaker's (M) utterance as expressing his disappointment to the fact that “Lily has never had a proper boyfriend”. Therefore, his utterance conveys the implication “No, she hasn’t”.

4. Concluding Remarks

In chapter one we have discussed the limit of the previous studies

on tag questions. The main focus of research has been in the polarity combination of an anchor clause and the question tag. The subsidiary focus of research has been the intonation of the question tag. The representative linguistic functions of question tags are described as follows: (a) a rising tag shows a speaker's doubt or request for verification of the message expressed in the anchor; (b) a falling tag indicates a speaker's request for the acknowledgement of the message in the anchor.

In Watanabe (2017) I collected 120 examples of tag questions from a radio drama. Both a syntactic and phonological features of tag questions are investigated. It is to be noted that the intonation of an anchor and a question tag are described independently. I have acknowledged in chapter one that I made a mistake when I was classifying one example. I have corrected the classification and have revised four figures in the three tables where the result of a syntactic and a phonological analyses of the research is encapsulated.

The essence of the syntactic and phonological data has been kept intact.

The syntactic form of a question tag appears to be parallel to that of a polar question as we can see from the following examples.

④7 [= ⑨] You closed the window, didn't you ? (Murphy 2002: 84)

[a question tag]

④8 [= ④5] Do you want to go to the movies? (Geluykens 1988: 470)

[a polar question]

Is there any parallelism observed in terms of intonation between tag questions and polar questions? The frequency of falling question tags in the data obtained is 77.5% in *the Archers* (2016) and 61.5% in *the Archers* (2018). The occurrence of falling tags has been found to be larger than that of rising ones. By contrast, we have used the data given in Geluykens and have found that the rising tones comprise 57.1% for polar questions. We will need to collect more phonetic data of both tag and polar questions to unravel the mystery.

In chapter two we have investigated how tag questions are taught in EFL materials published in England and in Japan. The EFL materials teaching pronunciation, Hancock (2003), Hewings (2007), and Marks (2007) all introduce tag questions as a pair of a question and an answer as illustrated below:

④⑨ [= ①④] A: You're June Smith, aren't you? (Marks 2007: 103)

B: No, I'm Jane Smith.

We are led to assume that the use of a question and answer pair is prototypical in the usage of tag questions. When we look into EFL grammar books, we notice that a different approach is employed. Murphy (2002) and Murphy (2004) introduce tag questions as a pair of a question and an answer. Yet, Hewings (2013) doesn't.

When we examine teaching materials published and used in Japan, we get a different picture. I have checked two independent learning materials. Ogata and Kamiho (2012) take up nine examples of tag questions but they do not provide an answer to them. Kanatani (2016) offers positive and negative responses.

I have probed three government-authorized English textbooks currently in use for third-year junior high school students. To our surprise, I have been able to find only one example as follows:

⑤⑩ [= ②①] The woman looked at Rudolf calmly, and smiled. "I fainted, didn't I?" she said. (New Horizon: p.102)

The sentence "I fainted, didn't I?" in ⑤⑩ is an example of tag questions in reverse polarity. But it is not an example of information-seeking use of tag questions which is generally considered standard usage as we have seen in chapter one.

We need to find out the reason why the coverage of tag questions is limited in the textbooks used in Japan. We would like to know if the reason is educational or linguistic.

In chapter three I have investigated 65 examples of tag questions collected from *the Archers* (2018). The analysis of the data has revealed that the use of tag questions is not limited to an information-seeking function. It has also become clear that an answer to a tag question do not always begin with a “yes” or a “no”. Rather, other ways of responses prevail. I have proposed to call a direct answer to a tag question a “coherent response” and to name a non-direct answer to it an “incoherent response”.

Among 65 examples “coherent responses” comprise 37 instances and “incoherent responses” make up 28 instances. The number of “coherent responses” is larger than that of “incoherent responses”. However, among 37 examples, responses with a literal “yes” add up to 10 instances and responses with a literal “no” come to seven instances. The combined numbers of literal responses, 17 instances, constitute 46% in the “coherent responses”. Yet, the literal yes/no responses comprise only 26.2% in the total number of examples of tag questions collected from *the Archers* (2018). The percentage corroborates the statistics we obtained from the data in *the Archers* (2016). The occurrence of yes/no responses in the data was 25.0%. We could conclude that the information-seeking function of tag questions occupies a smaller part of their usage as Tottie and Hoffman (2009: 141) observe.

As we have seen in chapter two, the coverage of tag questions is insufficient in the EFL teaching materials used in Japan. The instruction of tag questions can begin from a pair of a question and an answer as EFL materials published in England do. But the editors of a textbook will need to bear in mind that the use of tag questions, which seems to be generally considered standard, constitute less than 30 % of the overall usage. The information-seeking function of tag questions can be taught in the pre-intermediate level. But that does not cover the overall usage of tag questions. The EFL learners will benefit in the intermediate and advanced level if they are introduced to how tag questions are used in an actual discourse. They will also benefit from knowing Wata-

nabe's (2012) two observations on the questions in English: (1) polar questions can be answered with responses other than “yes” and “no”; (2) the answer to a tag question is not necessarily a simple short answer.

As we have noted in endnote (19), Hudson (1975) and Tottie and Hoffman (2009) declare that the canonical structure of tag questions cannot be observed in other European languages. The unique structure of English will be one of the difficulties EFL learners may come across. I would consider that the real difficulty of mastering the use of tag questions arises after they have learned answering them with a simple “yes” and “no”; when they face the various responses to tag questions.

Acknowledgements

This research was partially supported by a grant-in-aid (言語文化研究所研究助成 2017) from Takushoku University. I would like to express my heart-felt gratitude to all the people concerned.

Notes

- 1 The term “tag questions” can be ambiguous; for instance, in the case of example ①, it may refer to the whole sentence “Your friends made a good job of it, didn’t they?” or the last part “didn’t they?” For the purpose of avoiding ambiguity, as I did in Watanabe (2017), I will follow Huddleston and Pullum (2002: 891) and designate ${}_a[...]$ part an “anchor”; I will employ the traditional usage of Thompson and Martinet (1986: 113) and call ${}_b[...]$ part a “question tag”. The term “tag question” is reserved to describe the whole structure, ${}_a[...]+{}_b[...]$. Broughton (1990: 262) states: “A question-tag is a kind of yes/no question which is added to a statement. The tag statement may be positive or negative. The two parts, statement and tag, form one sentence, a tag question.” Sinclair (1990: 433) likewise states: “A tag is a short structure that is added to the end of a statement to turn it into a question.... The whole sentence, consisting of the statement and the tag, is called a tag question.”
- 2 The examples quoted from the other documents are preceded by such a circled number as ① whereas the examples originally collected from radio dramas are preceded by such a bracketed number as (1).
- 3 We find some reference grammars referring to the [negative + negative] type other than Huddleston & Pullum. Broughton (1990: 263) states: “But the corresponding negative + negative question is both rare and menacing:

So I'm not to be 'trusted, 'aren't I?" Somehow, Broughton describes the nuclear tone of both the anchor and the question tag as taking a falling tone, whereas, by contrast, he describes the nuclear tone of the question tag in the [positive + positive] type taking a rising tone as illustrated in "This is 'your car, 'is it?" Quirk et al (1972: 392) describe the [negative + negative] type as "less usual" and they present the example as follows: "So he doesn't like his job, DOESn't he?" Quirk et al (1985: 813) repeating the same example and comment: "This type, however, has not been clearly attested in actual use." As Egawa (1991: 453) suggests, a fairly widespread reference to the [negative + negative] type can be attributed to Michael Swan's description on 'same-way' question tags. Swan (1980: §515.5) claim: "It is quite common to use affirmative question-tags after affirmative sentences, and negative tags after negative sentences" and provides a sentence: "So you don't like my cooking, don't you?". Swan (2005: §488.7) still asserts: "Negative 'same-way' tags are occasionally heard; they usually sound aggressive." and offers a sentence: "I see. You don't like my cooking, don't you?"

- 4 Tottie and Hoffman (2006: 302) and Tottie and Hoffman (2009: 134) admit that their data lack the notation of intonation.
- 5 It seems to be usually the case that the intonation of the anchor is rarely discussed. Leech & Svartvik (2002: 132) is an exception. They discuss the intonation of both the anchor and the question tag as follows:

(a) He likes his job, doesn't he?

('I assume he likes his job. Am I right?')

The notations in the example indicate that the anchor assumes a falling tone while the question tag takes on a rising tone.

- 6 The Archers' home page on BBC website informs us that the drama began in 1951 and broadcast on BBC 4 six days a week, Sunday to Friday, since then. It was first intended for the British farmers. The drama is set in a rural setting, a fictional village called Ambridge. The website states that the number of episodes ever broadcast has exceeded 18740. It also comments that "Listeners are occasionally intrigued to hear topical events reflected in that evening's broadcast." I would assume that the drama represents the current English of England both in terms of pronunciation and usage.
- 7 The occurrence of a [positive + negative] type with a rising question tag in table 3 has been corrected to 8 instances, which was indicated as 9 instances in Watanabe (2017: 156). The occurrence of a [negative + positive] type with a rising tag in table 3 has been corrected to 3 instances, which was indicated as 2 instances in Watanabe (2017: 156). The occurrence of a [positive + negative] type with a rising question tag in table 4 has been corrected to 15 instances, which was indicated as 16 instances in Watanabe (2017: 156). The occurrence of a [negative + positive] type with a rising tag in

table 4 has been corrected to 6 instances, which was indicated as 5 instances in Watanabe (2017: 156). The changes have had to be made because one example in Watanabe (2017: 154) was mistakenly placed in the wrong category. Example (104) “But happily for you, I’ve had a word with him. It hasn’t gone on your \website yet, | /has it?” should not have been placed in the category [positive falling anchor + negative rising tag]. It must be placed in the category [negative falling anchor + positive rising tag].

- 8 The seven instances reported in Watanabe (2017: 156) all assume a rising tone. My data seem to square with the usual descriptions in many technical books on grammar and pronunciation. They describe the [positive + positive] type as taking a rising tone: Alexander (1988: 258), Broughton (1990: 263), Cruttenden (2014: 296), Huddleston & Pullum (2002: 895), Leech & Svartvik (2002: 133), Quirk et.al (1972: 392), Quirk et.al (1985: 812), and Wells (2006: 49).
- 9 Bartels (1999: 5), which was published eleven years after Geluykens (1988), states: “...I am leaving the systematic analysis of tag questions to future effort, widespread as this utterance is in English.” Moreover, the examples in her study do not seem to be drawn from the actually collected data.
- 10 Corresponding examples are taken from Leech and Svartvik (2002: 130, 132) below:
 - (a) A: Is the dinner réady? [yes-no questions]
 B: Yes, it’s already còoked. (positive answer)
 B: No, it’s not còoked yet. (negative answer)
 - (b) You got home sáfely then? [questions in statement form]
- 11 I have done the percentage calculation myself. Geluykens (1988: 476) asserts that: “Rises, though relatively frequent, occur in less than 37% of the data.” This percentage seems to be misleading. In the beginning of his article (p. 467) he calls “rises, fall-rises, and fall + rises” as “rising intonation”. I would assume that the process of how this percentage was calculated as follows: (a) if we take 13 instances of fall-rise tones and 11 instances of fall + rise tones away from 68 instances of overall rising tones, we will be left with 44 instances; (b) if we divide 44 by 119, which is the total number of inversion-interrogatives in his study, we will get the percentage of 36.97. Geluykens seems to have wanted to know the percentage that the low rising nuclear tones would occupy in 119 tokens because in Geluykens (1988: 467) he quotes O’Connor and Arnold (1961: 55) and criticize them for regarding “low bounce” (low rise) as “unmarked tones” for yes/no questions. But it seems to me that the percentage of 42.5 that non-rising (probably falling) nuclear tones occupy in 119 instances is large enough to claim that the rising tones cannot be regarded as unmarked tones for yes/no questions. In Watanabe (2017) I included a fall-rise nuclear tone as part of rising nuclear

- tones.
- 12 The major claim by Geluykens (1988: 478, 482) is that the question status of an utterance is not necessarily signaled by rising intonation. He (p.478) asserts that “pragmatic cues are much more important for determining the statement / question status of an utterance.”
 - 13 Hewings (2005: 207) uses the same illustrative sentence.
 - 14 I looked into several reference grammars, but they do not discuss how tag questions are replied; the following reference grammars do not deal with the possible replies to tag questions: Alexander (1988: 257-260) ; Broughton (1990: 262-264) ; Greenbaum (1991: 102-103, 129) ; Huddleston & Pullum (2002: 891-895) ; Quirk et.al (1972: 390-392) ; Quirk et.al (1985: 810-813) ; Leech & Svartvik (1994: 127, 366). Only Sinclair (1990: 434) refers to “replying to tags” with the following examples:
 (a) A: It became stronger, didn't it?
 B: Yes, it did.
 (b) A: You didn't know that, did you?
 B: No.
 - 15 Hancock (2003: 126-127) provides a separate section for tag questions. The examples quoted from Marks (2007: 103) and Hewings (2007: 45) appear as part of the exercises on other topics.
 - 16 In Murphy (2011: 84) the answer “Yes, I did.” to the preceding tag question “You closed the window, didn't you?” has been changed into “Yes, I think so,” which seems to sound more communicative because it expresses the second speaker's attitude as well as a positive response.
 - 17 Watanabe (2012: 74) argues that the proper understanding of how to use “short answers” is indispensable in communicative activities. He defines short answers as a minimum response, which is not redundant nor impolite to the person who asked a question.
 - 18 Eguchi and Hayase (2018: 30) express doubt on how effective the communicative approach is, which has been implemented in Japanese high schools for nearly 30 years, to improve speaking proficiency of the students. They carried out an experiment of introducing their own revised approach of using pattern practice to their first-year students at college whose major is not English. They (p.40) report that the result of the oral test and the questionnaire, which were conducted on their students after 30 weeks of teaching, shows that their teaching method of incorporating the pattern practice is effective in improving their student's communicative ability.
 - 19 MEXT stands for the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.
 - 20 Hudson (1975: 23) states: “The syntax of tags is unpredictable: I know of no other language which has them--- the clause that produces the simple 'auxil-

iary-pronoun' structures of reduced interrogatives in general and of tags in particular...". Tottie and Hoffman (2009: 159) refer to the origin of tag questions in English and state: "No evidence has been found for influence from Celtic languages; the canonical tag questions appear to be uniquely English."

- 21 Watanabe (2012: 83) mentions that the term "reply question" is employed in Murphy (2011: 311). The examples are given in Murphy (2011: 84).
- 22 Watanabe (2012: 84) mentions that the term "follow-up questions" is employed in Carter and McCarthy (2006: 199-200).
- 23 Tottie and Hoffman (2009: 141) indicate that there are 4% of instances which are not included in any of the six categories. If the percentage of all the six categories are added, it will somehow come to 101%. Tottie and Hoffman (2006: 302) use the same statistics.
- 24 The capitalization and the punctuation follow Geluykens' style.
- 25 The numbers preceding the examples are those of the examples in the appendix.
- 26 The definition of *ah* has been taken from Collins English Dictionary on the web. (<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english> accessed on 12 November 2018)

References

- Alexander, L.G. 1988. *Longman English Grammar*. Longman: London.
- Bartels, Christine 1999. *The Intonation of English Statements and Questions*. Garland Publishing Incorporated: London & New York. [reprinted in paperback by Routledge in 2015]
- Broughton, G. 1990. *Penguin English Grammar A-Z*. London: Penguin.
- Hancock, Mark 2003. *English Pronunciation in Use Intermediate*. Cambridge University Press.
- Carter, R. and McCarthy 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge University Press.
- Cruttenden, Alan 2014. *Gimson's Pronunciation of English*. 8th edition Routledge: London and New York.
- Egawa, Taichiro. (江川泰一郎) 1991. 『英文法解説』 (*A New Guide to English Grammar*) Kaneko Shobo: Tokyo.
- Eguchi, Kyoko and Hayase, Hironori (江口京子 早瀬博範) 2018. 「大学生のコミュニケーション育成のためのパターン・プラクティスの試み」『佐賀大学全学教育機構紀要』第6号 pp. 29-42.
- Fuchs, Marjorie and Bonner, Margaret. 2001. *Grammar Express: For Self-study and Classroom use*. New York: Addison Wesley Longman, Inc.
- Geluykens, Ronald 1988. "On the Myth of Rising Intonation in Polar Questions" *Journal of Pragmatics* 12 pp. 467-485.

- Greenbaum, Sidney 1991. *An Introduction to English Grammar*. Longman: London.
- Hewings, Martin 2005. *Advanced Grammar in Use*. 2nd edition Cambridge University Press.
- Hewings, Martin 2007. *English Pronunciation in Use Advanced*. Cambridge University Press.
- Hewings, Martin 2013. *Advanced Grammar in Use*. 3rd edition Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney, Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Hudson, Richard A. 1975. "The meaning of Questions" *Language*, Vol. 51, No. 1, pp. 1-31.
- Kanatani, Ken 2016. (金谷憲)『くわしい英文法 中学1～3年』文英堂.
- Kasajima, Junichi et. al (笠島準一 他) 2016. *New Horizon English Series 3* 東京書籍.
- Leech, Geoffrey and Svartvik, Jan. 2002. *A Communicative Grammar of English*. 3rd edition Pearson Education Limited: London.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Marks, Jonathan 2007. *English Pronunciation in Use Elementary*. Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond 2002. *Basic Grammar in Use*. 2nd edition Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond and Smalzer, William R. 2011. *Basic Grammar in Use*. 3rd edition Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond 2009. *Grammar in Use Intermediate*. 3rd edition Cambridge University Press.
- Murphy, Raymond 2011. *Basic Grammar in Use*. 3rd edition Cambridge University Press.
- Niizato, Makio et al. (新里真男 他) 2016. *Sunshine English Course 3* 開隆堂.
- Ogata and Kamiho (小縣宏之, 上保匡子) 2012. 『学研ニューコース 中3英語』学研.
- Ogawa, Yoshio; Yasuda, Ichiro (小川芳雄・安田一郎) 1961. 『英語の文型と運用』平明社.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Sydney, Leech Geoffrey, Svartvik, Jan. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. Longman Group Limited: London.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman: London.
- Sinclair, John 1990. *Collins Cobuild English Grammar*. Collins: London and Glasgow.
- Swan, Michael. 1980. *Practical English Usage*. Oxford University Press.
- 2005. *Practical English Usage*. 3rd Edition. Oxford University Press.

- Takahashi, Sadao et al. (高橋貞夫 他) et.al 2012. *New Crown English Series 3* 三省堂.
- Tottie, Gunnel and Sebastian Hoffmann 2006. "Tag Questions in British and American English" *Journal of English Linguistics*. Vol. 34 No. 4 pp. 283-311.
- 2009. "Tag Questions in English The First Century" *Journal of English Linguistics*. Vol. 37 No. 2 pp. 130-161.
- Thompson, A. J., A. V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar*. Oxford University press.
- Yasuda, Ichiro (安田一郎) 1970. 『NHK 続基礎英語 英語の文型と文法』 日本放送協会出版.
- Wells, John C. 2006. *English Intonation An Introduction*. Cambridge University Press.
- Watanabe, Tsutomu. 2014. "On Describing Tag Questions in English" *Takushoku Language Studies*. No. 131. pp. 1-32.
- Watanabe, Tsutomu. 2017. "A Preliminary Phonetic Study of Tag Questions in English" *Takushoku Language Studies*. No. 136. pp. 127-175.
- Watanabe, Masahito. 2012. (渡辺雅仁) 「コミュニケーションのための英文法」『横浜国立大学 大学教育総合センター紀要』第2号 pp. 71-98.
- 文部科学省 (MEXT) 2007. 『中学校学習指導要領解説外国語編』
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf アクセス日 2018 年 9 月 8 日)
- 文部科学省 (MEXT) 2017. 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語編』 (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_10_1.pdf アクセス日 2018 年 9 月 8 日)

Appendix

- ① **Reverse polarity: positive rising anchor + negative falling tag**
(2 instances)
- (1) F: It's 'great 'having 'Hana 'back in √Ambridge, | \isn't it? And Jazzer's Well Smitten are here. (The Archers 5 June 2018; 1: 40)
M: Oh, who's that in the lane?
- (2) M: Oh, they were pretty hung over yesterday.
F: I 'missed 'quite a √party, | \didn't I? Emma was cold, though. I did pay to see David on a bouncy castle. (The Archers 19 June 2018; 1: 42)
M: Yeah, I know.
- ② **Reverse polarity: negative rising anchor + positive falling tag**
(2 instances)
- (3) M₁: Any names for the little one yet?
M₂: I wish.
M₁: Not long √name, | \is it? (The Archers 18 June 2018; 8: 10)
M₂: No. We still can't make a decision.
- (4) F₁: Anyway, 'murdering 'someone 'hardly means she's em √powered, | / does it? (The Archers 19 June 2018; 4: 07)
F₂: Well, it is a rather strong statement of how far she's prepared to go.
- ③ **Reverse polarity: positive rising anchor + negative rising tag**
(2 instances)
- (5) F₁: I was sorry to hear about Helen. 'Food and √farming water, | / doesn't it? (The Archers 14 June 2018; 10: 23)
F₂: I could tell she was disappointed.
- (6) F: They can 'get the T'V re √paired, | / can't they?
(The Archers 19 June 2018; 0: 40)
M: No. But last night was the big night: England's opening game.
F: Oh, poor Kenton.
- ④ **Reverse polarity: negative rising anchor + positive rising tag**
(2 instances)

- (7) F₁: We are 'not 'using it on \Friday, | /are we?
 F₂: No, that's fine. (The Archers 12 June 2018; 3: 51)
- (8) M: We 'won't 'need chande\liers, | /will we?
 (The Archers 13 June 2018; 3: 32)
 F: They are extremely tasteful and made especially from our key scores.
- ⑤ **Reverse polarity: positive falling anchor + negative falling tag**
 (24 instances)
- (9) M₁: She's never been any trouble.
 M₂: But she \shut it, | \isn't she? 'cause her poppy.
 M₁: Poppy? (The Archers 3rd June 2018; 6: 18)
 M₂: Sneaking into her bed all the time.
- (10) F: Well, you've 'spoken to her about all of this \already, | \haven't you, Brian?
 (The Archers 3rd June 2018; 7: 44)
 M: Oh, yes, she knows what options are.
- (11) M: Only it 'got a bit 'frantic in the \tearoom last week, | \didn't it?
 F: It certainly did. (The Archers 4 June 2018; 8: 00)
- (12) F₁: What are you gonna tell Well?
 F₂: I 'look \failed, | \haven't I? Honestly, none the wiser.
 (The Archers 5 June 2018; 4: 45)
 (The drama goes on to the next scene.)
- (13) M₁: You've got to sign for it, Rex.
 M₂: Eh, 'Pip's \got it, | \haven't you? (The Archers 5 June 2018; 4: 59)
 F: Oh, it's in his folder somewhere.
- (14) F₁: I'm afraid I haven't got my sunglasses.
 F₂: You can be super\cool without them, \can't you, mom?
 F₃: Of course, she can.
- (15) F₁: You were at the 'art exhi'bition in \Felpersham last week, | \weren't you?
 (The Archers 7 June 2018; 2: 46)
 F₂: Sorry?
 F₁: Jim dragged me along. Postmodernist romance or something. Really not my thing. I'm rather impressed. Weren't you?
 F₃: You never mentioned that, really.

F₂: No, I wasn't there.

(16) F₁: Shut up, Freddie.

F₂: Yes, be quiet. 'Friends are im\portant there, | \aren't they? And, I mean, so often things start as friendship. And then people enjoy being together. And it develops from there, perfectly natural.

F₁: Oh, I don't think that will happen with Jim and me.

F₂: Sorry, I didn't mean "you". (The Archers 7 June 2018; 3: 43)

(17) M: 'You and 'dad knew 'lots of 'different \people back then, | \didn't you?

F: Oh, yes. (The Archers 7 June 2018; 6: 27)

(18) F: Yes, LGBTQ community. Although there more letters now. I should really learn them. It's about being inclusive.

M: 'cause we are 'all \people, | \aren't we?

F: Yes. Shall we get the bill? (The Archers 7 June 2018; 7: 13)

(19) F: If I showed "willing" once, then you'd start to depend on me.

M: I'm not sure about that,

F: And I've got lots of other priorities which is the same for everyone in fact. So you have 'certainly got your 'work cast 'out in the \future, | \haven't you? (The Archers 8 June 2018; 7: 21)

M: Not right.

(20) M: What's Kate gonna do with it?

F: 'She knows \everything as well, | \doesn't she? And if she chose to, she could do some real damage. (The Archers 10 June 2018; 12: 34)

(The drama ends here.)

(21) F₁: Old flower jewelry.

F₂: The very best. It's \compromise, | \isn't it?

F₁: Ok. (The Archers 11 June 2018; 6: 33)

F₂: I've had enough of compromising, Lilian. That's not what I am looking for.

(22) F: But that's what these appointments were for. To mediate everything.

M₁: The first one will be more of an introduction, Alistair.

M₂: But we can get 'cracking 'straight a\way now, | \can't we?

M₁: Right. I'll see you there. (The Archers 12 June 2018; 3: 29)

(23) M: That wasn't too bad.

F: Really? I thought it was pretty intense.

M: We are 'not 'there to have a 'nice \chat, | \are we?

F: I suppose not. (The Archers 12 June 2018)

(24) (= 37)

M: It's a business deal, pure and simple. Working out how to divide things up. So it's fair.

F: It's 'not at 'all about \finance, | \is it, Alistair? |

(The Archers 12 June 2018; 5: 36)

M: Well, we 'just want to 'get it \over with, | \don't we? Where can we park?

(The Archers 12 June 2018; 5: 39)

F: On the street.

(25) F: There. Isn't the lighting beautiful?

M: Yeah. But chandeliers.

F: We 'want it to look ex'quisite when Ruth walks \in, | \don't we?

I mean, we want her to be wowed by the sheer sparkle of the evening.

(The Archers 13 June 2018; 8: 24)

M: Yeah. Okay.

(26) F: Because obviously I love her whatever decisions she makes. Or however she lives her life. 'That's 'what 'moms \do, | \isn't it?

(The Archers 14 June 2018; 8: 25)

(The drama goes on to the next scene.)

(27) M: Can you give me a hand, then?

F: Yes, \busy, | \innit? (The Archers 15 2018; 0: 35)

M: You got it.

F: Yeah.

(28) F₁: Good for Jill.

F₂: Oh, she's a \mazing, | \isn't she? Really amazing.

F₁: Yeah. Of course. (The Archers 15 June 2018; 4: 14)

(29) F₁: Pip just wants us to have a bit of an adventure. Like a guider flight.

F₂: Oh, yes. You 'will be \careful though, | \won't you?

(The Archers 17 June 2018; 1: 14)

F₁: Honestly, Jill, they are incredibly safety conscious these days.

M: We'll be fine, Mom. Don't worry.

- (30) M₁: We got 'married in 'Vegas on a \road trip, | \didn't we?
 M₂: Oh, yeah. Of course. (The Archers 18 June 2018; 9: 42)
- (31) M₁: So what did Anisha say?
 M₂: Nothing.
 M₁: Didn't you tell her?
 M₂: Well, there's 'nothing to \tell, | \is there? You just may use Pip. Sue was being a bit friendly. (The Archers 19 June 2018; 2: 44)
 M₁: Friendly. I wish I had more friends like that.
- (32) F₁: But you 'will be 'careful with \Monty, | \won't you? Next time Mango comes around. (The Archers 19 June 2018; 8: 49)
 F₂: Oh, of course. I wouldn't dream of leaving him unsupervised with little Mango.

Reverse polarity: negative falling anchor + positive falling tag

(10 instances)

- (33) F₁: I'm not sure. I 'mean it 'wasn't 'something you \talked about in those days, | \was it? I'm sure I had in a way. Because it is an issue, especially for teenagers. (The Archers 6 June 2018; 5: 20)
 F₂: Yes.
 F₁: Then he didn't know that he didn't have to go through it on his own.
- (34) M: Strawberry cheese cake helps my brain.
 F: 'Not the \cheese cake, | \is it, buddy?
 M: I think all relationships are equal. Don't you, mom?
 F: Yes, of course, really. (The Archers 7 June 2018; 7: 23)
- (35) F₁: But you are feeling all right.
 F₂: Ah, feeling quite tired. 'Not all that sur\prising at our age, | \is it?
 F₁: I don't feel too bad. (The Archers 7 June 2018; 9: 15)
- (36) M: I'm busy, Kate.
 F: I wish I was. I've got 'nothing to \do now, | \have I? Not one single thing. (The Archers 8 June 2018; 3: 34)
 M: Maybe you could help your mother. She's been rushing around all afternoon.
 F: Lucky her.
- (37) (= 24)

M: It's a business deal, pure and simple. Working out how to divide things up. So it's fair.

F: It's 'not at 'all about \finance, | \is it, Alistair?

(The Archers 12 June 2018; 5: 36)

M: Well, we 'just want to 'get it \over with, | \don't we? Where can we park?

(The Archers 12 June 2018; 5: 39)

F: On the street.

- (38) F₁: Excuse me, madam, you are about to achieve the biggest thing any of us can.

F₂: Having a baby? It 'doesn't 'take a 'lot of 'skill to 'get \pregnant, | \does it?

(The Archers 12 June 2018; 9: 29)

F₁: Bringing up a child, which, believe me, is very different and highly skillful. Why you've been so hard on yourself lately?

- (39) (TV in the pub breaks down during a football match.)

M₁: It's not making any difference.

M₂: It's 'not looking 'too \good, | \is it? (The Archers 18 June 2018; 12: 06)

M₃: Maybe we should go home and watch it there.

- (40) F₁: Hardy's art merely reflects the world in which he lives.

F₂: You 'can't e'xactly i'magine his 'novels 'passing 'Vectors \test though, | \can you? (The Archers 19 June 2018; 4: 34)

F₁: Well, possibly not.

- (41) M: You are 'not 'taking me \seriously, | \are you?

(The Archers 19 June 2018; 11: 47)

F: Do you want me to?

M: Well, no, not necessarily.

F: I can if you want.

- (42) F: 'Nothing 'actually \happened, | \did it?

(The Archers 19 June 2018; 11: 59)

M: No, of course not. And according to Pip, she's definitely got the message.

F: Well, that's all right, then.

⑥ Reverse polarity: positive falling anchor + negative rising tag

(9 instances)

- (43) F: And Debbie's agreed.
 M: That she's all for it.
 F: But, you 'did 'say 'three 'hundred \acres, | /didn't you? Well, where's the rest? (The Archers 3rd June 2018; 11: 58)
 M: That's the trouble.
- (44) M: If people do the same subject, then they are lucky. 'cause they can re'vise to\gether, | /can't they? (The Archers 4 June 2018; 2: 11)
 F: Yeah. But not all the time. I don't want her burning out.
- (45) M: In fact, if she wants to spend every single minute of every single day, hold up over there, |then 'that's her \choice, | /isn't it?
 F: That's what they say. Then hang on. What do you mean by that? Why would she want to?
 M: Thanks for the love. (The Archers 4 June 2018; 2: 54)
- (46) F: I know if kids are best together.
 M: But what (th) en?
 F: I don't know.
 M: Of course they're best together. I know them. I \brought them up, | /didn't I?
 F: Andrew's involved.
- (47) M₁: (Are you) \Tom, | /isn't it? (The Archers 8 June 2018; 5: 00)
 M₂: Yeah. Philip.
 M₁: (I) don't think we've been properly introduced.
- (48) M₁: It's, um, your 'land is on the 'housing de\uvelopment and so on, | /isn't it?
 M₂: That's right. Is that a problem?
 M₁: Not to me. (The Archers 8 June 2018; 5: 24)
- (49) M₁: You guys still want some strangers picking your child's name.
 It's im\portant, | /isn't it? (It) sets him up for life.
 (The Archers 18 June; 8: 42)
 M₂: Through character and everything. It's a huge deal.
- (50) F₁: When the bill came, Gavin insisted on paying.
 F₂: That's \nice, | /isn't it? (The Archers 10 June 2018; 7: 33)
 F₁: Except that you can leave a tip.
 F₂: Oh.

(51) F: And 'time is ex'tremely im\portant, | \isn't it, Brian?

M: Don't ask me. (The Archers 10 June 2018; 9: 10)

F: It is.

⑦ Reverse polarity: negative falling anchor + positive rising tag

(7 instances)

(52) F₁: Good afternoon.

F₂: Oh, Ruth, you've made it.

F₁: 'Not \late, | /am I? (The Archers 3rd June 2018; 2: 44)

F₂: No, No. I'm waiting for Adam to come back from feed in the hinds.

(53) F: I mean you've seen them together.

M: Ha, ha, ha.

F: This is no laughing matter, Freddie. I mean (it) makes sense, actually.

Lily's never had a proper boyfriend. She 'never 'brought \anyone home, |
/has she?

M: Ah.

(54) F₁: 'Luckily, it's not that 'hard to \work out, | /is it?

F₂: If it's obvious to you, me, Jake, Clarrie, Eddie, my mom, and pretty much
everybody knows her. (The Archers 5 June 2018; 12: 13)

(55) F: I just don't wish. Oh, it doesn't matter. Forget I said anything.

M: You are. You are 'not 'having 'second \thoughts, | /are you?

F: I don't know.

M: Because, a few weeks ago you said, you didn't love me. And that was
the most hurtful thing anyone's ever said to me.

F: I'm sorry.

M: So, are you?

(56) F: Was that how he spoke to Kate last week?

M: Ha, ha. He was worse with Kate.

F: 'You haven't \heard from her, | /have you, darling?

(The Archers 13 June 2018)

M: Nope. No, I said I'd ring you if I did.

(57) M: We're gonna have the best summer ever. How about it Fred? Not gonna
'let me \down, | /are you? (The Archers 13 June 2018; 12: 44)

(The drama ends here.)

- (58) F: I 'haven't 'missed \anything, | /have I? Birthday, anniversary....
M: No. Nothing like that.

⑧ **Constant polarity: positive rising anchor + positive rising tag** (0 instances)

⑨ **Constant polarity: positive falling anchor + positive rising tag** (5 instances)

- (59) F: What school is she at?
M: Ask Lily.
F: But she's \local, | /is she? Farming family?
M: How would I know? (The Archers 4 June 2018; 1: 40)

- (60) M: So you're 'showing your 'Herefords jut to 'please all the \kiddies, | /are you?
F: Um, mainly.
M: Rubbish. You want to sell them in your meat boxes. No offence.

- (61) M₁: 'That's Jinn's, | /is it? Josh's show trial is complete. I'll attach the signs on Sunday morning. (The Archers 8 June 2018; 0: 28)
M₂: It's impressive, Tom. Bridge farm is like a really dynamic place.
M₁: It is.

- (62) M₁: 'Freddie's \picking again this year, | /is he?
M₂: Maybe after his exam. (The Archers 8 June 2018; 1: 43)

- (63) M₁: (I've) just found out much is gonna cost to place it.
M₂: Bad \news, | /is it? (The Archers 18 2018; 7: 48)
M₁: Just a bit.

⑩ **negative falling anchor + negative falling tag** (1 instance)

- (64) F: It's very kind of you. I'm grateful.
M: No more 'human be \havior, | \isn't it? When someone's under the weather.
F: Oh, I probably don't deserve this. Not after everything I've put you through.
M: Probably not. (The Archers 1st June 2018; 6: 20)

⑪ **positive falling anchor + positive falling tag** (1 instance)

(65) M: Kenton's put a suggestion box on the bar.

F: Honestly, what those boys (are) like? 'Toby can 'do 'anything \normally,
| \can he?

M: Favorite (names) so far: Luis and Emily.

F: Great. Right. Here we are.

M: Thanks for the lift.

(原稿受付 2018 年 11 月 22 日)

〈研究ノート〉

共同研究〈諸文化圏・諸言語圏における呪い・穢れ・占い・迷信〉

Hoshi's magic of Korea

韓国の法師の呪術

村 上 祥 子

要 旨

法師の呪術は共同研究テーマの中で、呪いあるいは迷信の範疇としてとらえることができる。法師が実際の現場で行う呪術とは経文と設経であり、どのように祭祀を行うのか、経文にはどのようなものがあり、どのような効果を持つのか、どのように唱えられているのか、また祭場を飾る設経とは、具体的にどのようなものかを現場の調査を踏まえて考察した。

法師の出現は古く高麗時代の盲僧に連なる存在であるといわれ、現在は目が見える法師により継承されている。韓国で一般的に行われる巫堂による祭祀は、歌と舞により 請神 ⇒ 娛神 ⇒ 送神の構造で行われ、現世の招福を願うものである。それに対し、法師の祭祀は、経文を唱えることと、設経という祭場に取り付ける紙を切った造形により 請神 ⇒ 脅神 ⇒ 送神を行うことで、厄災を払い招福を願うことである。その構造に大きな違いがある。また巫堂は降神巫と世襲巫に分けることができるが、法師は学習によりその技術を修得することから学習巫として理解されている。

法師の経文や設経は口承が主であり、師匠によりそれぞれの特徴を有しており、一貫性はない。法師の祭祀は現在では座経といわれるが、実際に行われる経文についてその性質を概観した。また設経は三か所に天禁・内禁・外禁と称され取り付けられる。各設経の意味と、目的をその造形を通して考察した。

目には見えない法師の呪術は、耳を通して経文として、目を通して設経としてその効果を発揮するものである。

キーワード：法師・菩薩・座経・設経・経文

1. はじめに

呪術とは目に見えない超自然を認めた人間が認識し、その力を操ろうとするものである。これらは宗教的な行為に利用されてきた。ここでは韓国忠清道一帯に散見できる法師の行う座経で、どのような方法で呪術が行われているのかを考察する。特に設経という切り紙に注目したのは、日本の伝承切り紙に通じるものが韓国にもあるのかを考える機会があり、法師の祭祀で祭場を飾る切り紙の設経を知った。日本でも古来から折符や護符などがあり、また祭場を飾る伝承切り紙がある。これらは祈りや願いを具現化したもので、法師の設経は大掛かりであり一種の祭具であるといえる。日本と同様にそこに込められる思いは、超自然を信じる「呪術」の一種である。設経は法師が制作し、同じく呪術的効力を持つ経文を通してその効果を最大限に発揮することで、祭主の招福を願うのである。以来、現場調査を続けてきた。巫堂の祭祀が様々な色合いで祭壇を飾るのは違い、設経は白い紙を切って作られることが多いのは、日本の伝承切り紙と同じである。祭祀の場の祈りとその効果を表現する時に神聖をイメージする白が使われるといえる。韓国では法師の祭祀以外に白い切り紙だけで祭場全体を飾ることはなく、設経の造形が法師の呪術に見えるものとして表現していると考えられる。実際に設経がどのように創られ、目に見えない力の存在をどのように表現しているのかを知るために、ここで取り上げることにした。同じく経文も願いを音として表現する法師の呪術の実行のためのものであると理解できる。

巫堂の祭祀は歌と舞で、請神 ⇒ 娛神 ⇒ 送神という神を招いて歓待することで招福を願うものである。一方、法師の祭祀は、請神 ⇒ 脅神 ⇒ 送神という厄災を及ぼす悪神悪鬼を経文と、紙で作る設経で捉え、追い払うことで招福を願うものであり、その方法において大きく違う。

法師の行う祭祀については「座るクッ⁽¹⁾」「座経」「両班クッ」「踊らないクッ」「巫儀」などの名称があるが、ここでは座経という筆者が調査した趙富元法師の言葉に従うことにする。法師という名称は、判数^{パンス}が起源であり、これまで経文者・読経匠・経者・経客・経師・誦経・法師・経師などや、占いをする特徴から卜術・福師・術客・占師・問福者・占い師などと呼ばれてきた⁽²⁾。半数は盲人が中心であったが、今の法師は盲人ではない点を除けば大きく異なる点はない⁽³⁾。これらの名称は法師が行う呪術の目的を表していると考えるが、ここでは法師という呼称を使用することにする。また経文は巫経といわれる場合もあるが、ここでは経文とする。

韓国では朝鮮時代に儒教の規範で政治を行い、巫堂の行う祭祀は淫祀として何度も禁止されたが、実際は途絶えることはなかった。それは儒教が規範は教えたが、宗教としての信仰の面を補うことが出来なかったからである。ここでは同じように淫祀とされた法師の呪術である経文と設経について、現場で行われた祭祀を参考としながら論じる。

現代社会では宗教的な行為が減少していく中で「心のよりどころ」を何に求めるのかということは、大きな問題として今を生きる人々に突き付けられている。長い歴史の中で、かつて人はどのような信仰の中で生きてきたのか、またそれが現代にもみられることを知ることは、今後の宗教のあり方を考える上でも必要なことである。

2. 研究史

朝鮮半島における巫俗の研究は、植民地時代から始まる。村山智順が調査した『朝鮮の巫覡』に盲僧に関しての言及があり⁽⁴⁾、各地域の巫儀についての説明の中に忠清北道の読経巫儀は紙片を結びつけた枝と、悪鬼を祓う鬼神とで壺に悪鬼を閉じ込め、土中に埋めるという説明がある⁽⁵⁾。また経文に関して三十一篇余りが集録されているが、口伝により伝えられるも

のがほとんどであり、文字により伝えられるものも書写したもので経題も経文も雑多で整理されてないことを指摘している⁽⁶⁾。

続いて秋葉隆の『踊る巫と踊らぬ巫⁽⁷⁾』は盲人巫覡と彼らが主催した座るクツの実相を知ることができる点に価値がある。李能和は『朝鮮巫俗考⁽⁸⁾』で座経研究の端初を開き、盲人巫覡による座経に言及しており、韓国道教の流れを追跡しながら盲人巫覡が高麗時代の道僧であると指摘した。座経と関連する資料と典拠を提供している点で非常に価値があると評価される。

本格的な研究は1960年代からであるが、孫晋泰「盲覡考⁽⁹⁾」から始まった。盲僧を盲覡と命名して、盲覡は高麗時代から予言と占ト、そして座るクツを主催した事実と、朝鮮初期には国家から従8品の奉事職と正9品の副奉事、従9品の参奉職を除拝し、彼らを積極的に受容したことを明らかにした。続いて徐大錫の「経巫考⁽¹⁰⁾」では、巫堂を職能別に分類し、クツ巫と経巫、そして雑巫に分けて経巫を中心として座るクツと立つクツの実行形態、規模、様相などを比較した。座るクツを韓国巫俗に中国の馳驅儀の様式を収容して、道教・仏教の思想を混合した新たな形態のクツであると考えた。

金榮振は「パンス考⁽¹¹⁾」で男性の巫堂名称を調べ、孫晋泰が究明した高麗時代の盲覡を根拠にして、職能は預言、占ト、読経であるという事実を確認した。彼らをパンスと命名し、パンスの性格と盲人巫覡との関係を明らかにした。ラ・インジョンは「読経の名称考察⁽¹²⁾」で‘設位説経’が作作的に創られた造語であると批判するために読経について言及している文献の用例を細かく調べた。以上の論文は通史的な観点から経客と巫堂の性向を比較すると同時に、経客の役割を追跡した結果のものであるといえる。

一方、現場に注目した論議もなされた。金榮振は「忠清北道の巫俗研究⁽¹³⁾」で、忠清道で躍する巫堂たちの大部分が学習巫であるという事実

を統計から明らかにし、彼らの巫服、巫具、巫経などを紹介した。また座るクツの類型を祈福祭儀、救病祭儀、降神祭儀、慰霊祭儀に分類して、各演行の様相を詳細に取り扱った。オ・ムンソンは「忠清道の座るクツ研究—忠南 扶余地域を中心として⁽¹⁴⁾」で、忠南扶余域の経客と巫堂の関係、神堂の形成、祭次の構成などを調べ、座経の核心的な伝承地が忠道であると力説した。同じくイ・ピルヨンは「忠清地方の狂クツ」と「忠清地域の家庭信仰の類型と性格」で病クツと安澤クツの演行を現場理論的な立場から取り扱い⁽¹⁵⁾、続いて『鶏龍山クツ堂の研究』で鶏龍山のクツ堂の形成と類型及び法師の組織、そして彼らが所有している巫経をひとつひとつ提示した。

その他、李圭昌は『巫経考⁽¹⁶⁾』で全南地域の資料を中心として巫経が道教と仏教の影響を受け形成されたと主張した。ファン・ルシは「江原道地域の読経の現況と宗教的な特徴についての研究⁽¹⁷⁾」で病クツを中心として座るクツの種類と内容を調べると共に、クツの神格及び関連資料を立つクツと比較した。

しかし、座経は口承形態に一貫性がなく、祭場を取り巻く様々な模様の設経などから、模擬行為として穰災など直接的であり強い呪術行為が複合的に絡まっている。そして病クツや狂クツあるいは厄払いのような呪術が強調される祭祀と、救病系列の祭祀が存在するかという点、安澤クツや告祀のような祈福系列のクツ、神明クツのような降神系列のクツ、魂クツやチノギクツのような慰霊系列のクツも存在する。また簡単な形式や、内容の粗悪な呪文も存在するが、自然の位置を構造化した五行や仏教の真言を受容している一方、呪術の効果を高くするために辟兵や星占の原理まで受容している⁽¹⁸⁾。

「従って資料の実態を歪曲した“座るクツは経客が巫経を読む単純な形態のクツである”“座るクツは神将を呼んで邪鬼を威喝する一種の厄払いである”“巫経は粗雑な呪文である”という式の誤解を解かなければなら

ない。これは解放後に展開された韓国巫俗及び韓国巫歌の研究において‘立つクツと巫歌中心の伝統性の付加’という既存の偏狭な視角を克服する代案でもある⁽¹⁹⁾」という見解が出されている。

これまでの研究から法師については、かつては全国的にみられたが、現在では忠清道に残っているだけである。先に述べたように孫晋泰が「盲僧」は高麗時代の資料に見られると指摘しており、その伝統が古いものであることがうかがわれる。一方、巫堂には降神巫と世襲巫がある。降神巫とは本人が望まなくとも神病を患い、原因の分からない症状から抜け出すために巫堂になる場合である。世襲巫とは巫業をする家系に生まれ、家業を継いだ場合である。法師になった者に話を聞くと、神病的な症状を語る者が多く、はっきりとした降神の経験がなくとも特別な力があると自身は信じている。しかも家族の中に巫堂とならなかったとしても、その兆候が見られる者がいる場合が多い。そして法師の場合、自らに神降しをすることはなく、設経と経文は師匠から習うことになる。両方とも習得するには長い修行の時間が必要であり、法師は学習巫といえる⁽²⁰⁾。

3. 法師と菩薩

巫堂の行う祭祀は、祖先神をもてなし満足させて送ることを目的として行われる。そうすれば生きている子孫に幸せを招くことが出来ると考えるからである。しかし法師の儀礼は、疫災をもたらす悪鬼を脅かして捉え、排除するために行われる祭祀である。そのために経文の力と、設経で法師の呪術力を高め、一体となったものが座経であると理解できる。座経の現場では巫堂は菩薩と称される。ここでは菩薩の名称を使うことにする。

法師に神々が憑依することはないので、かつては座経が行われる村には竿掴みという神降しをする竿を持つ受け手がおり、そこに憑依させていたが、時代の変化により都会化した村ではそれを担う者がいなくなった。そ

のことが一層、法師と菩薩の関係を密接にしたといえる。菩薩と法師は悪鬼を捉えるときには、菩薩が竿掴みの役をし、両者の協力で壺に悪鬼を閉じ込める。現在の座経は、菩薩との協力関係によって成り立っている。従って、巫堂（菩薩）の祭祀に法師の悪鬼を排除する方法が加わったと解釈できる。菩薩は問題を抱える依頼者と面談して、原因を占いで明らかにし、護符で解決できない場合に、どのような祭祀を行うのかを決定する。祭祀の期日が決まると、法師に連絡して招聘する。本来の法師がする祭祀は、法師と竿掴み役とで行っていたが、時代の状況変化により法師の役割は菩薩の依頼で経文をあげ、祭場の祭具の制作をするという補助的な存在となった⁽²¹⁾。

以上のように、依頼者から菩薩へ、菩薩から法師への連絡が来て初めて祭祀の場が設けられることで、法師は主導的立場から、補助的立場へと変化し、菩薩からの依頼を待つしかないのが現状である。祭祀での設経は法師が準備するが、これは時間がかかり座経の内容や規模により変わるし、場合により簡素化される。

4. 法師の呪術

法師の呪術とはどのような意味を持ち、どのように行われるのかを知るため、実際の座経を調査した結果を交えながら考察してみたい⁽²²⁾。上記で述べたように法師の呪術は、大きく分けて二つである。それは経文と設経である。この二つで法師の力を強め、悪鬼を捉え、疫災を祓う。

経文は師匠である法師により変わるが、誰でも知っていなければならない基本的な経文は玉樞経・玉甲経・寄門経・天地八陽経である。これらを組み合わせて座経の目的に沿って唱える。

調査した座経（1999年3月16日）では、遂邪壇と靈駕極楽壇が作られた。遂邪壇には、その場に招く神将名を朱書きした短冊と、紙を様々な形

に切ったものが設営された。法師はこれを設位設陣と称するという。遂邪壇は内禁・天禁・外禁に分かれており、方位は重要でなく八卦による鬼門がその日どの位置にあたるのが重要であるという。祭壇の高さは祭祀により考慮されるが、神将の力を示すものなのでなるべく高くするという。霊駕極楽壇は、若くして独身のまま死亡した男女を結婚させあの世に送る儀礼である。独身のまま亡くなると一番怖い鬼神となると言われ、現世に生きる人に悪い影響を与えると考えられている。ここでは法師の脅神と菩薩の娛神が同時に行われたことを意味している。

4-1. 経文

祭祀の場で唱えられる経文は、経力を言葉で示すことである。座経で読まれる経文の種類は、玉樞経・玉匣経・千手経・天地八陽経・山神経・龍王経など数十に及ぶ。法師たちの力量と師匠から習ったことの差によって法師が知る経文の種類も差がある。重要ないくつかだけを知っている場合もある⁽²³⁾。

経文は口傳もされているが、文書による習得も多く、経文の本が発行されている場合もあり、全国のどの地域でも同じ経文が口誦されている。ただし祝願・徳談・解冤詞などの経文は固定されているものではなく、一般の人々が容易に分かる内容である⁽²⁴⁾。

安相敬(2006)によれば、忠清道で伝承される経文の資料や研究のテキストは、座経の経文を包括したものと考えられる。問題は伝承の主題として多くの法師は体系的な教育を受けていない高齢者であり、漢文の文語体で構成されている経文の意味をすでに忘れ去っていることである。また現場での経験では、90%に至る法師が座経の辭説⁽²⁵⁾的な意味は度外視して、各篇のあらましや傾向だけを知っている状態で、単純に暗記しているに過ぎないことである⁽²⁶⁾。

結局、各経文の内容は正確性に欠けるという事実である。同じく安相敬

（2006）は漢文で伝承されている正確と思われる資料をまとめ、二十六の資料からその類型と座経時に使われる名称をどの法師が使用しているかを調べている⁽²⁷⁾。

経文の名称も各法師によって違う場合も見受けられると考えられる。筆者が調査した一例に2008年9月8日 病クツ（安澤クツ）⁽²⁸⁾ からみると、まずは菩薩による山神祭から始まり、山神祝言で不浄を払い、病氣（眠れない、気力がない）を治して欲しいことを神に告げる。すなわち、この日行われる祭祀の目的をまずは述べる。次に法師が経文を唱えるが、その順番は次の通りである。

① 初経 → 太乙保身経 → 不浄経 → 神明告祝願 → 山神
山王経 → 大監祝願 → 病者祝願 → 堂山経 → 龍王経

これが終わると、供えてある水と酒を取り換え、ここから法師の経文が本格的に始まる。

② 初経 → 太乙保身経 → 12神明祝願 → 祖上祝願 → 六十甲子解冤経が唱えられるが、この部分がこの日の核心的な経文となる。

終わると、菩薩による祖先神の神降しが始まり、祭主の悪いところを指し示し、口寄せもする。そして祭主はござに巻かれ、全身を打ちつけられて、体内にいる悪鬼を退治すると、祭主は立ち去り、最後に法師が

③ 内殿祝辞（客床祝願） → 安心経（安慰安定経）を唱えることで、この座経は終わる。

座経の内容を簡単に説明すると、座経を挙げることを伝え、祭祀の場の神に対してまずは経文をあげ、次にこの日に請奉する神や神将に対して、悪鬼を捉え、消滅させるための経文をとえなが、神統を羅列することから始まり、神兵の結陣、八門大蔵経、鬼神の捉擒などが続き、鬼神に対する攻撃的な内容を持つ。最後に神や神将に感謝を込めて送り出すという構造になっている。

座教における多様な経文の分類をすると、内容と機能により遂邪経・家

神奉安經・祝願經に分けることが出来る。逐邪經は神を呼び、鬼神を追い払ったり捕まえて消滅させるために読まれる経文で、鬼神を威喝して怒鳴り神将・神兵に命令して、神陣を立て鬼神を捕まえ結託して処置する内容が中心である。家神奉安經は成主祖先など家庭守護神を奉安する経で、祝願經を読む前と読んだ後に読まれる経である。祝願經は神将祝願經文と家神祝願經文に分けられるが、神将祝願文は神将の威力を賞賛し、神将の活躍を励ます内容で、逐邪經と一緒に読まれる⁽²⁹⁾。

ここに招かれる神将たちの名称を見ると、それ自体がすでに天文や五行の規則が含まれていることがわかる。即ち貧狼、巨門、禄存、文曲、廉貞、武曲、破軍、左補、右弼などは古代擬似天文学の観点から吉星とされている。次に九星〔北斗七星及び左・右補弼星〕であり、神将の名称にすでに‘天文の規則’が内在している。だから吉星の神助を応用して不浄的な存在を除こうとする事実を推し量ることが出来る。五方と五色を組み合わせた神将が陰陽数あるいは五行と関係している所に降臨している⁽³⁰⁾。

安相敬（2006）は座經が韓国伝統に基盤を置きながらも、より強力な呪力を確保するための手段として中国古代呪術を収容して発展したという立場から座經の形成と発展を推測した。そしてまた韓国伝統信仰に基盤がある神格と道教の諸神と同一の位置から祈願の対象としての地位を確保していると述べている⁽³¹⁾。

法師本来の目的である逐邪經は、仏經の形式を模倣した偽經であり、逐邪經にはトルゴル經のように呪文の羅列で一貫しているものもある。経文は長くなく、連続で呪力を祈り、雑鬼の侵奪を祓い、天氣に猛威を振るい、憂患から病者を救うことの内容である⁽³²⁾ という。

神に対する認識と呪術を強調する方法は降神巫と同じでありながら、経文で悪鬼を排除するという方法は、降神巫や世襲巫とは違う様相を見せている。このような法師の呪術性は、七世紀以後から本格的になり、古代時代には咀呪の厭勝〔*お守り〕を主として全域にまたがり、蔓延し、法師

の呪術行為は国王が乗り出し、徹底して崇仰したことを確認した⁽³³⁾ という。

4-2. 設経

設経とはこの場に招く神霊の名前を書いた短冊と、神霊の姿や、悪い鬼神を防ぎ、捉えて動かないようにする形を表した切り紙でできている。設経制作も法師により差がある。

調査した座経は、1999年3月16日に、韓国忠清南道泰安郡所遠面法山里696-1の趙富元法師の自宅で行なわれたもので、設経がいかに詳細に祭祀の目的を現わしているかを考察する⁽³⁴⁾。この日の設経は大きく分けて遂邪壇と霊駕極楽壇である。

〔1〕 遂邪壇の設経図

遂邪壇の設経図の取り付けは、内禁と天禁と外禁に設けられる。内禁とは部屋の中に設けられ、天禁とは内禁前の天井の中央から八方向に広げて吊るすものであり、外禁とは雑鬼が安宅に入ってくるのを防ぐために屋根の庇の下につけるものである。その一つひとつにどのような設経が設けられたのかを詳細に見ることにする。

1) 内禁

部屋の一方の壁に朱砂で書かれた神将位目を貼る。何枚の神将位目を貼るのかは、祭りの種類・性格・期間により決定する。この日は、太上老君玉皇上帝と両天尊を中心に配して十二位の大王と神将の位目を貼った。

奉請 太上老君玉皇上帝之位

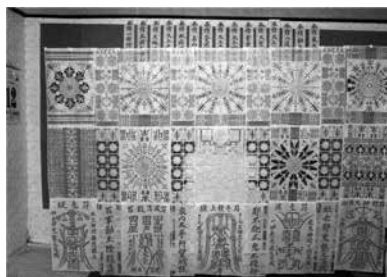
奉請 九天應元雷聲普化天尊之位

奉請 北斗證明大聖天尊之位

奉請 素車白馬大元帥大神将下降



写真① 内禁 神将位目と祭壇



写真② 設経

奉請 大聖北斗七元星君下降
奉請 名山大川山王神将下降
奉請 水府四海龍王神将下降
奉請 天上天下捉鬼神将下降
奉請 天土地府遂鬼神将下降
奉請 八道相生奇門神将下降
奉請 動土禁徐五岳山王下降
奉請 天地造花風雲神将下降
奉請 玉府執甲劍舞神将下降
奉請 一劍除神兵馬大王下降
奉請 東方甲乙青龍神将下降

これらは道教的な神を中心としているが、神々をこの場に呼び、奉り請願することを表している。

その前に四段になる壇が作られた。祭壇の各段には米と果物が供えられ、一番上には容器に入れられた米にロウソクを立て、白糸が掛けられる。向かって左側には、神将竿が米を入れた容器に立てられ、そこに水が供えられる。神将竿は、長さ 80cm のクヌギに白い紙を切ったものを巻き

つけて作られている。

その前には祭壇を隠すように設経2枚と護符1枚を1連として5連の設経が吊るされる。向かって左からまとめると以下のようになる。

- ① 上下に鉄網の模様があり、中央には陣法的一种である円央陣を形どり、雑鬼を生け捕りにした姿、囚鬼の漢字（鬼を獄に閉じ込めるという意味）、符籙本（甞の刃をかたどった）の模様がある。

次に両端に百殺（すべての祟り）⁽³⁵⁾と‘禁’の漢字があり、生け捕られた鬼神の姿が各4個あり、真ん中に囚鬼の文字が左右対称にある。最後に符籙がある。白馬大神将符で、右に素車白馬大元帥大神将、左に下降来臨擁護家中とあり、白馬が引く白い馬車に乗った白馬大元帥が天から降りてきてこの場に臨み、家内のすべての人々を包み保護するという意味がある。

- ② 上下に鉄網の模様、中央には円央陣、周りに人皇大帝という漢字と刀の先を表わす模様が丸くなっている。

次に上下に禁邪の漢字と鉄網の模様があり、中央に円央陣とそれを8人の神将が丸く取り囲んでいる。四隅に符籙本が模ってある。

最後に遂鬼符がある。これは雑鬼を追い払い護符である。右に遂鬼神将降臨来臨、左に一切悪鬼遂鬼消滅とある。

- ③ 上下に鉄網の模様、円央陣とそれを取り囲んで天皇大帝の文字が8個と四隅に符籙本の模様がある。

次に四君子、菊・梅・竹・蘭を四隅に配し、中央の花の上に壽福、左右に康寧の文字がある。

最後に壇上禮斗符がある。祭壇に奉った神霊にお礼を申し上げる符籙である。右に補處日光菩薩、中央には28の星座と3万3千の神霊が鬼神を捉えるという内容である。左は左補處日光菩薩の文字がある。

- ④ 上下に鉄網の模様があり、円央陣の周りに地皇大帝の文字が8個ある。その間には刀と槍の模様がある。

次に邪禁邪の文字があり、円中央陣を取り囲むように三奇と八門の文字が8個ずつある。三奇とは宇宙の奥妙な気運であり、八門は気運が通う門であり、ここでは陣法的一种である八門陣を意味している。最後に百殺消滅符がある。‘百’は‘すべてのもの’を表わし、‘殺’は不吉なことや鬼神が身体にとりついているから、この護符は五行の良くない厄運に対するもので、やってはならないことをしたために起きる厄をすべて消滅させるためのものである。

- ⑤ 上下に鉄網の模様があり、円中央陣を8人の神将が取り囲んでおり、その間には刀の先がある。

次に中央に縦に金・木・水・火・土・五行陣の文字があり、左右に鉄網の模様がある。最後は捉鬼符である。鬼神を捕まえる符籍であるが、右に捉鬼神将擁護壇上、左に妖亡邪鬼能之消滅の文字がある。これは鬼神を捕まえる神将が祭壇を守り、保護し、要望する邪鬼（悪鬼）たちをうまく消滅させるという意味である。

これらの間には「妖亡邪鬼能之消滅」、「邪不能正鬼不侵神」、「家内太平所望成就」、「百事動土徐殺消滅」と書かれたものがある。そしてその前に鉄網といわれる網目に切った紙をいっぱいに広げて、悪鬼を捕まえる。両脇には円錐形の鉄網がある。

以上、座経の目的を切り紙で表し、悪鬼を捉え排除するための装置である設経図は、なによりも精密に作られており、造形美に優れているのに驚くが、模様として決められたものが伝承されているのではなく、各法師の創意工夫により作りだされるものである。座経を行なうに際して、経文と同じほど重要である設経は、座経をより効果的に目に見える形として提示する信仰の心と願いを伝える造形として作り上げられているといえる。

設経図には、円中央陣が多くあるのが目につく。趙富元法師の説明によれば、鬼神が難しい円の形を嫌いなためであるという。形は、「人間の心の深層を無意識のうちに表わすが、そればかりではなく、人間の精神や文化

をも表わす。心は個人の内に固有に存在するが、それが民族や時代の傾向を集め、人間として生きる決意と方向性をもつときに、人間精神を形づくっていく。そして人間精神は、時代や状況と対応する文化をつくりあげていくのである⁽³⁶⁾。」形は人の心を表わすものであるだけでなく、それは人の精神や文化をも映しだし、時には、民族や時代の特徴も映し出す。設経図に多く円中央陣が使われるのは、円が「人間の根源的なもの、あるいは人間の誕生以前の神や宇宙を含めた元



写真③ 設経 鉄網

型心理と関係がある⁽³⁷⁾」形であり、人の根本的な無意識の世界を映し出し、円中央陣は、円の中央を中心として広がる円錐螺旋（等差螺旋）として、「中心から拡大へと、遠心から中心へと無限に生から死へ、死から生へと変転、循環していく無限大の運動がある⁽³⁸⁾」形として、韓国の信仰の基本理念ともいえる生から死へ、死から生への願望を形として表現しているのではないかと考える。今日の韓国でも日常生活のなかで、円の造形を以外に多く見つけ出すことができるのは、このような信仰心理と無関係ではないのかもしれない。

一番下にある符籙は、鬼神の侵入を防ぎ、退散させるものである。符籙は、韓国で古くから伝わる鬼神の撃退法である⁽³⁹⁾。設経は災いをもたらす鬼神が嫌いなものを主として造形として作り、飾ることによって鬼神に対峙しようとする気持が強く表現されるものであるといえる。これは、「読経は鬼神を追い払う形式で、鬼神をなだめて送る巫堂のクツとは根本的な差異がある⁽⁴⁰⁾」といわれるように、巫堂の行なうクツの精神構造とは違ったところから出発している祭礼である。

部屋中にめぐらされた設経図の前にも紙で作られた鉄網の様子は、鬼神を逃さないように、捕らえ閉じ込める為のもので、座経の根本目的が逐邪にあり、鉄網は設位設陣に欠かせない核心的な要素である。鉄網は、平たく作られた一般鉄網と、円錐形の鉄網に分かれており、機能によってまたいくつかの種類に分けられる。囚鬼鉄網は、形は円錐形の鉄網と同じであり、鬼神を捉え、閉じ込めるものである。

2) 天禁

天禁とは、逐邪壇前方の天井に直接八方に広げて細長い鉄網を伸ばし、貼り付けられる。八方に伸びたところを円形になるよう細長い鉄網で3重に繋ぐ。天井に直接、日本の神社にある天蓋を取り付けたようにみえるが、これを八陣禁絲という。八方の鉄網の先に各神将の名前が朱砂で書かれ吊り下げられる。

その位目は、

- 艮方休門神将
- 震方驚門神将
- 巽方傷門神将
- 離方杜門神将
- 坤方開門神将
- 兌方休門神将
- 乾方死門神将
- 坎方景門神将

である。

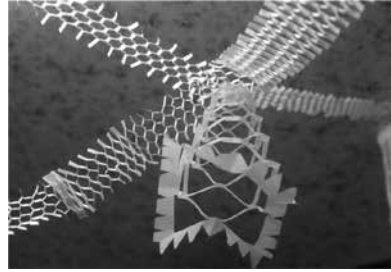
各方位と門の種類はその日の干支により変化する。また五方（東・西・南・北・中央）に、ここを担当する神霊の名前を朱砂で書いて吊るす⁽⁴¹⁾。

東は「東方甲乙青龍神将下降」

西は「西方庚申白虎神将下降」



写真④ 天禁



写真⑤ 天禁の鉄網

南は「南方丙丁朱雀神将下降」

北は「北方壬癸玄武神将下降」

中央は「中央戊己句陣騰蛇黄帝神将」

五方の神将位目の書かれている短冊の両端は、上に向かって斜めの切り込みがあるが、これは神将の威厳を表わすものであり、雑鬼を怖がらせるためのものであるという。下には五行の思想から各方位の色に合わせた青龍は青、朱雀は赤、玄武は黒、黄帝は黄の護札をつける。ただ西の白虎の白は目立たないので、西方浄土を行き来する神霊である戸口別星⁽⁴²⁾の色である緑をつける。これは飾りとして神将の威厳を引き立たせ祭壇を華やかにし、位目が風に吹かれないように重しにもなる実質的な機能をも持つ。

八陣禁絲には円錐形の鉄網を吊るし、雑鬼たちに休む所と思わせ、実は捕らえるために誘導する雑鬼依支網を吊るす。以上、天禁は八方を守る神将与五方の神将の威力により鬼神を捕らえ、鉄網に閉じこめるためのものである。

3) 外禁

外禁は、雑鬼たちが安宅に入ってくるのを止めるために設置するもの

で、本来は屋根の庇の下につけられるが、この日は家の外にある塀の上につけられた。二十八宿鉄網をはって、これに二十八宿（二十八の星座に相当する神霊⁽⁴³⁾）の名前を朱砂で書き吊るすが、以下の通りである。

1 角星	光一到遂鬼消滅	2 亢星	光一到遂鬼消滅
3 氏星	光一到遂鬼消滅	4 房星	光一到遂鬼消滅
5 心星	光一到遂鬼消滅	6 尾星	光一到遂鬼消滅
7 箕星	光一到遂鬼消滅	8 斗星	光一到遂鬼消滅
9 牛星	光一到遂鬼消滅	10 女星	光一到遂鬼消滅
11 虚星	光一到遂鬼消滅	12 危星	光一到遂鬼消滅
13 室星	光一到遂鬼消滅	14 壁星	光一到遂鬼消滅
15 奎星	光一到遂鬼消滅	16 婁星	光一到遂鬼消滅
17 胃星	光一到遂鬼消滅	18 昂星	光一到遂鬼消滅
19 畢星	光一到遂鬼消滅	20 觜星	光一到遂鬼消滅
21 參星	光一到遂鬼消滅	22 井星	光一到遂鬼消滅
23 鬼星	光一到遂鬼消滅	24 柳星	光一到遂鬼消滅
25 星星	光一到遂鬼消滅	26 張星	光一到遂鬼消滅
27 翼星	光一到遂鬼消滅	28 軫星	光一到遂鬼消滅

また門の入口には随陪床を用意し、その上に「上中下庁各等随陪神」と書かれた紙を貼る。随陪神は神将より格の下がる部下に当たる神霊であり、随陪床はこの神霊をもてなす膳である。

以上のように遂邪壇は、主として鬼神を捉え追放する目的のために作られている。その威力を発揮するために奉請する神や神将は赤い文字で書いて攻撃性を現わしている。これは巫堂のクツがさまざまな神の降神を祈願し、迎えた神を楽しませるために歌や踊りをしてまた送り出すのとは違う構造で行なわれるものであり、巫堂クツが女性的であるとしたら、座経は



写真⑥ 外禁



写真⑦ 霊駕壇

攻撃的で男性的であるといえる。

〔2〕 霊駕極楽壇の設経図

祖先の霊駕や亡者の冤恨を極楽へと薦度する儀礼である。この日は、若くして自殺したふたりを結婚させ極楽浄土に引導する儀礼が行なわれた。霊駕極楽壇の飾りは、天井に「西方浄土極楽世界南無阿弥陀仏」と墨で書かれた紙が横向きに貼られる。これは西方浄土の極楽世界に、祖先の霊駕と亡者の怨魂が薦度することを阿弥陀仏にお願いするという意味である。玄関前の部屋に設けられた祭壇のうしろに三連の設経図が掛けられた。設経図は、極楽を象徴する仏の姿、観世音菩薩・阿弥陀仏・釈迦牟尼仏・地藏菩薩を中心として北極星・北斗七星・雲・月・蓮の花・松・竹・鶴・カゲロウ・搭・ロウソク・蝶・ホトトギス・祖先の霊駕としておじいさんとおばあさんの姿などがみられる。道教では北極星と北斗七星は貧富俸禄と生死禍福をはじめとする全てのことを支配していると信じられていたが⁽⁴⁴⁾、星に対する信仰は、仏教や巫俗と習合して広く信仰されている。蓮の花は仏の姿とともに描かれているが、蓮の花は仏教では大慈悲を象徴している⁽⁴⁵⁾。雲、月、松、竹、鶴は、長寿を願う十長生として信仰されているものであり、これは韓国の自然崇拝のうえに中国の神仙思想が結びついた独特の信仰であるといえる⁽⁴⁶⁾。特に竹と松は不浄の接近を常緑の威



写真⑧ 霊をあの世界に導く道

力により防ごうという信仰から禁忌祓禊の場に用いられることが多い⁽⁴⁷⁾。蝶は喜びの象徴であり、夏を象徴し、また夫婦の琴瑟のよさを象徴した⁽⁴⁸⁾ のでその姿の華麗さとともに女性の装飾品に今日も多く使われている。ホトトギスの鳴き声は怨み

を残したような鳴き声をするため怨恨を象徴するといわれているという⁽⁴⁹⁾。

霊駕壇には死んだ二人の代わりに人形が置かれ、造花、お供え物と神竿が置かれている。ここから玄関を通り、門までまっすぐに両脇を亡者護慰網が掛けられ、造花で飾られており、あの世への道を象徴する。亡者護慰網とは、亡者の靈魂を雑鬼に邪魔されず、極楽に薦度させるために引導する鉄網である。

遂邪壇が鬼神を捕り抑え、閉じ込め封じることを目的とし、敵にたいして戦いを挑むことを意味し制作されるのに比べ、霊駕極楽壇は、この世に怨恨を残し死んだ者の平安を願い極楽浄土に導くためのものであり、設経図の制作の目的もまったく違う意味で作られる。本来、法師の座経の目的は、遂邪壇における鬼神に対峙する姿勢であったのが、近年になり、変化をしたとみられる。

「座るクツの伝統があった大田にも 1945 年 8 月 15 日の解放と、1950 年 6 月 25 日の朝鮮戦争を経て、他の地域の巫俗から多くの影響を受けた。特にソウル、京畿道地域の立つクツの影響を強く受けた⁽⁵⁰⁾」といわれるように、忠清道の座経は、巫堂との関わりが密接となり、接触することで、互いに吸収、受容という変化が起こり、霊駕極楽壇が新たに座経の中に組み入れられたのではないかと考える。

以上から悪鬼を捉えるための設経は、幾重にも悪鬼を脅かし、捉えるこ

とを繊細な図で表現しており、積極的な呪術を行うことを表現している。またこれらの設経が示す意味から考えると、道教的な思想の上に成り立っていると考えられる。

「驅儺儀と相通じた法師の呪術行為は、剪紙の形態を取り入れた祭具として、韓国の巫経が独立的に形成・発展したとは見られない。中国の古代呪術の受容により巫経が発展したという立場から巫経に内在している中国の古代呪術の痕跡を追跡できる⁽⁵¹⁾」という。また「辟兵呪術は主に神獣や天神の姿をもつ器物の呪力として戦禍を退治し、又は相対する敵として災いを及ぼそうとする積極的な呪術である。辟兵呪術は春秋時代の文化であり、特に禳災巫経で辟兵呪術を収容⁽⁵²⁾」したと考えられるという。

5. おわりに

法師の行う祭祀が本来は盲僧から出発しているとするのが、大勢である。しかし設経を伴うこの祭祀は、盲目である僧がどのように紙を切り、祭祀の現場を装飾したのかは明らかでない。盲僧の中にはわずかに目が見える者も存在しており、盲僧を手伝っていたという資料もあり、村山智順が残した現場の写真からは、簡単に紙を切ったものとはいえ設経が見られる。祭祀の場には、その目的を可視化するための装置が必要なのはどの宗教も同じである。今日、設経と称されている紙を切った祭具と、神や神将、方位に対する名称、星名などは漢字で書かれる。これは学習を伴い、盲僧の手助けをする者がおり、そこから盲僧の祭祀が一般の目の見える者へと伝承したと考えることもできる。装飾がどのような名称として伝承され、いつから設経と称されるようになったのか、はつきりとはしない。

法師の行う祭祀が、巫堂のクツと大きく違うのは、祭祀の場に招く神と神将による攻撃性であり、悪鬼と戦うためにやって来る。そのための経文と設経が法師の呪術である。以上、実際に法師の呪術とはどのようなもの

かを考察した。経文は大きく人間に対するものと、神や神将に対するものとに分けられる。特に強調されるのは、神や神将を招き、その力で悪鬼を捉え、消滅させるためのものである。設経はそれを目に見える形として表現する祭具である。

座経がどのように継承され変化をしてきたのかは、もう少し研究が進まないと難しい点もあるが、明らかに巫俗とは違う。それが現在では菩薩と法師の協力関係なしでは成立しないという本来の形は失われつつあるが、できるだけ現代の座経の姿を正確に記録し、法師の呪術の実態を伝えることは、韓国の信仰について知るうえで重要であると考えられる。

《注》

- (1) クッ (꺆) とは祭祀の意味
- (2) オ・ムンソン (1994) 『忠清道 座るクッ研究』 漢陽大学 大学院 修士論文 p. 10
- (3) オ・ムンソン 前掲書 p. 11
- (4) 村山智順 (昭和七年三月) 『朝鮮の巫覡』 朝鮮総督府 p. 161
この本には附圖写真があり、当時の盲覡の祈祷と題する写真が掲載されている。ここに漢字と思われる短冊形のものと、紙を切った物が両脇に吊るされており、また祭壇に並べられた器に紙垂のついた棒が立てられている。当時の様子が見て取れる。
- (5) 村山智順 前掲書 pp. 314～315 「樹枝に細長く切りたる紙片を数十條結び下げたるもの、及び壺、鬼神の三種を用意し、二名の祈祷者中一名は太鼓及び鐘を打ち鳴らしながら読経し、暫時他の一名の手に乗せる鬼神を前記樹木をもって壺中に追い込み、之を厳封して土中に埋め以て悪神を封じたりとするものなり」
- (6) 村山智順 前掲書 pp. 618～619
- (7) 秋葉隆 (昭6) 「踊る巫と踊らぬ巫」 (宗教研究新第九巻・) 『韓国巫俗論集』 pp. 207～221
- (8) 李能和 (1976) 『朝鮮巫俗考』 白鹿出版社
- (9) 孫晋泰 (1981) 「盲覡考」 『孫鎮泰先生全集』 2 太学社
- (10) 徐大錫 (1973) 「経巫考」 『韓国文化人類学』 1 輯 韓国文化人類学会
- (11) 金栄振 (1983) 「パンス考」 『民俗語文論叢』 啓明大学出版部

- (12) ラ・インジョン (2002) 「読經の名称考察」『語文研究』40 輯 韓国語文研究学会
- (13) 金榮振 (1976) 「忠清北道の巫俗研究」『論文集』10 輯 清州大学校
- (14) オ・ムンソン (1994) 『忠清道 座るクツ研究』漢陽大学 大学院 修士論文 pp.5~6
- (15) イ・ビルヨン (1999) 「忠清地方の狂クツ」『シャーマニズム研究』1 輯 韓国シャーマニズム学会 「忠清地域の家庭信仰の類型と性格」『シャーマニズム研究』3 輯 韓国シャーマニズム学会
- (16) 李圭昌 (1994) 「巫經」『全羅民俗論巧』集文堂
- (17) ファン・ルシ (2000) 「江原道地域の読經の現況と宗教的な特徴についての研究」『シャーマニズム研究』3 輯 韓国シャーマニズム学会
- (18) 安相敬 (2006) 『座るクツ研究』忠北大学校 博士論文 p.5
- (19) オ・ムンソン『忠清道 座るクツ研究』漢陽大学 大学院 修士論文 pp.5~6
- (20) 永井彰子 (2002) 「盲僧集團の歴史的変遷」『日韓盲僧の社会史』葦書房 p.153~
- (21) オ・ムンソン 前掲書 p.5
- (22) 1999 年 3 月 16 日に韓国忠清南道泰安郡所遠面にある趙富元法師の自宅で行われた行なわれた座經は、大主 (祭家の家長) 李慶悅 (57 歳) さんの事業の成功と、祭主 (祭家の女主人) ユ・ファンニョル (54 歳) の病気の治癒のために逐邪壇と、大主の姪 (兄の娘) であるイ・スンオク (22 歳) さんが 3 年前に自殺したが、同じく若くして自殺したキム・ジョンホさん (趙富元法師の知人) との靈魂結婚式を挙げ、亡者の無念を晴らし、極楽に薦度させるための靈駕極楽壇のふたつが準備された。これ以降、何度か他の法師の現場に行ったが、規模として一番大きいのが趙富元法師の現場であったので、これを例としてここでは見ることにする。
- (23) オ・ムンソン 前掲書 p.4
- (24) 安相敬 (2006) 『座るクツ 巫經 研究』忠北大学 国語国文学科 博士論文) p.35
- (25) 辭説とは歌やパンソリの時の合間をつなぐ語り
- (26) 安相敬 前掲書 p.10
- (27) 安相敬 前掲書 p.11 ここで設經の項目で調査資料とした趙富元法師は「八門大陣經」と「祖上經」が含まれている
- (28) 韓徳法師 巫業 (法師) 大田無形文化財第 2 号座るクツ (説經) 保有者 候補 天人菩薩 (61 歳)・菩薩 1 名。病クツの依頼が多い。クツ堂は忠南

公州市 反浦面鳳谷1区 サン472-1。祭主は柳ソクシン氏（83歳）で、症状は眠れない、気力がない。原因は菩薩によれば区画整備のため先祖の墓を掘り、この墓に行ったために周堂^{ミツ}熬^{ミツ}になったためという。この周堂^{ミツ}熬^{ミツ}は様々な所を巡るといわれ、特に祖先に関する場や、宴会の場に現れる。とりつかれて長い時間がたつと、人を殺すこともあり、死体を見るだけでも移るといわれる。これにとりつかれるのは四柱と関係があり、昔は葬儀の場できれいと考えられ、その日の干支により何年生まれの人葬儀を見ないようにというお触れをして禁止したという。実際今年の春に交通事故で妹が死亡するという不幸があったという。祭主の柳ソクシン氏（83歳）と妻のユン・イムさんは、結婚60周年を迎えるが、農業を営んできた。

- (29) オ・ムンソン 前掲書 p.36
- (30) 安相敬 前掲書 p.111
- (31) 安相敬 前掲書 p.111
- (32) 李圭昌 (1994) 「巫経考」『全羅民俗論攷』集文堂 1994 p.417
- (33) 安相敬 前掲書 p.176
- (34) この日は、大主（祭家の家長）李ハンゲン（57歳）さんの事業の成功と、祭主（祭家の女主人）ユ・ファン（54歳）さんの病気の治癒のために逐邪壇と、大主の姪（兄の娘）であるイ・スンオク（22歳）さんが3年前に自殺したが、同じく若くして自殺したキム・ジョンホさん（趙富元法師が以前から知っていた）との靈魂結婚を挙げ、亡者の無念を晴らし、極楽に薦度させるための靈魂極楽壇のふたつが準備された。
- (35) ‘殺’は悪い気運が入ったり、雑鬼にとりつかれ、厄運が迫っているなど、そうなり易い状況を示している。従ってそれを防ぐためには祭祀をすること、厄運や凶事を防ぐことができる。（趙富元 談）
- (36) 岩井寛 (1986) 『色と形の深層心理』NHK ブックス 492 日本放送出版協会 pp.127～128
- (37) 岩井寛 前掲書 p.126
- (38) 城一夫 (1996) 『装飾文様の東と西』明現社 p.149
- (39) 『三国遺事』の鼻荊郎や處容郎の話からみられるように護符に対する信仰は新羅の時からあった鬼神の撃退法である。護符にはまた文字符と図符があり、文字符は天・日・鬼・弓・吉・口・王・神等の文字を単独又は組み合わせたものと、神名、人物名等を列ねたものがあり、図符は太陽形・顔面形・渦巻形・方形・搭形・天体形・手形・電光形等の輪廓形に文字を配したものであり、文字符、図符その何れも之に依って鬼神を退去させる意味を含めたものである。（村山智順 『朝鮮の鬼神』朝鮮総督府 1929.7

pp. 377~378)

- (40) 徐大錫 (1980) 「経巫考」『韓国巫歌の研究』文学思想社 p. 307
- (41) 中央は句陣騰蛇という天を飛ぶ蛇と、伝説上の聖君である黄帝を組み合わせたものである「中央戊己句陣騰蛇黄帝神将」を、やはり朱砂で書き貼り付ける。
- (42) 西方浄土である天竺と安宅を往来する神霊である。戸口という名称からして大門と関連した神霊であると推測される。(趙富元法師 談)
- (43) 中国の天文学・占星術で用いられている。
- (44) 車柱環 (1990)『朝鮮の道教』人文書院 pp. 76~76
- (45) 林永周 (1988)『韓国文様事典』河出書房新社 p. 76
- (46) 秋葉隆 (1980)『朝鮮民俗誌』名著出版 p. 128
- (47) 秋葉隆 (1980)『朝鮮民俗誌』名著出版 p. 130
- (48) 林永周 (1988)『韓国文様事典』河出書房新社 p. 46
- (49) 趙富元法師 談
- (50) イ・ピルヨン (1993)「大田の狂クッ」『大田文化』第2号 大田直轄市史編纂委員会 p. 284
- (51) 安相敬 前掲書 p. 36
- (52) 安相敬 前掲書 p. 42

(原稿受付 2018年11月28日)

〈資 料〉

Kimono か quimono か

——「着物」のスペイン語表記をめぐる——

松 下 直 弘

要 旨

日本語の「着物」は、スペイン語で kimono あるいは quimono と表記される。さまざまな文献からそれぞれの頻度数を比べてみると、どちらかに極端に偏ることなく、両者とも使われていることがわかる。スペイン王立アカデミーは長年 quimono の方が好ましいとしてきたが、21 世紀に入ると、kimono の方が望ましいとし、quimono という表記も可とする方針を打ち出した。これ以降、スペイン王立アカデミー監修のスペイン語辞書をはじめ、いくつもの辞書が kimono の項で語義を載せるようになった。だが、相変わらず quimono という表記はよく用いられている。外来語として意識される kimono に対し、すっかりスペイン語の一部となった quimono が用いられるのは好ましい現象ではないだろうか。

キーワード：外来語の表記、着物、スペイン語と日本語

1. 「着物」のスペイン語表記をめぐる

日本語の「着物」はスペイン語に取り入れられ、現在 kimono あるいは quimono と表記される。この語が外来語であることを考えれば、外来語のみに用いられる文字 k を含む kimono という表記が適当であるように思われるが、[ki] の音を表すスペイン語の一般的な綴り qui を用いた qui-

monoの方を選ぶ人も少なくない。

1609年、マニラからヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコ）へ船で向かう途中、遭難して日本に漂着したRodrigo de Viveroは、帰国後『日本見聞録』（*Relación del Japón*）を著しているが⁽¹⁾、その中で「着物」に相当する語 *quimones* を3回使っている。「着物」という日本語は、Rodrigo de Viveroの耳には、語末が鼻母音化した *quimón* と響き、その複数形 *quimones* を記したと思われる⁽²⁾。

Habiendo llegado a este lugarejo, el intérprete de su nación que conmigo iba, les dijo que yo era el Gobernador de Luzón, que así se llamaban las Filipinas, y comenzó nuestro discurso desgraciado, del que ellos se enternecieron, y las mujeres lloraban, que son por ese extremo compasivas, y así nació de ellas el pedir a sus maridos que nos prestasen algunas ropas que llaman *quimones*, forradas de algodón, como lo hicieron liberalmente. (*Relación de la Camboya y el Japón*, p. 139)⁽³⁾

Trájome de presente cuatro ropas, que como he dicho, se llaman *quimones*, forrados de algodón de damasco, y telas diferentes guarnecidas en oro y seda. (*Ibid.*, p. 140)

El príncipe me esperó en una sala grande, que en medio de ella había tres escalones y seis u ocho pasos más adelante estaba sentado en el suelo y sobre este género de esteras que he dicho, y con un puño cuadrado como alfombra de terciopelo carmesí guarnecido de oro, y el vestido de verde y amarillo, con la ropa de lo que llaman *quimones*, y ceñida su espada y daga, que dicen cazanas, en la cabeza

no tenía más que una cinta de color, y trenzado el cabello con ella.
(*Ibid.*, pp. 147-148)

Quimono という表記を多く用いたスペインの代表的な作家は José María Gironella である。1963 年、東京オリンピック開催直前の日本を訪れた Gironella は、翌年に *El Japón y su duende* というタイトルの日本旅行記を著し⁽⁴⁾、その中で quimono という語を 24 回使っている。

そのほか、kimono ではなく quimono を選択した主な作家には、Ramón María del Valle-Inclán (*Tirano Banderas*, 1927), Elena Fortún (*El bazar de todas las cosas*, 1935), Carmen Laforet (*Nada*, 1945), Eduardo Mendoza (*La ciudad de los prodigios*, 1986), Juan Marsé (*El embrujo de Shanghai*, 1993) などがある。

一方、kimono という表記を何度も用いた代表的な作家は、スペインの Vicente Blasco Ibáñez とベネズエラ出身の Teresa de la Parra である。関東大震災後の日本を訪れた Vicente Blasco Ibáñez は、『ある小説家の世界一周』(*La vuelta al mundo de un novelista*)⁽⁵⁾の中で kimono という語を 32 回用いている。彼は、紀行文の中だけでなく、小説の中でもしばしば kimono という語を用いている。また、Teresa de la Parra は、ベネズエラの若い女性を主人公にした小説 *Ifigenia*⁽⁶⁾の中で、kimono という語を 19 回使っている。

グアテマラ出身の Enrique Gómez Carrillo やスペインの Luis de Oteyza も日本滞在記を著しているが⁽⁷⁾、彼らも quimono ではなく kimono を用いている。さらに、清少納言『枕草子』のスペイン語訳 *El libro de la almohada*⁽⁸⁾を世に出した Jorge Luis Borges と María Kodama 夫妻も quimono ではなく kimono を用いている。また、1897 年(明治 30 年)にスペイン人 C.Yñigo が日本で著した日本語学習書 *Vocabulario japonés*⁽⁹⁾にも、基礎語彙の中に kimono が出てくる。

西暦 2000 年までに使われた語彙を集めた Real Academia Española のスペイン語コーパス, *Corpus del nuevo diccionario histórico del español* (CDH) によれば⁽¹⁰⁾, quimono は 23 の文献で延べ 113 回, kimono は 55 の文献で延べ 100 回現れている。さらに, 2001 年以降に使われている語彙を集めた *Corpus del español del siglo XXI* (CORPES XXI) では⁽¹¹⁾, quimono は 32 の文献で延べ 50 回, kimono は 110 の文献で延べ 168 回現れている。

これらのデータから判断すると, kimono と quimono はどちらかに極端に偏ることなく, 両者とも使われていることがわかる。では, スペイン語圏で出版された辞書ではどのように扱われているだろうか。

1917 年に José Alemany y Bolufer が編纂した *Diccionario de la lengua española*⁽¹²⁾ には quimono の項が作成されている。その後, 1925 年に出された Ancieto de Pagés 編纂, José Pérez Hervás 補遺 *Gran diccionario de la lengua castellana, autorizado con ejemplos de buenos escritores antiguos y modernos*⁽¹³⁾ にも quimono の項が見られる。1927 年刊行の *Diccionario manual e ilustrado de la lengua española*⁽¹⁴⁾ にも quimono の項があり, 1950 年, 1984 年, 1985 年, 1989 年と版を重ねても常に quimono の項で語の説明をしている。さらに, 現在まで何度も版を重ねている Real Academia Española の *Diccionario de la lengua española* (DRAE) でも, 長年にわたって quimono の項で語義の説明をしてきた⁽¹⁵⁾。

また, María Moliner の *Diccionario de uso del español*⁽¹⁶⁾, Martín Alonso の *Enciclopedia del idioma*⁽¹⁷⁾, VOX *Diccionario general ilustrado de la lengua española*⁽¹⁸⁾, *Diccionario Anaya de la lengua española*⁽¹⁹⁾, *Diccionario Salamanca de la lengua española*⁽²⁰⁾, *Diccionario general de la lengua española*⁽²¹⁾ など, 定評ある辞書の多くも quimono で項目を立て, kimono の項では「quimono を参照せよ」と記されるのが通常だった。

1995 年に刊行された *Diccionario para la enseñanza de la lengua es-*

pañola の kimono の項には、「Real Academia Española は quimono という表記を好ましいとしている」と明記されている⁽²²⁾。

しかし、21 世紀に入ると、ある変化が見られる。Real Academia Española が 2005 年に刊行した辞書 *Diccionario panhispánico de dudas*⁽²³⁾ では、kimono の項に次のような定義を載せ、quimono という表記も可とした。

kimono. ‘Túnica japonesa con mangas anchas y largas’. Esta es la grafía originaria y más frecuente en el uso; también es válida la adaptación posterior *quimono* (→ k). (P. 386)

そして、2006 年に出版された Real Academia Española の *Diccionario esencial de la lengua española*⁽²⁴⁾ では、kimono の項で語義を載せるようになり、その翌年に Antonio Fernández Fernández が著した *Diccionario de dudas*⁽²⁵⁾ でもこの考え方が踏襲され、quimono は kimono という書記法の方が望ましいと明記された。

quimono Para este sustantivo del masculino se prefiere la grafía *kimono*. (*Diccionario de dudas I-Z*, p. 169)

さらに、Real Academia Española が 2010 年に出した *Ortografía de la lengua española* (『スペイン語正書法』)⁽²⁶⁾ も、quimono ではなく kimono と綴る方が良いとした。日本語からスペイン語に入った音素 /k/ を含む語は他にもあるが、「柿」や「柿色」は kaki よりも caqui, 「腹切り」は haraquiri よりも harakiri, 「神風」は camicace よりも kamikaze, 「帝」は micado よりも mikado が良いと説明している。そして、後者が望ましいのは、多数の人によって使用されている綴りであるため (por corres-

ponder al uso mayoritario) と述べている。⁽²⁷⁾

この『スペイン語正書法』により、quimono という表記は容認されるものの、kimono と記した方が良いという考え方が Real Academia Española によって、はっきり打ち出されたと言える。そのことを示すかのように、当時スペイン王立言語アカデミー会長を務めていた José Manuel Blecia が監修した SM 社の *Diccionario básico de la lengua española: primaria* (2014 年初版) では⁽²⁸⁾、quimono の項では語の定義をせず、kimono の項でイラストと共に語義を説明している。

教育図書出版社としての歴史が長い SM 社は、それ以前にもたくさんの辞書を世に出しているが、*Diccionario didáctico de español*⁽²⁹⁾、*Diccionario esencial de la lengua española*⁽³⁰⁾、*Diccionario Primaria*⁽³¹⁾ など、いずれも kimono の項では説明を省略し、quimono の項で語義を述べていた。2010 年を境として quimono から kimono への転換がなされたことが、辞書の編纂方針に明確に現れているようである。もちろん、Real Academia Española が 2014 年に出した *Diccionario de la lengua española* (第 23 版)⁽³²⁾ でも、それまでの版とは異なり、kimono の項で語の意味が述べられている。

一方で、相変わらず kimono より quimono を優先させている辞書もある。

Santillana 社が 2012 年に刊行した *Nuevo diccionario escolar de la lengua española*⁽³³⁾ では、kimono を引くと quimono の項を参照するようにという指示が出ていて、quimono は次のように定義されている。

quimono *s.m.* Prenda de vestir japonesa que usan las mujeres y que parece una bata larga y cruzada con las mangas muy anchas.
(p.988)

また、同社が2013年に出版した *Nuevo diccionario básico de la lengua española*⁽³⁴⁾、2015年に出版した *Nuevo diccionario esencial de la lengua española*⁽³⁵⁾ でも、同様に quimono の項で語義を載せている。

興味深いことに、Real Academia Española 編纂の *Diccionario práctico del estudiante*⁽³⁶⁾ は2012年に出されているが、kimono で引くと kimo-no→quimono となっていて、quimono の項で意味を説明している。

近年、スペイン語圏の人たちの日本文化に対する関心は急速に広がり、その理解の仕方も深まっている。外来語として取り入れられた日本語の語彙が、いつの間にかスペイン語の一部となって定着しても不思議ではない。

Real Academia Española の正書法の変更に際しては、日本でのローマ字表記 kimono を考慮に入れた判断もなされたと思われる（2014年刊行の *Diccionario de la lengua española* 第23版では、Del jap. *kimono* と明記された）が、スペイン語を母語としている人間にとっては、quimonoの方がより自然に感じられるのではないだろうか。いつまでも外来語ではなく、すっかりスペイン語の語彙となった quimono が用いられるのは好ましい現象ではないかと思われる。今後、kimono がさらに増えるのか、それとも quimono が増えるのか、注意深く観察を続けていきたい。

Kimono か quimono か、スペイン語を母語とする人たちの揺れ動く言語心理を映しているかのような文章を、筆者はあるとき偶然見つけた。何と kimono と quimono が混在する以下の文章である。これこそ、今日のスペイン語事情をよく表しているのではないだろうか。

Esperé a las geishas con impaciencia. Las pequeñas jóvenes se deslizaron por fin en la habitación vestidas con exquisitos **kimonos** que tenían una pequeña cola y mangas anchas y largas. (...) Cuanto más joven es la geisha, más se adorna el cabello. Sus **quimonos**,

hechos del material más exquisito, se arrastran a su alrededor, y se sujetan flojos alrededor de la cintura con un obi, un fajín; sus mangas amplias y largas caen hacia atrás, mostrando sus brazos pecosos y sus manos infantiles. (*La vuelta al mundo en 72 días*, p. 220) ⁽³⁷⁾

Los *quimonos* están compuestos por tres piezas, cada una de ellas aproximadamente unos tres centímetros más larga que la anterior. Vi un *kimono* que una japonesa se compró para ir de vacaciones, un conjunto de crepé de seda gris, salpicado de flores de rosa de melocotón aquí y allá. (*Ibid.*, p. 224)

2. Kimono あるいは quimono の語義について

スペイン語の kimono あるいは quimono は、日本の伝統的な衣装である着物（和服）を指すだけでなく、部屋着、ガウンをも指す。特に 19 世紀以降は、後者の意味で使われることが多くなり、小説に描かれる kimono あるいは quimono はほとんどの場合、部屋着、ガウンである。さらに、スペイン語圏で柔道や空手などの格闘技が盛んになると、柔道着や空手着の意味でも kimono や quimono が使われるようになった。20 世紀以降にスペインで発行された主要な辞書、特に Real Academia Española 編纂のスペイン語辞書を繙きながら、語義の変遷について見てみよう。

Real Academia Española が 2014 年に刊行した *Diccionario de la lengua española*（第 23 版）は、kimono を次のように定義している。

1. m. Túnica de origen japonés, de mangas anchas y largas, abierta por delante y que se ciñe, cruzándola, mediante un cinturón.
2. m. Vestimenta utilizada para practicar las artes marciales.

第1の語義は「日本から入ってきた、袖が広くて長く、前開きになっている上衣で、前を合わせて帯で締める」。第2の語義は「格闘技をするために使われる衣服」である。現代のスペイン語では、柔道着や空手着の意味でも kimono あるいは quimono が用いられている。2001年刊行の *Diccionario de la lengua española* (第22版) や2006年刊行の *Diccionario esencial de la lengua española* で、すでにこの第2の語義は付けられていたが、それよりも前の版、1992年刊行の *Diccionario de la lengua española* (第21版) では、第1の語義のみで、「格闘技をするために使われる衣服」という語義は載っていなかった⁽³⁸⁾。21世紀を迎える頃から、柔道や空手などの格闘技に対する一般の人々の関心がいっそう高まり、quimono de judo (yudo) や quimono de karate などの表現がよく使われるようになっていたと思われる。SM社が出したスペインの子ども向けの学習辞典には、quimono の項に次のような例文が載っている。

Mi traje de judo es un quimono blanco con un cinturón naranja.⁽³⁹⁾

2012年刊行の Real Academia Española, *Diccionario práctico del estudiante* では、quimono の項で、第2の語義をさらに詳しく説明している。

Conjunto de ropa deportiva para practicar artes marciales, formado por un pantalón amplio y una chaqueta de mangas anchas que se ciñe como un quimono. (p.585)

また、2014年刊行の *Diccionario básico de la lengua española: primaria* も、第2の語義を要領よくまとめ、イラストを付けてわかりやすくしている。

Conjunto de chaqueta y pantalón muy anchos que se usa para practicar algunos deportes, como el yudo. (p. 555)

さて、ここで少々問題になるのは第1の語義についてである。スペイン語圏では、「和服」の意味だけではなく、「部屋着、ガウン」の意味でも kimono あるいは quimono を用いている。上述した *Corpus del nuevo diccionario histórico del español* および *Corpus del español del siglo XXI* の用例を見ても、大部分はこの意味で使われている。まず日本の伝統的な衣装である「着物、和服」について触れ、次に「部屋着、ガウン」として用いられている kimono あるいは quimono について述べるという方法が正確な説明の仕方であろう。1917年に刊行された José Alemany y Bolufer 編纂の *Diccionario de la lengua española* では、quimono を次のように2つに分けて定義していた。的確な定義だと思われる。

Túnica larga, usada en el Japón por los dos sexos. | Especie de bata de mujer, muy parecida al quimono.⁽⁴⁰⁾

さらに、1927年刊行の *Diccionario manual e ilustrado de la lengua española* では、quimono を以下のように説明している。簡潔ではあるが、これも理解しやすい定義であろう。

Túnica japonesa, o hecha a su semejanza, que usan las mujeres.

これ以降、*Diccionario de la lengua española* でも、1936年版、1939年版、1947年版、1956年版、1970年版、1984年版で、*Diccionario manual e ilustrado de la lengua española* とほぼ同一の語義を載せている。異なる点は、コンマを1つ取り除いたことである。

Túnica japonesa o hecha a su semejanza, que usan las mujeres.

一方, *Diccionario manual e ilustrado de la lengua española* の第 2 版 (1950 年刊行) は, 初版 (1927 年刊行) と同じ語義を載せていたが, 1985 年刊行の第 3 版では, quimono の語義が詳しくなった。まず, 袖幅が広く長いという着物の特徴が述べられ, 前開きになっているので左右を合わせて帯で結ぶという, 着物の着方が説明されている。この頃になると, 日本の着物や着物風の衣服を着用する人たちがスペイン語圏でも増加したのかもしれない。実際に身につけないまでも, テレビの映像や新聞・雑誌の写真で着物姿を目にする人が多くなったのは事実だろう。

Túnica japonesa, o hecha a su semejanza, que usan las mujeres. Se caracteriza por sus mangas largas y anchas, y se abre y cruza por delante, ciñéndose a la cintura mediante un cinturón.

その後, 1992 年刊行の *Diccionario de la lengua española* 第 21 版は, わずかに書き換えただけで, この語義を受け継いでいる。

Túnica japonesa o hecha a su semejanza, que usan las mujeres, y que se caracteriza por sus mangas anchas y largas. Es abierta por delante y se cruza ciñéndose a la cintura mediante un cinturón.

そして, 2001 年刊行の第 22 版では, 前述のとおり, 「格闘技をするために使われる衣服」という第 2 の語義が加えられた。

quimono

1. m. Túnica de origen japonés que se caracteriza por sus mangas

anchas y largas. Es abierta por delante y se cruza ciñéndose mediante un cinturón.

2. m. Vestimenta utilizada para practicar las artes marciales.

さらに、初めに引用した 2014 年の第 23 版に継承されるが、もう一度よく比べてみよう。

1. m. Túnica de origen japonés, de mangas anchas y largas, abierta por delante y que se ciñe, cruzándola, mediante un cinturón.

2. m. Vestimenta utilizada para practicar las artes marciales.

2 番目の語義は全く同一であるが、1 番目の語義はやや簡潔になっている。しかし、どちらの版も、1992 年刊行の *Diccionario de la lengua española* 第 21 版まで付けられていた “Túnica japonesa o hecha a su semejanza” が “Túnica de origen japonés” と書き換えられてしまった。やはり、「日本の伝統的な衣服としての着物（和服）」であることを最初に説明し、「着物風の衣服，部屋着，ガウン」をも指すという定義が妥当ではないだろうか⁽⁴¹⁾。

3. Kimona あるいは quimona について

「部屋着」「化粧着」の意味で、kimona あるいは quimona という女性名詞が使われている地域がある。これはスペインではなく、カリブ海地域とアメリカ大陸の一部の地域である。

Kimona と quimona を早々と載せた辞書は、1927 年刊行の *Diccionario manual e ilustrado de la lengua española* で、キューバでは kimona が quimono の意味で使われていることを簡潔に記している。以後、1950 年

版, 1984 年版, 1989 年版で同様の記述をしている。

KIMONA. f. *Cuba*. Quimono

1993 年刊行の *Diccionario del español de América*⁽⁴²⁾ でも, kimono のすぐ上に kimona という項が並んでいる。日本語から導入された kimono を部屋着の意味で定義し, アルゼンチン, パラグアイ, ウルグアイで使用されていると説明している。そして, キューバとメキシコでは kimono の意味で kimona が使われていることを明記している。

KIMONA. f. *Cub.*, *Méx.* kimono.

KIMONO. (Voz japonesa.) m. *Arg.*, *Par.*, *Uru.* Bata larga hecha de tela fina y llamativamente coloreada o bordada que usan las mujeres como vestido de casa.

さらに, 2010 年刊行の *Diccionario de americanismos*⁽⁴³⁾ では, quimona の項で「女性用の部屋着」と定義されている。

quimona. f. *PR.* Bata de mujer para estar en casa.

ベネズエラの女流作家 Teresa de la Parra は, 『カラカス女性の極東旅日記』 *El diario de una caraqueña por el Lejano Oriente*⁽⁴⁴⁾ の中で, 日本人の姿を細やかな筆遣いで描いているが, 一カ所だけ kimono ではなく kimona を使っている。日常生活で身につける kimono に対して, 晴れ着としての kimona を意識しているような使い方である。

Y fue ello, que luego de encargar una nutrida orquesta sin olvidar el consabido cuerpo de baile, nos vestimos todos nuestras floreadas

kimonas de seda, con largas bandas y anchísimas mangas. (p. 441)

前述したように、Teresa de la Parra は小説 *Ifigenia* の中でも kimono という語を 19 回使っているが、いずれも女性の部屋着の意味で用いている。kimona と綴ったとき、彼女の心の中では日本の「着物」に対する特別な想いが広がっていたのかもしれない。

《注》

- (1) Rodrigo de Vivero は植民地時代のフィリピン総督で、任務を終えてヌエバ・エスパーニャに帰国する途中で日本に漂着した。

Del tratado al tratado, Tokio, Embajada de México en Japón, 2005, pp. 11-13 には、Rodrigo de Vivero の日本での足跡が短く紹介されている。

- (2) Joan Corominas の『スペイン語語源辞典』には、「着物」という語彙に慣れ親しむのが早かったポルトガル人たちが、16 世紀前半に「着物」をあらわす quimão を使っていたことが述べられている。そこから、「着物にする布地、反物」をあらわすスペイン語の quimón ができた、と説明を加えている。

Joan Corominas y José A. Pascual, *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, vol. 4, Madrid, Gredos, 1985, p. 730.

だが、ここで Rodrigo de Vivero が述べているのは、反物ではなく、すでに仕立てられた着物である。後世（特に 19 世紀以降）用いられるようになった quimón ではなく、いわゆる quimono を指していると考えるのが妥当だろう。

1603 年に刊行された『日葡辞書』では、quimono は qimono と記されている。土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店、1980 年、p. 497。

- (3) G. San Antonio y R. de Vivero, *Relaciones de la Camboya y el Japón*, Edición de Roberto Ferrando, Madrid, Historia 16, 1988 から引用。イタリックの強調は引用者による。
- (4) José María Gironella, *El Japón y su duende*, Barcelona, Planeta, 1964.
- (5) Vicente Blasco Ibáñez, *La vuelta al mundo de un novelista*, Valencia, Prometeo, 1924.
- (6) Teresa de la Parra, *Ifigenia*, París, Editorial Franco-Iberoamericana,

1924. 本稿ではテキストとして次の書を使用。

Teresa de la Parra, *Obra*, Caracas, Biblioteca Ayacucho, 1982.

- (7) Enrique Gómez Carrillo, *El alma japonesa*, París, Garnier hermanos, sin fecha.

Luis de Oteyza, *En el remoto Cipango*, Madrid, Pueyo, 1927.

- (8) Sei Shonagon, *El libro de la almohada*, Selección y traducción de Jorge Luis Borges y María Kodama, Madrid, Alianza, 2004.

- (9) C. Yñigo, *Vocabulario japonés y lecciones de japonés*, Tokio, Maruzen, 1897.

- (10) Real Academia Española, *Corpus del nuevo diccionario histórico del español* (CDH). <<http://www.rae.es>> [noviembre de 2018]

- (11) Real Academia Española, *Corpus del español del siglo XXI*. (CORPES XXI) <<http://www.rae.es>> [noviembre de 2018]

- (12) José Alemany y Bolufer, *Diccionario de la lengua española*, Barcelona, Ramón Sopena, 1917.

- (13) Ancieto de Pagés, *Gran diccionario de la lengua castellana, autorizado con ejemplos de buenos escritores antiguos y modernos*, Continuado y completado por José Pérez Hervás, Tomo cuarto, Barcelona, Fomento comercial del libro, 1925.

- (14) Real Academia Española, *Diccionario manual e ilustrado de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 1927.

- (15) Real Academia Española, *Diccionario de la lengua española*, 16.^a ed., Madrid, Espasa-Calpe, 1936.

この後, 1939 年版, 1947 年版, 1956 年版, 1970 年版, 1984 年版, 1992 年版, 2001 年版 (第 22 版) まで, ずっと quimono の項に語義を付けている。

- (16) María Moliner, *Diccionario de uso del español*, 4.^a ed., Madrid, Gredos, 2016.

- (17) Martín Alonso, *Enciclopedia del idioma*, Madrid, Aguilar, 1982.

- (18) VOX *Diccionario general ilustrado de la lengua española*, Barcelona, Biblograf, 1987.

- (19) *Diccionario Anaya de la lengua española*, Madrid, Anaya, 1991.

- (20) *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Madrid, Santillana, 2006.

- (21) *Diccionario general de la lengua española*, Barcelona, Edebé, 2005.

- (22) *Diccionario para la enseñanza de la lengua española*, Barcelona, Biblograf, S.A. y Univ. de Alcalá de Henares, 1995, p. 670.

- (23) Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española, *Diccionario panhispánico de dudas*, Madrid, Santillana, 2005.
- (24) Real Academia Española, *Diccionario esencial de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 2006.
- (25) Antonio Fernández Fernández, *Diccionario de dudas*, Oviedo, Ediciones Nobel, 2007.
- (26) Real Academia Española, *Ortografía de la lengua española*, Madrid, Espasa, 2010.
- (27) *Ibid.*, pp. 116–117.
- (28) *Diccionario básico de la lengua española: primaria*, Madrid, SM, 2014.
- (29) *Diccionario didáctico de español: elemental*, 3.^a ed., Madrid, SM, 1996.
- (30) *Diccionario esencial de la lengua española*, 6.^a ed., Madrid, SM, 2006.
- (31) *Diccionario primaria de la lengua española: nivel avanzado*, 10.^a ed., Madrid, SM, 2006.
- (32) Real Academia Española, *Diccionario de la lengua española*, 23.^a ed., Madrid, Espasa, 2014.
- (33) *Nuevo diccionario escolar de la lengua española*, Madrid, Santillana, 2012.
- (34) *Nuevo diccionario básico de la lengua española*, Madrid, Santillana, 2013.
- (35) *Nuevo diccionario esencial de la lengua española*, Madrid, Santillana, 2015.
- (36) Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española, *Diccionario práctico del estudiante*, Madrid, Santillana, 2012.
- (37) Nellie Bly, *La vuelta al mundo en 72 días*, Traducción de Rosa M. Salles Puig, Barcelona, Ediciones Buck, 2010.
- (38) この点については、Real Academia Española の辞書よりも SM 社の辞書の方が進んでいて、*Diccionario didáctico de español: elemental*, 3.^aed., Madrid, SM, 1996 には、すでに第 2 の語義が見られる。
- (39) *Ibid.*, p. 706.
- (40) *Op.cit.*, p. 1402.
- (41) 日本で発行されたスペイン語の辞書の中では、次のような定義が的確と思われる。
「①着物, 着物風のガウン, 部屋着 ②柔道着, 空手着」
山田善郎他監修『スペイン語大辞典』白水社, 2015 年, p. 1911.
- (42) Marcos A. Morínigo, *Diccionario del español de América*, Madrid, Anaya & Mario Muchnik, 1993.

- (43) Real Academia Española, *Diccionario de americanismos*, Madrid, Santillana, 2010.
- (44) Teresa de la Parra, *op. cit.*, p. 441.

(原稿受付 2018 年 11 月 29 日)

〈資 料〉

文化的反義語の試案

—— 日本語の実例 ——

山 田 政 通

要 旨

本稿では、著者がこれまで収集してきた日本語の文化的反義語の実例を紹介した。まず第2節では、多項非両立性、二項対立、コンテキスト依存の観点と標準的反義語との差異を考慮した上で、文化的反義語を定義し、これまでの研究で指摘されてきた代表例を確認した。以上を踏まえて、第3節では、著者が集めた文化的反義語の実例を(1)日常生活、(2)政治・経済・社会、(3)教育・文化の3つの分野別に整理して示し、適宜解説を加えた。最後に、時と共に変わりゆく文化的反義語の変遷にも触れた。

反義語の研究は、語彙の意義関係 (sense relations) に直結するので本来意味論の分野に属するが、文化的反義語は現実世界と深く関わり、コンテキスト依存性が高いので語用論の要素が多いトピックである。本稿を契機に文化的反義語の重要性が認知され、日本語のみならず他の言語でも研究が進むことを期待する。さらに、そのような研究が、異文化理解や辞書の記述の向上、さらに他の分野にも応用されれば幸いである。

キーワード：文化的反義語、多項非両立性、二項対立、コンテキスト依存、無標・有標

目 次

1. はじめに
2. 定義と代表例
 - 2.1 文化的反義語とは
 - 2.2 代表例
3. 実例集
 - 3.1 日常生活
 - ①飲食 ②買い物 ③交通 ④自然 ⑤名前と地名
 - ⑥色 ⑦定型表現 ⑧その他
 - 3.2 政治・経済・社会
 - ①政治 ②社会 ③マスメディア ④医療
 - 3.3 教育・文化
 - ①教育 ②スポーツ ③その他
 - 3.4 文化的反義語の変遷
4. 終わりに
- 参考文献

1. はじめに

本稿では、山田（2015 & 2017）に従い、文化的背景から成立する反義語を「文化的反義語」と定義する。著者が文化的反義語に興味を持ったのは、日本の大学で教授経験があるアメリカの言語学者 Hofmann（1993：40）の次のような指摘であった。アメリカ人にとって *mountain* の反対は *valley* であるのに対し、日本人にとっては山の反対は海であることが多い、という指摘である。多くの日本人は、これまで山と海に挟まれた限定された地域で生活してきたので、自然と山と海を対照的に捉えるようになったのであろう、と Hofmann は推測している。この違いには、言語の知識と共に文化的な背景が大きく関連していると考えられると彼は結論付けている。言語により反義語のペアにバリエーションがありうるというのは、著者にとって新見地であり、言語と文化の接点の現象として調査に値

すると考えた。

本稿の目的は、この数年著者が収集してきた日本語の文化的反義語の実例を整理し、解説をつけて提示することである。これを契機に、文化的反義語の重要性が認知され、他の言語でも研究が進むことを期待したい。また、そのような研究が、異文化理解や辞書の記述の向上、さらには翻訳・通訳などの分野にも貢献できれば幸いである。

言うまでもなく、本稿で示す日本語の文化的反義語の例は、いかなる意味でも「網羅的」ではなく、「部分的」である。事例は、著者自身のこれまでの言語体験（東京とその周辺部）やマスメディア（テレビ、新聞、雑誌、ネット、広告等）から得た情報などを基に集められた私的なリストである。しかし、時間をかけて試行錯誤の上で収集した実例で、文化的反義語研究の第一歩になればと考え、今回本稿で紹介することにした。将来拡充され、より網羅的になることを願っている。

本稿全体の構成は以下の通りである。まず第2節では、文化的反義語の定義とこれまでに指摘されてきた代表例を挙げる。次の第3節が本稿の本体であり、著者が集めた文化的反義語の実例を分野別に示し、解説を加える。最後に、第4節で本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2. 定義と代表例

2.1 文化的反義語とは

本稿では、山田（2015：154）に基づき、文化的反義語を、「元来はあるカテゴリーの下位語として多項非両立性（multiple incompatibility）の関係にある二語が、実際の言語使用のコンテキストで選択肢がその二つに限定され、あたかも相補的反義語のように扱われる例」と定義する。文化的反義語は、他の反義語と比較して、特にコンテキスト依存度が高いのが特徴である。Murphy（2003：174）は、標準的反義語がコンテキストに中

立的 (context-neutral) であるのに対して、文化的反義語はコンテキストに依存的 (context-dependent) な特徴があると述べている。さらに、有標理論の視点からすると、前者を無標 (unmarked)、後者を有標 (marked) と捉えることができる。

山 / 海の対比を例にすると、以下のように地形の下位語としては複数のものが存在すると考えられる (反義語ペアは A / B の形で示す) :



図1 文化的反義語としての山 / 海

先に紹介した Hofmann (1993) の指摘のように、多くの日本人にとっては最初の二つが強く意識されていて、「山の反対は何?」と尋ねられると多くの場合「海」と答えるであろう。最初の二つに意識が集中すると、この二つが二者択一の関係になり、二項対立を示す反義語のように扱われると考えられる (勿論「川」、「里」、「野」、「谷」と答える人もいるであろう⁽¹⁾。しかし、近年「海の日」に続き、「山の日」が国民の祝日となったことは、「山」と「海」の関係性の強さを明示している)⁽²⁾。

文化的反義語は、従来の辞書には反義語としての記載がない場合が多く、語学学習者には学びにくいのが現状である。また、反義語は本来意味論の範疇に属するが、文化的反義語は現実世界と深く関わり、コンテキスト依存性が高いので語用論の色彩が濃い研究課題である。

2.2 代表例

先に、Hofmann (1993 : 40) の山 / 海の例を挙げたが、ここでは他の研究者が反義語の議論の中で挙げた例の中で、文化的反義語の候補となる

日本語の例をまとめて提示して、第3節への導入としたい。

① 大塚・中島（1982）

まず、出発点となるのは、大塚・中島（1982：84）が「文化的に定義された反義」の例として挙げたアカ／シロである。『デジタル大辞泉』（p.1241）によると、「紅白試合」や「紅白戦」などの競技などで対抗するチームを指す「紅白」は、源平時代（11世紀末から12世紀末までの約100年間）に源氏が白旗を、平家は赤旗を用いたことが起源であるという（尚、祝い事のしるしとしての紅白（紅白の水引、紅白饅頭、紅白の幕など）の紅と白の間には反義性は感じられない）。

② 森岡（2005 = 1987年6月号の再録、以下の4点も同じ）

森岡（2005：68-71）は、「具体名詞を比喩的に用いて抽象世界の対義関係」を示すことがあると述べて、以下の例を挙げている：

（1）鷹／鷲、犬／猿、花／嵐

鷹／鷲は上等なものと下等なものを、犬／猿は敵対関係を、そして花／嵐は、好調なものと支障となるものを指す比喩として対比されている（『デジタル大辞泉』は、「花に嵐」という成句を挙げ、「物事にはとにかく支障が起こりやすいことのたとえ」としている）。具体名詞を比喩的に用いて、抽象概念相互の関係を単純明快に表現できるのは、メタファーの大きな効用で、反義語もそれに一役買っている。また、森岡は、対義語は文脈や対象によってペアの組合せが違うとも指摘している（p.70）。

③ 田中（2005）

田中（2005）は対義語（＝反義語）の特徴について、反義の意味関係の方向性には柔軟性があるとし、「意味のベクトルは必ずしも固定せず、さまざまに動きうる」（p.84）と述べている。例として、色彩語については

(p. 84) シロ／クロを起点として：

(2) シロ／アカ, アカ／クロ, アカ／アオ

などのペアがあり、地形についても (p. 84)：

(3) ヤマ／カワ, ヤマ／タニ, ヤマ／ウミ, ウミ／リク, カワ／ウミ

など複数の対立関係がありうるとしている。その上で、「反対語意識は個人差が大きい」(p. 84)と述べ、「語義や語形の変化によって、対義構造は時代とともに大きく変容することが珍しくない」(p. 88)と結論付けている。反義語の習得は、他の意味関係と同様、個人の体験の蓄積に深く関連し、時間の経過と共に通時的な変化へと発展すると考えられる。これは、本稿の文化的反義語の特徴と通じるところが多い(第3節参照)。

④ 村木 (2005)

村木 (2005 : 89-101) は、従来の典型的な反義語のペアを「閉じた反義対」と呼び、それとは別に「開いた反義対」を提案し、次のような例を挙げている (p. 94)：

(4) 和室／洋室, 見ること／聞くこと

村木は、「伝達行為の中で、物事のふたつの側面をとりだして対比させると、反義性が感じられる」とし、人は上記のようなペア間に二価性、両面性を読み取る傾向があると指摘する (p. 94)。部屋のタイプとしては、事実上和室と洋室のペアしかない。見る／聞くは物事を理解する典型的な認知方法であり、「見ると聞くでは、大きな違いだ」とか「百聞（は）一見に如かず」などの慣用表現や諺にもみられる反義性を有する。部屋のタイプや物の理解という限定されたコンテキストで有効な反義語ペアである。最後に村木は、対立の意味関係についてのまとめとして、対立は、「われわれの認識に基準をおき、人間の経験や思考過程にもとづいて成立する」(p. 100)とし、その点で、「人間的であり、論理的、科学的でない側面がある」(同上)と述べている。

⑤ 毛利（2005）

毛利（2005）は、本稿で取り扱う文化的反義語にあたる例を数多く取り上げて論じていて、文化的反義語の宝庫である。毛利は、対義語を「その文脈において、ある相関関係にある二つの事物を指す語である」と幅広く定義し（p. 106）、以下のような例を挙げている（pp. 103-104）：

（5）私鉄／JR、山／川、教授／学生

色彩語の例としては（pp. 106-107）：

（6）白／黒、白／赤：運動会の白組と紅組、紅白歌合戦
赤／黒：赤字、黒字、赤／青：赤信号、青信号⁽³⁾）

その他の例としては（pp. 108-10）：

（7）生菓子／干菓子、生花／造花、えびす顔／えんま顔、
前売券／当日券、練羊かん／蒸羊かん、禁煙車／喫煙車
トーキー／サイレント（映画の種類）

最後の二つの例は、有標・無標の観点から論じられている。時代の変化と共に、有標と無標が入れ替わることがある。禁煙車とトーキー（発声映画）はかつて有標であったが、現在は一般化し無標となり、喫煙車とサイレント（無声映画）は、特別な存在となり有標に変化した。

⑥ 国広（2002）

語彙の意義関係（sense relations）について、国広は語彙的關係と場面的關係の區別を提案している（p. 153）。前者は、語彙体系の中だけで語義の關係を考えることを指し、後者は具体的な場面・文脈の中で語の關係を考えることを意味する。本稿の文化的反義語は、この後者の視点が重要な例であると言える。国広は、場面的關係の例として次の2つを挙げている（p. 153）：

（8）犬／猫（ペットの好み）、口／肛門（赤ん坊の検温）

ペット動物の好みについて「犬が好きですか猫が好きですか」と尋ねる場

面では、**犬**と**猫**が対義的に使用される。また、病院などで赤ちゃんの検温をする時、「**口**で測りますか、**肛門**で測りますか」と言えば、**口**と**肛門**は対義語と見なされる。両者とも場面的関係が対比の決め手となっている。

3. 実例集

この節では、これまで著者が集めた日本語の文化的反義語の実例を紹介する。「はじめに」でも述べたように、ここに挙げる実例集は、決して網羅的なものではなく、あくまでも著者の個人的な観察に基づいたもので、今後の研究の出発点をなすものである。

実例は、以下のように分類する。まず、(3.1)～(3.3)では、分野別に日常生活 (3.1)、政治・経済・社会 (3.2)、教育・文化 (3.3) の3つに分類して解説する。そして最後の (3.4) では、時間の経過と共に文化的反義語が変遷する姿に触れる。また、各分野はさらに下位分類される。

各見出しは、 A / B の形 (太文字・イタリック体) で提示し、カッコ【 】内に対比関係が現れる領域・分野を特定する。さらに必要があれば、それ以下に補足説明を加える。

また、 A / B の語句の順番については、以下のような原則に従った：

- (a) 基になるフレーズや実例での出現の順 (例：**文** / **武**：「文武両道」という表現がある；**犬** / **猫**：「犬猫病院」という表現がある)
- (b) 時間軸の順 (例：**始発** / **終電**、**前売券** / **当日券**)
- (c) 注目度の順 (例：**関東** / **関西**【日本の地域区分】は、著者が関東の出身で、そこでの体験が基になっているので、この順となる)
- (d) 以上のどれにも該当しない場合は、「あいうえお順」とした。

以下に提示した例は、原則として国語辞典 (『広辞苑』と『デジタル大辞泉』の2冊) に反義語としての表示がないペアである。また、少数であるが、そのような記載があっても、文化的な反義語として重要で、日本文

化理解に役立つと思われるものは掲載した。

これ以降で実例を示すが、日常生活はさらに以下のように下位分類されている：①飲食，②買い物，③交通，④自然，⑤名前と地名，⑥色，⑦定型表現，⑧その他である。

3.1 日常生活

① 飲食

- (9) **和食 / 洋食**【食事の分類】日本文化と西洋文化は、対になることが多く、**和 / 洋**【様式の分類】としてまとめられる。**和室 / 洋室**（既出），**和菓子 / 洋菓子**，**和装 / 洋装**，**和服 / 洋服**，**和書 / 洋書**，**和風 / 洋風**，**和式 / 洋式**（トイレなど）などがある。ただし，**日本酒 / 洋酒**，**日本間 / 洋間**などは**日本 / 洋**の対立となる。さらに，**邦 / 洋**もあり，**邦画 / 洋画**，**邦楽 / 洋楽**などがあるが，**邦人 / 外国人**で**洋人**とは言わないなど，対応は多様である。
- (10) **ご飯（はん） / パン**【主食の選択肢】これも上記の**和食 / 洋食**の対比を基にした例で，**お米 / パン** ともいう。洋食時の選択では**ライス / パン**となる。昼などの軽食であれば，**おにぎり / パン**【簡単な食事】という対比もあるであろう。和語と外来語がペアとなるのは珍しい。
- (11) **米 / 小麦**【主食用穀物の代表】上記のペアのもとになる材料である。
- (12) **玄米 / 白米**【米の種類】前者はもみ殻を取り除いただけのもの，後者はさらに精米したものを指す（精米とも呼ばれる）。
- (13) **肉 / 魚**【メインディッシュの選択】**肉 / 野菜**【食物の分類】という対比もある。
- (14) **国産 / 輸入**【産地】**国産品 / 輸入品**ともいう。
- (15) **露地 / ハウス**【野菜の栽培方法】**露地栽培 / ハウス栽培**の略であ

る。

- (16) 天然 / 養殖【ウナギなどの魚介類の育成過程】天然物 / 養殖物という表現がある。標準的反義語としては天然 / 人工である。
- (17) 外食 / 内食【食事の取り方】内食は家で料理して食べることを指す。最近では、店で買い、家で食べる中食（なかしょく）という言葉も使われる。
- (18) 甘い / 辛い【味覚】Murphy (2003 : 173) は, “sweet” (甘い) の反義語は, 言語により異なるとし, 例えば韓国語では, 「苦い (bitter)」が, 日本語では「辛い (pungent)」が当たると述べている。

個々の食材

- (19) 豚 (肉) / 牛 (肉)【食肉の種類】
- (20) 玉ねぎ / 長ねぎ【ねぎの種類】
- (21) 男爵 / メイクイーン【ジャガイモの代表】漢語とカタカナのペアは珍しい。
- (22) 幸水 / 豊水【梨の代表】それぞれ「こうすい」と「ほうすい」という。平成以降の梨の二大品種である。
- (23) ナチュラルチーズ / プロセスチーズ【チーズの分類】天然チーズと加工チーズを指す。前者は加工処理なし, 後者は乳化剤を加えて, 加熱溶解した成型チーズで, 均一的な品質と保存性に優れる。
- (24) 塩 / 砂糖【調味料の代表】「辛い」と「甘い」の元となる。
- (25) ケチャップ / マヨネーズ【洋食用味付けソースの代表】トマトケチャップとマヨネーズソースともいう。
- (26) コーヒー / 紅茶【温かい飲み物の代表】他にココア, 緑茶, 甘酒など候補あるが, このペアが温かい飲み物の代表格である。
- (27) そば / うどん【日本の麺の代表】日本伝統の麺 (パスタ) の種類。
- (28) きつね / たぬき【そば・うどんの代表メニュー】前者は油揚げを, 後者は刻みねぎと揚げ玉を載せている。この対比は, 大ヒットした

和風即席カップ麺の商品名の一部となっている（赤いきつねと緑のたぬき [発売元・東洋水産]）。

- (29) 木綿（漉し）／絹（漉し）【豆腐の種類】この二つが代表格で、その他にも寄せ豆腐、焼き豆腐などがある。
- (30) つぶあん（粒餡）／こしあん（漉し餡）【小豆餡の種類】
- (31) 赤あん／白あん【餡の種類】近年は、クリーム餡、抹茶餡などバリエーションが出てきた。
- (32) レモン／ミルク【紅茶に加えるものの代表】
- (33) ホット／アイス【コーヒー・紅茶などの飲み方】熱いものと氷を入れて冷やしたものを指す。

② 買い物

- (34) コーン／カップ【アイスクリームやソフトクリームの容器の選択】英語の cone と cup より。
- (35) レギュラー／ラージ【容器のサイズ】普通、サイズは S (small), M (medium), L (large) で表示されるが、コンビニ等では、飲み物用の紙コップを *R* と *L* という文字で、それぞれ「REGULAR 普通」と「LARGE 大きい」と表示している。
- (36) アルミ／スチール【缶の種類】缶詰の区分であるが、使用後のゴミの分別回収の区分ともなる。
- (37) 錠剤／顆粒【飲み薬の種類】飲みやすい医薬品にする為、前者は一定の形に圧縮したもの、後者は小さな粒にしたもの。
- (38) 家庭用・自宅用／プレゼント用【買い物の用途】デパートや専門店での買い物時の選択肢で、プレゼント用（贈り物、お使い物）であると、リボンや熨斗紙を付けて、より装飾的な包装となる。
- (39) ズボン／スカート【性別による洋服の分類】
- (40) スカート／パンツ【女性の服装の分類】

- (41) **ブリーフ / トランクス** 【男性下着の分類】
- (42) **縦型 / ドラム式** 【洗濯機の洗濯方式】 前者は旧来のタテ型の水槽タイプで、後者は横になったドラムが回転するタイプである。
- (43) **レギュラー / ハイ・オク** 【ガソリンの種類】 それぞれレギュラー・ガソリン、ハイ・オクタン (high-octane) の略で、新聞記事等でもこの二つの価格が対比的に言及される。
- (44) **新車 / 中古 (車)** 【(乗用) 自動車の購買時の分類】
- (45) **持ち家 / 借家** 【家の所有形態】
- (46) **マンション / 一戸建て** 【住宅の形態】 都会の住人にとっては、必須の選択肢である。
- (47) **分譲 / 賃貸** 【土地や建物の販売方法】
- (48) **ウィークリー / マンスリー** 【賃貸マンションの契約期間の種類】 それぞれ1週間 (あるいは一日) 単位、又は1か月単位で賃貸するマンションを指す。
- (49) **新築 / 中古** 【販売物件の分類】 上記のように、自動車であれば、**新車 / 中古**であり、米であれば**新米 / 古米**となる。
- (50) **畳 (たたみ) / フローリング** 【部屋の床の種類】

③ 交通

- (51) **JR / 私鉄** 【鉄道の区分】 旧日本国有鉄道が母体の JR と民間企業が経営する私営鉄道の対比を指す。交通情報の報道では、「JR, 私鉄各線は通常通り…」という言い方をよく耳にする。(5) に既出。
- (52) **東京メトロ / 都営** 【東京の地下鉄の区分】 東京地下鉄が運営する地下鉄と東京都が経営する地下鉄の対比を示すペアである。
- (53) **在来線 / 新幹線** 【JR の路線区分】 前者は、新しくできた鉄道線 (特に新幹線) に対して、既存の線を指す。この区分は、鉄道の運行状況の報道でよく使われる。

- (54) **自由席 / 指定席**【列車の座席の区分】劇場やスポーツ会場でも見られる区分である。
- (55) **喫煙席 / 禁煙席**【席の区分】列車や店の座席などの区分である。先に (7) で**喫煙車 / 禁煙車**に触れたが、**喫煙 / 禁煙**は客室や特定の区域にも適応される。
- (56) **急行 / 各駅 (停車)**【電車・列車の種類】これは、最も基本的な区別で、さらに詳細な区分（例えば、特急、準特急、快速など）がある路線もある。
- (57) **始発 / 終電**【一日の最初と最後に運行する電車】厳密には、「始発」の反義語は「終発」であろうが、電車の場合は「終電」（「終電車」の略）と言い、バスの場合は「終バス」という言い方がある。
- (58) **自家用 / 営業用**【(乗用) 自動車の区分】
- (59) **普通自動車 / 軽自動車**【自家用車の区分】前者は白いナンバープレートを付け、後者は黄色のナンバープレートを掲載して区別している。
- (60) **タクシー / ハイヤー**【営業用自動車の貸し切りの形態】前者は流しで客を取るのに対して、後者は事前予約が必要となる。
- (61) **首都高 / NEXCO**【高速道路を建設・管理する会社（元公団）の代表】前者は「首都高速道路公団」、後者は「日本道路公団」（NEXCO は Nippon Expressway Company Limited の略で、ネクスコと読む）で、2005 年に民営化された。

④ 自然

- (62) **在来種 / 外来種**【植物の起源】前者は国産種（国内種）とも呼ばれる。
- (63) **桜 / 梅**【春を彩る鑑賞用の花の代表】春の花として人の好みを二分してきた。「桜伐る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」という諺がある。これ

は、桜は幹や枝を伐ると衰弱するが、梅は余分な枝を切らないといふ果実がならないという教訓で、それぞれの特性に従って対応する必要があることを説いている。

- (64) 月／太陽【空で輝く身近な天体】
- (65) 空／地【人を取り巻く空間】頭上の空と足元の地面の対比を示す。
- (66) 水平線／地平線【遠方に見える水面や陸地との境目の線】英語ではどちらも *horizon* (the furthest that you can see, where the sky seems to meet the land or the sea, *OALD*, p. 758) だが、日本語では空との境界が海かまたは陸かで、「水平線」と「地平線」を分けている。
- (67) 犬／猫【身近なペットの代表】かつてペット動物用の病院を「犬猫病院」と呼んだ。森岡（2005：69）は、犬／猫は敵対関係を示すと述べている（第2節参照）が、英語でも *cat*／*dog* という対比がある（山田 2017：280）。
- (68) 飼い犬（猫）／野良犬（猫）【ペットか否かという区別】通常ペットとして飼う犬と猫にだけ当てはまる特別な対比である。
- (69) ウサギ／カメ【対照的な性格の持ち主】前者は「てきぱきと行動が早くすばしこいが油断するタイプ」、後者は「時間はかかるが着実に前進する、おっとり・ゆっくりタイプ」を指す。ある学習塾の広告チラシに、「お子さんはウサギさんタイプですか、それともカメさんタイプですか？」という文言があった（太文字は著者の追加）。この塾のモットーは「カメさんのように粘り強く学習を継続」するタイプの子供を育てることだという。イソップ物語が出典だろうが、日常でも使用されるペアである。

⑤ 名前と地名

- (70) 太郎／花子【子供の男女に付ける名前の代表例】名前には流行が

あり、このペアは現在では古風な名前となった。また、『ケイコとマナブ』というタイトルの雑誌（リクルート社発行、1990年発刊2016年休刊）があったが、趣味、仕事、転身のためのスキルアップや資格取得など習い事の情報を紹介した月刊情報誌で、「稽古」と「学ぶ」をカタカナ表記で名前に置き換えた命名で、若者に人気を博した。数年前のことだが、岡山県のある神社で、男子トイレに彦、女子トイレには姫と記されていたのを見た。辞書にも彦／姫という記述があるが、神社ならではの趣のある表示である。

- (71) 北海道／沖縄【日本の両極地】日本国中という意味で、「北は北海道から、南は九州、沖縄まで」とよく言われる。英語の類似表現は、山田（2017：277-8）を参照のこと。
- (72) 関東／関西【日本の地域区分の代表】
- (73) 東京／大阪【日本の大都市】
- (74) 下町／山の手【東京の地域区分】英語にも、ロンドンの地域区分を表す *the East End*／*the West End* がある（山田 2017：50）。
- (75) 大陸／台湾【中国の区分】

⑥ 色

- (76) 白／黒【物事の是非】「白黒をはっきりさせる」という表現で用いられる。
- (77) 白／青【雲と空の対比】それぞれ白い雲と青い空を指す。
- (78) 黒／赤【収支決算の余剰と欠損】それぞれ黒字と赤字の対比から生じた。
- (79) 赤／青【色の対比】信号機で停止と進めを表す。古代日本語の色彩語の4つ（赤、青、白、黒）の中の二つである。また、仏教や陰陽道によると、地獄には赤鬼と青鬼が住むという。
- (80) 赤／黄色【野菜の色】トマト、スイカなどの代表的な色を指す。

- (81) 緑 / 黄色【キウイ・フルーツの果肉の色】後者は、「ゴールド」と呼ばれることもある。
- (82) ホワイト / ルビー【グレープフルーツの果肉の色】後者はピンク色の果肉をしている。
- (83) ブルー / ピンク【新生児の男女の色分け】赤ん坊や子供用の服や日常用品、トイレの表示などに用いられる（英語の *blue* / *pink* の成立事情については、山田（2017：284）を参照のこと）。

⑦ 定型表現：a. 慣用句 b. 諺 c. 挨拶 d. オノマトペ

a. 慣用句

- (84) 水 / 油【相性が良くない物】「水と油」という慣用句より。
- (85) 度胸 / 愛嬌【男・女に望まれる違った資質】「男は度胸、女は愛嬌」という慣用句より。度胸と愛嬌は脚韻を踏んでいて語呂がいい（「男」と「女」は頭韻）。この対比は、男女に関わる古風なステレオタイプを示し、「草食系男子」と「肉食系女子」が注目される現代では、時代錯誤の感がある。
- (86) 鬼 / 福【不幸と幸運】節分の時の掛け声「鬼は外、福は内」より。
- (87) 甲 / 乙【二つのものの優劣】十干の最初の二つで、前者は第一、後者は第二を意味する。「甲乙付け難い」という慣用表現があり、二つのものについて、優劣をつけるのが難しいことを示す。

b. 諺

- (88) 一挙兩得、一石二鳥 / 虻蜂^{あぶはち}取らず、二兎追う者は一兎をも得ず【一度に二つのことをして、成功することと失敗すること】要領よく物事を成し遂げることと欲張りすぎて失敗することをそれぞれ指す。
- (89) 海老で鯛を釣る / 骨折り損のくたびれ儲け【費やした労力と得られる利益のバランス】前者は、僅かな労力で大きな利益を得ること、後者は、大きな労力をかけたのに利益が少ないことを意味する。

- (90) 立つ鳥跡を濁さず / 後は野となれ山となれ【何かをした後の去り際の姿勢】最後までしっかり責任を全うすることと、責任を取らずに立ち去ることを表す。

その他にも多数候補がありそうで、ある諺に出会った時、その反対のものも覚えると、それはまさに一石二鳥となるであろう。反対語辞典の中には、特に付録として諺を収録しているものがあり、利用価値がある。例えば『三省堂反対語便覧』と『活用自在反対語対義語辞典』がその代表で、『反対語対立語辞典』には「故事ことわざ・四字熟語・慣用句」(pp. 454-503)という部分があり、参考になる。例えば、四字熟語の例としては、賛否両論 / 満場一致 (p. 475), 杓子定規 / 臨機応変 (p. 476), 支離滅裂 / 理路整然 (p. 479) などが挙げられている。

c. 挨拶

- (91) おはよう（ございます） / おやすみ（なさい）【一日の始めと終わりの挨拶】
- (92) 行ってきます / ただいま【外出時と帰宅時の挨拶】外出する人が家の人に向かって言う。
- (93) 行ってらっしゃい / お帰り（なさい）【外出時と帰宅時の挨拶】家にいる人が、外出する人に向かって言う。
- (94) いただきます / ごちそうさま【食事の始めと終わりの挨拶】
- (95) いらっしゃいませ / ありがとうございます【店員の客に対する挨拶】

これらの挨拶の例は、日本の日常生活（家庭や親子関係、食卓と食文化、顧客サービスなど）のあり方（又は、その理想像）を端的に表現する定型表現になっていて、日本の文化理解に重要かつ不可欠なペアであろう。

d. オノマトペ

- (96) ノロノロ / スタスタ【歩き方】「ノロノロ歩きを、スタスタ歩きに。」という再春館製薬所の老化予防剤の広告より（読売新聞、2018年1月15日，p.18）。
- (97) ぎゅうぎゅう / スイスイ【通勤時の人の流れ】地下鉄を利用する乗客の混雑解消を目指した「ぎゅうぎゅうを スイスイへ！」という東京メトロの広告より（池袋駅，2018年3月29日）。前半の6文字の平仮名表記と後半の4文字「すいすい」のカタカナ表記の対比が効果的である。それぞれ混雑感と軽快感を上手に表現している。

オノマトペの多彩さは、日本語の特徴の一つとされていて、上記の実例の他にも多様な組合せやバリエーションがあると考えられる。

⑧ その他

- (98) 体 / 頭【身体の部位の対比】**体と頭**を対比的に捉えることがよくある。例えば、加島祥造の『求めない』（2007年，小学館）という詩集には、以下のような一節がある（p.141，太文字は著者）：

体と頭のどちらの求めに
より多く従っているか
体より頭が威張っていて
よけいに求めすぎていないか…

同書には、この他にも体と頭の対比が数か所出てくる。また、英語の諺に *A sound mind in a sound body*.（健康な体に健全な精神が宿らんことを：元はラテン語）があり、類似の対比を示している。

- (99) フィジカル / メンタル【身体と精神の対比】スポーツ中継の解説でよく耳にするペアで、選手の身体面と精神面を対比させる。上記の**体 / 頭**とも共通点がありそうだ。なお『三省堂反対語便覧』に

は最後にカタカナ語の反義語集がまとめて収録されており、参考になる（ただし、残念ながらフィジカル／メンタルの記述はない）。

- (100) **チャンス／ピンチ**【好機と危機】「ピンチをチャンスに変える」
なように対比的に用いる。
- (101) **可燃ごみ／不燃ごみ**【ごみの分別】分かりやすく、分別用ごみ袋
を色分けしている自治体もある（八王子市では、**可燃ごみ**は青色
の袋に、**不燃ごみ**は黄色の袋に入れる）。
- (102) **化粧／すっぴん**【女性について化粧の有無】後者は、「素っぴん」
で、化粧をしていない顔をさす。**すっぴん／厚化粧**という対比も
考えられるであろう。
- (103) **ローマ字入力／かな入力**【パソコンの日本語入力方式】現在は、
前者が圧倒的に多い。
- (104) **敬語／ため口**【相手に対する言葉づかいのスタイル】後者は年下
の者が年長の者に対等の話し方をすることを指す。他に、**丁寧体**
／**普通体**という対比もある（「〈対談〉日本語はこんなに面白い」
（清水義範，金水敏の対談）『図書』2013年5月号，岩波書店，
p.8）。

3.2 政治・経済・社会：①政治，②社会，③マスメディア，④医療

① 政治

- (105) **首相／大統領**【国のトップ】前者は内閣総理大臣の通称である。
- (106) **衆議院／参議院**【日本の国会の二つの院】
- (107) **護憲派／改憲派**【現行の憲法に対する相反する考え方】前者は現
行憲法を変えずに守ること，後者は改定することを主張する。
- (108) **推進派／慎重派**【東京の築地市場の豊洲移転に対する賛成派と反
対派】国語辞典（『デジタル大辞泉』）には、「推進」に反義語の記
述はなく、「慎重」の反義語は「軽率」となっている（並行して、

築地 / 豊洲【東京の中央卸売市場の新旧の所在地】という対比も一時大きな話題となった)。両派の対比は、イギリスの EU 離脱問題 (Brexit) の *leave / remain* (離脱 / 残留) の選択を思い起こさせる (山田 2017 : 283)。

② 社会

- (109) **左遷 / 栄転**【地位や身分の変更】前者はより低い地位へ、後者はより高い地位への変更を指す。
- (110) **表 / 裏**【公式と非公式の区別】裏は、公式な表と反対側にあり、「主だっていないこと。中心でないこと」を表す (『デジタル大辞泉』, 裏の 7 番目の用法)。表の存在を前提して、その背後にあるものを指し、「番組, 情報, 事情, 社会, 街道, ビデオ」などと共に用いる。英語の *Plan A* (原案), *Planet A* (地球) に対する *Plan B* (代案), *Planet B* (地球に代わる代替惑星) の関係 (山田 2017 : 286 で解説) と類似している。
- (111) **火葬 / 土葬**【遺体の処理方法】2011 年の東日本大震災直後、火葬場が使用不可となり、本来は火葬するところであるが、放置すると第 2 次感染の恐れがあったので、仮埋葬として土葬することに決めた、という報道があった (岩手県釜石市)。
- (112) **平服 / 礼服**【会などに出席する際の服装】普段の衣服と儀式に着る衣服を指す。
- (113) **制服組 / 背広組**【自衛隊員の区別】前者は、いわゆる職業軍人で武官とも呼ばれ、後者は事務方の文民官僚の通称で、文官ともいわれる。
- (114) **国家公務員 / 地方公務員**【公務員の区別】
- (115) **派遣 / 社員**【社員の雇用の種類】前者は派遣社員の略で、後者は正社員を指す。

- (116) **仕事 / オフ**【仕事とそれ以外の時間の区別】和語と外来語がペアになる珍しい例の一つである（既出のご飯 / パンも同様）。ある鉄道とバス運行会社の IC 定期券の宣伝に「仕事の私も オフの私もこれ一枚。」（モットクパス・京王バス 2017 年 9 月：太文字は著者）という例があった。

③ マスメディア

- (117) **草食系 / 肉食系**【若い男性の分類】2009 年の流行語で、動物の分類を基に、前者は弱弱しく頼りない男性を、後者は力強く頼もしい男性を指す。最近では女性についても特に「肉食系女子」ということがある。
- (118) **醤油顔 / ソース顔**【顔つきの分類】代表的な味付けである和風の醤油と洋風のソースの違いに基づいた対比で、前者は顔の彫りが浅くて一重まぶたの薄目の顔立ち、後者は彫りが深く二重まぶたの顔立ちを表す。
- (119) **黒髪 / 茶髪**【髪の色】「くろかみ」と「ちゃぱつ」。
- (120) **直木賞 / 芥川賞**【代表的な文学賞】直木賞は大衆文学の新人・中堅作家へ、一方芥川賞は純文学の新人作家へ贈られる賞である（どちらも 1935 年文藝春秋社が設定）。

④ 医療

- (121) **先発医薬品 / ジェネリック医薬品**【薬の選択】後者は、先発医薬品の特許が切れた後に他社が製造する、より安価な薬を指す。「後発医薬品」ともいわれる。英語では *brand / generic* というペアを用いる（山田 2017：272 参照）。
- (122) **外来診療 / 訪問診療**【診察の種類】患者については、**外来患者 / 入院患者**というペアがある。

- (123) **裸眼視力 / 矯正視力**【視力の種類】前者はメガネやコンタクトレンズを使用しないときの視力，後者はそれらを使用したときの視力を指す。
- (124) **胃カメラ (内視鏡) / バリウム**【胃の検査の種類】内視鏡による検査か，またはバリウムを飲んだ後の X 線写真による検査か，という区別を示す。
- (125) **腹腔鏡手術 / 開腹手術**【(内科) 手術法の種類】前者は腹腔鏡を使った手術で，より高度な技術が必要だが，患者の身体的負担が少なく，回復も早い（読売新聞，2015 年 3 月 7 日，p.1）。2010 年～2014 年にかけて，ある大学病院で**腹腔鏡手術**の後，相次いで患者が亡くなるという死亡事故が起きて，注目された。

3.3 教育・文化：①教育，②スポーツ，③その他

① 教育

- (126) **公立 / 私立**【学校の分類（特に中学校，高等学校）】
- (127) **国公立 / 私立**【学校の分類（特に大学）】
- (128) **全日制 / 定時制**【学校の分類】前者は平日の昼間に授業を行うのに対し，後者は夜間やその他特定の時間や時期に授業を行う。
- (129) **年内 / 年明け**【大学の入学試験の区分】前者は入学の前年の秋に行われる推薦入試，後者はその翌年初めに実施される一般入試を指す。
- (130) **推薦入試 / 一般入試**【入試区分】前者は年内試験，後者は年明け試験とも呼ばれる。
- (131) **文化部 / 運動部**【課外活動の分類】
- (132) **文化祭 / 体育祭**【学校行事の代表】
- (133) **ブレザー / セーラー服**【女子の制服】後者は，少数派になってきているようだ。

- (134) **ブレザー / 詰襟**【男子の制服】これも後者は、セーラー服ほどではないが、少数派になってきたようだ。
- (135) **入学式 / 卒業式**【学校の式典】**入学 / 卒業**という対比に基づいている。
- (136) **グループ / 個別**【塾での指導の種類】ある塾のチラシに「**グループ指導と個別指導**、どちらも試せる！」という宣伝文句の広告があった（栄光ゼミナール，2017年2月：太文字は著者）。

大学

- (137) **必修科目 / 選択科目**【授業科目の分類】
- (138) **教養（教育）科目 / 専門科目**【授業科目の分類】前者の名称は、大学により違う。
- (139) **文系 / 理系**【進路の選択】読売新聞（2015年5月26日）に、「私は文系と理系、どちらに向いてるの？」というタイトルの記事があった（太文字は著者）。
- (140) **体育系 / 文化系**【課外活動の分類】
- (141) **専任 / 非常勤**【教職員の身分】教員及び教育関係の仕事につく職員の区分を指す。
- (142) **教員 / 職員**【学校内の職員の区別】最近**教育職員 / 事務職員**という新たな呼び名が使われている。通常は、**教員 / 学生・生徒・児童**という対比が反義語のペアをなす。
- (143) **早稲田 / 慶応**【関東地区の私立大学の代表】両校を略して**早慶**という（類例のイギリス版 *Oxbridge* については、山田 2017：289 参照）。両大学の運動部の試合（野球，ラグビー，サッカー，レガッタなど）は、**早慶戦**（慶応では**慶^{けい}早^{そう}戦**）と呼ばれる。

英語教育

- (144) **教養主義 / 実用主義**【英語教育の目的】
- (145) **英和辞典 / 和英辞典**【英語辞典の種類】英語と日本語のバイリン

ガル辞書の区別を示す。

- (146) **英和辞典** / **英英辞典**【英語辞典の種類】英語辞典に関して、バイリンガルかモノリンガルかの区別を表わす。上記のペアと共に、異なる対比の視点から、同一の語（句）[ここでは**英和辞典**]が複数の語（句）と反義語ペアを成す好例である。
- (147) **紙** / **電子**【辞書の種類】冊子の辞典と電子辞典の区別である。今の若者にとっては、辞書というと電子辞書のことを指すと思われる。この対比は、**手紙** / **電子メール**にも通じ、さらに一般的には、**紙媒体** / **電子媒体**という対比であろう。また、スマホの急速な普及により、今や**電子** / **アプリ**という対比の方がより現実味を持っていると思われる。

② スポーツ

- (148) **セ・リーグ** / **パ・リーグ**【日本のプロ野球リーグ】それぞれセントラルリーグ、パシフィックリーグの略である。
- (149) **巨人** / **阪神**【プロ野球の伝統ある対戦相手】それぞれ関東と関西の代表チームで、(関東では)巨人阪神戦と呼ばれ、多くのファン(巨人ファン / 阪神ファン)を沸かしてきた。
- (150) **生え抜き選手** / **移籍選手**【スポーツ選手の分類】特に野球やサッカーで、あるチームに初めから所属しているか、又は他チームから移籍してきたかの違いを指す。
- (151) **個人** / **団体**【スポーツ競技などの分類】体操、卓球、バトミントンなどで、個人競技と団体競技を指す。旅行についてもこの区別がある。**個人**とペアになる語には、**集団**、**組織**、**チーム**(**個人プレイ** / **チームプレイ**)などもある。
- (152) **イエローカード** / **レッドカード**【サッカーなどの試合で選手の実行に対する罰則の分類】前者は警告、後者は退場を示す。同様に、

経営悪化の度合いを示す対比にイエローゾーン / レッドゾーンがあり、後者の方が危険の度合いが高い。

③ その他

広告コピー

- (153) **ご飯 / お風呂**【帰宅時の選択】帰宅した夫に向かって、妻が「ご飯にする？ お風呂にする？」と尋ねる会話より（専業主婦の妻が家で夫の帰りを迎えるという場面設定である）。あるビールの広告に「おふろ？ ごはん？」というものがあつた（サントリーの「金麦」（ビール）の車内広告・京王線内，2011年：太文字は著者）が，どちらの選択にもビールがよく合うというメッセージが込められていた。
- (154) **ビール / お風呂**【帰宅時の選択（特に夏場）】「お帰りなさい。ビールにする？ それともお風呂が先？」（朝日新聞，2013年8月7日，p.21，ビールの広告：太文字は著者）。

習慣

- (155) **お中元 / お歳暮**【季節の贈り物の代表】
- (156) **暑中見舞い / 年賀状**【季節の挨拶状】他に残暑見舞い，寒中見舞いなどもあるが，この二つほどは一般でない。ただ，このような書状を出す頻度は今急速に下がっている。
- (157) **クリスマス / お正月**【年末・年始にかけての二大行事】
- (158) **大安 / 仏滅**【縁起の良い日と悪い日】歴注の六曜の中の二つで，今でも重要な行事の日程を決める際に参考にすることがある。
- (159) **建て前 / 本音**【人の言動に関する二面性】表向きの原則と本当の気持ち・本心からの考えをそれぞれ指し，「建て前と本音」と対比させて使うことが多い。これも日本文化の特徴であろう。
- (160) **おかめ / ひょっとこ**【女性と男性の仮面】ふくよかでおたふく（阿多福，お多福）のような顔の女（お亀，阿亀）と，火を吹く時のよ

うに口を尖らせ、滑稽な顔をした男を指す。古くから縁起物としてとして扱われ、お祭りの踊りなどに登場する。

落語

- (161) **古典落語 / 新作落語**【落語の分類】古典落語は昔から語り継がれた噺で、新作落語は明治末期以降の作られたもので、作者がはっきりしている。
- (162) **滑稽噺 / 人情噺**【落語の演目の分類】前者は文字通り笑いを取る噺、後者はよりストーリー性を重視した噺を指す。

3.4 文化的反義語の変遷

本稿でいう文化的反義語は、私たちの現実世界での経験に基づいて誕生するので、その現実世界に変化が起これと、それに伴い消えていくものや新たに誕生するものが出てくる。本稿でここまで挙げた例は、現在使用されているものであるが、以下では、現実世界の変化の影響を大きく受けた例を挙げて、その変遷をたどる。

まずは、現在は使用されることが少なくなったペアの例を挙げる：

- (163) **光沢 / 絹目**【写真のプリント仕上げの種類】英語でも *glossy / silky* (*matte*, つや消し) というペアがある (山田 2017 : 293)。近年光沢が一般的であるが、そもそも写真をプリントしないことが多くなったので、使用されることがほとんどなくなった。
- (164) **液晶 (テレビ) / プラズマ (テレビ)**【高品位薄型大型テレビの種類】薄型大型テレビが出始めた時の選択肢であったが、現在、後者は姿を消し、今後は**液晶 / 有機 EL**の対立になると予想されている。
- (165) **白黒 / カラー**【色彩表示の区別】白黒 (モノクロ [ーム]) とカラーの対立は、写真、映画、テレビ受信機などで以前はあったが、今はカラーが主流 (無標) で、この対立はほとんどなくなった。限

定的に、コピー、スキャン、PC プリント、印刷に関してはまだ選択肢として残っている。映画もカラーが無標であり、敢えて有標の白黒を使用することで、特別な効果を生み出すことがある。

- (166) 文 / 武【学びの領域】文事と武事の対比より。それぞれ学問の道と武芸の道を指す。この両方を備えることを「文武両道」というが、この考え方自体が古めかしく過去のものとなりつつある。同様の対比を、英語ではより具体的な *pen* / *sword* というペアで表す（山田 2017 : 281）。

次の3つの例は、現在使用されてはいるが、現実世界の変化に応じて、今後変わることが確実なペアである：

- (167) オートマ（車） / マニュアル（車）【自動車のトランスミッションの種類】前者は、オートマチック・トランスミッション（automatic transmission, 自動変速装置）の略で、それを搭載した AT 車を指し、後者は、手動でギアを変える車のことである。現在は、オートマが圧倒的に主流で、マニュアルは少数派であり、消えつつある。
- (168) ガソリン車 / ハイブリッド車【自動車のエンジンの種類】これは現時点でのペアで、後者はガソリンを燃料とするエンジンと走行中充電で動くモーターの両方を装備した車である。しかし、このペアは将来的には変わる可能性が高く、今後はガソリン車が減り、電気自動車（EV）へと進むであろう。ただ、その前段階として電気とガソリンの両方で起動するプラグインハイブリッド車（PHV）が現れると予想されている。PHV は EV に比べて走行距離が長い利点がある（読売新聞、2018 年 8 月 24 日）。
- (169) 一般 / ETC【高速道路の料金支払方法】一般は現金やクレジットカード支払い、ETC は ETC カード自動支払いを指し、「一般車」と「ETC 車」を分類している。数年前までは、一般が主流（無標）

であったが、*ETC*の普及が急速に進み、現在は*ETC*が一般的（無標）になりつつあり、有標・無標の逆転が起きている。そうすると、現在の一般が有標となり、それに合せて表示も変化する必要がある。そして、最終的には*ETC*へ一本化され、この対立もなくなる可能性が高い。

現実世界の変化が語彙の構造に変化を与えるのは文化的反義語特有の現象ではなく、語彙全般に当てはまる。ここで見た変遷の例のように、文化的反義語は、その時々、文化的背景を色濃く反映するので、そのような変化を直接的に受けることになる。見方を変えれば、文化的反義語の変化をたどることで、その背景にある文化の変化を明示することができるという利点もある。

4. 終わりに

本稿で、著者はこの数年間収集してきた日本語の文化的反義語の実例を示した。まず第2節では、文化的反義語を定義し、さらにこれまで他の研究で触れられてきた代表的な例を確認し、第3節では、著者が集めた文化的反義語の実例を分野別に提示し、適宜解説を加えた。本稿をまとめて、改めて文化的反義語を意識して学ぶ・教えることは、日本語学習の促進と日本語圏文化の理解に有意義であるとの思いを強くした。本稿を契機に文化的反義語の有用性が認識され、日本語のみならず他の言語でも研究が進むことを望みたい。さらに、そのような研究が、異文化理解や辞書の記述の向上に活用され、さらに、翻訳や通訳などの実務にも応用されれば幸いである。

今後の研究課題としては、次の二点を挙げる。まずは、オノマトペの中での文化的反義語探しである。本文中でも一部実例（ノロノロ / スタスタ、ぎゅうぎゅう / スイスイ）を示したが、日本語の特徴の一つである

オノマトペについて文化的反義語の観点から、どのような反義語ペアがありうるかを調査したい。広告などを中心に創造的に使用されている例が多くあるであろう。

二つ目は、文化的反義語の使用状況を談話分析の手法を用いてより実証的に明らかにしたい。文化的反義語は、特定の文脈上で成立する反義語であるので、談話の中でその使用状況や機能を調べることで有意義な特徴が解明されるであろう。最近の例であるが、ボクシングの世界タイトルマッチに関する新聞記事の中で、対戦予定の二人が「雑草 vs エリート」と対比的に描写されていた（読売新聞，2018年9月12日，p.21）。前者はいろいろな挫折を経験してきた現王者，後者はこれまで順調に輝かしい戦歴を残してきた挑戦者を指していた。雑草は、野生のたくましい生命力を彷彿させるが、通常の国語辞典や反対語辞典には、エリートとの反義性には言及がない。特定の文脈での限定的な意味合いの濃い反義語ペアであろう。雑草／エリートという比喩的な対比を使用することで、二人の違いを読者に効果的に印象付けることに成功していると言えそうだ。このように実際の反義語ペアの使用とその効果を文脈の中で精査し、ことばが持つ創造性的一端を解明したい。

以上、本稿が文化的反義語のさらなる研究に少しでも役立てば幸いである。

《注》

- (1) 国広（2002：168-9）は、反義語の中には、通常の「一本の系列ではなくて、二次元的な体系をなす」場合があるとし、その例として「山」を中心にその前後左右に「野，谷，海，川」が位置する語彙体系を提案している。そこから場面に応じて、「野・山」，「山・海」，「山・川」，「山・谷」などの対義語（場面的対義語と呼ばれる）が誕生すると述べている。沖森（2011：75）にも、「山」を中心に様々な対立関係（「川」，「野」，「海」，「谷」，「陸」）を示す図式が掲載されていて参考になる。
- (2) 「山」に注目して、その反義語を問う場合と「海」を挙げて反義語を問う

場合では、その反応が違う可能性がある。「山」から「海」への反応は可能性が高いが、「海」の反義語としては、「陸（りく）」、「陸（おか）」（『三省堂反対語便覧』, p. 28）が最有力で、その他の反対語辞典には「山」, 「空」, 「湖」などが記載されている。文化的反義語のペアには、両者の関係に方向性がありそうだ。

- (3) 北原・東郷（編）の『反対語対照語辞典』（1989：4）は、「赤、白、黒」の3色と「赤、黄色、青、緑」の4色の反義関係を示す図式を掲載していて参考になる。

参考文献

[和書]

- 大塚高信・中島文雄（監修）. 1982. 『新英語学辞典』東京：研究社.
沖森卓也 他. 2011. 『図解日本の語彙』東京：三省堂.
国広哲弥. 2002. 「類義語・対義語の構造」飛田良文・佐藤武義（編）『現代日本語講座第4巻語彙』東京：明治書院. pp. 152-171.
田中章夫. 2005. 「対義構造の性格」宮地（編）所蔵. pp. 77-88.
宮地裕（編）. 2005. 『『日本語学』特集テーマ別ファイル（2）意味Ⅱ』東京：明治書院（「対義語」部分は1987年6月号の再録）.
村木新次郎. 2005. 「対義語の輪郭と条件」宮地（編）所蔵. pp. 89-101.
毛利可信. 2005. 「対義語・類義語・類縁語」宮地（編）所蔵. pp. 102-110.
森岡健二. 2005. 「私の対義語観」宮地（編）所蔵. pp. 68-71.
山田政通. 2015. 「文化的反義語の試案——第4のカテゴリとして——」拓殖大学語学研究（言語文化研究所）第133号. pp. 149-172.
山田政通. 2017. 「文化的反義語——英語の実例集——」拓殖大学語学研究（言語文化研究所）第137号. pp. 261-297.

[英書]

- Hofmann, Th. R. 1993. *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics*. Essex and New York: Longman.
Murphy, M. Lynne. 2003. *Semantic Relations and the Lexicon: Antonymy, Synonymy, and Other Paradigms*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
Yamada, Masamichi. 2009. "Making More Sense of Antonymy in English." 拓殖大学語学研究（言語文化研究所）第120号. pp. 43-79.

[反対語辞典]

- 浅野鶴子（編）. 1978. 『擬音語・擬態語辞典』 東京：角川書店.
 北原保雄・東郷吉男（編）. 1989. 『反対語対照語辞典』 東京：東京堂出版.
 三省堂編修所（編）. 2008. 『三省堂 反対語便覧（新装版）』 東京：三省堂.
 三省堂編修所（編）. 2017. 『三省堂 反対語対立語辞典』 東京：三省堂.
 塩田紀和・中村一男（編）. 1957. 『反対語辞典』 東京：東京堂出版.
 反対語対照語編集委員会（編）. 1988. 『活用自在 反対語対照語辞典』 東京：柏書房.

[国語辞典]

- 新村出（編集）. 1998. 『広辞苑』（第5版） 東京：岩波書店.
 松村明（監修）. 2012. 『デジタル大辞泉』 東京：小学館.

[英語辞典]

- OALD = Oxford Advanced Learner's Dictionary* (9th edition). 2009. Oxford, UK: Oxford University Press.

（原稿受付 2018 年 11 月 20 日）

拓殖大学研究所紀要投稿規則

(目的)

第1条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する、経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下、「研究所」という。）が刊行する紀要には、多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

(紀要他)

第2条 研究所の紀要は、次の各号のとおりとする。

- (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』

2 研究所長は、次の事項について毎年度決定する。

- (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
- (2) 投稿する原稿（以下、「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日
- (3) 投稿原稿の査読等の日程

(投稿資格)

第3条 紀要の投稿者（共著の場合、投稿者のうち少なくとも1名）は、原則として研究所の兼担研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

2 研究所の編集委員会が認める場合には、研究所員以外も投稿することができる。

(著作権)

第4条 投稿者は、紀要に掲載された著作物が、本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

2 共同執筆として紀要に掲載する場合には、共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し、投稿代表者に承諾書を提出しなければ

ばならない。投稿代表者は、共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

(執筆要領および投稿原稿)

第5条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。

3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分：経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所及び人文科学研究所

(1)論文	研究の課題、方法、結果、含意（考察）、技術、表現について明確であり、独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で、将来、論文になりうるもの（論文の形式に準じる）。新しい方法の提示、新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、人文科学研究所の研究助成要領第10項(2)に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿（公開講座記録等）については、編集委員会において取り扱いを判断する。また、編集委員会が必要と認めた場合には、新たな種類の原稿を掲載することができる。

表2 投稿原稿区別：理工学総合研究所

(1)論文、(2)研究速報、(3)展望・解説、(4)設計・製図、(5)抄録（発表作品の概要を含む）、(6)その他（公開講座記録等）

2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。

3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3～5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。

- 4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表（原稿）の投稿原稿区分は、原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果（原稿）は、抄録として掲載することができる。

（投稿料他）

- 第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。
- 2 投稿者には、紀要3部を贈呈する。
 - 3 投稿者が研究所員の場合には、掲載の抜き刷りを50部まで無料で贈呈する。50部を超えて希望する場合は、超過分について有料とする。

（リポジトリへの公開の停止及び削除）

- 第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

（その他）

- 第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決定する。

（改廃）

- 第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附 則

- この規則は、平成29年4月1日から施行する。

拓殖大学言語文化研究所紀要『拓殖大学語学研究』執筆要領

1. 発行回数

『拓殖大学語学研究』（以下、「紀要」という）は、原則として年2回発行する。その発行のため、以下の原稿提出締切日を厳守する。

(1)	原稿は、9月中旬締切－12月発行
(2)	原稿は、11月末日締切－3月発行

2. 使用言語

用語は、日本語又は日本語以外の言語とする。ただし、日本語以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に言語文化研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という。）に申し出て、その承諾を得たときは、使用可能とする。

3. 様式

投稿原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿（A4用紙を使用し、横書き、1行33字×27行でプリント）2部を編集委員会宛に提出する。

- (1) 数字は、アラビア数字を用いる。
- (2) ローマ字（及び欧文）の場合は、ダブルスペースで32行。1行の語数は日本語33文字分。
- (3) 投稿原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、以下のとおりとする。

①	日本語論文による原稿	20,000字（1行33字×27行）以内	} A4縦版・ 横書
②	日本語以外の言語による原稿	20,000字（ダブルスペース、20枚）以内	

上記分量を超えた投稿原稿は、編集委員会で分割掲載等の制限をおこなうこともある。

投稿者の希望で、本紀要の複数号にわたって、同一タイトルで投稿することはできない。ただし、編集委員会が許可した場合に限り、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で全体像と回数を明示しなければならない。

- (4) 上記以外の様式にて、投稿原稿の提出する場合には、編集委員会と協議する。

4. 投稿原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学 研究所紀要投稿規則」に記載されている種別のいずれかとするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。

- (2) 投稿原稿の受理日は、編集委員会に到着した日とする。
- (3) 投稿は完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿原稿数の関係で、紀要に掲載できない場合には、拓殖大学言語文化研究所長（以下「所長」という）より、その旨を執筆者に通達する。

5. 図・表・数式の表示

- (1) 図・表の使用は、必要最小限にし、それぞれに通し番号と図・表名を付けて、本文中に挿入位置と原稿用紙上に枠で大きさを指定する。図・表も分量に含める。
- (2) 図および表は、コンピューター等を使って、きれいに作成すること。
- (3) 数式は、専用ソフトを用いて正確に表現すること。

6. 注・参考文献

- (1) 注は、本文中に（右肩に片パーレンで）通し番号とし、執筆者の意向を尊重して脚注、後注とも可能とする。
- (2) 引用・典拠の表示は各言語の一般的な方式に従うものとする。

7. 執筆予定表の提出

紀要に投稿を希望するものは、『拓殖大学 語学研究』執筆予定表を、指定された期日までに研究所に提出する。

8. 原稿の提出

投稿原稿と一緒に、『拓殖大学 語学研究』投稿原稿表紙に必要事項の記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

9. 原稿の審査・変更・再提出

- (1) 投稿原稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が決定する。編集委員会は、原稿の区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 出された投稿原稿は、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (3) 編集委員会は、投稿者に若干の訂正あるいは書き直しを要請することができる。
- (4) 編集委員会は、紀要に掲載しない事を決定した場合は、所長名の文書でその

旨を執筆者に通達する。

- (5) 他の刊行物に既に発表された、もしくは投稿中の原稿は、紀要に投稿することができない。

10. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）にプリントした完成原稿 1 部と電子媒体を提出すること。

電子媒体の提出時には、コンピューターの機種名と使用 OS とソフトウェア名及びバージョン名を明記すること。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿のデータを保管しておくこと。

11. 校正

投稿原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、編集委員会と所長が三枚を行う。この際の校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。

校正は、所長の指示に従い、迅速に行う。

校正が、決められた期日までに行われない場合には、紀要に掲載できないこともある。

12. 改廃

この要領の改廃は、言語文化研究所会議の議を経て、所長が決定する。

附 則

この要領は、平成 26 年 4 月 1 日から施行する。

附 則

この要領は、平成 29 年 4 月 1 日から施行する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	調査報告：	専門領域に関する調査。
②	資 料：	原稿区分の範疇以外で教育・研究上有用であると考えられるもの。
③	書 評：	専門領域の学術図書についての書評。
④	紹 介：	専門領域に関するもの。

以上

執筆者紹介（目次掲載順）

阿久津 智（あ く つ ・ さ と る）	外国語学部教授	日本語学
遠藤 裕子（えんどう ・ ひ ろ こ）	外国語学部教授	日本語学，意味論
狩野 紀子（か の う ・ の り こ）	外国語学部教授	英語教育，CALL
小池 和良（こ い け ・ か ず み）	外国語学部教授	スペイン語統語論，スペイン語語彙論
平山 邦彦（ひらやま ・ く に ひ こ）	外国語学部教授	中国語学，現代中国語文法
渡辺 勉（わたなべ ・ つ と む）	外国語学部教授	英語音声学，言語学
村上 祥子（むらかみ ・ しょうこ）	商学部教授	韓国語，韓国民俗学
松下 直弘（まつした ・ なおひろ）	外国語学部教授	スペイン語，スペイン文学
山田 政通（や ま だ ・ まさみち）	外国語学部教授	語用論，談話分析

拓殖大学 語学研究 第 140 号 ISSN No. 1348-8384

2019 年（平成 31 年）3 月 22 日 印 刷

2019 年（平成 31 年）3 月 29 日 発 行

編 集 拓殖大学言語文化研究所編集委員会

編集委員 寺家村博 阿久津智 平山邦彦 廣澤明彦 松下直弘 岩崎光一
大野英樹 小林敏宏 末延俊生 永江貴子 藤本淳史 村上祐紀
渡邊俊彦

発 行 者 拓殖大学言語文化研究所長 寺家村博

発 行 所 拓殖大学言語文化研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向 3 丁目 4 番地 14 号

Tel. 03-3947-7595

印 刷 所 株式会社 外為印刷
